

螻螂の斧

—社会システム変化への介入—

Part

1990年児童相談所内外事情 第一回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

対人援助の日常的実践には二つあると思っている。一つは直接の援助。そしてもう一つは援助が実施されている枠組への支援である。私は昔から、どちらかという、枠組みへの変化処方に関心が強かった。

児童相談所で仕事をしていた頃、外部の人たちがいろいろ言うのを聞いて、心外な思いがいつもあった。「内実(システム)を知りもしないで、勝手なこと言うんじゃないよ!」と思っていた。単独の項目にしか関心のない人のたわごとが、システム変化に成果を上げることなどないと思っていた。そんなわけで、研究者一群も、それに依存的に近づいてゆく行政機関も好きになれなかった。現場にしながら、なぜ自分たちで考えないで、他所の人間に頼るのか!といささか、意地っ張り気味にエネルギーを注ぎ込んでいた。

しかし、丁寧に時間をかけた取り組みだからといっても、理解しようとする人は僅かしかないなんて事態はしょっちゅう起きていた。逆に、そんな無茶苦茶な...と思うような抗いがたい乱暴な潮流が生まれることも多々あった。それも社会システムと呼ぶのだと思って諦めていたところもあった。

児童相談所外部の人間になって長い時が過ぎた。今何を言っても、かつて私のように、「昨今の兇相の内実を知りもしないで、勝手なこと言うんじゃないよ!」と呟く人が少なくないに違いない。

だからここでは外からの話ではなく、内からの話を書きたいと思う。ただ、現職ではないので今の話ではない。「昔話だったら何でも言える。歴史や記憶はいつも、都合良く改ざんされるものだ」と即座につっこむ人があるかもしれない。それは承知の上で、1990年の日記を取り出してみた。

二十年前である。キーボード物を持つようになって、頻繁に書き込みをはじめたのが、その三、四年前(まだワープロだった)。そして今に至るまでの全日誌が、私のノートPCのハードディスクに存在する。

その記述の中からピックアップしたものを、今の視点と言葉で振り返ってみようと思う。そうすれば今昔がどのように同じで、また違うのか、明らかになることもあるに違いない。近い過去ではあるが、温故知新の芽も見つかるかもしれない。

Part では児童相談所が対象である。予定としてpart では、より大きな社会システムへの介入経過を述べてゆくつもりだ。理念や意見ではなく、目論見を具体化したことを定義したり、現時点での検証を加えたりできればと思う。

社会の変化は常に起きている。できることなら望ましい変化であって欲しいと思う。しかしそれが偶然の幸運でもたらされることは稀だ。放っておくと不運は簡単に届く。幸運が届いたところには、それを引き寄せた取り組み経過があるものだ。ただそれが因果で結ばれていないことも多いから、「どうしてだろう?」「不思議だね」なんて言うのである。物事には訳がある。そしてそれは因果関係で繋がっているとは限らない。

ピックアップした箱線内の記述は1990年の日誌からのもので、加筆修正はしていない。その後の記述は今の私の論評である。

螻螂(とうろう)はカマキリの漢名。自分の力の弱さをかえりみず、敵に刃向かうことのたとえを、螻螂の斧という。

1990

1 月

1/19-20 FRI-SAT

児童福祉施設中堅職員研修第二期4回目。

いきなりタイトルだけしか書いていない。この年の初めから、全日記述の業務日誌を書き始めたのだが、元旦からは始まっていない。思い立ったのが年明けしてしばらくしてからだったのだろう。最初の記述がこれだ。

京都府内の児童福祉施設で働く中堅職員向けに、少人数の一年を通じた継続研修を実施していた。初年度(前年)には報告集「はじめの8人」も出した。(右)

プログラムの内容は、「ゲシュタルトセラピー(日高正宏)」、「アドラー心理学(萩昌子)」、「家族療法(早樫一男・団士郎)」、「ポディーワーク(松井洋子)」、「応答構成トレーニング(団士郎)」、「エンカウンターグループ(川崎二三彦)」等。

当時、最先端の自己理解、他者理解、援助技法だと考えていたものの中心にいた人たちを講師に招いて、施設で働き始めて十年以上というベテランの心身共のバージョンアップを図った。

当時、施設問題というと、措置している子ども達が起こした事件や、対職員問題があがって来るのが定番だった。そしてたまたま全国のどこかで、新聞沙汰になるような施設関連の事件がおきた。

京都府が直接関わるといふものでなければ、何をやるわけでもなく、漠然とした「明日は我が身、明日は我が所」感のようなものだけが少し漂った。

また、時代の記憶としては一時保護所における職員殺害事件も大きい。管理システムや、職員の資質、建物の構造も合わせた複合問題であったことは確かだ。そこに異なる視点から、施設へのサポートを行政として考えようとした。

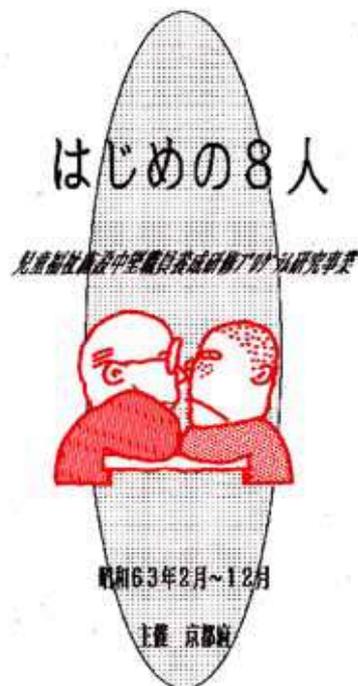
規模の小さな社会福祉法人では、中堅クラスになった職員のために、学びの機会などなかなか準備できない。人事交流も難しく、一方で若い女性は結婚退職も含めて離職のサイクルも早かった。働き続ける人の意識は、だんだんマンネリ化する傾向に

あった。

毎年行われる施設連絡協議会主催の研修は、新任者向けが繰り返され、長期勤続者には研修機会も減っていた。

そしてそれぞれの施設においてベテラン職員は、個性の塊(お局様や癌)と陰口をきかれる存在と化すこともしばしばだった。

これを個人、個性の問題ではなく、システムとしての必然メカニズムだと考えた。そこでこの人達のバージョンアップを目指して企画した研修だった。



こんな盛りだくさんな贅沢企画であっても、施設側からは、児相(行政)が音頭取りの研修に、厳しい現場のシフト体勢から人手を抜かれるという不満があがることは予想できた。

そこで初年度は、本庁からの指示ルートを使って、提案ではなく指名研修にした。その結果、いわく付きの評判の中堅どころも一部含まれて、一堂に会することになった。(もっとも、このいわく付きというのは公正さを欠いた噂に近いものではあった。しかしとにかく、北風を送るのではなく、太陽をプレゼントするのだからと目をつぶって貰うことにした)

三児相の課長も全プログラム張り付きで宿泊し、夜は各施設の中堅どころと、児相の中堅どころで、ビールを飲みながら、じっくり四方山話に花が咲くこと

になった。

始まってみると、回を追う毎に評判が高くなり、翌年からも施設側の希望もあって、継続開催されることになった。

(日誌の順次記述からさっそく外れるが、
二ヶ月後の同じ事業に関する記述)

3/9-10 FRI-SAT

京都府児童福祉施設中堅職員研修第一期の
第5回目(最終回)、7名の終了生を送り出した。去
年が8人、今年もまた7月から第一期をはじめ。

こうして各施設一人を一年間、一泊二日を五回
(延べ十日間)、体験学習的なプログラムを、講師
を呼んで受けてもらっている。こういう経験を持っ
た中堅クラスが、現場に増えていくことの値打ち
は計り知れないものだ。こんな事を思っているの
は、仕掛けた私だけかもしれないが、まあその内
わかる。

実際にこの取り組みは、数年間継続された。施設
にとって、特定の職員が年間を通じて十日間もロ
ーテーションから外れるのは難題だった。京都府立
のある施設は、そんな体制は組めないといって二年
目からの参加を断ってきた。もともとは、その施設の
職員の進言もあって、数年かけて企画実現にこぎ着
けた研修だったが、蓋を開けてみると、そんな結果に
なった。

社会福祉法人組織にとって京都府は、監督・監
査機関である。そこから指示された研修会は、職場
事情はあっても断りにくかっただろう。逆に府立施設
は権力関係を感じることは少なく、その結果、職場事
情を理由に参加を断ることになった。

もとより明確な結果が出るものではないが、この府
立施設が抱える課題を、延々と悩み続けて、その後
も過ごすことになるのは、変化への柔軟性を持てな
かったことが一因だろう。後から考えると、不運とい
うのはこんな風に忍び寄るものなのだなぁと思う。

研修の成果について、語られることは基本的には
ない。実施しているという以上に、何か語られる仕
組みになっていないし、何を効果と認定するかも難し
いことではある。

しかしそんなことで済ませてきたツケがいま、社会

のあちこちに出てきている。個人の意思任せの、趣
味のような勉強指向と、学ばない者はそれでご勝手に
！という風土は今もあるだろう。

そして職場状況が厳しくなればなるほど、ますます
学びは当面の課題や対策に流されていくだろう。

組織システムの一員として、給料に見合った貢献
度を自覚するなら、キャリアに応じた重層的学びは
不可欠である。

1/22 MON

京都府三児童相談所課長・係長会議(福知山)。

中間管理職の会議である。三カ所(宇治、京
都、福知山)ある児童相談所の課長・係長が一堂
に会して、実務の協議をかなり頻繁に繰り返してい
た。

会議の話など珍しくもないし、世間には、「会議ば
かりで、ちょっと仕事がかどらない…」という言い
回しが定着していた。会議は無駄だと考える慣用認
識が信じられていた。実際そういう会議も多かったに
違いないし、そう思っている当事者が、会議をしてい
るのだから、そんな会議になっていたのだろう。

しかし当時の児童相談所に関しては、業務に関
する協議不足の無駄が多いと確信していた。そこで
既にあった中間管理職会議を大幅拡大して、三児
相・課長係長会議をはじめた。

ここでは西川課長(宇治)、鉄川課長(福知山)、
川崎係長(宇治)、早樫係長(宇治)、高橋係長
(福知山)という、私にとっては長年の心理職仲間と
して気心の知れたメンバーが揃う事になった。

その結果、これまでよくあった意思疎通不足によ
る、新任者同士の食い違いのようなことはなくなっ
た。私にとっては時代が、上手い巡り合わせに変わ
っていた。

心理職の先輩後輩関係だったから、立場や面
子を構うことなく、職場を越えた分業体制なども採り
入れた合理的な業務進行をプランした。何でも試し
てみて、上手いかなければ、さっさと変更すればよ
かった。

しばらく後の事だったと思うが、ビジネス番組でト
ーヨーカ堂が全国店長会議というのを、毎週、東
京に日本中から集めて実施しているという話を聞い
た。会議費だけで莫大な出費になるが、それでも効

果があるのだと社長は言っていた。この話題はなんだが、自分たちのしていることを後押しされたようで嬉しかったのを覚えている。

1/23-25 TUE-THU

東京・国立リハビリテーションセンターで開かれた、文部省関係団体(注・文部科学省になるのは2001年から)主催「全国青少年相談研究集会」に参加。行ってみて分かったことだが、100名定員で通知しておいて、300余名の申込があったからと、そのまま受け入れてしまっている主催者の神経を疑った。当然、中味もその程度で、告知のテーマや企画に惹かれて参加を決めた期待はやはり裏切られた。

国がやることに期待する方が甘いなどと言われたが、どうせこんなものだろうとしか思わずに集まってくる教育、福祉関係の公務員達は、自らの手で何かを崩し続けている。

夜、新宿に出て、映画「恋人たちの予感」をみる。評判ほどでもなく平凡。わざわざ行ったという気持ちがあるからがっかりする。その後、「談話室」と名付けられた喫茶店で、チーズケーキセットを頼んだら、1200円だった。一人でだ。関西だったら誰も入らないな。

「施設中堅職員研修」と対比して考えざるを得ない経験をしていた。

こんな感覚の全国研修は、まだ今も行われているのだろうか。この20年で、公務員を取り巻く環境は大きく変わった。しかし相変わらず公務員希望者は多い。若者は公務員をどのような職業だと考えて、希望しているのだろうか。公務員を語る言葉の古くささから脱却した時代に入ったのだろうか？

当時もまだ、こんな研修参加者の大半は、「公費出張で東京見物でもしてきますか…」という気分だった。十数名で分科会討議とアナウンスのあった一部屋が40人だったりするバカバカしさに、誰も苦情を述べるでもない現実だった。まだ、素晴らしいものは中央(東京)にあると信じていた時代だったかもしれない。

映画も評判ほどではなかったが、それは東京

のせいではない。1200円のケーキセットは、今でもそんなところは多くはないのはいか。スタバはまだない。パブルのはじける直前の事だったのだろう。世相はこんな小さな事から振り返ることもできる。

1/26 FRI

滅多にないことだがピンチヒッターで、久しぶりに就学前の子の保健所での発達相談。発達検査をして母親や保母さんと話す。夜は地域で教師との勉強会。

ピンチヒッターのことを一言。中間管理職になった私だが、心理臨床業務への未練がないはずがない。実際、少数のケースは持っていた。管理職になりきるのは寂しかった。

しかし、経験豊富な管理職が、部下の緊急時にピンチヒッターで入るのはご用心だ。四番バッターがスランプだということで、王監督がピンチヒッターに出るようなものである。結果については必ず、様々な思いが交錯する。(王選手だって三振はするからね)上手いといっても、上手いかなくても、しばしば後まで、微妙な問題を抱えることになる。

一番良いのは、同僚間で融通して貰うことである。助け合いは、一面貸し借り感覚でもあるので、そこでさばいて貰っておけば、後々やりやすい。助けて貰った人は、次、相手に事情が生じたときに、喜んでサポートに回るだろう。「こっちも一杯一杯なんだ。課長に頼めよ」、ということにはならない。職場のチームワークは、好調に事態が進行しているときだけに生まれるのではない。

一方的に助け役ばかり、助けて貰ってばかりの役割固定も不満の温床になる。職場に於けるお互い様の成立は重要課題だ。

ある施設に管理職として出向していた知人は、いい顔がしくて、気やすくピンチヒッターの夜勤を替わってやっていた。職員は何かあるとまず、課長に代理を頼むようになった。

そして個々人の緊急事態発生頻度は格段に高くなった。依存心の誘発は人や組織をだらし

なくさせる。その結果、彼は未消化の代休を山盛り抱える事になり、それを自慢げに愚痴ることになった。

*

「地域の教師勉強会」 夜間、児相職員が地域の集会所などに出向いて、地元で働く教員と合同の勉強会を管内二カ所で月例(継続)実施していた。相談判定課主任心理職・川畑隆くんが世話人で精力的に動いていた。相談になる以前の、地域における学校問題に関与してゆこうとしていた。受け身の相談ではなく、うってでる相談を具体化したものだった。今、彼は当時出かけていた地域の一つ、亀岡市にある大学で教鞭をとっている。

私は私で、ずっと後になってから、教員のための家族理解勉強会(月例)を大阪・門真市(10年継続で昨年終了)と滋賀・草津市(11年目継続中)を開くことになる。

亀岡市で参加していましたと語る教員退職者に、二年ほど前に講演会で声をかけられたことがある。地域に種を蒔くような仕事の意味を、後になってしばしば実感することになった。

流行語のように、「地域ネットワークの構築」なんて、出来もしないことを軽々しく口にするものではない。現実社会にはもう、思いつきだけで発展するようなネタはない。難しい課題しか残っていないのが当然なのだ。それをどう一歩前進させるか。ここに深く辛抱強い知恵が求められている。

1/29 MON

夕飯を5時に食べた後は、父親が嫌がるから、もの音をたてずに夜を過ごすという一家。想像しにくい環境で育った女子中学生が今日から一週間、一時保護所に来た。私が面接を担当しているが、とにかく頑固な娘さんだ。

心理臨床業務から離れて、完全にマネージャーになる事への抵抗が、私の仕事ぶりのあちこ

ちに見られる。私の心理臨床への執着心は、組織に何をもたらしていたのか、何を阻害していたのか、何とも言えない。

教育現場で時々、良いことのように「生涯一教師」と言ったりする人に会うが、賢明な管理者が学校を良くすることをどう考えているのだろう。能力がないのなら仕方がないが、管理者にならないことが格好良いという意識は困りものである。加えて、管理者には向かない人が、その地位を欲しがらざるを放置しているのも無責任である。

きちんとやれる人が校長職に就くことで、無理な人は諦める。「なるべき人がならない管理職問題」というのが、私たち(専門職公務員)の世界にあったかもしれない。

私にとってこの中間管理職生活の試練が、良い学びだったことは後々分かってきた。

*

彼女のことを、2010年になって思い出して、月刊「少年育成」誌連載中の「木陰の物語」に描いた。むろん、他のケースとアレンジしたものだが、印象に残る少女だった。

彼女も今では三十代半ばの女性になって、どこかで暮らしていることになる。あの頃のことを覚えてくれているだろうか?そして何かの拍子に思い出すことがあるだろうか?

私たちの仕事は直ぐには結果の見えない、誰かの未来に希望を繋ぐことだった。そんな仕事に疲弊することはなかったし、二年や三年で、異動希望を出すことになるわけもなかった。今、思い出しても胸が温くなる。

近年になって児童相談所で働き始めた人たちは、そんな仕事もさせてもらっているだろうか。

以上、まずは1990年1月の10日間のことである。

螻蛄の斧 (とうろうのおの)

一社会システム変化への介入一

part 1

1990年児童相談所内外事情 第二回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

常識的レベル以上のことを知っているわけではないが、科学技術は刻々新しいものをみつけ精緻化しているといえるだろう。iphoneなど日常生活に入り込んだパーソナルな道具をみても、このことは実感できる。一方、人々の暮らす社会の仕組みやダイナミズムはどうだろう。10年前、20年前と比べて、時間経過に見合う進化をしているだろうか？

むろん戦後の混乱期と比較すれば、何もかもが大きく変化したことは言うまでもない。開発途上国が条件さえ整えば、急速に発展するのは当然だ。そんな話がしたいのではない。その先の丁寧に構築されるべき社会システムの話だ。これを考えるといつも、「戦争」は相変わらずなくならないが、兵器は格段の進化を遂げている事実を思い出す。戦争のない世の中を作るのが、超精密なハイテク兵器を作るよりずっと難しいことは分かっていることだ。人と人との関係世界に持ち込まなければならない科学は、なかなかの難問だ。

そこまで話をひろげなくても、わが国の「貧困」一つ取り上げてそれも言える。二十五年前、社会は一億層中流化といわれて、貧困問題は「生活の質」を問うような流れにあった。物量的な貧困は克服されたとみんなが思った。しかしそこから更なる向上はしなかった。そして今又、世の中は量的貧困が復活しつつある。

こんな繰り返しの世の中である。アイデアマンが思いついたり、時代の風にみんなが飛びついたりするものの多くも、たいてい過去の焼き直しである。独創的なものなど、そう簡単にはひねり出せない。そしてどれもこれも足が速い。(つまり直ぐに腐る、廃れる)。にもかかわらず、なぜポツと出たものがもて囃されるかという、おそらく、飛びつく人々の無知、無責任との共同作業だからだろう。

世の中の多くの事態が、幾多の積み重なりの上に今を形成していることに、もう少し自覚的でも良いのではないかと思う。過去に実践されたものは、それなりの経過をもち、そこには利点も欠点も明らかになっていたはずである。試行錯誤の記録や記憶はあるものだ。これを知らないと、物事はいつでもゼロから始めなければならないことになる。

経験は浅く、若いから不安の強い職員が多い組織になってしまえば、蓄積されたものの発揮する力も目にすることも少なくなるだろう。そして緊急事態に追まられるばかりの仕事では、自己防衛反応としてのバーンアウトや、敵前逃亡もやむなしの事態を生み続けるだろう。

どの分野だろうと研究者と呼ばれる人たちは、先行のデータがあり、これまでに明らかにされた共有の知があることを知っている。新しい研究はその先の一步を模索している。様々な現場も本当はこうでなければならないのだが、なかなかそうはいかない。

特にやっかいなのが不安の強い素人管理者である。こういう人の用心深さ(自己保身)が、先人の多くの蓄積を無にしてきたのだと思う。

1990

二月

2/9 FRI

隔月、三所持ち回りで開いている、「児童相談所業務検討会議」。今月の議題は「教護院在籍児童の教育権保障問題」、「家庭裁判所と福祉関係機関との協議会(特別養子制度、シンナー問題、警察との関係、等々)まとめ」、「京都市児相と府児相の連絡会のこと」、そのほか。

「業務検討会議」は京都府三児相の再編整備が行われたときに始まった業務の見直し会議である。管理者が開催したものではなく、自分たちの日常業務の点検を、児童相談所再編整備計画に連動してはじめたものだ。

もともと京都府には南部に中央児相、北部に舞鶴、福知山の二児相があった。京都市は政令指定都市で市児相を独自に設置していた。人口急増の南部地域の強い要望があって、新たに児童相談所を設置することになる議論経過の産物だった。

最初の四カ所案(南部に新たに新児相設置)が、厚生省(当時)は京都府の人口規模からしてOKを出さないという話で、統廃合絡みのややこしい事態になった。

プランは京都府舞鶴児童相談所の廃止と福知山児童相談所への統合。そして南部に宇治児童相談所を新設することになっていった。

(この経過については、「1948～1987 京都府舞鶴児童相談所記念文集」という冊子がある。(右・表紙)1989年12月に発行されたものだ。130頁あまりの小冊子だが、戦後直ぐに生まれた児童相談所が、40年で使命を終えて閉じる経過を、川崎二三彦氏が七〇頁にわたって全検証している。情報によると、現在刊行準備中の彼の著作に、この文章が含まれるらしい。興味のある方は是非、ご一読下さい。多分私の覚えている事実とは異なるところも多いだろう)

新児相プランに関しては、当局と組合、そして職員との協議が断続的に行われた。労働組合は地元舞鶴市議会や教員組合の反対に理解を示し、廃止統合反対の立場にたった。世の中万事の浮き足だったスクラップアンドビルドの追い風に、地元住民の反対も分か

1948
1987



京都府舞鶴児童相談所記念文集編集委員会

ることではあった。

しかし一方、当時、中央児相職員であり、組合員でもある私は、微妙な立場だった。将来に向かって、何に着手しておかなければならないのかを真剣に考えていた。

私にとって廃止を検討されている舞鶴児童相談所は、六年間働いた二カ所目の職場だった。「それを無くせと君は言うのか!」と、先輩や元同僚達に言われたが、そんなセンチメンタルな話ではなかった。

この段階で京都府下の児童福祉司一人当たりの地区担当人口、南は北の二倍を超えていた。地域事情の差があるとはいえ、このままにしておくことが未来を見据えた結論とは思えなかった。私はその見直しを中心に、再編整備計画を実行すべしという意見だった。

私の役割、心理判定員(今は児童心理士)は、各所とも配置数も少なく、論ずるにあたいしなかった。

新児相建築へ

紆余曲折はあったが、最後は当局案の統廃合が決まり、その後は、新築児相の建物設計にも積極的に口を出すことになった。本庁職員と児相職員が一緒に、いくつかのグループに分かれて、全国各地の最近建てられた児相の視察に出かけた。

こうなっていた背景に直近の福知山児相新築があ

った。数年前、老朽化から新築移転になったそれは、ほとんど本庁主導の庁舎新築計画で、後で建つことになった宇治児相より建設費も遙かに多額だった。

その段階の職員の感覚は、どうせ削られるのだからあれこれ要求をしておけ。二倍ぐらいのものを出しておけば、ちょうどいいになるというアドバイスだった。

そして実際、福知山児相には、何に使うのか不明なまま、早々と故障した電動式のステージがあった。窓には数百万円(?)という飾り枠が付けられ、円窓はステンドグラス仕様になっていた。パッと見た印象は国道下のラブホテルと言った人があったが、全くその通りだった。

宇治児相新築に対峙する我々は、そんな気分ではなかった。あれもこれも要求するのではなく、必要なものしか要求しないから、その通りの建設予算を組んで欲しいと思っていた。本庁の担当者と一緒に行動することで、その真意は伝わっていたと思う。部長も児相をよく知っている人だったので、なるならないはともかく、出来ることをして新たな事態に向かう事になった。

視察

視察に出かけた新築なったばかりの滋賀県中央児相の一時保護所は、夜間、男女の生活ゾーンを区切るためと、無断外出(逃亡)発見のためのセンサーが設置されていた。

ところが実際動き始めてみると、このシステムのランニングコストがバカにならないというので、普段は止めているという話だった。思いつきと、実態運用の間には起りがちなことだ。皆さんの家にも、あったら便利そうに思って購入したが、実際は二、三度使っただけという通販商品があるだろう。

遠方の視察もいくつかの班に分かれて実施された。私は山形県の児相に出かけたが、そこで改めて、業務姿勢と建物の形は相似形だと思った。

山形県中央児相は合同庁舎のワンフロアー(4階だったか)に置かれ、エレベーターを降りると、保健所と左右に分かれるホールが待合室だった。ここで対応される親子のことを考えると、相談機関ではなく、役所の窓口だなと思った。

われわれの議論では、児相の待合室そのものの発想転換を議論していた。千客万来のごった返すような機関ではないのだから、直接、面接室に入って貰えばいい。問題を抱えて出向いた相談所の待合ゾーンで、見も知らない誰かから、「どうされました?」なんて話しかけられても、嬉しくはないだろう。それこそ、プライバシーの問題だ。だから新築児相に待合いゾーンは作らなかつた。

また、翌日訪問した新築・庄内児相の一時保護所は、児童の居室に集音マイク(隠しマイク)が設置されていて、保母の居室からモニタリングできるという、とんでもない仕掛けがあった。

同行した熱血漢のMさんが、「子どもの人権のことを、どう考えているんだ。刑務所でもこんな事はしていないぞ!」と視察させていただいているにもかかわらず吠えた。

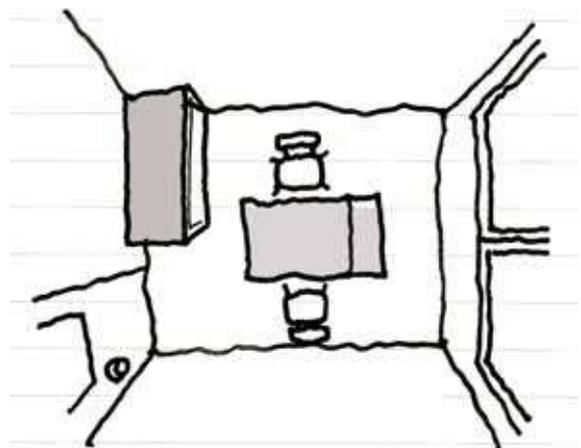
この状況で、こういう発言が出来るMさん。頼もしさと、困った人だという両面があると思う。近年、自分のことで騒ぐ人は増えているが、誰かのためにこういう事の出来る人は減っている。こんな人が状況打開の突破口になる事もしばしばだ。しかし一方、こういうスイッチの入りをする人の人生が安穩かという、そうでもないから、なかなか難しい。

庄内児相は、保母(女性)が宿直勤務をしており、当時、児相の一時保護所で起きていた事件(職員が亡くなる事件が複数あった)への懸念から、本庁設計担当のところで押し切った設備だと、次長は弁明していた。

踏まえるべき事を踏まえて、必要な議論を尽くしておかないと、こんな事は京都府でも簡単に起きることだと視察グループで話し合った。

空調の問題、採光の問題、職員と利用者の動線、一時保護所の子どもの雨天時の過ごし方。廊下の声が面接中の室内に響く問題。全館冷暖房の場合、夜間や土日に、建物の一部を使用する際のコスト問題など、それまで考えた事もなかった話題を話し合った。

やがて東洋エンジニアリングkkとかいう設計事務所から出てきた、警察署の新築を手がけた経験を背景の図面(平面図)を、漫画家でもある私は一部屋ずつ俯瞰立体図に起こして、微調整の議論を繰り返した。



こんな仕事は業務でも何でも無い、全く好きでやっていること扱だったが、立体図におこすと、実際に面接室を使うときのイメージがみんなにも浮かんだ。

それは例えば、入室して着席した人に見える景色はどんなものかと、その時、手荷物はどこに置かれているかと、部屋が殺風景すぎないかと、具体的な想像だった。

職員体勢

再編整備計画であるのだから、現有する課題にできるだけ総合的に取り組もうと思った。だから、新しい児相の職員体勢にも意見を出していった。しかし人事に関しては壁が厚く、最終的には管理者と組合が、思いがけない妥結案で手打ちをした。

組織、建物は統合する。所長や次長、庶務担当は舞鶴児相、福知山児相それぞれに一名ずつ配置されていたのだから、統合されれば自動的に各一名減になる(マイナス3人)。一時保護所も統合されて一つになる。保母、指導員、調理員が減(マイナス3人)。これは議論の余地なく当然である。

しかし、他の職種、特に児童福祉司は現行通りでという。相談部門はそのままの体勢で合併だという。これが地元で、統合案を呑んで貰うポイントだ。「統合による相談部門の縮小、劣化はない!」と説得したというのだから、そんな馬鹿なマイナス6人案があるものかと思った。しかし現実には、まさにそのように動き出した。

一方、新設の南部、宇治児童相談所の人員配置は、現行中央児童相談所の各地域担当を、新しくなる二カ所の児相に分割して対応するだけだった。

一時保護所は京都児相(旧中央児相)、宇治児相の二カ所になり、その対応職員も配置されプラス3人。所長、次長、庶務も一名ずつ増えるのでプラス3人。これで新児相の人員配置は、プラス6人になるという。つまり、直接相談業務職員の配分には変化はないことになった。この経過は人事のことであり、年度末ギリギリになるまで、私たちには明らかにされなかった。

てっきり児童福祉司、心理判定員の負担の南北間格差に、新提案があるのだらうと思っていたので、こんな拍子抜けの手打ちには、当局だけではなく、労働組合に対してもあきれてしまった。そしてこの後、数年にわたって、南北間格差の是正問題はくすぶり続けることになる。

福知山児相に定年退職職員があると、後を補充せずに欠員化して、じわじわと南に人を持ってくるような人事は、方針でもなんでもない。そのため、当時福知山児相の児童福祉司で退職間近だった人は、後任の人事を考えて悩んだという。迷惑をかけたくないからと自分の退

職後の人生設計の微調整を余儀なくされ人もあったやに聞く。

この頃私はもう、児相を離れる事になってしまっていたので、詳細は分かっていない。そして今、その後の児童虐待の追い風で、児童福祉司も児童心理士(旧・心理判定員)も、大幅増員になっている。

業務検討会議

人事は口の出せる余地の少ない部分だったが、建物問題に一定の目処が立つと、児相再編後の業務についての洗い直しも協議事項として浮上した。ここでやっと業検(業務検討会議)の話になる。

業務の点検とか洗い直しとか、言葉はよく使う。ただし問題はその方法である。似たようなことをやっても、結果が出るものと、出ないものがあるのは、皆良く承知している。この時の業務洗い直しはこんな方法ではじめた。

当時、三児相には総勢五十人足らずの職員が働いていた。庶務会計も含めた陣容である。その全員に、「自分の関わる児相業務で、改善を考えるべき項目はなんですか?」というテーマのアンケートを実施した。自由記述ではあるが、ノルマを一人10枚(一項目を一枚の紙に書く)にした。

児相業務の根本問題から、面接室のパイプ椅子の質、一時保護所のおやつとの与え方まで、各自の領分での懸案事項を半ば強制的に書きだして貰った。

三児相それぞれに業務検討会議担当(「業検」と呼んでいた)がCW、心理、一時保護、庶務と選任されていて、ここに本庁主管課の係長が加わった。

アンケートは500枚足らず集まる予定になった。実際はそこまで集まらなかった記憶があるが、それでも三百枚近く集まったものを持ち寄って二回目の業務検討会議をひらいた。

京都児相の卓球台をワークテーブルに、アンケートの分類を行った。

直ぐに改善できること。

中期的に検討、改善計画を要すること。

長期的展望を要すること。

根本的な理念や児童福祉機関としての課題。

これくらいのカテゴリーで整理していった。そして、この課題については、速やかに、三所共通に改善していった。

これで記憶に残っているのは、「ゴム印」の事である。当時のカルテ(これも三所バラバラで、後日、書式の統一が議論されることになる)は、要件について受付相談員が処理を記述して回覧して決済されていた。この要件

欄に押されているゴム印の文言が三所で違っているものがあった。

類似のことなのだが、言葉が違う。言葉が違うと、若干の違和感が三所相互に生ずることになる。三所をくまなく転勤した人はなかったから、他児相の言葉は異文化だった。これを統一するには、少々議論が必要だった。

中長期の課題ではこんな事もあった。宿直勤務明けの代休の取り扱いである。当時、京都府では一時保護所の夜勤を、職員が交代で行っていた。他府県の実態を見ると、専任の夜間勤務職員を採用しているところも多く、もう少数派になっていたと思う。しかし我々はかならずしもネガティブだけではなかった。

自分の担当する子が児相にはじめてきた日の夜、食事をしながら、TVのついた部屋で、何となくダラダラ話したり、「風呂に入ろうか…」等と言っているのは、豊かさを感じられる仕事だった。

しかし三十二時間以上の拘束になるこの勤務、時間外手当で対応すると莫大な額になってしまうので、一律の宿直勤務手当で対応し、あとは半日の代休で処理していた。そのように北部の児相のものは皆、理解していた。

しかし中央児相ではそのような処理が行われていなかった。年次休暇も満足に消化できない業務実態に、加えて半休を取れと言われても、実態はとも消化しきれものではない。結局、概ね2週間以内に消化すると内規された代休は、とれないまま権利放棄になっていた。

これが常態化しているのはおかしい、北部では取れている代休も、中央児相では取れないという不満の声があったらしい。そこでこの代休の定額買い上げが行われているという。そんな話は北部で働く者にはまったく寝耳に水の話だった。

また恒常的な時間外勤務の増加により、手当の100パーセント支給も難しいというので7割支給の現実もあった。ところがここでも、やたらに時間外の多い人と、僅かだという人への支給を一律7割は気の毒だという意見があったとかで、人によって満額支給だったり、7割支給だったりするという。

こんな話も三所で共有できる事ではなかったし、庶務会計を担当したことのない我々には驚きの実態だった。

今日、税収は伸びず、人員削減も進む今、給与カットも繰り返されたあげく、長時間の勤務をただ働かさせられている児相職員が多いのではないかと思う。今考えると、こんな議論も恵まれた条件下のお話に見えるのかも知れない。

業検(業務検討会議)では様々なレベルで、仕事の共通化と合理化を議論していた。そしてその成果を毎年、

冊子にまとめて重ねていくことになった。

5,6年間、毎年一冊出たのではないかと思うが、これは、人事異動で来る新しい職員に、業務をわかりやすく伝達講習する職場教科書や手引き書にもなっていった。

2/6 TUE

施設で育って、高校中退した女の子が去年結婚をした。式に招かれて何人かと出かけた。その彼女が久しぶりに尋ねてきて、「父の位牌を探したい…」という。

いろいろな経過を判る範囲で調べてみたが、余りいいものは出てこなかった。まだまだ頼りないことを言っているが、それでも大人と喋っている気がして安心する。彼女も一人前になってきた。

短期な人事異動を繰り返しては、こんな結婚式に立ち会うこともないだろう。せいぜい卒業式に巡り会うくらいだと思う。

児童相談所は事件に遭遇するのではなく、ドラマに会うのだと思って仕事をしていた(今もそうでなければと思う)。だから職場に生き字引のような長期勤続者が居てくれるのもありがたかった。

誰かが、どこにも頼れる人がないと思った時、自分のことを覚えていてくれるに違いない人のいる場所が思い出せたら、孤独にさいなまれることは、幾分減るように思う。

覚えていてくれる、自分のことを知っていてくれるというのは究極の支えだ。こういう人的資源は、資格や、専門性によってもたらされるものではない。

そういうことを分らない人が増えて、こざかしい議論で会社(企業)も社会システムも再編するようになって、人々は多く自殺するようになったのだと思う。先に鬱病があるのではなく、まず、孤立や孤独が人の心を占めてしまったのではないのか。これは昨今話題の高齢化社会の抱えるテーマとも共通している。自主独立は繋がり下手とイコールではない。自立出来る人は繋がることも出来る。きちんと繋がれないから、自立も出来ないのだ。

また、親族間の極端化した攻撃性の発露も、長い経過があってもあると思えない人の反応だろう。良いときも、悪いときも、親密なときも疎遠なときも、全て含まれて関係であることを学んでおかなければ、絶好調、ラブラブ以外の関係は皆、破滅するしかない事になってしまう。私は京都から(関西から)他の地域に移ろうとしたこと

がない。たまたま機会がなかっただけでなく、京阪神、関西エリアで私も生きていることを、過去から今に繋がる人に、資源として示し続けたいと思ってきた。京都市内の利便性の高い場所に、自宅とは別に仕事場D・A・Nを構えたのも、その表れである。

彼女に関してはこの後のことも、よく知っている。世間の多くの主婦(母親)である人たち同様の悩みを抱えて今を生きている。けっして万々歳、めでたしめでたしの人生などではない。そんなことは当たり前だし、私が引き続いて面倒を見るようなことをする気もない。それが当たり前前の関係である。平凡に生きる人にありがちな悩みを、彼女にも確保してやれたのが、児童相談所の大人の知恵だったと思う。

2/10-12 SAT-MON

「家族療法ワークショップstep その2」をJR嵐山駅前コミュニティ嵯峨野で。昨年夏にはじめて開催して、申込多数で断った人があったので、もう一度同じプログラムで開いたものだ。北海道から九州まで、児童相談所を中心に、医療機関や教育相談機関、大学、研究所など、いろいろなところから、2回で71名の参加者があった。

このプログラムの主催は京都国際社会福祉センター(KISWEC)。新k式発達検査の販売や、講習も実施している社会福祉法人である。1989年に始まったプログラムだが、2010年現在も毎年、step(1)(2)(3)を開催し続けている。二十一年たっても、それほど変化しないものもあるということだ。

社会には必然というものがあって、それはその時々々のルールやトレンドとは異なったものだ。議会制民主主義の原則ルールのように、民意の結果として多数決で何でも決めてしまえる事実は存在する。これは、アメリカの好きな「マーケットが決める」という理屈と似ている。

しかし私は、誰がどう考えようと、世の中には必然が存在すると思っている。そしてそれは、存在し続けることで立証されることになる。

もて囃される(民意が強く後押しする)商品でも、あっという間に消えてしまうのものに、価値など探す必要はない。本当のものは継続している。定番商品というのがそれである。

2/22 THU

受理判定措置会議。ややこしい事態を抱えたケースが多く、丸一日かかってしまった。夕刻17:30と19:30に家族面接の予約が入っていて、事務所を出たのは21:30だった。

家族療法を採り入れて、積極的に面接に繋げていた。結果も出ていたので、職場全体で取り組みが進んだ。

父親の出席も強く求めていた(20年前のことですよ)ので、面接時間が夜間になることも多かった。この事態を当時の次長(会計・庶務担当)からは、時間外手当が出し切れないから、仕事は昼間にやってくれと繰り返し注意された。

もっとも、今の児童相談所は児童虐待対応で、昼も夜もありはしない。何か起きたらどうすると騒がれれば、動く(しかない)。そう考えると、あの頃はまだ良い時代だったということになるのだろう。

「職場を出るのが21時30分過ぎになった！」などと書いているのは、そんなことは稀で、よく頑張っているだろうというアピールだからだ。これが京都府の児相では標準感覚だったのが1990年である。

状況はあっという間に変化する。今では土日もなく、携帯電話を持たされて四六時中・・・なんて、酷い労働環境だ。

前半に登場した川崎君とのことで、こんな印象的な記憶がある。私が京都府を退職して数年経った頃のことだ。1年に一度くらいしか顔を合わせることもなくなっていたが、たまにはゆくり話そうかと時間を設定した。

業務帰りの彼が私の仕事場に手土産を持って19時前にやってきた。そして、20時過ぎに、川崎課長の携帯が鳴った。相談所に戻らなければならないという。

こちらは急ぐ要件があるわけではないので、お開きになった。おそらく、家族の日常に、こんな事が頻回にあるのだろう。

短期間で異動希望を出したくなる職員の気持ちも、「我が子ネグレクトですよ、団さん」と言っていた人の気持ちもよくわかる。

螻蛄の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第三回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

ここに書いているのは児童相談所(昨今は国民の誰もがその存在を知ることになった)が、まだまだ「児童相談所」の説明からしなければならなかった頃の仕事の話である。十年一昔と言うが、1990年といえば二十年前。今、大学生の人達はやっと生まれた頃だ。

そこで行われていた子どもの福祉や健全育成に向けた仕事が、今では考えられない古臭いものであったら、課題はあるにせよ現在は、進歩したものだという結論になるだろう。しかし世の中というのは概ね、そんな風に進化するものではない。仕事、中でも業務の枠組みというのはなかなか変化しない。職場の悩みを聞いてみたら、昔も同じじゃないかなんて話はよくあることだ。中味は変わっても実は堂々巡り、こんな事もよくある話だ。そして、注意を怠ると世の中は進歩しているはずなのに、仕事は稚拙化、劣化する。名人、職人がいる業界ではよく聞く話だ。

この二十年を振り返ると、児童相談所の仕事はそれまでがそうだったように、やはり時代の風にあおられて、業務の様相を変化させてきた。計画的構築性などなかなか持てないまま、目前の課題に翻弄されてきたのではないかと思う。

近年ずっと騒ぎの中心にある児童虐待だが、現在の陣容で児童相談所が危機介入から家族再統合、そして防止・予防まで語るのには世迷い言にさえ見える。そんな難題をふっかけられて犠牲になっている後輩職員達を気の毒だと思って見ながら、同時にちょっと彼らにも知恵や勇気が足りないのではないかと思ったりもする。

私は4カ所の児童相談所に合計21年勤務した。当時、このキャリアは殊更珍しくはなかった。もっとベテランの児相職員は全国に沢山いたし、採用から退職まで35年以上、児相一筋という先輩もいた。私自身、二十年余働いてもマンネリしていると思うことなどなかったし、惰性で働いていた記憶もない。そういう意味では特殊な仕事、職場だったかもしれない。

2010年11月、「週刊少年サンデー」で『ちいさいひと～青葉児童相談所物語～』が三週にわたって掲載された。新採の児童福祉司が主人公のコミックスである。設定にも驚いたが、内容にはもっと驚いた。私は浦島太郎だと思った。「人事異動で久しぶりに児相に復帰しました」と語る人が、「様変わりぶりに驚いています!!」というのを何度聞いたことだろう。時代の変化が必ずしも進化だとは言えない。みんな頑張っているのに、事態が良くなっているようには思えない、これが今日ではないかと思う。そんな時には温故知新。少年サンデーに対抗するわけではないが、今回は別冊マンガも用意した。もし届くものがノスタルジーでしかなかったら、私の筆力の未熟だろう。現実には確かに豊かだったのだ。

1990

三月

3/2 FRI

夜、一時保護所に中学生が来ていて宿直当番。一緒に飯を食ってテレビを見る。ほとんど自分から話さない少年。

3/3 SAT

家中に爬虫類を飼っている登校拒否中学3年生の家族との最終面接。就職先が決まって、その給料をあてにして、分割払いで新種のトカゲを50万円で買ったそうだ。頑張れるといいな。

京都府はずいぶん後まで、一時保護中の子どもの夜間対応を、職員が交代でしていた。だから担当ケースの少年・少女と一晩過ごすことがけっこうあった。

勤務としては長時間拘束（三十二時間）であり、他府県の実態は刻々変化している中でのことだった。

自分たちの負担軽減のために、一時保護期間をできるだけ短期に設定しようとする無意識の協同や、簡単には一時保護を開始しない傾向もあった。

いいか悪いかは、おそらく両面である。手段を乱用しないメカニズムは、こういう動機にも支えられているといえる。専任宿直員のいる状況なら、あまり仕事がないのもいかなものかという判断も働こうというものだ。

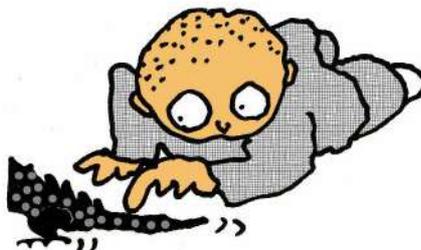
もっとも、近年では都市部も地方もあまり変わりなく、一時保護所はどこも、要保護児童の対応に満杯の大賑わいらしい。

この頃まだ、「登校拒否」という言い方が主流だったのか・・・と、これを読んで思った。「不登校」が常識になって、二〇年にはならないのだな。

そしてここに出てくる、トカゲ五十万円という単位に驚く。やはり世の中全体にバブルの匂いがある時代だったのだ。

たしか既に飼っていた南米産の爬虫類を業者に引き取ってもらって、差額を足して手にいれたトカゲだった。

「の子が
夢中類だ！」



この一家に家庭訪問したときのことも忘れられない。玄関を開けたとたん、家中温室状態だった。爬虫類放し飼いの家など、後にも先にも経験がない。

3/5 MON

重症心身障害児施設「H学園」との話し合いで、T川・N川両課長と出かけた。「児」とつく施設であるにもかかわらず、年長者51歳、十代の方はわずかだという。隣接する養護学校の分校は、数年後には在学対象者がなくなると聞いた。

就学猶予、免除などという言い方で、教育権保障されなかった重度障害者に、さかのぼって教育保障していた養護学校も、ぼつぼつそんな対象者がなくなってきていたのだろう。

重症心身障害児施設というが、入所者は皆、成人してしまうこの時期には、隣接の養護学校分校も入学者がなくなりかけていた。立ち話で分校関係者は私たちに、学齢期の重症心身障害児の入学斡旋を強く求めていた。

3/7 WED

実習生の最終日。午後半日かけて、振り返りをする。彼女達は14日間の驚きの連続の中で、ずいぶん正確にものを言えるようになっている。

3/8 THU

昨日から、京都府心理判定員会議をや

っていて、今日のコメンテーターを依頼されていた。心理職課長がレギュラー参加しなくなって、少しずつ以前とは違ってきている。

3/13 TUE

久しぶりに心理検査をした。食べないで衰弱して、入院をするという小学6年生女子。どう進めていくかは、これから考える。

こんな実習生の中から将来、児童相談所で働くことになる人が何人かあった。仕事が魅力的にみえていたのだろう。働いている人が生き生きと輝いていたと感想を述べた学生もあった。

児相職員の平均在職期間が三年未満と聞く今、外部の人や学生達にはどんな職場に見えているのだろう。

当時、県市によっては、大学と共同して事業を始めたり、スーパーヴァイザーとして大学教員を招いている所も少なくなかった。しかし京都府に関して、我々はそういうスタンスは全くとらなかった。

仕事は児童相談所に属しているが、研究はその個人に属していると思っていた。大学教員の関心でやってこられて、満足したからとほかにいってしまわれる児童相談所として、置き去りにされているような実態を少なからず目にしていた。だから我々のところでは、何でも自分たちでやろうと思っていた。

心理判定員会議では様々な工夫や提案を形にしてきた。「月刊・心理テストカンファレンス」という冊子もその一つだった。この会議とは別に月例実施していた心理テストカンファレンスを、担当者が小冊子にまとめて、百力所あまりの関係者、機関に、守秘お願いのための通しナンバーを入れたものを送っていた。

研究者ではないが、現場もこんな風ががんばっているのだと知らしめたかった。そして上芝功博さん、氏原寛さんなど、何人かの業界先輩の方々から反応や書籍、カンパをいただいて、とて

も嬉しかった記憶がある。

アノレキシア（拒食症）女子との家族面接をすることになる出会だった。それまでも、痩せ症の女子ケースに会ったことはあった。しかしその時は、個人セラピーを実施していた。（効果のほどは何とも言えないが、時間と共に変化した）。

このケースでも初期は相互描画法を用いて個人面接していた。小康状態の保てる半年ほどの期間を過ごした後、母親の強い希望で一家四人の合同家族面接を実施することになった。

ランチセッションなどという面接場面で食事をする方法も、ミニチュチンの本を参考におこなってみた。思いがけない発見や落胆もあったのだが、ここで詳細には述べない。

3/14 WED

秋に京都で開催する「全国児相研セミナー」の現地実行委員会の通知を作成。午後はABC朝日放送ラジオへ。卒業シーズンということで、テーマは自立、旅立ち。旅立たれる側の課題に焦点をあてて話す。

児相研セミナーは2010年（青森大会）に至る今も継続している自主的研究グループである。私もできるだけ参加するようにしている。「研究発表」中心の集まりではなく、児童相談所を取り巻く諸問題について、情報交換や検討することを目的にしている。

この日の記述を読みながら気づいたことだが、相談判定課長の私は当時、相当に優秀な課員に支えられていたようだ。

午前中全国セミナーの文書作りをし、午後は休暇を取って月に一度のラジオ出演をしていたのだから、日常業務は実に順調に進行していたということになる。

私なりにみんなの支え役ではあったと思うのだが、課員にとっては、近接異分野の風をあちこちから持ち込んできてくれる小隊長だったのだろうと思った。この時代の課員とは、この後もずっと、なんやかやと出会う機会がある。

そして私は、二十年も前から、子ども達の自立不全が気になって仕方なかったのだと思ひ出す。このテーマは近年、ますます問題拡大してきているやに思える。そしてこの依存性を、私も含めた心理職、対人援助職者が一貫して助長してきたように感じられて仕方がない。

3/16 FRI

情緒障害児短期治療施設「静岡県立吉原林間学園」に講演に行った。新幹線の新富士駅から霞がかかった富士山が正面に見えた。長男が公立高校に合格したことを、名古屋のプラットホームから公衆電話で聞いた。息子の元気な声がとても嬉しかった。

当時、情短施設は京都府にはなかった。京都市は情短・青葉寮が京都市児相に隣接してあった。

この頃、吉原林間は、生活と治療と教育の三本柱の金食い虫ぶりに、議会で追及されていた。少ない在籍児童に莫大な金をかけて、効果はどうなのだという県議会での質問だった。

確かにこの時代、情緒障害児短期治療施設(ほぼ公立、職員は公務員)は裕福な時代のさらなる一歩という位置づけの施設だった。

今、情短施設は社会福祉法人施設として、虐待児の受け皿として、全国で増えている。



ここで高校入学を喜んでいた長男が、今、本誌で連載もしている団遊である。二十年というのは、そういう時間なのである。

仕事で出会うひきこもり青年。「高校時代の嫌な思い出が・・・」と語るが、どれほど変化の可能性に満ちたその後の時間を無為に過ごしてきたことかと思う。

人が自身の説明(言説)に執着してしまったり成長も変化も拒否できてしまう。抵抗できないのは身体変化と加齢くらいのものだ。それでも一生は過ぎてしまうのだから、無為を助長するような支えにウカウカ一票を投ずるものではない。

我が子や自身の人生がそうやって費されていてもいいと覚悟が決まるなら自由だが、他人の人生の浪費だけに平気というのは酷いのではないか。

3/22 THU

受理判定措置会議 母に急死された男の子二人が家庭内暴力と登校拒否でどうしたらいいのかわからないという父親の相談があった。

それから母子家庭の母親の素行が悪くて、三人姉兄妹それぞれが非行という相談もあった。

離婚、事故、癌、その他、いろいろな原因で核家族が維持できなくなる。みんな辛い。

夕方、徳島県児相の判定員が家族面接の実際を見せて欲しいと訪ねて来訪。

ケースは日々多様に飛び込んで来て、展開していた。対象を特化しない、家族、子育てにまつわるあらゆる相談が寄せられていた。

この日に限らず、児童相談所における家族療法の視察という枠組みで、あちこちの県から訪問があった。この日の判定員は、他用務があって関西に来たついでに、一度見せて欲しいという趣旨の来訪だった。

この時期の視察の特徴の一つは、年度末の予算消化行動であり、せつかくなら京都見物でもし

てくればいいと、職場の合意で出張派遣されている人も少なくなかった。そのため、見に来ているのに、あまり家族面接には関心がないなんて人も含まれていた。



3/23 FRI

来週、療育事業・琵琶湖一周サイクリングに登校拒否小・中学生8人を連れていく。その候補者の一人と面接。この子達はいろいろ小さなことを気にして、すぐ感情を害してしまったりする。グループの一員になって一週間旅をするなんて、なかなかだ。

3/26

サイクリング参加者7人とその第1人が、欠けることなく集合。みんな登校拒否だ。

私は出発三日後の夜、22時前の列車で、米原乗り換えで木之本駅に行って、ピックアップしてもらい、サイクリング部隊に合流した。明日、明後日と伴走車でビデオ撮影担当だ。今夜は賤ヶ岳ユースホステル泊。

3/31

昨日までの走行実績から見て、最終日の予定行程は無理だろうという予想が昨夜のミーティングの大勢をしめた。それでも、朝5時30分起き、6時10分出発。そして結果は予定の膳所公園に12時に着いた。60km近くを昼までに走りぬいた。子どもも大人もみんな顔付きが違っている。いいサイクリングだった。

琵琶湖一周サイクリング

さて、今回のメインメニューである。この手の療育事業はあちこちの児相で、たくさん行って

いた。時代がそんな風向きだったのだろう、様々な療育事業メニューがあって、競い合っていた感覚もある。

京都府でも、集団になじめない子のための合宿(集団指導プログラム)や、非行少年達を四国・四万十川に一週間連れて行って、河をゴムボートで下る事業(スタッフにとってあまりにハードだったので、一回きりになったが思い出深い)など、様々なことをした。

どのような意味があり、どんな成果があったのかと聞かれると、実証的には答えられない。しかし実際に渦中で一緒に行動して、手に入れたモノは限りなくあった。

琵琶湖一周サイクリングは7~8年も(毎年、春と夏)継続したのではないだろうか。不登校を中心に、家族面接、カウンセリング等の経過を持った子達の、区切りイベントとして位置づけられていた。

春休みと夏休み後半に、対象児童がゼロでない限り、参加者一人から出発していた。

閉ざされた面接室の中で、デリケートな心の中だけの援助では、子どもも家族も再生しきれないことは気づいていた。両者を組み合わせた援助プログラムの発想は、我々のオリジナルなどではなく、考え方として諸外国に既にあった。我々のところではメニューを何にするか、そこが独自性のある余地だった。

琵琶湖一周するという達成感の明確さ、一日中、湖を眺めながら疾走する爽快感、湖岸各地の青少年施設の整備充実と、申し分のない条件が整っていた。京都の児童相談所ではあるが、滋賀県琵琶湖を大いに活用させていただいた。そして、参加者の予後は、期待に十分応えてくれていたと思う。

ただ、この事業で私たちが悩ましたのは予算の問題だった。基本的には庶務・会計のところさばいてくれる話である。しかし彼らのルールでは当然、事業計画を立て、予算要求をして、予算の付いた事業を執行する。

ところが臨床家でもある私たちは、「来年の

夏に何名の不登校児をサイクリングに連れて行くことになるかなど、前年に分かるはずがない！」と言っていた。

そして直前になって、「今年は五名になりそうだ」とか、「一人だけかもしれない」とか言っていた。

庶務・会計の人たちには迷惑なことだったろう。だが、何でも予算だけで決めるのは弱いことだ。

他にも予算絡みではこんな事もあった。随行職員もそこそこの人数が必要になる。その職員達の時間外勤務手当がまかなえないという話が会計からあった。サイクリングは業務だから、その勤務に対する手当が当然発生した。二四時間張り付きの一週間分である。伴走職員を減らすとか、滋賀県は近いから職員は日帰りに出来ないかという提案もあった。

しかし私はそういう対応を選択しなかった。皆で話し合っ手当を返上した。合宿中の宿泊費や食費をカバーするだけで参加してくれるよう話をつけた。この結果、予算の問題で庶務・会計と、調整しなければならないことは減った。

当時、特に中央児相は、超勤手当の完全支給について、組合との協議が繰り返されていた。役所と言うところは今も、何かを実施しようとする「予算がない！」といわれ、いったん予算が付くと、「何が何でもやってもらわないと困ります！」と実施を迫られる、こんな事態がなくもないだろう。

*

この数年の療育事業をまとめて後年、月刊「少年育成」誌（当時の名称は「少年補導」）に二年（24回）にわたってマンガの連載をした。それを掲載しようと思った。しかし本誌に入れ込むと膨大なページ数になるので、昔懐かしい月刊誌の付録本の感覚で、別冊付録にすることにした。

マンガにはカラー頁も含まれているので、プリントアウトするとコストがかさむと思うので、モニター上でごらんいただくのが合理的かと思う。

㊦巻40頁は完成させたが、問題は㊦巻である。年末年始に作業できればと思っているが…。

（では、別冊マンガを）

そして今、2010.12.12

家庭内暴力をのりこえる
「家族臨床理論」の構築にむけて
虐待を解決する取り組みの
最前線からの問題提起

と長いタイトルの公開シンポジウムに出かけた。同僚の中村正さんと大阪市の久保樹里さんが企画したものだ。大阪を中心に、このエリアで働く様々な機関、組織の人たちが、ちょっと一堂に会しすぎといった趣の、贅沢なイベントだった。

報告は又正式なものがどこかで行われるだろうが、私はちょっと義理もあって、前日東京で6時間のワークショップを行い、東京泊になった翌朝6時50分の新幹線で大阪に向かった。八重洲富士屋ホテルにいたのは前夜11時半チェックインだったので、6時間半だけだった。

しかしこの会は、出席できて本当に良かった。登壇者と参加者で、会場はぎっしりだった。児相とその周辺で問題意識を共有しながら、協力協働しようとする人たちがたくさんあることに触れた。

全国の児相がみなこんな風だと言えないのは重々承知だが、新しい時代の新しい風は起きていて、そこには私の時代に吹かせた風の匂いも少し感じられた。だからこのマガジン連載（20年前の日誌）の中に、普遍が含まれていることも確認できた。

問題を調査することや指摘することは比較的たやすい。手におえる部分を切り取って、限定的に言及すれば、発言はそれほど無意味化しない。

しかしその結果を、具体的に業務デザインにして世に問うのは簡単ではない。現実には刻々結果を見せつけるし、そこで一定の成果を上げるのは容易ではない。

それに新しい試みはいつも、それまでのことを

批判することになる宿命を背負っている。そのため、たいした意味もなく、変化したくないと訴える組織や人が少なくない。

「このままではどうしようもないでしょう！」等と叫んだところで、相手も世の中も変化したりはしない。変化可能な部分から手を付けて、ひたすら働きかけ続けるしか、社会システム変容への道はない。

私はこの会場でしきりに自分がこれまでしてきたことを振り返っていた。そして、「蠅螂の斧」の第二部に書こうとしている継続的地域ネットワークの事を思っていた。（詳細はいずれ）

2010年6月に始まったこのマガジン。今までなかったものが、このように持続的に場を獲得して、様々な現場のコンテンツを運んでくることになった。その場の管理人として3ヶ月に一度、世の中の変化（新たな物が一つ付け加えられる点において変化である）を作り続けることになった。

私は今、自分のやりたいことをやる自由を授けられている。ありがたいことに協力、協働者もたくさんある。ならば、ここに何か一つでも時代の進歩を刻まなければならないのではないかと考えて、今朝も新幹線の車中、編集作業を続けていた。

そして会場で、いろんな取り組みや、論拠に基づいて奮闘する、私よりずっと若い人たちの群れに出会った。

嬉しく、有り難いことだなぁと思って最後部の端の席で、喜びに満ちて座っていた。

蠅螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第四回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

1年なんて、あつという間だとも言える。64歳になる今年、年々、一年があつと言う間だ感は強くなる。しかし、1年365日は決してあつという間ではない。日々、充実させる努力をしていれば、ずいぶんいろいろなことが出来ると思う。この日誌レビューは当初、大きな出来事、事業をピックアップして二十年前の一年を概括しようと思っていた。

たまたま一月は「児童福祉施設職員向けの中堅職員研修」プログラム、二月は児童相談所再編整備に関わる「業務検討会議」、三月は「療育事業・不登校児のための琵琶湖一周サイクリング」があった。しかし四月になって、新年度早々そんなに大きなイベントはない。そこで、この辺りはさつと進める予定だった。ところが最近、あることに強く印象づけられる出来事に遭遇した。

研修の場だったのだが、そこの参加者が一様に、「三日間、楽しかった。仕事の話をしているのに…」と語った。また、私と早樫さんがプログラムのことを、ああだこうだと夢中で話しているのを脇で見て、「とても楽しそうに話している！」と、そのことに反応した。私の頭の中に「？」マークが生まれた。仕事の話をああだこうだと、いい大人が懸命に話しているのだから楽しいに決まっている。そんなことは自明のことだと思って今日まで来た。

ところが、それは必ずしもそう言えることではないらしい。仕事は苦しかったり、辛かったり、ストレスだったりするという。私とて、全くストレスがないなどとは言わないが、一日も早くこんなところから逃れて、悠々自適で暮らしたいなんて思ったことはない。面白いのだから止める理由がない。むしろ、「不本意でも、そこに引っ張ってゆかねばならない。立場というものがあるから…」なんて業務をしていたらきっとそうだろう。しかしそんな仕事っぷりをしたことがない。これは恵まれているだけでも、運が良いだけの事ではないと思ってきた。

では何なのか。その答えが一九九〇年一年の仕事ぶりにも含まれている気がした。読み返しながらかめて、ずいぶんいろんな事をしているなあと思う。しかし多分どれ一つとっても、しなければならぬことではない。面白そうで、したいからしている。しかも自分一人ではなく同僚や部下と一緒にである。

彼らにすれば、強引な課長に付き合わされていただけかもしれないが、意外にあの児相時代のことを良い記憶として、現在を生きる退職組、定年間近組が多いらしい。新たな場で活躍する後輩もどんどん増えている。

これは社会システムの最小単位、職場システムへの良い介入になっていたところが、期待以上に大きかったのかもしれないと思った。当時からの点はある程度自覚していて、効果も手にしていたので、「蠅螂の斧」だとは思っていなかったの、この角度からの記述は想定外だった。しかし、職場システム論としてこれも書いておく価値があると思い始めたので、四月からの日々を大事だけではなく、小事も振り返ることにした。

1990

四月

4/1

図書館にいて、池澤夏樹の本を探す。書店でよく見かける「スティル・ライフ」の他に、「夏の朝の成層圏」を見つけた。その奥付の筆者の略歴に福永武彦の遺児とあるのを見て驚く。福永の著書は二十代の後半に、数冊読んだ記憶がある。中でも「草の花」が真っ先に浮かぶ。話はうる覚えだが、ひどく印象的だったことを覚えている。

私にとって読書習慣は20代半ばからの事である。結核で半年の自宅療養を強いられるまで、本など読んだことがなかった。だからどの作家の何を読めばいいのか（そもそも、どれを読めばいいかなんて、読書習慣のない人間の教養主義的発想だ。今は、読みたいものを読めばいいのだと思っている。）

その初期に出会った作家の一人が福永武彦。その息子なんだ…と思った。そして池澤夏樹は作家としてだけでなく、映画字幕に名前を発見して驚いた記憶のある人でもある。テオ・アングロプロス監督のギリシア映画。エキブ・ド・シネマの作品の一つとして（岩波ホールなどで上映される作家群）「旅芸人の記録」、「こうのとりのたちづさんで」等を観たとき、その字幕監修に池澤夏樹の名を見つけた。氏はギリシアに住んでいたこともある理科系の文学者だ。近作では世界の博物館を巡って書いた「パレオマニ」がお気に入りである。

4/2

遊びの場所を少し広げようと、塾に通うことにした。京都インターナショナル・アカデミーというところで、今月から毎週金曜の夜「編集者講座」(全41回)を受ける。そこそこ高額の受講料だが、たいした目的はない。

この当時、よく考えていたことの一つに、すぐに役立つことばかりしてはいけないという自分への戒めがあった。

大学生が資格が欲しくて専門学校にダブルスクール入学したりするのを、鼻のきく行動だと思っている浅薄さが好きではない。

そういうと、「先生は実力があるから…」などと、分かったようなことを返してくる者もあるが、そんな思い込みにもうんざりである。世界を安易に了解して、その対策に時間を浪費するものではない。なにかにつけて、ハウツーはおおむねこの作業で、報われることは少ないものだ。

4/3

'90 京都児相レポートの原稿締め切りをむかえている。だいたい出揃ったものを読むと、読み物風で面白い。50ページぐらいに薄く仕上げ、読みやすくしたい。発行は5月20日の予定。

舞鶴児相以来ずっと、自分の所属する児相では業務レポートを年に一冊発行してきた。職員全員に執筆してもらう。

1980年代、やる気のある心理職はおおむね研究的で、学会発表したり、論文を書いたりしていた。しかし他職種は一般行政職員で、そんなことは関係ないといった感じだった。この心理職公務員だけ特別という風潮が気に入らなかった。

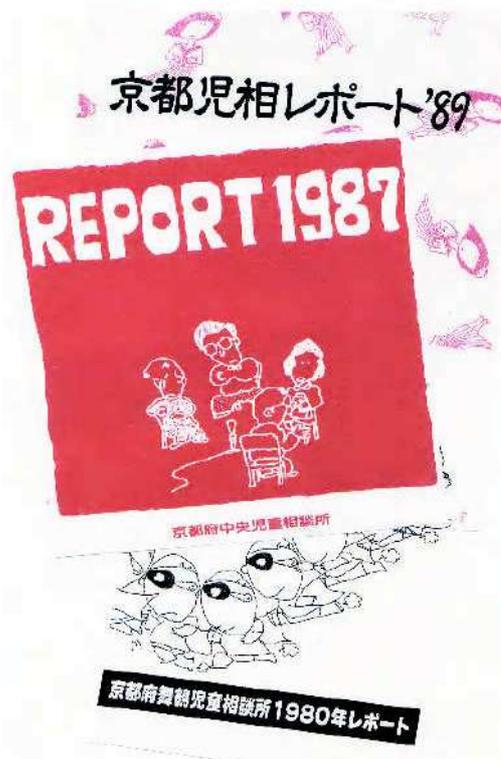
みんな臨床業務に就いているのだから、業務のまとめや振り返りをしておくのは大切だ。そこで、年一冊のレポートを出し続けることを職場に提案し、ケース担当した者全員には半ば強要していた。

直接関係はないが、私の中の整理では、この毎年の営みは20年後、このメンバーが筆者となった書籍が何冊も書店に並ぶことに繋がったと思っている。川崎二三彦、川畑隆、早樫一男、柴田長生、それぞれが筆頭著者名の本が存在する。

みんな、公務員試験を受けて採用された京都府職員で、長期勤続の者ばかりだ。けっして数年の腰掛け公務員期間を過ぎて、

大学や研究機関に行った者達ではない。

こんな現象は世間にそうそう起きていることではない。起こったこと的背景にある必然サイクルを見定めて、上手くいっていることは繰り返す、真似る。上手くいかないことは中止する。これはシステム論的発想の原点だと思うが、なかなかこれが出来ない。人とはとにかく、だめなことだけ繰り返してしまう生き物である。



4/4

京都の出版社ミネルヴァ書房の編集者が会いに来て、家族療法で何か本を書かないかという。面白そうなものが作れるかどうか、何人か一緒に考えてみるつもりだ。”むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく。ふかいことをゆかいに”井上ひさしのこの言葉がまた頭をかすめた。そんなものなら作ってみたい。

20年後の2010年春、井上ひさしさんは亡くなった。この言葉が引用であちこちの記事で目に付いた。そして今、私はこの対人援助学マガジンを編集している。

私は現在まで、単著・共著合わせると十

数冊の本を出している。その最初の巡り合わせが、20年前に起きていたことを、この記述で思い出した。

さて更に20年後、現在のどんな巡り合わせが思い出されることになるだろう。世の中に向けて今私のしている事が、未来の日にとっての、企画編集になっていると良いなどと思う。

4/6

登校拒否をしている小5の男の子の新学期直前の面接。別室で見ていたのだが、途中から面接室に入って、「学校の椅子」という課題をやることになった。3時間近い面接で、両親は自分達自身の手で掴んだものを子供に伝えた。後は新学期初日の朝だ。

学校の椅子は実際に面接室内で、学校に見立てた椅子を一脚、ちょっと離れた場所に置いて、両親にそこまで子どもを連れて行ってもらおうエクササイズだ。室内の数メートルしか離れていない場所に、息子を連れて行くのは、バカらしいほど簡単な話に思える。

ところが実際は、この数メートルを移動させるために両親は一時間以上も苦勞することになった。

ここで発見できたことは、学校における出来事と不登校の息子との関係とは別のことだ。

両親や本人が訴えるように、学校で何かがあるのかもしれない。しかし今、この面接ではっきりしたのは、この両親は小学生の息子を数メートルも動かすことが出来ない。そして、「息子さんのために、ご両親としてこんな事すら出来ないのは問題だとは思いませんか？」という問いに、「こんな事をして息子が、余計に悪くなったら…」などと

案ずる。

室内を数メートル、無理に移動させることで悪化する息子の症状って何だ！と私は思っている。この時から現在に至るまで、同じような事を言っているクライアントやセラピストにたくさん会った。あの人達は本気でこんなことを信じているのだろうか？

結果に責任の持てていない共犯事象を、専門家と保護者が「不問に伏しあう」ことによって、世の中にたくさんの「ひきこもり」青年達という結果になったと私は考えている。人には今できることがたくさんある。

4/7

第16回全国児童相談所問題研究セミナーの第一回拡大現地実行委員会。京都府のほか、神戸市、大阪府、京都市と、花園大学のN田さんの12名。予定通り私が実行委員長を引受けた。思い切った企画を考えようということになり、いろいろアイデアが出た。

土曜日の午後、今は児童問題研究セミナーと改称して継続されている研究会の現地実行委員会を開催した。こういった業務関係の自主的企画を次々に引き受けて実行していた。けっして暇だったからというわけではないが結果として、こんな活動で職場の団結や、業務能力の向上を計っていることになった。そして、職員、スタッフの地力は蓄積されていった。

このとき、外部から来ていた野田正人さんは今、立命館の大学院で同僚だ。

4/9

今春のサイクリングに参加した子供達7人中6人が新学期から学校に行き始めているという電話が入る。驚きと共に嬉しい。でも無理することはないぞ。

第3号に続いて、「不登校児の琵琶湖一週サイクリング⑩」が別冊付録でアップされています。ご覧ください。

なお、申し上げる必要もないことですが、この物語は、複数回の事業を編集して、一回のサイクリングに構成した漫画家・団士郎作のフィクションです。ですから、この4月9日の報告（春のサイクリング）の中に、含まれている子も、含まれていない子もいます。ご承知おきください。

4/10

K本弁護士を招いて児相職員研修会。法律の組立と人間ドラマの情緒性の間に、どんな橋が架かるのか。架けられるのか。なかなか面白い一日だった。また続きをやれるといい。

近年、児相では児童虐待問題を通じて、弁護士と協働する機会もずいぶん多くなっているようだ。しかしこの時点で、弁護士は縁遠い専門職だった。たまたま、児童問題に関心のある弁護士を招いて、法律家の立場から見た児童福祉を聞かせてもらっていた。

この繋がりから、新しく始めた弁護士事務所での児童福祉司研修。三児相のCW二名ずつが、月例で事務所に伺って、ケース検討を行っていた。数年間継続されたこの取り組みも、当時、他ではなかなか見ないものだった。

我々はここで、親権、相続などの問題だけでなく、国籍や戸籍問題など、いろいろな事象のことを考えることになった。そして個人的には、私はやっぱり法律的な考え方とは根本発想が合わない体質だと思った。つまり漫画家体質は良くも悪くも、もっと杜撰で自由だった。

4/12

今月から月二回、受理判定措置会議に京大病院の小児精神科医I坂先生をスーパーヴァイザーで迎えることになった。

診察は別で、週一回お願いするT辺先生も新任。顔ぶれが一新した。

考え方はいろいろだが、これも児童相談所における外部専門家の活用方法についての一プランと言えるかもしれない。

当時、嘱託精神科医は府立大学の医局から、教授の推薦による人が配置されてきていた。当然、児童精神科医であることは少なく、中には、子どもはほとんど診たことがありませんと告白する医師もいた。

しかしそれをどうこう出来る余地はなく、小さな出先公所の所長は、きちんと医師を確保するだけでも、それなりの努力が必要だったようだ。そこでそのルートとは別に、児童精神科医の業務協力の依頼できる道を探っていた。

ある課員の尽力で、児童精神科医として信頼を得ていたI坂医師からやっても良いと返事をもらった。しかしこれまでから派遣されてきている大学系列とは別のルートだったため、そちらと交代するようなことは組織的には叶わなかった。

二人の精神科医を、それほど受診児童が多いわけでもなかった児相で、どう対処するかという事になってしまった。

結果的に、嘱託精神科医ではなく、受審判定処遇会議のsvとして、会議に参加してもらうことにした。この後、京都児相の会議には隔週、児童精神科医が同席し、更にある時期には、児童精神医学を研修中の後輩女医も同席する事になった。(この女医は後年、K市児童福祉センターの医師として働くことになった。また、I坂医師とは、この10数年後に、立命館大学の教員同士として再会することになった。もっとも、氏は二年あまりで又現場の医師として転身していったが)

会議出席メンバーの経験や専門性だけで

はなく、部外専門家の同席は、会議を緊張感のあるものにし、結果的に重層的な議論を促す効果があった。

4/18

家族療法ビデオカンファレンスの日。特別プログラムとしてアメリカ人の家族療法のVTRを観て話し合った。

家族療法家横田さんに、月一回来てもらって、所内で実施された家族面接のVTRを見ながらのケース検討をしていた。その特別プログラムとして、どこかで手に入れた家族療法のVTRを見ながら話し合った。

家族療法に関しては、マジックミラーの裏の部屋で、実施中の面接を見られるようにしてあった。今風にいうなら、情報の共有化、面接の可視化だ。関心があれば職員は、現在進行中の面接展開をライブで知ることが出来た。

この時の所長は一般行政職畑でずっとやってきた人だったが、よくスタッフルームで面接を見ていた。

4/24

昨年の秋から積み残し課題になっている親睦会旅行の実現リミットが迫っている。この間の紆余曲折には、親睦会役員としてはいろいろ言いたいことがあるのだが、とにかく実現する責任を果たそうと4人で頑張った。そして静岡県・大井川鉄道の終着・井川と寸又峡温泉に決まって、5月に二班に分れて行くことになった。

職場のメンバーで旅行なんて今時、流行らない。その通りだと思う。当時だってもう十分、時代遅れだった。しかし、それにも関わらず私の職場では、親睦旅行は重要な行事だった。

この背景には、旧来型の宴会延長の親睦旅行があり、それに女性職員はほとんど仕

事の延長感覚で同行させられていた。直前に、家庭の急な事情でキャンセルする人が必ずあったのは、これを示している。

しかし私は、前の職場（舞鶴児童相談所）で、女性職員が「家事を離れて、業務も離れて、楽しめる旅行なら行きたい」。「子育てをしていると、なかなか勝手に旅行なんて出来ないしねー」、「一家で出かけようものなら、お金がかかって仕方ない…」と語るのも聞かされていた。

そこで近場の温泉への、一泊の宴会旅行ではなく、希望も募りながら、二班に分けて、年次休暇も一日含めた二泊三日のちょっとしたツアーを提案した。

舞鶴児相時代、「石垣島&西表島ツアー」、「函館&二股ラジウム温泉ツアー」、「東北のランプの秘湯と東北自動車道縦断ドライブ」など、女性職員がほぼ全員出席になる親睦会企画を実現していた。

京都児相に来て、職員の気質も違うし、時代も変わりつつあったので、同じ事は出来ないが、それでも楽しくなければ職場はストレスと、勤務評定の結果、病巣になると考えていたので、何か企画したいと思っていた。そして賛否ある中、やっとたどり着いたのがこのプランだった。

寸又峡温泉は年配の人なら名前に記憶があるかもしれない。ライフル魔といわれた金喜老が立てこもって、全国ニュースに国民が釘付けになった場所である。それまでは地元の人以外誰も知らなかったと思う。ここを選んだのは、それが面白かったからだ。

この後、京都児相の親睦旅行企画はニュース性がテーマになり、現場を見に行くツアーになっていった。雲仙普賢岳が大噴火

した時には、当時の村山首相より一日早く、火山灰と土石流で大変な、天草鉄道にも乗った。伊豆大島が噴火したときも、時間が経ってもまだ暖かい溶岩流の上に、東京都が復旧作業で付けた道路を走って、三原山見物に行った。

親睦会については次に異動したところで面白い経験をした。そこは所長と職員が全くそりの合わない組織だった。少人数なのにそれだから、日常がぎくしゃくしていた。

管理職も職員も大人げないと言えばそうなのだが、そのため、親睦会費というのを給料天引きで集めていたことが頭痛の種だった。昨今は、こんな金の扱いはしないが、当時はまだこういうところも多かった。

何が困ったかという、集めた会費は貯まっていくのに、みんな所長と親睦旅行なんか、行きたくないのだ。歓送迎会と忘年会は嫌々出席するのだが、他は御免ということになり、何十万円という積立金が貯まっていたのだ。前に働いていた人など、積み立てただけで使わずに異動になっているなんて馬鹿なことがあった。

そこで大奮発の贅沢宴会を、京都の奥座敷・美山荘で実施した。関東の趣味人あこがれの一軒宿だが、それでも宴席終了後、夜中にタクシーで帰宅した人があった。

ここで生まれて初めて、松茸でお腹がいっぱいになる経験をした。いったい、いくら払ったのだろうか？

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第五回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

現場を離れた児童相談所の元実力者の話す中味が、二、三年で急速に古くさくなって行って…と聞かされた。一般論として「私の若い頃は・・・」とか、「私がいた頃の組織では・・・」というのが、懐古自慢話になりがちなのは分かっているはずのことだ。自制も利くはずのテーマだ。しかしそれでも・・・なのだと改めて、過去の人間が今を語ることの危うさを思う。私がここに書いているものはそうではないと強弁したところで、誰かがそう読めると言ったらそうなる運命にある。OBに情報は入って来にくくなるし、直接責任もなくなった仕事についてあれこれ言うのは、あまり勝算のある業ではない。それを承知で、だからこそ書き始めた連載である。

「いくら、自分が熱意を込めて関わった仕事でも、時と共に変化してゆくものだから・・・」、こういう言い方をしてしまえば話は簡単である。「今のことは今の人が考えて、取り組んだらいいことで、老兵は消え去るのみ」、こんな態度が潔いことだと語る言い回しがある。しかし、こういう言葉の背後にある冷たさには用心が必要だ。では、どうすれば懐古趣味にならないで、現在と互角に話し合えるのだろうか。

それは結局、テーマ（哲学、理念、原則）なのだと思う。その時々現象ではなく、底流にある原理のようなものが反映されているかどうか分岐点ではないかと思う。それが様々な具体事象の中に強く反映されることではじめて、風化、老化を押しとどめ、普遍に至ることができるのではないかと思う。

児童相談所を離れてから五年あまり、知的障害者更生相談所にいた。そこで取り組んだのは、知的障害への取り組みでも、療育手帳判定制度の見直しでもなかった。知的障害者自身と共に暮らす家族の抱える課題への援助だった。まだ、そんな視点から知的障害者行政に取り組む体勢は少なかった時代だったが、テーマとしてははっきりと成立していた。

児童相談所の仕事とは違って、知的障害一点集中だったが、その人を取り巻く家族が抱える課題は、児童相談所で関わった家族のそれとさほど違いはなかった。そしてこの発想は後に、公務員職を離れ、児童福祉、障害者福祉の枠組みを離れても、引き続き「家族」はテーマの中心であり続けることになった。

今、全国十三カ所で継続開催している家族理解ワークショップの参加者は、母子保健の保健師、発達障害に関わる幼児教育現場職員、義務教育の中の教師達、高校、大学の教員。カップルや離婚調停に携わる人や弁護士。高齢者介護の現場と社会システム作りに奔走する人々。小児医療従事者、看護職、助産師、精神障害者の地域生活支援に関わる人など、多岐にわたっている。その理由は当然で、だれも家族なしには存在できなかったからである。家族焦点の仕事は限りなく普遍性を持っていた。

1990年5月

5/1 TUE 今月 28 日に京都府教育総合センターで開かれる教育相談講座・課題別の講師として話すことに関する打ち合わせにK研究主事来所。午後は児童福祉司三人と受付相談員といっしょに、業務統計について協議。夜、出版の企画（結果的にミネルヴァ書房「家族の居心地シリーズ」三部作になったもの）について、第二回目の話し合い。川崎君、柴田君、川畑君、早樫君と私。いろいろ出て、少し形らしきものが見える。

他所から依頼される仕事が増えてきていた。当然、業務に対する評判や、結果を出している事への外部からの評価なのだが、私の所属する組織はこういう事にほとんど関心がなかった。他府県への出張が目につくと、牽制されるくらいだった。もっともこの京都府教委の研修依頼は、身内にタダで使える職員がいるからと、渡りに船の感じも否定できなかった。

自分の職場や仕事をおろそかにしていた気は全くない。それどころか、この時期に働いていた人たちみんなに、その人に合わせたエールが送れていたと思っている。その仲間もみんな定年退職を迎えた。部下であった人たちも京都府には少なくなった。

公務員組織の人物評価に関して、昔から持論は変わらない。何も努力しない人間に給料をだらだら支払うことを、納税者が同意するわけがない。何かする人間を牽制するより、何も新しいことをしない人間にハッパをかける！

組織に愛着の持てる構成員からタレント

が輩出するのは素晴らしいことだ。その人達と、きちんとルーティンワークをこなす人がチームワークできたら、きっと良いゲームができる。

ただ、こういう理屈も、私だから放置されていたところがあったようだ。私の退職後には、同じ事をしてきた元同僚は処分を受けた。私にはノーペナルティだったのである。彼のその後に着しい害があったわけではないが、こういう事しかできない組織管理者が、事なかれ主義以外の方針を持っているとは思えなかった。

5/2 WED ある人から「K大のSさんが困さんってどんな人か?と聞いていたが、どんなつながりがあるの?」と問われた。それからいろいろと妄想してしまって、まんざら悪い気がしなかった。

実は3月にもH先生からS大学の学生相談室でカウンセラーを何時間か引き受けてくれないかと言われて断っていた。

その時、俺もなかなかの者になってきたかな・・・と嬉しい気がしたのだった。そして、さあ今度はどんな用件だろうと、勝手に妄想を楽しんだ。

帰宅すると、連休中だけ貸してもらってきたファミコン（長年、我が家は禁止だった）に狂っている挑（次男）が「にいちゃん、急に耳が聞こえんようになって、医者へ行った。おかあさんもついていった」という。11時近くなって、「中耳炎やって、痛かったあー」と言って帰ってきた。

夜中、DVD「その男、凶暴につき」、「早春物語」の二本をみて、その後、原稿書きにワープロをさわっていたら朝になった。7時半過ぎに娘が起きだしてきたので、膝に抱えて茶の間に話した。そのまま「荻野目洋子の部屋で映画監督が自殺した事件」をやかましく喋っているレポーターの声を聞きながら眠ってしまった。

この頃の日常である。まだまだ他者評価は頭の中で駆けめぐっていた。誰かに認めてもらうなんてうっとうしい気がしているのに、認めさせたい気は大いにあるという矛盾。でも、それが原動力だったかもしれない。

児童相談所からの学会発表がほとんどなかった時期に、心理臨床学会で数年発表し続けたのも、ある時点で納得して止めてしまったのも同じ事だ。

三人の子の父親役割を十分に果たしている時間は多くなかったが、八歳（女兒）と一四歳（次男）、一六歳（長男）の父であることは、当たり前のように私を充たしている、公私とも安定を与えてくれていた。

5/7 MON 15年以上の付き合いになる年下の友人竹中尚文くんが、ずっと以前から欲しいと思っていたものが届くように手配してくれた。

「NATIONAL GEOGRAPHIC」アメリカの雑誌だ。1990年の年間契約ということで、1月号から4月号までがシンガポールから送られてきたが、その写真のすばらしさに惚れ惚れしてしまう。付録の地図が嬉しい。英語の部分をとばしてしまう僕にも十分楽しめる。

本誌に「お寺の社会学」を連載中の竹中君である。この時点でもう十五年つきあいだったことに驚く。以前も書いたが、彼が龍大の学生だったときに、シルクロードの旅というツアーでたまたま一緒になったのがきっかけだ。

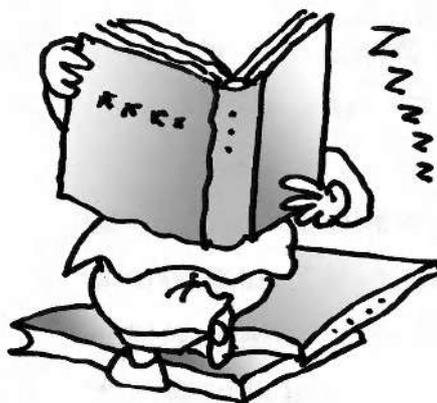
そしてナショナル・ジオグラフィックは今、日経ビジネス社から月刊誌として日本語版が発行されている。あの頃は、考えられないことだった。そして、だから輝いて

いたところもあって、定期的に日本版が届くようになった十年後、定期購読は止めてしまった。

5/8 TUE 決めておかないとなかなか面倒な専門書は読めない。持ち歩くのも重いし、つつい買ったのに読めていないという事態が発生する。それで火曜日の夜は、できるだけ仕事関係の読書をすることに決めた。そういえば昔、受験生の頃、こういうことをしょっちゅうやって、挫折ばかりしていたなあ。

当然のことながら、こんな記述の後に、定期的に専門書を読み続けた記録も記憶もない。読書に関して、いわば無駄読みが多く、情報や知識を取り込む読み方は本当に苦手だ。

直ぐには役に立ちそうにないことと、永久に役に立たないだろう知識への好奇心なら、右に出る者は居ないのではないかと思う。まあ、誰も右に出たいなんて思わないだろうけど。いったいつまで、役にも立ちそうにない事への好奇心を持ち続けるのだろう、私は。（答は多分、死ぬまでだ）



5/9 WED 桂南光さんのABCラジオ・パノラマ大放送におじゃまする日。月一度の出演だし、そこであまり相談の回答のようなことはやりたくないのに、一寸いい話くらいの中味で喋っているのだが、それでも聞いていて、ハガキをくれるリスナーがある。感謝である。

夜は4月から通い始めた編集者講座・講師は「広告批評」誌の島森路子さん。インタビュー（後藤久美子の事）の話で、いくつかうんうんと共感するところがあった。

この編集者講座通年クラスの受講は、私の生活のエンターテインメント部門だった。公務員であることと、こういう動きが自分の中では矛盾しない。むしろ、こういう事が大事なんだと確信さえあった。

世間は公務員だけで構築されているわけではないことを強く意識していた。親族に一人も公務員がいなかったせいもあるかもしれない。

今に至るまで世間は、官僚・公務員についていろいろ言うが、霞ヶ関だけではない、地方公務員のライフスタイルの社会的な限定が、問題解決能力を硬直化させてきたのだ。



民間に！などと小泉純一郎に叫ばせていないで、公務員自身もっと権限の主体性

を駆使して、結果に責任を取る構えになればいい。させられていないで、自分が面白いと思うことをやればいいのだ

5/10 THU N児童相談所に居たYさんから、転勤の挨拶状。それに一時保護所統廃合に向けて、三児相の組合分会長が転勤させられたとある。

こういう文言を目にするとき、いつもある種の飲み込めなさを感じてしまう。ひょっとすると自分が置かれている状況が恵まれていて分からないのかもしれないが、とにかくなんか変な感じがある。結果だけ書くと、こんな事になるのかもしれないが、具体的な取組経過が持てて、そもそもの目的をそれぞれが考えていたら、これほどただの被害者的表現をしなくていいように思えてならない。

一時保護所の統廃合が、必ずしも合理化したことにはならないのは既に証明されている。事実や人材を大切にできない組織が栄えたためしはないし、人の育たない組織もまたそうだ。

「着眼大局着手小局」が、実行であるならば、残念ながらこのグチの出るところは「着眼小局無着手」ではないのかと言いたくなる。

統廃合問題がそれとして議論になりきらず、最後は時間切れで個々人の人事異動問題になってしまいがちだという不幸を、当局・組合両者が噛みしめなければならぬのだと思う。

繰り返し経験してきたことだが、公務員組織の様々な課題が、最後の最後には人事異動（一身上の都合）という個人の問題になって決着がつく。いよいよそうなった時には、どれほどの積み重ね経過が水泡に帰すことになっていても誰も構わない。ここに親方日の丸という長年の批判が集約されている。こういうものこそ、談合というのだと私は思う。

5/17-18 府三児相児童福祉司会議。三所の相談判定課長も出席して二日間。しかしどうも内容が感心しない。発言や提案が生き生きしていない。サイド・ブレーキを引いたまま運転しているような議論の仕方に思える。

そのベースが私に言わせると「相互不可侵条約」、暗黙の密約である。誰が何を言っても批判をしない、そのかわり自分の発言についても誰かに何か言われることは好まない。

この傾向は、特に中年を迎えた女性職員に多いように思う。そして迎合するように、何も言わない事なかれ主義の中年男性職員がいる。こんなことは続けていて良いものではない。カツを入れなくてはならない。

厳しいことを書いているなあと、今読んで思う。しかしこれは日誌の中の独り言だったわけではない。日常や会議でここに至る十年くらい、ずっとこうだったような気がする。

いわゆる大人の発言、大人の対応をしていると、その場は丸く収まって、和気藹々。でも、そんなことが目的だったのか？と振り返るとおかしいところに行き着くことになる。職業が個人の人生選択の一つである事は認める。しかしその仕事の持つミッションは、個人の見解とは無関係に存在する。

業務がますますハードになってきて、一方で児童福祉司の経験年数が浅くなってきたりすると、お互いを気遣うという美辞麗句にコーティングされた「いたわり合い(馴れ合い)」ディスカッションが始まる。そして対外的な防衛心だけで連帯したりすることになる。

それは児相や児童福祉司の話だけではなく、昨今の災害における政府の混乱にも

見て取れる。情緒的には分からないでもないが、そんなことで仕事を語ってしまうようになった自分たち自身を、弱体化していると自覚する必要があるのだと思う。

随分以前のことだ。近畿地方の同職者が集まる持ち回り会議で、他府県の若い女性心理職が、理屈の通らない話で、自分の上司を護ろうとするのを目の当たりにした。そのあまりにも人間関係だけに焦点化された若い職員の態度に、怒鳴りつけたことがある。それじゃ、身内ホステスじゃないかと思ったのだ。

住民ではなく、たまたま、そのときの上司である者のために、この人は何を言っているのだらうと許せなかった。その場では、私が撃感を買ったのだったが、こういう若者の意識の寄せ集めで未来が作られていくのはうんざりだった。

5/19 SAT 「発禁・カタルーニャ現代史」セスク著という大版のヒトコマ漫画本購入。筆者はスペインの風刺漫画家。ここに掲載された作品の多くが、検閲で×を付けられて発表できなかったものだという。それらの作品が大きな×印とともに掲載されている。

自分も漫画を描く身として、何とも言いようがない気持ちになるのは、原稿に直接×印を検閲者が書き込んでいる作品だ。自分の作品が、意見が違う者の手で、掲載を拒否されるのみならず、大きく×印を書き込まれて戻ってくるなんて考えられない気がする。

しかし振り返ってみると逆に、自分は誰かが×印を付けたくなるような作品の一枚も描けていないなあと情けなくなる。

風刺とか批評は、自分があからさまに前面に出る。そうでない評論風のもの、慣

用句や慣用感覚の使い回しで、時流に乗っかっているだけだ。

その場、その時期に、世渡り上手が駆使する言語や態度は、見える人には見えている。しかしその人達はたいてい優しい。

だから「彼にも事情があるんだろうから…」などとかばう。しかし、こういう妥協が産んだものの結末の一つが、フクシマ（原発問題）だったりしたのだと思う。

あの頃の私は、「団さん、こうした方が得ですよ。いや、そうしないと損をしますよ！」と忠告されても、「損しても構わないから、思うように選べます」と言っていたように思う。だからといって、自己犠牲の精神などであったわけではない。欲しいと思わなかったから、要らないと言っていたのだと思う。この経過にも、それなりの自己満足はあった。そして引き受けた結果の一つが50歳の退職だったかもしれない。

しかし今、それでは弱いのだと、今回の原発事故のことでつくづく思った。間違っていたからといって責任をとれない人に、責任を取らせようとするのは間違いだ。責任のとれない人に、そんな権限を与えていることに気づいている者が傍観するのは悪である。



「何が正しいかなんて分からない…、正

義なんて言う輩には、要注意だ！」等と、何も言っていないのと同じ事を繰り返していないで、その時々で、責任を取るか、責任を取らせるか、どちらかにしっかり立ち位置を定めなければならない。傍観者は基本、利己主義である。

5/22 TUE 家族療法訓練講座第3期が始まった。12人のいろいろな現場の人達と1年間付き合うことになる。さっそく金沢から毎週京都に通う男性に、健康な一般家族と面接をしてもらった。複数の人達と面接する大変さを十分味わい尽くしたような展開だった。

この京都国際社会福祉センター（K I S W E C）家族療法訓練（通年コース）は現在まで、受講人数の揃わなかった2回を除いて、延々続いている。初期は団、早樫、木村の三人で、その後、早樫と私の二人で担当して今に至る。

家族療法家を育成・訓練しているというより、家族療法訓練を受けることで、様々な分野に、家族を理解する人が増えることを目指している。

ここで通年コースや、短期集中WSコース（step 1, 2 夏・冬）を受講した人たちが、それぞれの出身地に戻って、地元で家族療法の継続訓練プログラムを開講してほしいと言いだめたのが10年以上前。その第一号が1990年代後半の青森県・弘前だ。

5/25 FRI 久しぶりの亀岡教師勉強会。参加者は9人と少なかったが、具体的ケースの処遇方針を一緒に考えた。原則にのっとりた仮説をどう立てるか、主に川畑くんとキャッチボールした。

児童相談所に来談するのは、基本的に保護者の意向。それ以外に警察のように、14歳未満の触法通告というルートもある。

(近年では虐待通告)。連携する機関ルートの仕事は、保健所との三歳児健診、1歳半健診などが主なものだった。

他に京都府北部の児相では、学校に向いて実施していた「学校教育相談」があったが、管内全ての学校から相談があったわけではなかった。管理者の意向や地域の習慣で、伝統的にケースのある学校とない学校に分かれていた。不登校は山のようにある時代に入っていたが、義務教育年齢の子ども達は学校が困り込んでいた。

そんな中で教員個人の判断で、正式な相談というより、学級運営上の教員の困り事相談を、非公式に受けられる窓口を意識して設定したのがこれだった。

保護者や学校管理者には内緒でも、ここで一緒に考えてみて、教師自身が現場でよい結果が出せればいいじゃないかと考えていた。

5/29 午前中はヤセ症の子の両親と面接。ボディ・ワーク、体の力を抜く練習をしてもらった。夫婦ともなかなか抜けない。次の面接まで、週一回家族全員でその練習時間を決めてすること。

いろんな事を試していた。結果の出そうなことであれば、流儀も何も、構わなかった。身体への関心は、心身症状と呼ばれるものが話題になったとき、どこからのアプローチにチャンスがあるだろうかと考えて、早くに頭の中にあった。

竹内敏晴さんの名著「ことばがひらかれるとき」に心酔したのは、舞鶴児童相談所に勤務していた時代。発達相談でいろんな偏りやこだわりのある子達に会っていた時のことだ。これがきっかけでボディ・ワー

クのプログラムに参加し、目から鱗の体験連発に遭遇する事になる。(この顛末は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版に書いた。

その頃からずっと、身体をテーマの援助実践には関心がある。体は結構大きなテーマであり、みんなの中に潜む弱さも引きずり出す。

5/31 受理判定措置会議。一時保護中の盗難事件のことを話し合う。ぼんやりしている人間の欠点が現われてしまった。彼の資質を全否定するわけではないのだから、どうか要所は押さえてもらいたいと思う。

スタッフの誰もがしっかりした人であることなど求めてはいなかった。いろんな人が来談するところが、一色の人間集団では、不十分だと思っていた。だから気の付かない人も、下世話な欲望の人も、裏表のある人も、臆病な人も皆、チームの一員だった。

ただ、この時のように、うっかりした人のせいで、預かっている子供が事件当事者になるのは勘弁してもらいたかった。

一時保護所での事件の記憶と云ったら、その昔、保護中の子ども他児への暴力を止めようと手を挙げた職員があった。

これに激昂したその子(逆ギレだ)は、調理場から包丁を持ち出した。慌てて庁舎を飛び出した職員を彼は包丁を振りかざして追いかけて、それを見た町内の住民が警察に通報する騒ぎになった。

この事態を収束させるのに必要だったのは、この子に対する恐怖心のない者だった。怖がっている者が無理矢理、包丁を取り上げようとしたり、押さえ込もうとしたら更に事件が起きる可能性があっただろう。

みんな外に出た事務所で担当児童福祉司と二人、包丁で事務椅子を突き刺し続ける彼に、話しかけていたときのことは鮮明に思い出せる。彼にこれ以上のことをさせたくなかった気持ちは届いた。

蠅螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第六回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

児童相談所で働いていた頃、誰かに言われたことがある。「団さんは、相談がなくても児童相談所があれば、十分楽しめますよね」。おかしな言い方が本当にそうだった。相談よりも児童相談所が好きだった。業務集団として、どんなことまで出来るだろうかを考えているのが楽しくて仕方なかった。それはその時に始まったことではなく、基本的に昔からそうだった。臨床現場（医療・保健・福祉・教育）で仕事をしている人の多くは、一番大事なのは来談者、利用者だと思っているのだろう。しかし私は、その仕事に従事する集団が一番なのだった。人間関係などではなく、業務が発展、深化してゆくメカニズムが好きなのだ。そこに何かを付け加えていくのが大好きだった。

何が起きるか分からないけれども常に何か起きる。そしてその多くは初めて起きたことではない。これが人の世の原則である。だからまずは歴史に学ぶこと。そしてもう一つは、自分自身その流れの中にいるのだから、そこで受ける生体としての感覚（予感）に従うことだ。

1993年、不本意ながら異動した知的障害者更生相談所(当時、精更相)は、とても限られた業務だけを負託された機関だった。療育手帳の更新と施設入所判定書作りが主な業務。非常勤職も多く、そのスケジュール管理と予約台帳の管理が私の仕事だった。それをしながら、公的な機関にもたらされる仕事は、どのようにこの世界に登場してくるのが気になった。まだ着手していないことで、今、ここでしておくべき事の存在予感が消せなかった。

その頃、京都造形芸術大学に在職していた野田正彰氏が戦後処理問題に焦点を当てた授業をしていた。ナチスの子ども達とイスラエルの人々との和解をテーマにした話や、高齢化した中国帰還兵の加害記憶の語りへの関心などが焦点だった。氏の著作「喪の途上にて」(岩波書店刊)は、日航ジャンボ機の墜落事故被害者家族のその後をインタビューして書かれたもので、この頃から日本社会では心のケアや喪の仕事のことなどを喧伝し始めていた。

行政機関にとって、こういう役割の準備はどのようにしておかれなければならないのか。それを知的障害者更生相談所の場から考えると、どんなデザインになるのだろうと考え、そのための学びをと思い立った。管理職に話して、業務日の昼間、野田氏の講義聴講をと打診してみたが、「言ってることが分からない」と却下された。仕方ないので、毎週時間休を取って半期、受講に大学に通った。

この翌年、1月に阪神・淡路大震災が起きた。児童相談所には支援体制協議や、派遣スタッフの分担が下りてきていた。しかし、知的障害者更生相談所にはなんのオファーもなかった。児相併設の府県も多く、単独設置しているところの少ない出先機関など、誰の眼中にもなかった。在宅の知的障害者が避難指示の理解不十分や、臨機応変な対応からも外れて、ポツンと自宅に取り残されていたことは、後から明らかになったりしていた。

これは二十一年前の京都府京都児童相談所での日々を、相談判定課長職にあった筆者が、当時の日記(ハコ部分)を元に再考したものです。明治・大正や終戦直後と比べるのではなく、ほんの二昔前の仕事の振り返り。そこから見えてくるものは・・・

1990年6月

6/1 FRI S 高校定時制の教員研修で話した。少人数が口の字型に並べたテーブル座席に座っているもので、こちらの視線の方向が定まらず、ひどく疲れた。それにザワザワしていて愉快ではなかった。

ディスカッションするわけではないのに、口の字型に並べた会議机で話をさせられることがあった。後年は、自分が話しやすいレイアウトに変更してもらうようになったが、前にはこんな事がたまにあった。

関係機関が一堂に会した協議会などで、大きな口の字型の中央の空洞に、みんなで愚にもつかない意見を吐き出し合う図が今も目に浮かぶ。形も大切だ。

そして教員職の人たちの、受講態度作りの下手さを何度も嘆いた。自分の授業で、そういう態度の生徒が居たら、気分が悪いだろうと思うのだが、いつも生徒たちにやられている仕返しのつもりかもしれないなんて思った。

6/2 SAT 児相研セミナー現地実行委員会。いろいろプランや全体像について意見を出し合う。新しいことがやれそうな気配もある。

夜、中国の漫画展の打ち上げがあったが、明日は施設運動会の応援で出勤のため、気持ちが乗らないので欠席。

児相研セミナー(現・「児童問題研修セミナー」)。発足時点は「児童相談所問題研究セミナー」。途中で名称変更したけれど、今あらためて、「児童相談所問題研究セミナー」に戻すのが、今の児童福祉分野を多面的に再考することになるのではないのかと思う。児童虐待相談所について研究する気は、私には湧いてこない。)の開催を京都で引き受けていた。

こういう全国大会を引き受けると、大抵一年がかりの事務局仕事になった。おろん、それで盛り上がる面があることも否定しない。大きなイベントに向かって一致団結するパターンはそこここに存在する。しかし私はこういう一般化に不同意だった。こんな大会くらい、軽々とやっしまえばいいと思っていた。

そこで、岡田隆介さん(当時、広島市児相長・児童精神科医)と始めた「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族支援の実際・勉強会」では、現地準備は最低限でやれるノウハウの開発を考えた。

当日配布の勉強会冊子や、終了後のレポート冊子があつという間に発行出来る方法も考えた。(こういう報告集って、終了後一年くらい経って出るのが通例だった。そして誰も読まない)。今なら、ネット環境が整ったからもっと簡略化の工夫の余地がある。この発想の延長線上に、「対人援助学マガジン」の発行もある。

20年前、「今こそ中国で！」と勧められた漫画展は、終始うさんくさい話で、委託した世話人の言うことがコロコロ変わっていった。最初は南京の博物館でやるとか言っていたのだが、結局、専門学校の体育館のようなところに展示したらしい。

ただし、「マンガ」に関する世界の大きな潮流から、本家の日本は終始立ち後れ気味だった。この後、10年ほど経った頃、我々のマンガグループ「ぼむ」は、中国の新設芸術系大学で「日本漫画・アニメ」の講座を引き受けることになる。そして複数のスタッフが数ヶ月滞在して集中講義をしたりした。私は韓国のマンガを履修する高校生の集まりで、講演する機会を与えられたりした。

「マンガ」に対して一番保守的で、見下した態度をとり続けているのが我が国だ。「国立の漫画喫茶など作ってどうする！」と誰かの政権の新企画を叩きつぶしたのも、マンガ好きのほぼ日本国民だった。その引き金が、マスメディアの内在する冷笑的エリート主義だったと思う。日本マンガを馬鹿に出来ると思っているあなたは何者なのか？世界のあらゆる創造活動に、日本マンガが及ぼした影響を一番分かっていないのが中高年の日本人かもしれない。

6/3 児童福祉施設の連合運動会。決勝係りで参加。日差しの中で一日いることなどほとんどないもので、すっかり日焼けしてしまった。腕まくりをしていたところは段がついて、縞模様焼けの腕になってしまった。全く何ということだ。

こういう役回りは、引き受けないことが多かったから、珍しいことだ。我が子の運動会や学校行事にもほとんど行ったことがない。そういう役割を楽しんでできる人が

羨ましいと思うが、できないことは仕方がないと思っていた。

そんな場に立っていると、突然自分がモノになってしまったような気になってしまう（自意識過剰だ）。ゴチャゴチャ思わず、必要ならば引き受けられるようになったのは、やっとこの頃からだった。

同じ頃、暮らし始めた新興住宅の町内会でも、広報紙担当を引き受け、火の用心の夜回りにも出て、数人のご近所さんと居住区周辺を、拍子木を打ちながら巡回した。

あほらしいなあとも思いながら、こういう楽しみもあるのかと思い、志ん朝の落語「二番煎じ」のことを思い出していた。

6/4 重症児施設から知的障害児施設に移った子どもが、てんかんの発作がひどくなって・・・という一件で動いている。M学園の管理体制そのものが問われるような、後ろめたい失敗が隠蔽されかけたりした。事実解明に担当児童福祉司はよく動いている。

授業管理をする看護職スタッフがいて、定量与えているはずの錠剤の数に食い違いが起きていた。それを、うっかりしていたという理由で、引き継ぎスタッフに伝えなかった。引き継いだスタッフは、残っているものだけを与えて済ませていて、それが次にも引き継がれたらしい。その結果、発作が起き、原因究明の結果、事実が明らかになった。

当時、とんでもない話だと憤慨したが、こういう杜撰なことは、あちこちで今も引き続き起きている。2011年に事件になったユッケ食中毒の事件も、後で調査すると、とんでもない無責任と杜撰さが発見されたりした。以前もあった食肉の偽装事件や不当表示など、いろんな事を、皆さんも

忘れてはいないだろう。

今回の原発事故のずっと前、たしか放射能汚染水を手作業のバケツでくみ出していたニュースがあったことも覚えている。

つまり人間は、お互いの信頼関係なんて口先言葉で済ませているとこうなってしまうらしい。個人の人間性なんて正体不明な話でごまかさないうで、そういう実態を形成しやすい社会システムだと考えるほうが、改良点はいくつも発見できる。

6/5 ひよんなことで、K福祉司と夜十時半頃まで話しこんだ。見破る目と見守る目。好きになることと、好きなことを伝えるための力、そんな話をする。「好いてくれる人を好きになる、それも相手よりずっと少なく」という愛情関係で生きてると語る彼女の話の聞いていて、どんな成育歴なのだろうと思う。

そういえば以前、同僚だったことのある体に障害を持つHさんが、似た感じのことを言っていたのを思い出した。

他人との関係を切り結ぶ作法として、どの程度の自己開示と、相手の自分への意思表示や自己開示度を求めるかは、人それぞれ流儀があるようだ。

相手がどうだろうと私は・・・と語れる人は強い。逆に、相手が自分をどう思っているかを確認した上で、自分の表明態度を調整するというのは弱い。多くはこの間にグラデーションで存在する。

この態度形成の背景は、親子関係、家族関係に起因するモノが大きいのだろう。そしてこういう感覚は、私生活を支配するだけではなく、対人援助サービスの現場では、しばしば業務関係にも直結してしまう。

過剰な思い入れや、逆の手厳しい批判など、どうしてそこまで・・・と思わされる仕事

の報告を目にする。ヒューマンサービスの現場にいる者は、自分のことを知っておかなければならないなあと改めて思った。

6/8 人事異動の内示があつて、宇治児相の課長が代わる。後任は本庁の福祉係長だという。児相再編時の、「相談判定課長人事は臨床経験者の中で」という約束は早くも、あの時だけのリップサービスだったことになってしまった。

そもそもあの時の人事担当者の見解が、たいした信念があつたわけでもないから、その時々でコロコロ変わるのである。私にもそれほど確信があつたわけではないが、懸念して予め手を打っておくべきだ、と判定員連中に言っていたことが早くも現実になった。

心理職の重要性など、人事に携わる役人には関係ない。組織の評価担当者さえ関心はないかもしれない。

宇治(中央)児相の新課長が一般事務系職ということは、今後いろいろな影響を及ぼすだろう。本庁係長だった新任のSさんは何もしないでいる人ではない。

しかし何にしても人事異動期は愉快じゃない。私にとっては今のポジションの居心地はベストだと思うのだが、他の人にとっては、私がそのままで上は詰まっていることになる。京都府への貢献度は高い自分だと思っているが、組織の上の評価までは何ともできん。

20年後の今読んでみて、熱く語っているなあとと思う。やはり人事はストレスだったのだ。思い出しても、一番イライラしたことだった。

組織を離れて独立をして、仕事を始めてから、世の中の評価は案外公平だと実感し続けている。

私だけへの格別な何かを要望していたのではない。妥当な評価のできる人を求めていた。(これを甘い！と言って済ませられる人に、組織論を語る資格はない。)

この時の異動は、今考えても私が宇治(中央)児相の相談判定課長になるのが順当だったろう。

無論、何人かは公平だと思える上司、幹部もいた。しかし京都府には二十五年も在職したのに、結果的には組織貢献的だとも、人材育成が上手だとも思ってもらえていなかったようだ。そしてこの時の人事は、今になると分かるのだが、この時点だけのことにはならなかった。私が50歳で退職し、その後も順次、退職が続く引き金になっていたように思う。

本庁から来たSさんと私は上手な棲み分けをしていたと思う。しかし彼を出先公所の中間管理職に出した本庁は、再び呼び戻すことに消極的だった。

そのため、元々児童相談とは何の縁もなかった行政職の課長が、歴代の相談判定課長の中で一番長く居座ることになった。

ポストが空かなければ玉突きもない。私は中央児相の課長になることはなく、他公所の所長補佐職で異動になった。そして児童相談所との縁が切れて、五年後に退職した。

もしあのとき、宇治児相の相談判定課長で異動していたら、五年後の退職決断はなかっただろう。それが私の人生にどうであったかは、選択されなかった方の人生評価に意味がないように、考えても詮ないことである。しかし、もしそうだったら京都府は、今とは少し違っていただろうと思う。

私たちは、今していることが、未来の何に繋がっているのか、想像力を欠きすぎて

いる。予言者にはなれないのだから、せめてその時点で、精一杯の英知で目前の課題に当たっておきたいものだ。

6/09 第二土曜日。すっかり週休二日のペースが身に付いた。だから先週のように日曜日のない14日間を過ごす、途端に体調を崩してしまった。体力を自慢する歳ではないことをもっと具体的に自覚すること。

これを書いたのは四十三歳の時である。サラリーマンだったのだなあとと思う。去年、六十三歳の私は、最長四十日連続でオフ日なかった。でも、それがストレスや体調不良の原因にはならなかった。自分で計画を立てて、決めて働いているのは、忙しくはあっても、それだけのことだ。

仕事において、させられている感がないのは非常に重要な要素だと思う。自分で決めて、自分で実行する仕事は楽しい。

6/14 THU 複雑な家庭事情を抱えた中学三年の女子の処遇でいろいろ考えている。家出中を保護され、事情があつてここに来た子である。夜は宿直担当だったので、その子といろいろ話した。発達と土地と血縁者とまわりの他人、それに自立の時期と甘えへのこだわり、そんなことが渦巻く。限られた選択肢の中から、うまくいきそうな一つを選んでやらなくてはならない。



児童相談の仕事は、子どもだけを取り上げるなら、一生懸命向き合ってやることで、大抵は繋がることができる。

初対面の宿直勤務だったとしても、一緒に食事をして、TVを見ながら、リラックストークをしていれば、和んでくる子が大半だった。

しかしその家族を絡めた展開になると、難しいこと山積みだった。加えて、目の前の十五歳は、十年経ったら二十五歳になっている。その時はもう立派な大人だし、子供を産んでいてもおかしくない。

そんな十年後(わずか十年しかないのだ。成人までなら、五年ぽっきり)になるように、今自分たちの打つ手が、熟慮を重ねているかどうか、いつも気になった。

先のことなど誰にも分からないなどと、他人の人生だからといい加減なことが言いたくなかった。「気楽なセンスやなぁと思ってたけど、良かったわ!」と、もし十年後に再会することがあったら、言ってもらいたいと願っていた。

だから京都児童相談所相談判定課長として、受けた相談の目標達成率予測はいつも100%だった。ケースバイケースじゃない、全部だ!と思っていた。



6/16 SAT 京都府保母会北丹支部研修会で話をするために峰山に行った。昔、六年ほどこの管内で仕事をしていたので、僕を知ってくれている人もいて、楽しく話げできた。帰路は北近畿タンゴ鉄道という第三セクターの会社になって走り始めた、特急丹後エクスプローラーに乗った。途中からとなりの席に、とても礼儀正しいお婆さんが乗ってきた。少し言葉を交わしただけだったが、僕もつきちんとした態度で対応したりした。

礼儀正しいのはとても気持ちのいいことだし、相手への影響力も大きいものと思った。中学生達の乱暴さや無礼さは、教師や親との相互作用だなやっぱり…、と思った。

これはそうなんだろうと思う。加えて、「コントロールされる」という学習も、生き物には大切だ。しつけなしの犬より、しつけられた犬の方が、飼い主や周囲の人から可愛がられるし、長生きすると思う。

ペットを生ゴミのように廃棄する日本人の心性と底通している子育ての現状がある。飼い主を鍛えることで、捨てられて殺されてしまうペットは減る。

まったく相似形のことが子育て現場で起きているのだろう。

6/20 WED 久しぶりに家族の初回面接だった。家庭裁判所から送られてきている家族なので、来所の動機が一般のものとは少し違う。どうジョイニングして、継続面接に持って行くかが鍵なわけで、久しぶりに緊張していた。

夜は宿直で先週からいる中3女兒。夜中の1時半頃まで、むかし出会ったいろいろな子供達との話をした。

この家族面接は思い出しても顔がほころ

ぶくらい楽しく運んだ。当然、出だしはストレスフルだったのだが、母親がなかなか胡散臭い人だったので、きれい事は早々と撤収できたからだ。

裁判所からの兎相長送致だという締め付けを強調し、安易な対応は許しませんという態度を崩さなかったら、向こうが譲歩してきて、きっちりした継続面接になった。

非行少年の弟と賢明な兄が、自由に生きて来た母親の下で育っていた。良い子よりも、困った子に強くシンパシーを感じている母に会ったことは、今までなかったように思う。

おとなしく良い子は片隅に追いやられ、罔々しい子が、要求を振りかざして、母親との間でもアンフェアな権利を獲得していた。

6/21 THU 会議の結果、彼女は教護院で中卒後の進路に向けて再スタートすることになった。

いろいろと経過があった子だが、教護院（現在は児童自立支援施設）退所後、企業内高校に進学し、就職して結婚もし、お母さんになったと聞いた。

6/23 SAT 「大阪からだとところの出会いの会」10周年と松井洋子さんの「癒しのワークショップ」出版記念のパーティ。久しぶりにワークのエッセンスに触れて心動き胸熱くなる。

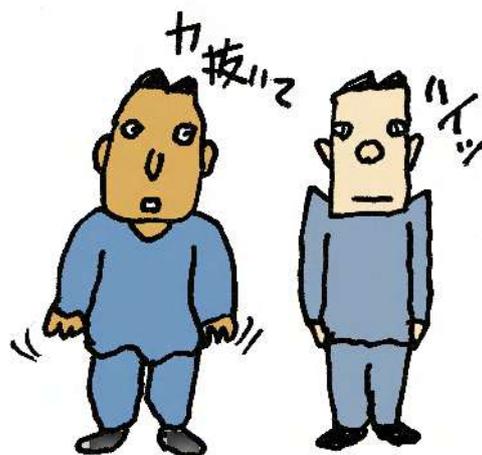
松井洋子さんの「大阪からころ」に毎月のように通っていたのは、この更に数年前だった。「ことばがひらかれるとき」の著者、竹内敏晴さんのポディーワークsに遭遇し、松井さんに会って、目から鱗の体験連発でのめり込んでいった。当時、京都府北部在住だったので、週末は家族放ったらかしで大阪に足繁く通った。

この日のパーティで出会った、「音具」というものを熱く語る非常に興味深かった音楽プロデューサーの事は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」（金剛出版）に書いた。

精神、こころを語る人も、一度は「体」のテーマにしっかり向き合っておくことが大切だ。用心しないと「こころ」が口先言葉でカバーしてしまえる、まやかしの術になってしまう。それを知らないまま大きな壁にぶつかり、反動で身体一辺倒の論者に引きずり込まれてしまう。オウム真理教事件の時、そんな人たちの姿を見る気がして心が騒いだ。

身体はごまかしにくい。誰かの目の前で、まっすぐ立っているだけで、見透かされる自分もある。説明を許されず、他者の目にさらされる自分を覚悟する経験は、知的作業に偏りがちな心理職には良い経験だ。それに、身体実感を伴った言葉もまた、専門業界用語とは随分違ったものだ。

もっとも、身体は身体で又、胡散臭いところたっぷりの世界でもあるから、何事にも用心深く、のめり込まないことだ。



蝸螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第七回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

2011年の今、1990年夏の日誌を読んで思うことは、我ながら元気だの一言である。よく動いている。一つ一つの仕事の質や見解まではどうこういえないが、とにかく楽しそう。基本的には今も毎日楽しいのだが、あの頃は働き盛り、元気だったなあと思う。そしてそう思える昔が、文字記録に残っているのを幸運だと思った。

私はワープロ、PCが登場するまで、書くことが苦痛だった。文章を書くのが苦手だったわけではない。清書が嫌いだった。それが理由で原稿を頼まれても、適当なところで妥協していた。初めて分担執筆した本の原稿（当時はまだ原稿用紙に清書して提出だった）も、最終的には「これ以上推敲すると、又清書し直さなければならないから面倒だ！」が理由で、読み返すのを止めた。だから本になってから、いろいろ思うところがあった。

PCが普及して、話すようなペースで書けるようになった実感があり、書きたいところから書いて、文節毎に前後入れ替えが可能な編集機能を駆使できるようになったのは私にとって大変革だった。書くことが楽しくなった。

そしてもう一つ、時代は多少前後するが、書くことをそそのかしてくれた二人の編集者との偶然の遭遇が重なる。

一人目はなんでもなしの話で、先方は心当たりもないだろう。定期購読していた月刊誌「話の特集」（随分前に休刊になった）と共に、編集長・矢崎泰久氏をクセのある興味深い人だと思って見続けていた。愛読者カードも時々書き送ったりしていた。その一回が、イラスト付きの描き文字のまま、読者の声欄に掲載された。嬉しかった。そんなことを期待していたわけではなかったのだから、本当にびっくりしたのだ。

そのしばらく後の事だが、筑摩書房から独立した編集者・原田奈翁雄氏の創業した径（こみち）書房。ここから創刊された「いま人間として」を創刊準備号から愛読していた。そしてゼロ号、一号と愛読者カードを書き送っていた。そんなある日、径書房編集部と書かれた封書が届いた。出版案内のDMかと思って開封してみると、「いま人間として」第3号の特集「仲間」をテーマの原稿を書かないかという誘いだった。びっくりして大喜びした。

執筆依頼など受けたことのない、地方公務員だった。文章はたくさん書いていたが、商業誌からの依頼原稿など、どう書けばいいのか…と戸惑いながらも、とにかく嬉しかった。そして、漫画家仲間「ぼむ」の連中との同人誌作りのドキュメンタリーをマンガも含めて（これは他の人と違った強みだった）書いた。しかし、「こんな生真面目でかたい雑誌、誰が購読しているのだろうか？」と案じていた通り、10号余りで休刊になった。

この二つの出来事が私に、ものを書くことを後押ししてくれた。プロの編集者に選んでもらえたという一点が、その後の行動をどれだけ支えてくれたことか。チャンスをくれる人の有り難さは今も忘れない。

1990年7月

7/3 TUE 京都市南保健所の保健婦さんを中心にした事例検討会に呼ばれて家族療法の話をした。世の中には誰が悪いか、何が悪いのかと犯人や原因を探すのが、好きで好きで仕方ない人が多い。そしてその人達は押し並べて、問題解決には力がない。

原則的なこの姿勢は、当時も今もそう変化はない。我ながら、相変わらずだと感心する。ただ、こう言っているからと言って原因がないなどと主張しているわけではない。

原因究明は問題解決や軽減に、必ずしも役に立つとは限らないと言っている。この発想が持てたことが、私の人生の後半の大きな分かれ道になったと思う。

7/4 WED わが児童相談所に新人として配属されてきた一時保護所指導員のK君の研修で職場の四方山斬をした。

K君の新採研修に職場は大いに張り切った。外部からの視察や研修依頼にもそれなりに力を入れていたから、内部スタッフの新採研修となればもっと力も入った。しかしその内、空気が抜けるようにモチベーションが下がっていった。彼は国家公務員の試験を受け続けていて、現在は法務省関係の職場を摸索する間の腰掛けらしいということが分かってきたからだ。

進路選択は基本的に個人の自由だ。他人が勝手な思いを押しつけるものではないことは分かっていた。しかし我々がトーンダウンしていったのも仕方なからう。

彼は結局二年目も居たのだったと記憶し

ているが、相変わらず受験生で腰掛け職員。そこへの対応エネルギーが空しくなってくのは避けられなかった。

7/6-7 FRI-SAT 三年目を迎えた、児童福祉施設中堅職員研修の初回。新しい参加者七人と初顔合わせ。プログラム講師は松井洋子さん(ボディーワーク・からころ代表)。参加者それぞれが非常にしなやかで、初々しいのに驚く。

継続してきたことが定着して、その影響が初参加の人達の振る舞いの中に認められることが嬉しい。

施設職員のための通年連続研修会が順調に継続されていった。こういう蓄積が、10年後の場や施設を形作る。



そんなことは分かっていそうなものだが、しばしば先行する物事は、後発のアイデアや、声の大きなものの影響で簡単に終結を迎える。そして又、大した工夫もない新しいだけの事業に書き換えられていく。

その結果が現状であることを、経験の短いスタッフは知ることすら出来ない。「継続」は侮れない大きなテーマなのだが、そんな経験も与えられない若い人達は、現状を防衛的に語る以外、自己肯定の手だてがない。

でもそれは、あなたのせいではなく、システムを継続的に維持管理する責任を持った人間に知恵が足りないせいなのだ。だから管理者やトップの人選には注意がいる。事なかれ主義の臆病者をトップに頂くと、スタッフは砂をかむような現状砂漠に向かって働けと追いたてられることになる。そして失敗が起きると、自己責任にされる。

必ず上手くいく方法など誰にも分からないのだから、受け継がれている先人の知恵に学ぶ程度の謙虚さはあって良い。新しいモノが素晴らしいモノだなんて、子どもっぽい好奇心しか満たさない理屈だ。

7/9 MON 月例の「継続中の全ケース進行状況報告」を第一議題にした課会議。その後、膠着状態のいくつかケースの打開案を担当と話し合った。午後はヤセ症の子との面接。

コンピュータが導入され、この20年の間に職場環境や業務管理環境は大きく変化した。業務の進行状況管理強化によるメリット、デメリットは両方あるのが当然だ。PCの導入、データの共有化も一面だけでは語れない。「進行管理」自体が複雑さを持ったテーマなのだ。

そう考えると、今は管理と記録が徹底して追求される時代になったのかもしれない。当時は、ケース進行管理が難しい故の問題を抱えていた時代だった。

各児童福祉司がどんな継続ケースを、どれくらい持っているのか。管理職がカルテに目を通していたら分かるようで、実際はなかなか正確なところは把握できなかった。(担当者が記録を書く時間が限られ、カルテの回ってくるのが遅い)。その結果、年度末や、担当者の異動がきっかけで、「そんな

ケースがあったの！」なんてことが実際にあった。

それをなくそうと、継続ケースの月例進行管理を提案して開始していた。指導継続ケースを一覧表にして、担当順に、全ケースの一ヶ月の様子を口頭で報告して貰った。その結果、長期にほったらかしになってしまうケースがなくなっただけではなく、手つかずのまま指導継続中だったケースが、コンタクトと共に終結になっていって少し身軽にもなった。

7/10 TUE 今年の新任児相職員研修を福知山児相で行った。「職場のチームワーク」をテーマに話すよう依頼されて出かけた。その後、特急で戻って職場に顔を出して、雑用を片付けてからKISWEC(京都国際社会福祉センター)の家族療法訓練の当番日なので出かけた。

この夜、出かけた家族療法訓練で、私はこんな経験をしていた。

思春期病棟のある病院の院長が訓練受講に来ていて、セラピストをする日だった。今日来てくれたボランティア家族(研修のために、一般の家族をお願いしている)は、成人した息子、娘とその両親の四大家族。元国鉄マンの父親は、広島に原爆の投下された直後、蒸気機関車を運転して広島市内を走ったそうだ。



「初めてそんな話聞いた！」と成人した息子が驚きと共に呟いていたのが印象的だった。

今、振り返ってみると、一日でいろんなレベルの出来事に対応している。今と過去と、未来のためにが交錯している。その一つずつにしっかりアクセスしておくことが、それぞれのその後を作る。

これらのことを思い出すと、あの時の芽が、何として実っていったのかも分かる。職場の応援もあって受講した訓練だったから、意識して成果を、児相に還元しようとしていた。

それが三年目には思いがけず家族療法訓練スタッフとして実施する側になることになっていった。自分としては、貰ったモノは返すという意識で、とくに問題ない話だった。

しかし地方公務員法がからんで時々、経過や様子の分からない管理職から、「兼業の禁止」が注意されたりした。

働かない人には甘いのに、人の二倍働いている人間にうるさいことを言う組織を、私は納得していなかった。そこから職場に還元されているものの存在に敬意が足りないとさえ考えていた。

公務員組織だけで世の中が構成されているわけではない。外の世界の空気も知恵も導入しなければ、職場が職員互助組織化してしまうと確信していた。この批判が世間の言う「親方日の丸」という言い方だった。

そんな、生ぬるい仕事をしている気はなかった。外に向けではなく、組織内部にも自分の姿勢をはっきりさせていた。

今、児童相談所の内部にこんな乱暴者の力はなく、市民社会に対して防衛的になりがちな状況と、起きてしまった事への対策

が溢れている。これは組織内に未来に向けた英知を醸成してこなかった組織管理者の責任だろう。

数年後、私が京都府を退職してから、この研修に同僚の早樫一男君（現・同志社大学教員）が関わっていることについて、兼業を禁ずる条項に反しているとかの指摘があり、彼は人事記録上の処分をされた。実害のあるものではなかったようだが、なんと短絡的で、社会システム全体を見ない反応だろうとあきれた。（そして、それなら私がいるときに言えば良かったじゃないか！と思った）

私たちが最初に受講したときも、組織の一員でありつつ、全国の児相や周辺機関職員の研修の場の担当をすることにサポートだった京都府は、どんどん縮んでいった。そして処分といえば後年、児童虐待死事件が京都児相管内で起きてしまった時、頑張っていたけれども起きてしまった地域の不幸について、私のよく知る熱心な担当児童福祉司を処分した。

7/13 FRI 新体制になって初めての三児相課長・係長会議。養護ケースの京都府的分析をし始めている。数字の奥に少しずつ、いろいろな意味がちらついているのが見える。

この段階ではまだ、児童虐待増加の予感程度だったと思う。「養護問題の質が変化してきた」なんて言っていたのを思い出す。そして大阪市に代表される都市型の養護問題と、京都府とは同じではないと話し合った。「やっぱり京都府は田舎だよなあ」とネガティブではなく話していた。

この後、どんどん露出の多くなる児童虐待の大阪市方式？や、愛知県の論調と、京都は一線を画していると思っていた。

しかしこの潮流は全国を席卷し、児童虐待問題対応のスタイルの本流に飲み込まれていった。もはや小さな実践からの提言など許されない、全国的で大学アカデミズムに後押しされた主張が「こども虐待」問題のトレンドを形成していった。こういう事態はいつも、牽引する数名の学者と、キャッチーな理論が担っていた。

そして二十年、誰も彼もがヘトヘトの現状を形成して今に至る。誰が悪いのでもないが、結果が良くはない。通告は増え続け、トップランナーは消耗しきっているし、後に続いた者はどんどん脱落し続けている。

今更引けない人々の献身によって支えられている日本の子ども虐待問題。今後どう収める計画なのか、私には見えない。

経験的に言うなら、社会が飽和し、金回りが悪くなったのを理由に、今から出てくる他の理屈や現象に飛びついて、子ども虐待ブームが去るかたちで放り出されて沈静化するのだろう。

その時にはおそらく通報数ではなく、子ども虐待死の実数が語られることだろう。そして社会はもっと厳しい別の課題に直面して、大騒ぎしていることだろう



「一人の子の虐待死に学ぶこと」は科学だが、「一人も虐待死させてはならない」はスローガンだ。それを一緒に語ってはならないのではないかと思う。

7/14-15 SAT-SUN 栃木県の社会福祉教育センターから研修の依頼をされて来週はじめに行くことになった。すると「私も行こうかな」と嫁さんが言わせて、前々日の土曜日から出発することにした。初日は奥日光・中禅寺湖の更に奥、湯の湖畔のホテルで一泊。海拔1500メートルの高原は肌寒かった。滋賀を朝八時に出て、着いたのは午後四時半。次の日は滝巡りをしながら日光に下って宇都宮に出た。ちょっと有名なレストランで、なかなか珍しいフランス料理を食べた。

各都道府県に「社会福祉研修センター」のような組織が活発に機能していた時代があった。

私は府の社会福祉研修所で、田中昌人氏の発達保障理論に基づく講義や実践のドキュメンタリーフィルムを見せられたりした記憶がある。そういうことを各府県で実践していたのだろう。職員の養成に力を入れていた時代だ。

訳も分からず多忙ではなく、短期で人が入れ替わってしまうこともなかった。先輩はうとうとしくも有り難かったし、研修機会も内外に豊富だった。

組織内自治研活動や全国の児童相談所問題研究セミナー（後年、児童相談研究セミナーに改称）など、業務を社会科学的に検証したり、見直したりする機会がいくらかもあった。積極的にその中に身を置くことで、いろんな事を学んだ。

7/20 FRI 朝、所長・次長との定例の週間打ち合わせのあと、社会福祉実習の大学生7人に非行問題について、一時間半ほど話した。午後、西川さん(隣接する知的障害者更生相談所所長補佐)に庁舎使用問題で意見を求められた。その後、定期的に通って来る子どもと続けて二人会った。二人目の子は、元気が出てきつつある不登校の中三女子で、彼女の希望でこの夏、北海道の酪農農家へ体験実習的に出かけることを考えていて、その計画を練った。

その後、息子達に暴力を振われている父親との川畑君の夕刻からの面接を少し見て、編集者講座に行った。泉麻人が講師。エッセイが宿題で出ていて、その講評をした。「このまま雑誌に載っていてもおかしくない完成されたものがあった」と前置きして、僕のもものが読まれた。子どもの頃にはこういう経験が全くなかったので嬉しくなった。いくつになっても誉められると嬉しいものだと思えて実感する。

この日のことは、とても鮮明に思い出せる。所長、次長とはウイークリーの定例会を持っていた。気が合う上司ばかりではなかったが、意思疎通機会は確保しておくことで、不要なトラブルは防げていた。

毎年のことだったが、実習生への対応は出来るだけ丁寧にと考えて、手厚いプログラムを実施し、実習ノートへの記述もおおざなりにならないよう気をつけていた。しかし、そんな思いは、それほど伝わったわけではなかった。自分の若い頃を思い出せばやむを得ないかと思うが、若者は無神経で無頓着だった。

精更相(知更相)との庁舎共同使用問題上のトラブルが前任者の代から混迷したまま続いていた。隣接地に建てられた新しい

庁舎の一階に、児相のプレイルームが新設され、二階(事務所)三階(面接ゾーン)に知更相が入っていた。この状況は、庁舎管理問題でしばしば両相談所がぶつかる事になった。

西川さんとは心理職の先輩・後輩関係ということもあり、ここで解決しておかないと、ずっと引きずる事になると思っていた。結局、大幅な譲歩も含めて、未来に向けて、積み残し課題を放置しないという一点で合意した。

一つの建物は一つの公所であると認識し、プレイルームを放棄した。そして知更相は事務所を一階に降ろすことになった。元々の経過を考えると、それは不当な譲歩だと主張する人もいた。

この数年後、まさか自分が西川さんのポジションに異動になるとは考えもしなかった。そしてあらためて、自分も一緒になって片付けておけたことが幸運だと思った。情けは人のためならず・・・を実感した出来事だった。

川畑君の面接していたこのお父さんの家族(夫婦)物語は哀れなところのある話だった。ずっと後に、木陰の物語の一作として描いた。



夜、編集者講座に出かけて、コラムニスト泉麻人氏の話聞いた。そこで前回の課

題への講評を聞いたのだった。この頃から、自分の書いているものへの自信が少し出てきていたのだと思う。

7/21-22 SAT-SUN 今秋開く全国児童相談所問題研究セミナーの母体である「全国連絡会」の会議を京都で開催した。関東・中部からたくさん全国運営委員の人達が来てくれた。各府県の今日の状況をつぶさに知る事ができて、毎年のことながらこの集まりは面白かった。プログラムの検討もしてもらった。

日曜の正午に終わって、映画を観る人や、ぶらぶらするという人達と別れて、帰宅して読売ユーモア広告大賞の応募作品を二枚描いた。月末締め切りで、今日描かないと不参加になるしかなかったのだ。

この時に描いて、入賞して貰ったメダルがこれだ。私は賞や当選等というものに、ほとんど縁のない人生を送ってきたが、この時期だけ、いくつかの幸運が届いていた。

漫画家としては合計3回、それなりの受賞をしたが、2回はこの年と翌年の連続だった。翌年は、授賞式にも来るようにと主催者（読売新聞社）から強く招待されて、大手町の読売新聞社屋に出かけ、パーティ会場で漫画界、デザイン界の重鎮達を眺めていた。



7/25 WED 年二回、府県持ち回りで開催される近畿児童相談所職員研修会が和歌山であった。終了後に、心理判定員協議会の近畿ブロックの幹事の引き継ぎを行わなければならなかったのですが、気は進まなかったが参加した。中味は期待に違わずしょうがないものだった。しかし後の心理判定員の集まりは、短時間ながら面白かった。別れ難い人があったので、駅前の喫茶店で、八人ほどで続きの話をした。

この頃、まだ近畿の心理職連中が個人的に親しいということにはなかった。それぞれの属する府県の専門職として、お互いのメンツや牽制も含みつつ、出会っていたと思う。

そんな事態が急速に変化してゆくのは、川畑隆君が発起人になって創刊した「児相の心理臨床」誌に負うところが大きい。

この雑誌は15号まで発刊され、リニューアルして又、「そだちと援助」誌として発行され続けたが、この間に阪神淡路大震災があって、大きな役割りを果たすことになった。

7/26 THU 受理判定処遇会議、月一度石坂、田辺両児童精神科医が同席する日。

登校拒否をしないでやっていけるようになった中三女子の希望の牧場体験実習を実現すべく、T市教育研究所のT川氏に骨を折ってもらっている。一人で12日間の旅に出かけられるかどうか、楽しみに根回しをしている。

京都府の児相に、常勤の児童精神科医はいない。囑託の精神科医は府立医大ルートでこちらの希望と関係なく、配置されてきていた。着任早々、子どもは見たことがありませんと告白する正直な医師もあった。

そんな経緯でケース会議に京大病院の石

坂医師が定例出席することになっていた。

先にも述べたこの少女、担当者として、彼女の夢を叶えるため、つてを探して北海道芽室町の酪農家に、何度も手紙を書いてホームステイさせてもらえる段取りをした。

そして何もかも整った出発直前、彼女は「行かない!」と言って断った。腹も立っただし残念だったが、これが彼女のその後の身の振り方には生かされたところがある。

7/27-29 FRI-SUN 広谷、飯田、川崎、私の中年川遊び隊で、今年の実地、和歌山県の飛び地・北山村に行った。瀬八丁の上流で、昔筏流しをしていた人達が観光用に筏川下りをさせてくれる。予約時間に間に合うように、奈良県の山間部をひた走りに走った。

しかし、はじめの予定の筏下りコースをゴムボートでチャレンジする計画は、ボートをもって川に下ることが困難なため中止。そして次の予定地である十津川温泉の下湯へ向かって、川を眺めつつ走っていると、瀬八丁を遡るジェット船のことが浮かんた。「車を河口に置いて、ゴムボートを抱えてあの船に乗り、上流で降ろしてもらったら、そこから下れるぞ!」。

こうしてゴムボート河下りをした瀬峡は、流れの非常にいい川だった。最終便に乗ったことが結果的に、下ってくる観光船に迷惑かけることもなく、快調に流れを楽しめることになった。夕方の少し冷えてきた河面を、例によって流れのままに男4人が、2隻のボートで下るのだった。

この豊かな山間の地が2011年の台風、洪水で壊滅的打撃を受けて、今も避難所暮らしの住民が多くある。

あらゆるモノが変化することを肝に銘じて、今できることをするのが、今生きてい

る者の使命だと思う。

7/30 MON 面接を二つ済ませて、午後から福知山へ行った。秋の児相研セミナーでやってもらう基調公演のシナリオ原案の打ち合わせだ。「あらじん」という名の変った喫茶店で、5人でいろいろプランを練った。

児童相談qw所の一日を、ドラマ仕立てにして上演するプランだった。原案を私が書いて、脚色・シナリオ化を福知山児相の児童福祉司小巻さんが担当した。

できあがった脚本で出演者が何度か練習をした。この稽古も面白かった記憶があるが、私は出演しなかった。

そして本番当日、全国から集まった同業。同職者に、「ある児相の一日」の芝居を上演した。

あのシナリオは今でもどこかにあるのだろうか?



蟻螂の斧 とうろうのおの

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第八回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

誰かのたてた命題に添って、精緻化するばかりの専門家集団。様々な議論がなされるが、そもそもの前提は不問に伏される。そこは手に負えないから議論の対象にしない。こんな科学が信頼できるものだろうか。素人目には「おかしいなあ…」と見えていたはずだ。

人通りもまばらな僻地に、誰が利用するのかも分からないようなりつばな建造物が次々に建つ。年金のずさんな管理が明らかになる頃、あちこちにリゾート法とやらで、立派な施設をぼんぼん建てて、とても採算のとれない浮ついたブームに踊っている頃、そこに従事する人は感じていたはずだ。その家族もまた、おかしいなあと思っていた人はあったはずだ。それまでだって、たくさんの事業や、世の中の動きに、「我々のやっていることはどうもおかしい・・・」と渦中に従事する人たちは思っていたにちがいない。

今、児童虐待対策に従事する人はそう思っていないのだろうか？二十四時間繋がった呼び出し電話を持たされた配偶者を、家族はおかしいと思わないのだろうか？救急隊ではない、消防隊員でもない、児童相談機関職員なのである。

「店は24時間あいている方が便利だ」、なんていうちょっとした欲望に応えるために、働く者の負担はどうなっていくか。それによって崩された人の暮らしはどのようなものか。想像力を働かせなければいけない。過剰な便利には警告を発しなければならない。そして負担を背負うつもりのない、他者責任の追及には眉唾を持って対応しなければならない。

時々、そもそもの前提が間違ったところで、屋上屋を重ねてきているのではないかと思うことがある。個々人の人柄や才能の問題ではなく、前提に誤謬があったのだから、そこから始まる営みはどう創意工夫を重ねても、基本的誤りをカバーは出来ない。「所詮人間とは愚かしい、そういう生き物なのさ！」などと、斜に構えたくないでそこを問題にしたい。

それは、「児童虐待」通報件数5万件超えとその後の、次々の事件報道が目にも余るからである。対策は、必ず結果の出るときが来て、それを踏まえた総括が行われなければならない。例えば、交通事故死が1万人を超えた時代と比較すると、5000人余りになった時代は、最悪の時期からすると半減したと語られるべきモノだ。しかし「戦争では3万人が死んだが、平和になって戦死者はゼロになった」、この話と交通事故は同じにはならない。ゼロを目指せと言うなら、車を一切やめようという提案しかない。

事故死などあってはならないし、戦争もしてはならない。児童だろうと高齢者だろうと、虐待など許されることではない。それはそうだろう。だからなんだ？そこからではないか。責任のある語りを開始されなければならないのは。

児童相談所の見え方が、時代と共にこんなに変わってしまうとは思わなかった。児童虐待問題にちゃんと対応することを、国民の多くが、こんなに期待しているフリをするなんて信じられなかった。

私は今、渦中にいるわけではないので、それ以外の業務の現状を詳しく承知しているわけではない。でも児相OBとして、他の仕事もいろいろしていることは知っている。しかし、多くの国民はそこしか知らされないし、他の子育て相談など持ち込むところだとは思っていない。専門性の高い課題対応をするということで、市町村の児童相談機関のとの棲み分けを提言してきたのだと思うが、実態は、児相職

員のキャリアの方が浅いなんて事態があちこちに見られる。

国は該当者が多いことのアピールのために通報数の発表をするが、5万件の通報があつて仮に死亡事例が50件なら、0.1%の発生率だ。これが人間社会の現象として更に、どれくらいのエネルギーとコストをかけてゼロ%になるよう、努力されなければならない課題かどうか？考えてみよう。一つの死について、よってたかって非難したり、嘆いたりする理由は何なのか？

私にはこう見えている。児童虐待は特にそうだが、加害者は自動的に明らかになる。迷宮入りの凶悪犯罪ということにはならない。警察の捜査能力の劣化が言われて久しい凶悪犯罪。そんな中で虐待問題は、因果が早期に誰の目にも明らかになる。こういう出来事に人は弱い。関心を持ったとたん、その当事者と因果が提示される。水戸黄門の事件解決並みの早さで、関心持続時間内に白黒がつく。こういう事件が傍観者は好きなのだ。

そんなメカニズムを煽って書き散らすマスコミも、それで売り出す学者も、あおられて対策を講じる役所（児童相談所を含む行政）も、やらせメール問題で批判されて臆面もないアンフェアな始末書を書いてあきらめられた九州電力と変わらない。何かあったとたんに、「いじめはなかった」と記者会見してしまう学校長ともかわりないのではないか。

ふざけてはいけぬ。真面目そうな顔をしているからと言って、誠実だなんて、ちっとも言えない。臆面もなく、よくそんなことが言っていられるなあと思うようなことの連発する世の中で、児童福祉の理念に基づいて、子どもの権利を考えるなら、遠く長い道のりでも、子ども虐待の「予防と防止」に取り組まなければ、結局マッチポンプだろう。

酷い親が居るのは酷い世の中だからだ。そんな世の中でも、ちゃんとした親もいるなんて気休めにもならない。当たり前だ。同じ放射能を浴びても、発症は同じ時期ではない。弱い人、事情を抱えた人、体力のない人の所から被害は始まる。

それを個々人の問題だと語る鈍感が作り上げた、緊急援助デザインである。児童虐待の現状への対策などもうこれで良い。それより、今後の児童虐待の発生予防のために、今しておかなければならないことを実行する。そこしかないのは当然ではないか。

それをいったい誰が担当しているのか？私にはよく見えない。

1990年8月

8/1 WED 高校野球の開会式のため一週
操り上げてABCパノラマ大放送に大阪
へ。その後、篠原が友人と二十年近く続
いている現代画廊での三人展に。中西、吉
田両君と四方山話。肝心の篠原はPLの花
火大会に行っていたようだ。

そうか、この頃、月に一度大阪ABC朝日
放送ラジオに出かけて、桂南光さんの番組
に出演していたのだった。私のような仕事
をしている立場も含めて、世の中のいろ
んな事について、求められた時にコメント
していた。あまり大した話が出来たと思わ

かったが、夕陽のみえるタワー上のスタ
ジオはなかなか気分が良かった。いろん
なゲストにお目にかかれたのも楽しいこ
とだった。

8/4-6 SAT・SUN・MON トレーナーを引
き受けている「家族療法ワークショップ°
STEP II」。STEP Iの経験者を中心
に、全国から24人の方達が集まって
こられた。例によって、かなり盛り
沢山のプログラム。しかし最近時々
疲れたなあと思うようになった。こ
れは僕には良いことだろう。

延々と今も続いている家族療法訓練
step 1, 2, 3。受講生の変動が時代が
合わせ鏡のように見える。2012年、
受講生に児童相談所勤務の人の公費
出張受講が激増した。国からおりて
くる予算で研修が認められる

とか聞いた。でも、予算に連動してしまう学びの動機付けて、金の切れ目が縁の切れ目になりがちだと、受講生は分かっているだろうか？ こういう時代の流れそのものに批判的でないと、いつでも時代に流されているだけの職員になる。

8/7 TUE 小さな用件ながら気分のえらいことばかりのコンタクトを一日中つづけた。そんな中で後からほっとできるのは、やはり子どもと直接のやり取りである。夜は今日 FAX で受けて、明朝速達で返送する「住友金属社内誌・すみとぴあ」の原稿を 6 枚描いた。

こういう書き方では、まったく思い出せない。課長業務で、トラブルのやりとりだったのだろう。さてどんな話だったのやら、気になるなあ。

住友金属の社内誌連載は、この時点でもう 10 年以上になっていたと思う。この後、鉄鋼の大不況で、合理化の中、社内誌の発行は中止となり、連載もなくなった。

その後、中国の鉄鋼需要拡大で業界は、息を吹き返したと聞くが、ホント、景気は水物だ。大企業の社内誌と二十年以上の付き合いだったが、この間、世界の景気動向に揺れる日本のトップ企業内部を見聞できた。国内の各工場や高炉の火入れ式にも出かけた。公務員をしながら、漫画家の立場で面白い体験を重ねていた。

8/9 THU 北海道の体験実習。結局は行かないことに決めたというので、フェリーのチケット・キャンセルを自分でさせるために生協旅行部へ連れていった。チャンスは掴むも選択、見送るも選択。回ってこなかったのではないことを本人が知ったことも財産のうちだ。体験実習の断わりと詫びを、芽室の H 田さんに伝えた。まことに残念。

今思い返しても、残念至極だった。代わりに私が一週間の北海道の牧場体験なんか、行ってみたくらいだった。

8/11・12 SAT・SUN 今日から 15 日まで夏休み。とは言うものの、一気に片付けた雑用数件と D.A.N.通信 10 号の制作を二日間で済まさなければならない

DAN 通信は長年出し続けた個人ミニコミ誌。ファンも多く、これについて書いてくださいと言われて、「メイキング/DAN 通信」を産経新聞の夕刊に連載したこともある。近年はみんながやっているブログを、手間を厭わず、郵送版で数年間も続けていたことになる。

コピーして折り曲げて、シールを貼って、切手と住所を張って投函する。ものすごい手間を月刊ペースでやっていた。毎月、年賀状を出す感覚だったといえば、分かってもらえるかな。

8/13-14 MON・TUE 一家揃って琵琶湖の北、余呉湖野外活動センターのバンガローに出かけた。我家は車を持たないので、JR を乗り継いで木之本駅からはタクシー。

最近こんな動き方をする家族はほとんどいない。みんなオート・キャンプの道具をどっさり積み込んだ 4WD で乗り込んできている。我家もすき焼きを作ったり花火をしたり、泳いだりいろいろだが、僕は木陰で原稿を読んでいた。

夜は息子達と花札賭博をやった。賭率 1 対 10 のハンデを付けて本気でやった。賭事をする性格が出るというが、息子達が劣勢の時に自分の陥ってしまう人前での態度を知っておくのはとても良いことだと思っている。ただ問題は、むしりとってや

るつもりが、2500円ばかりとられたことだ。なあと親父はこうして小遣いをばらまいているのさ。

頑なに我家に車は導入しなかった。現在、息子達の世代は、大学時代に免許も取って、それぞれ運転している。妻もそのうち教習所に通って運転するようになった。私だけが相変わらず無免許だ。

車社会に反対とかいうのもでは全くない。移動手段に関心がないのと、運転している時間が無駄に思えて仕方ないだけだ。

過去に一年だけHONDA CB50という原付に乗ったが、走っている間中ずっと、到着時間のことばかり考えていた。道中が面倒なのである。運転は誰かに任せて読書したり、車窓を眺めたり、お茶を飲んだりが向いている。

8/17 FRI 児童相談所業務検討会議。福知山児相のキャンプ事業の実態について、かなり厳しいことを言う結果になった。正しく伝わることを願うしかない。

終了後、本庁から担当者が来て、①「精神薄弱児・者福祉対策基礎調査」②重症心身障害者通所援護事業実施要綱(案)③家庭養育支援事業実施要綱(案)の説明を聞いた。

(1)など10年以上前、各種団体からの反対があつて潰れた経過のある実態調査と同じようなものだが、今回、話はあるという。何が変わったのだろうか。

今もそうだが、こういう文言に拒否感がある。思いつきの臭いは大きく、漢字が多い。そして多分、数年ですっかり様変わりしている。そんなものに付き合いたくない。

「継続は力なり」、を強く信じて何十年、

先ずこれ自体が相当な継続だ。友人関係も、業務も、自分の行為も、続くものしか信用しない。そこに留まって踏ん張っていれば誰でも、相当な成果は手にすることが出来る。

しかしそれにしても、役所仕事って、今も漢字いっぱいの新規事業を繰り返しているのだが、その割に成果は見えていない。せいぜい、自殺対策をGKB47と称したことを、寄ってたかって批判する程度のことである。なぜ、続きもしないことを提案した者や、予算執行した者を批判しないのかな。金と時間の無駄遣い。

家庭内だったら夫婦紛争ものだ。

8/18 SAT 家裁からのケースの月一度の家族面接(三回目)をした後、原稿を書いていた。夜は里帰りしている妹と子供たち(甥と姪)、うちの家族と祖父母の計10人で食事に行った。孫五人がワイワイとやかましい祖父母の幸せ。

夜中、VTR「セックスと嘘とビデオテープ」をみた。繋がりによるドラマの通俗性ではなく、繋がれないことによるドラマの喪失をドラマにしている、と書いていて何を書いているのか自分でもわからん。

なんだか、全般に夏休み期間中の感じが漂う日誌だ。この時代から二十年経つと、私に孫が二人いて、祖父母とは我々のことになっている。世代交代が順調に出来ていることを嬉しく思う。

8/19 SUN 日曜日だが相談所に出た。他に日がなかったので児童相談所問題研修の現地実行委員会をひらいたのだ。9人集まってくれてプログラムは大方まとまった。夜中、ヒッチコックの「めまい」をみた。タイトルを覚えていなかっただけ

で、見たことのある作品だった。僕はヒットcockをあまりいいと思って観たことがない。

児相研セミナーは当時、「児童相談所問題研究セミナー」と称した。今は「児童相談研究セミナー」。時代の流れから言えば、今こそ、児童相談所問題を語らなければならないのではないのか。この時代、さんざん、あれこれの開催や主催をやったので、今はもう絶対に引き受けない。

この「めまい」をテーマの文章に描いたイラスト(中日新聞)が今号の表紙である。

8/20 MON 丹後・野田川町教育研究会へ話に行った。講演が二本立てで、一部が僕、二部は「父よ母よ」「妻たちの思秋期」の斎藤茂男さんだった。著作のほとんど全部を読んでいるジャーナリストである。終了後、京都までの帰路同行した。いろいろなことが話せて楽しかった。

この夏、最大の思い出である。愛読書が多い斎藤茂男さんと、グリーン車に二人で京都駅までご一緒することになった。

講演はどうしてもよかったが、帰路の京都までの車中、たっぷり時間があつた。いろいろ聞きたいと思っていた。しかし実際は、新聞記者である氏に質問されるまま、私があれこれ喋ってしまった。その結果、誠に残念な結果に終わった。私の話すことなど、私は既に知っていることだったのに。

8/21 TUE 琵琶湖一周サイクリング隊の出発を見送った。今回の隊長は川畑君。登校拒否の男の子3人とスタッフ5人、小編成である。我々はこの取組を「必要な子供に、必要な事を」の精神でずっと大切にしてきた。一人だけを連れて一周したこともある。JTB や赤い風船ではな

い。何人揃わなければなどというものではない。一人一人を大切にすることの積み重ねがこの種の療育事業である。

そして夜は労演「風が吹くとき」。アニメが有名で、そちらを見たことがあるが、芝居の方がダンゼン良かった。夫婦のいたわりあいや愛情、そこに浸みだしてくる核の恐怖が本当に恐ろしかった。

このマガジン四、五号でマンガを掲載した琵琶湖一周サイクリングを春と夏に、繰り返し実施していた。当然そこに成果を感じていたからで、ここにも継続の力を見つけていた。

「風が吹くとき」、まさかこんな現実が我々の世界に登場することになるとは思わなかった。想像力の世界を上書きする現実とは・・・と恐ろしい思いがする。想像では恐怖を描けるのに、現実となると、恐ろしすぎて、何でもないことのように言いたくなる人の心情を悲しく思う。自分たちはどうなってしまふのだろう・・・と不安な気持ちが、大したことではないと合唱したがっている。この心情は女性より男性に強い? 「現実問題として原発が止まってしまったら、我が町はやってゆけない!」と発言する原発城下町の人々に、フクシマはどのように見えているのだろう。

8/22 WED 京都府青少年課の開催する「青少年地域育成フォーラム」なるものが開かれて、出席した。有識者の専門委員会でもとめたプランが冊子になっていて、その説明を聞かされた。しかし後半は参加者である、各市町村の人達の府行政への要望や、独断的な意見の垂れ流しだった。こういう会議は内容よりも形式が間違っている感じがしてならない。

誰が本気なのかまったく分からない会議

やフォーラムを延々と続けてきた結果、大阪市の橋下徹市長の誕生を引き出したのではないのか？

分かっているはずの人が、鈍感を装い、自分が責任を取らないで、先送りを選択する。その順送りですべての結果がこれだ。

8/23 THU 府が市町村の福祉担当職員を集めて行う説明会のプログラムのにぎやかで、90分程話した。ずっと高齢者対策事業の説明で埋まっている間に、全く毛色の違うシステム論の話は、出席者にどう聞こえただろう。一日目の最後のプログラムだったが、寝ている人はなかった。

組織内では希なことだった記憶があるが、私の考える本論に近い趣旨で話す時間を留意された。たしか二条城そばの会議場だった。京都府の中にも私のファンは居てくれたが、同輩か後輩がほとんどだった。これは私の弱点だったのだろうか？

8/24 FRI 隣接する府関係庁舎との積年の問題を解決すべく、会議がもたれている。手順が誤っていたり、経過の理解がいい加減だったり、困ったことは多いのだが、要はやれるときにやれる者が被ることだ。

経過を振り返ると、具体的な問題を、理解しがたい決着で矛をおさめてきたことが一番の問題なのだ。二度と同じ議論に引張り出されないためにも、最後まで見届けねば。

この庁舎問題はここで決着を見たのだと思う。わが方の組織内には、経過を考えるとその決着は不当だ！という声もあった。しかし、誰も経過を引き継がないような変則的な約束は、問題再燃の種になる。

分かりやすい決着にしておくことが紛争再発予防策にもなる。

そして二十年、今、ここに児童相談所はない。京都市内の観光名所・清水寺のそばに移動してしまった。またしても担当地域外（京都市内は、京都市児相の管轄）に設置された児童相談所だが、どうしてこういう事になるのかなあと思った。

宇治児相新築の時、設置場所から、庁舎設計まで、みんなで侃々諤々できた時代は懐かしいだけになったのか。

8/25 SAT 岡山大学教育学部で開催された第7回日本アドラー心理学会に野田俊作さんに招かれて、「夫婦関係におけるユーモア」なる演題で話をした。メインテーマが「夫婦」ということで、こんなタイトルにしたのだが、普段話すのとはちょっと違った準備をして、やるほうとしては楽しかった。誰かに「お題」を頂戴してというのは、大喜利みたいで面白い。

アドラー心理学は強力な野田俊作シンパによって支えられている感じがする。最近、目にする機会が減ったようにも思うが。

私はなにかにつけて、余り心動くことが少ない方だが、初めて野田氏の講演を聴いた時はたまげた。川畑君が事例を用意していたのだが、最初の数フレーズを述べただけで、あとは講師の独演会になった。

学会誌のリレーインタビューをお願いして、新大阪のオフィスにもおじゃましたことがあった。当日そこにいた人たちも同席しての、公開インタビューになったのに驚いた。オープンカウンセリングをやっている人たちには馴染みの形式だったのだろう。

8/27 MON 午前中いっぱいM判定員のケースにいろいろコメントをしていた。体の問題と心の問題、どちらか一方というものではない事実。着手できるところはいつも限られるし、手段も限られる現実の中で、心理診断とは何かというテーマが続く。「何であるか」と「何ができるか」、担当者の関心の在り方によってデータはいろいろな顔を見せる。

午後は半休をとって、ミネルヴァ本の編集会議(第五回)に宇治児相へいった。21時ごろまで、ディスカッションの録音をしたり企画を詰めたりしていた。

児相、そしてその後の知更相と、このころの新人や、力量に問題を感じている心理職のために、家庭教師のようなミーティングをよくしていた。

一緒に学べた世代や後輩はいいのだが、そこに遅れてきた部下、後輩世代には、組織的に学習機会が貧弱になってきていたのだと思う。自分で学べというのはいないが、独学の成果と共同関係の中の学習は結果が違う。一緒に学ぶ場を確保するのは、学習内容のためだけではない。それがチームワークや、次世代育成の組織のレパートリーに繋がる。難しいことではあるが、ここは肝だ。

学び損ねた先輩女性心理職にも多大な応援をしたが、余り受け止めてもらえてはいなかった。その点後輩は、多かれ少なかれ、おこなったことを受けとめて成長していつてくれた。分かってもらうのに随分時間のかかった人もあったが、それでもそのことを忘れず、ずっと後になってフィードバックをくれている事実には報われた気はする。

結局、北風ではなく太陽になることなのだろう。

8/28 TUE 朝、大山崎中学校の校内研修会に出かけた。夏休み中、多くの学校がこういう企画を実施している。会場を校外の公民館などに設定して、クーラーのきいた会場でというわけだ。川畑君と二人でこの夏はいくつか出向いた。担当地域の学校にはできるだけ、こういう形でも出ていきたいと思っている。

午後は家族療法のSVの来る日で、夫婦面接のライブを見てもらった。夕方からは観察室で、家庭内暴力ケースをみた。耐えかねて家を出たという話が悲愴感なく語られる不可思議さにしっかり見定めなければならぬものを感じる。

地域、学校との連携、教育分野の人たちへの支援、そんなことを殊更ネーミングせずに、心理職スタッフを中心に実行していた。そして家族を理解し支えることが児童相談所の中核的業務にあると確信していた。「家族療法」を特定症状のための治療技法だと認識したことはなく、児童相談全ての分野に応用できる援助だと考えていた。そして年度レポートにも、そのスタンスで量的な報告も続けていた。

8/31 Hと面接。相互なぐりがき法で物語を少し長めに実施し始めた。製作過程で考えておくようにと指示してあるので、すこしアイデアルなものできた。面白かった。

さあ、これは誰のことだったのだろう。多くはないがやはり、記憶の棚から完全に抜け落ちてしまっているものがある。残念だが、自覚しているより、もっと多くの欠落が生まれているに違いない。仕方あるまい。みんな覚えていたいなんて欲張りか。

螻螂の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第九回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

春休みの旅に大分県日田を訪れた。ここに行ったのは偶然以外のなにものでもなく、事前の知識は地名を聞いたことがあった程度だった。そこそこの歳になると、意外なことに遭遇する機会は減る。世の中には未知のことがいっぱいのはずだが、日常はたいてい既知の山になってしまう。そこで、昔のTV番組「遠くへ行きたい」の主題歌のごとく、知らない街を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい と思ったわけである。

やってみると、これがなかなか面倒なことはすぐ分かった。「とりあえず、新大阪駅から西へ向かおう！」と思っていたが、新幹線出口であてもなく切符は買えない。春休みの混雑の中、座席を確保しようとしたら、行き先も希望時刻も定めていなければならなかった。

旅の目的を「知らない街を歩く」に決めたので、行き先は消去法で決定した。これまで下車する機会がなかった九州新幹線駅の一つ、久留米駅にした。この結果、その先の移動が、初めて乗車するJR久大本線になった。この沿線に日田や湯布院があることを知らなかった。断片的知識はあっても、それがどこなのか分かっていないものだなあと思った。

日程すら決めていなかったのだが、五日間、ひたすら知らない場所、初めての経験を優先に選択を繰り返した。結果的に日田二泊の後は、大分経由で佐賀関から九四フェリーにのって、四国・佐田岬の突端、三崎港の民宿に行った。そこから細長い半島を延々と八幡浜に出て、最後が何度か訪れたことのある松山市に行き着くことになった。知らない街があったら、もっと延長しても良かったのだが、選択と決定の繰り返しも疲れた。

二泊することに決めた日田の散策で、咸宜園(カンギエン)と遭遇した。咸宜は「ことごとく、よろしい」という意味だそうで、江戸時代に彼の地に開かれた私塾である。地元の豪商の息子、廣瀬淡窓(ひろせたんそう)が開塾者である。淡窓は江戸末期の儒学者であり教育者である。こう書いたところで、私がいかにそのことを知っているわけでもない。にもかかわらず、思いがけず興味を持ち、今その人物誌などを読んでいます。

研修、教育、人材育成は私の長年の関心事である。天領日田は江戸期には九州の要の地だったとはいえ、ここに結果的に九十年間、この時代の塾としては、一番長く世代をつないで存在し続けた民間の塾に大いに好奇心をくすぐられた。案内のおじさんの話を聞き、資料館をいくつかのぞき、参考文書を手にした。この場所に、全国から学びの徒が訪れ、寮生活をしながら日夜学んだ。そこからたくさんの人材が輩出したことを知って、気持ちの高鳴りを覚えた。若くして病死する者も少なくない時代に、学びに邁進した若者達を支え、自身は病弱のこともあって、ほとんど九州を出ることのなかった廣瀬淡窓という人の使命感を思った。

こういう人物に会えた旅は、なかなかいい経験だった。出発前に想像もしなかった人や物に会い、そこから影響を貰う。これからは、生きていけば、面白いことがあるだろうと思わせてくれた旅になった。

(2012/5/25)

1990年9月

9/5 WED 京都府総合教育センター・教育相談中級講座に話しに行った。3年目になるが、こういう講座の持ち方で、なにが達成できるかなあと思う。能力開発には非常に関心があるから、単なる頼まれ講師になりきれない

同じ京都府組織に属するというので、一度引き受けると、何度も依頼された。講師料も要らないし、業務時間内でも頼みやすいというので、依頼は繰り返された。受講生は府内各校に勤務する教師。時間帯は受講者も執務時間枠内だから多数集まる。

私が話すのだから、それなりに面白く聞いてくれてもいる。しかし、いかほどの効果、成果があったのだろう。「受講生が寝てしまうような講義ではなく・・・」とか期待されていたのかもしれないが、寝ないで楽しんで貰えるって、互助会の演芸会か？

教員のメンタルヘルスの取り組みだと位置づければ、それなりの意味は見いだせたかとも思うが、結局学校の抱えた課題への支えにはなれなかっただろう。

この経験があって、地域で教員のための家族理解勉強会を有志と継続開催するようになった。三カ所（草津市、茨木市、門真市）で開始し始めて十数年。今も続いているのは草津市だが、皆、熱心な人たちだ。

大雑把な教師批判は、世の中批判の放言と同じで意味はない。若手教員育成に力のない管理職がまだまだ居座っているのが惜しい。たくさんの学校長に会ってきたが、他業種の支店長や中小企業社長と比較して、管理者としての力不足な人が多いのはなぜ

かなあ。個々人の問題ではない課題があるに違いない。

9/7-8 FRI-SAT 施設中堅職員研修の二回目。川崎君をファシリテーターに「ベーシック・エンカウンター・グループ」を実施。変則的だが、僕は観察スタッフになった。

第一セッション90分間、完全に11人が沈黙を買ったのに驚く。後で、「こんな沈黙、生まれて初めての経験だ」と何人かの口から出ていた。

グループとして、つもりをしていたようなことが起こったとはいえないが、何か違った経験をした感じはあった。

一時期、エンカウンターグループが面白くて、度々出かけた。きっかけは、PCA（パーソン センタード アプローチ）1977合宿。日本精神技術研修所が主催して伊香保温泉で三泊四日実施したものに、遠路はるばる私が参加したことに始まる。（この時が、後々、いろんな繋がりを持つことになった佐治守夫さん、平木典子さん、内田純平さんらと初対面である）

それにしても90分の沈黙とは、相当な警戒心だ。

9/9 SUN 一時保護所に中三の女子が来ている。精神病の母と、暴力的な兄から逃れて、施設に行かせてくれといっている。しばらくここに居ることになる。そんなわけで、夜は宿直勤務。男の人と話せないという子だった。

こんな事情の女の子でも、夜勤体勢は男性職員一名だ。22年前の京都府京都児童相談所の一時保護所の静けさは感じてもらえるだろう。

今、日本中、どこを探しても、こんな空

気の一時保護所はないだろう。ほんの20年ほどですっかり変わってしまった。あと10年経ったら、その時には何を騒いでいるのだろう。それとも児童相談所は、すっかり寂れてしまっているのだろうか？

今だけを、声高に騒ぐものではない。長い歴史を振り返れ、ほんの数年前も振り返れ、そして未来を見ろ！である。

9/11 TUE 他の行事の関係で、午前中・受理判定処遇会議。午後、京都市から依頼されて、民生児童委員研修会で話す。会場がいつも労演で芝居を観る京都会館第二ホール。キャパのでかいのと、照明の熱いのと、音響にプロがいることを感じる。

舞台の袖で出番を待っている気持ちは、昔、学芸会の時に感じた気持ちと似ていた。あの時の方がドキドキしたけど。

職場に戻って個別面接。相互なぐりがき法がとても面白い。

いろんな会場で講演をしてきた。基本的にそこには何の思い出もない。あのステージで一度はやりたいと、歌手がカーネギーホールを思うような舞台は、講演にはない。

この研修会は当時京都市職員だった日高正宏さんに「ゲシュタルトセラピー」のワークショップを、施設中堅職員研修講師として依頼したことに関わっている。京都市当局から私の講演とのパーティーでなら市職員を貸し出すと言われたのだ。変なことを言うなぁと思った。

講演に関して振り返ってみると、最高でキャパシティ2000人くらいのホールで話したことがあるが、動員された人たちがざわついてきた記憶だけだ。むしろ少人数だった会場が記憶に残っている。

阪神・淡路大震災直後の豊中・庄内公民館での子育て講座シリーズ。シリーズ最終回として依頼されていたのが、震災直後の土曜日だった。予定通りやってしまいますと言われて出向いた。参加者2名。担当職員4名。そして私という結果だった。

9/13 THU 夏バテが来ている。特に気のすまないことをしようとすると、てきめんに体に出る。

心理判定員会議の助言者を頼まれていて出かけていった。畳に座っているのがしんどかった。夜は児相研セミナーの事務局会議で集まってもらったのだが、引き続き不調だった。帰宅して、何も食わずに寝た。夜中にやっと腹がへってきた。

体力だけではなかった記憶がある。自分のしてきた経過を、改変する目論見が進行していた。

なにごととも時と共に変化してゆくことを



否定はできない。しかし、・・・とってしまう我がある。変えるなら進歩を！と押しつけてしまう。変化が必ずしも前進とは限らない。そして前進だけが良いとも言えない。

分かっているが、そう思いきれない。だから後輩のすることに批判的な目がのぞいてしまう。そして、結果がたいしたことにならないと、それに落ち込む。

何もかも自分が仕切ろうなんて思うな。ずっと続けられるわけじゃなかろう・・・そう思っているのだが、やはり。

時代を振り返ると、おこなった事だけでなく、おこなえなかった事の記憶もなくなっている。

9/14 FRI みんなバタバタ出張していたりするので、バックスタッフなしで家族面接をした。4回目のこの母子家族は、当初の予想を裏切ってキチンと来続けている。あまりにも違う兄弟。出来のよくない弟に肩入れする母親。それを兄は黙って認めている。そこで今日は兄を主役の面接にした。

夜は久しぶりの編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。氏の小学校時代、図画の先生が画家の安野光雅さんだったという経験を持つ同世代人。

先週欠席していたので、村松友視さん講義のテープを借りた。歩きながら聞いたが、とても面白かった。

家裁の審判で児相送致になったケースだった。裁判所の威光を使って、継続的に面接に来なければならないと思いこませた。

ルーズなところのある母親だから、ぬるいことを伝えたらグズグズになるのは見えていた。

継続的に出会う内に、とても特徴的な選択行動パターンを発見。このことは「不登校の解法」(愚弟賢兄)文春新書に詳しく書いた。

そして私は、自分には置き換えられない行動選択をする人の存在を知った。それは誤りではなく、私との違いだった。だから、私が正しいと思う未来像を、押しつけることは出来ないことだけが分かった。

母親は事件を繰り返す弟に肩入れし、つ

るんでいた。理解しやすい好青年の長男はこの一家では孤独だった。家族ってこういう事があるのだ・・・と驚きを持って見ていた。

夜の編集者講座。今考えても、よくこの時、思い切って参加し続けたなあと思う。多くはない受講者のほとんどが、関連企業の人だった。会社から業務として受けるよう言われて、来ているようだった。京都なんてローカル都市ではフリーランスのライターやエディターで食べていくのは大変だから、受講料の高額な講座に参加など出来なかったのだろう。私はそんな中の門外漢の感じで教室にいた。

9/15 SAT 久しぶりに家にいた。一日かかって「こども旅」の原稿を描いた。雨も降っていたし、敬老の日ということもあって、大津の古い鰻料理屋「かねよ」の出前を頼んで、母と一緒に飯を食った。元気な親父は友人の一周忌に行ってその後、麻雀。長男はクラスの友達のところへ、次男も友達と雨降りだから体育館で遊ぶと言って出かけていて帰宅は遅い。

22年前、こんな風に過ごしていたのか・・・と思い出すと懐かしいような、不思議なような、こんな時代があったのだ。

あの時、今の自分を想像することなど出来なかった。20年余りで、こんなに変化してしまうのか。そりゃ、42歳の人生と65歳の人生では、決定的に違う。誰にも起きることなのに、歳を取って不思議なことだ。

9/16 SUN 昼過ぎまで寝ていて、その後職場に出かけた。先週から一時保護所に来ている子があるので、宿直のローテーションを組んでいるが、平日の夜にい

ろいろ仕事を入れるもので、日曜日しか泊まれなくなる。先週に続いて日曜日の夕方出勤。

この頃から既に、自分の家族のことは、妻に任せっきりだったことにも気づく。三人の子育てと、私の両親との途中同居。本当に良くやってくれていたんだなあと、今になって思う。

そして、これが相当無理をしていたのもあることが判明し、再度別居暮らしの選択に至るのは、まだ少し先のことである。そして父が亡くなったのを機に、再び同居暮らししたのだ。

9/19 職場周辺にも不穏な空気が渦巻いている。ただならぬ緊張がそこかしこにちらついている。半端じゃない台風が接近している。面接もキャンセルして、早々に引き上げた。風が夕方から本格的になってきた。ゴーゴーいう音に、夜中息子達と玄関を出てみたら、思わず大歓声をあげるほどの嵐だった。「半端やないなあー」とキャーキャー騒いでいたら、ばあちゃんに「ケガでもしたらどおすんの！」と親子で叱られてしまった。

あれから22年、祖父母は他界し、長男、次男は結婚、それぞれに一人ずつ子どもも生まれ、共に関東で暮らしている。末娘も東京に出て行って十二年。今では私たち夫婦二人で、かつて七人が住んでいた家に暮らしている。

これが家族というものだ。そしていつか、我々も世代交代してゆく。個人的には不思議な気がするが、客観的には、実に当たり前のことだ。

ほんの二十年前、私は今の暮らしを想像することが出来なかった。だから、今では

使い勝手の悪い、だだっ広い家を建てた。当然、先の十年後も想像することが出来ない。人はそういうものなのだろう。

9/21 昼休み、組合の学習会があった。支給された弁当を食いながら、給与の話を聞いた。こういう受け身の楽しさは、自主独立の人にはないだろうなあ。夕方家族面接を一つしてから、編集者講座。マガジンハウスKKの甘糟章氏。

夜中にまんが新聞の時事物原稿をFAX送信。どう考えても不思議で便利な機械だ。

FAXが便利なものだなあと感じる対象だった時代。オフィスにはあっても、家庭にある人は少なかった。マンガの原稿送信も可能な精度の高いFAXはありがたかった。ごくわずかな間である。

この後、PCが急速に普及してゆくことになり、出来ることの変化が、人々の発想そのものを変えていった。こんな渦中を、一つ一つ記憶して歳を重ねてこられたのは、幸運な団塊ジェネレーションである。

9/23 第九回心理臨床学会が始まった。川畑君が割に地味なテーマで発表をするので、参加者が少ないと辛いなあと言っていたこともあって出席した。ところがなんと、これまでの我々仲間内では最高の参加者数だった。レジュメが足りなくて慌てて追加してもらったりして、よかったよかった。それに比べて午後に出た特別テーマの内一つは、箸にも棒にもかからない無様なものだった。

夜は自主シンポジウムのコメントを依頼されていた。しかし自分がつもりして用意したものが全体と大幅にズレていて、気持ちが悪げってしまった。

児童相談所をはじめ、臨床現場で働く人

たちが活発に学会発表するようになった先鞭はつけたと思っている。今では考えられないかも知れないが、スタート時期の心理臨床学会では、本当に現場からの発表が少なかった。

シンポのコメント内容はおぼろげだが、状況は記憶している。期待されているものを外さず、それ風なことを言うのが苦手だ。私の関心の持ち方が、皆さんの関心事ではないことがあるのは承知だ。しかしそれは、如何ともしがたいことなので、合わせるのは断念している。

人にはそれぞれ、思惑や魂胆があって、それをいけないとは思わない。ただ、他人の思惑に一枚噛まされるのは嫌だ。私は誰かの道具ではない。そういう気持ちがかんたん強くなっている気がする。これも老化現象の一つなのだろうが、それで良いと思ってしまう。

他の人の気持ちも尊重はしようと思うが、ご機嫌取りばかりもしてられないなんて、意地悪かもしれないことも思っている。

9/24 午後に参加した特別テーマ「家族への援助における工夫・個人療法と家族療法のメタストラクチャー」の発表はそれぞれに面白かった。

しかしこのごろの僕は以前のようにその会場で、質問や発言が出来なくなっている。要約して、ポイントを絞って話すのは捨てざるものが多すぎるようで辛いのだ。発表者も同じ思いで答えているのだろうと考えると話せなくなる。

夜の懇親会は例によって、物凄い数の出席者で誰が居るのやら居ないのやら。その後14人ばかりで六本木へくりだし二時半過ぎまで、下戸の僕は一生行かな

いだろう所へも付き合った。

ディベート文化をもてはやすようになって久しい。しかし私は、あれが面白くない。質疑応答が嫌になったのは、「良いご質問ですね。有り難うございます」とどこかで返されて以来だ。



「なんだ、この空々しいテーブルマナーのようなやりとりは！」とってしまった。

形式が主導する文化の中で、内容は確実に浅くなった。そして物知り、データ重視の百科事典人間が論証根拠を持って話すのが、賢い技になった。

結果の出ているものを集めて、整理して何か言うのは編集者だ。その勉強もしたから分かるが、彼等はクリエイターではない。

もう一からの発明なんてない！なんて言いくさに簡単に同意してしまわないのが大切だ。そんなことは分かっている。だからこそ、産みの苦しみがある。チョッチョと組み替えて、何かを言うような人ばかりになることには用心がいる。

9/26 久しぶりに職場に出た。二十日以上、一時保護所にいた少女の行き先を会議で決めた。言葉に表しがたい質の貧しさや、育ててもらえなかった人間的なも

のから、自分自身を守れるのは鈍感さしかないのかもしれないと思ったりさせられた子だった。

午後、府立城南高校(アジア大会女子重量挙げで銀メダルの子の学校だって)校内職員研修会で話をした。

とんぼがえりして彼女の最後の夜の宿直をした。一人で、こんなに長く居たのにほとんど男の職員には話さない子だった。面白いことを言ってやると、太めの工藤静香のような笑顔で弱々しく笑った。

太めの工藤静香は太めのキムタクと出会えただろうか？ 繰り返し、様々な事情を抱えた子達と出会って別れた。

あの時の年齢に22年を加算すると、今の彼等の年齢である。どこでどうしているだろう。おそらく、皆何とかやっているというのが正解だ。人は皆、何とかなるものだ。騒ぎすぎるのは、関係者の臆病な自己保身ゆえだ。

私は来談者に向かって出来ることをする。出来ないことは出来ない。それで仕方ないと思っている。自分の不安を、他者を動員して膨張させるような事はしない。

9/27-28 昨日泊まって、今日はまた一泊の福祉司会議だ。この一週間、家で寝たのが一日。全くなんてこった。この会議もそろそろ転換しかけている。

終了後、児相に戻ってセミナーの案内状の発送業務を福知山・宇治・京都各児相の人達とした。よく動いてくれるみんなの中で、嬉しく見ている幸せ。

この頃も今も、していることにあまり変わりがないことに驚く。人はなかなか変化しないようだ。

まあ、良いと思ったことを繰り返してい

るのだから、それで納得ではあるが。歳を取ったら、生き方が変わるというのは誤解の期待のようだ。今だめなものはずっとだめだということらしい。

9/29-30 泊まり明けの週末。昼頃まで寝ていた。何だかバタバタして準備ができていなかった来週のぼむ展のチェックが篠原社長からあった。「まんが新聞」が12月で廃刊になるとショッキングなニュースもいっしょに。これではいかんと思いき直して、土曜の午後から日曜にかけて、3点仕上げで宅急便で送る段取りをした。

やりたいことは皆、させて貰って生きていた。それは今も変わらないのかと思う。そうすることで届いたものも少なくない。

家族心理臨床の渦中において、マンガ家としての活動をし、講演や、講座を引き受け、時に出向いて受講する。

今と何も変わらない二十二年前である。



(写真は2011年春、イギリス視察に行った時のもので、本文とは関係ありません)

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第十回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

22年前の業務中心の日誌を一ヶ月ずつ、今の私が振り返る企画。10回目ともなると飽きてくる。読者は読まなければいいのだから簡単だが、筆者はそういうわけにはいかない。(勝手にやっておいて、何を言っている！)

「意味のないことまで、だらだらと・・・」とか、「要するに何なのか・・・」と思わないでもない。

そしてこれがまさに、ある意味この連載の本旨だとも思う。仕事の日常とはそういうものだからである。

もし仕事が、事件や祭りで代表されてしまったら、日常は「祭りの前か後」ということになる。結果だけが目的だとしたら、陽の目を見なかった日々の地道さは空しい。レギュラーになれないのに繰り返すトレーニングも空しい。勝利に結びつかなかった努力は徒労ということになる。すぐに結果のでない精進が無駄に思えても仕方がない。

だが本当は、そんな投資と対費用効果のような因果が、仕事の意味であるはずがない。そんな働き方ばかりし続けてしまった結果が私たちの周りに蔓延していて、今、不毛さに苦しんでいるのではないのか？

暮らしか、生きることとか、働くことは、誰かに勝つことや、け落とすことではない。

米を作っている人は自分の田んぼも、隣の田んぼも豊作だったら嬉しいだろう。そんな時に凶作地域を想像して、価格高騰に期待を寄せるのは業者だ。そういう人たちは作物を育てない。経済にしか熱中できない。あらゆることを利益をあげる手段にしか考えない拝金主義者にとって、グローバル経済社会がわがもの顔でいられる世界なのだろう。

私はそんな感覚がまったくしっくり来ない。経済問題を軽んじるつもりはないし、お金は大切だと思っている。でもそれは、いくら集めるかではなく、どう経済活動(消費)するかが重要だ。豊かになるとは、使い道のことであって獲得量(金額)や備蓄量の事ではない。

世代間の格差が喧伝される(真偽に疑問もあるが)。その恵まれた側だと言われる団塊世代人としては、今、何に消費するかが問われている気がしてならない。精神貧困なまま、勝ち逃げの年寄りにならないために、考えなければならないことがある。

(2012/9/15)

1990年10月

10/1 MON 別の歯がまたちょっと欠けて歯科へ行った。公演のシナリオ打ち合わせ。本当に手間取っている。こんな大変なことになるとは思わなかった。

少し具合が悪いと、直ぐに歯医者にゆく事にしている。だから一度で治療完了になることが多い。ずるずる治療に通い続けたら、手遅れみたいなことが嫌いなのだ。

しかしこの行動は、健康に気遣っているというより、面倒な事態を早めに避けている感じが強いので、不健康な一面なのかもしれない。

延々と通院したり、待合室でぼんやり時間を食いつぶされていくのが心底嫌いなのである。こういう性癖は、介護や付き添いを面倒がる傾向に現れている。歳を取ったら公私ともに、そういう現実が近づいてくる。効率的に動けることに酔いしれるばかりではない行動パターンの学習が必要なのは分かっているのだが、なかなか身につかない。

児相研セミナーでのアマチュア芝居公演、出演者達は、楽しげではあったが大変だったようだ。

10/3 WED ABCラジオ最終回。アシスタントやキャスター、その他いろんな人がいっぺんに変わってしまう。フリーで仕事をしている人達が多いが、みんな大変だなあと思う。

夜、ナビオのスカラ座で「ダイ・ハード2」をみる。楽しみにしていた一本。期待を裏切らない。

月一回で結構長く関わっていたラジオ、

この件がどんなことだったのか記憶がない。公務員として雇用の確保された中から、フリーの人達のことを見ていた。もっとも、マンガ家としての仕事ではフリーだったから、連載が始まったり、突然終了したりする事への不満や不安は共感できた。

サラリーマン編集者に、いいように言われて連載打ちきりになったり、原稿料を値下げされたりしているフリーランスの憤懣はわかる。

最近のニュースで警察官が、釣り情報誌に連載をして稿料を貰ったことが問題になり、退職したと聞いた。私は公務員に途中採用（欠員補充のために7月採用）されたとき、既に新聞にマンガの連載をしていた。人事課はそれを承知で採用した。そして、一度も問題にされることなく、25年過ごした。京都府の依頼仕事に漫画を描いて、原稿料まで貰ったことがある。例外だったのだろうか？

「ダイ・ハード2」は良く覚えているというより大好きな映画だ。正当な映画ファンなら、第一作が良いと言うべきなのだが、好みだからしょうがない。特別版DVDも持っていて、今もたまに見返すことがある。

10/4 THU 受理判定処遇会議。

シナリオが何かふくらみが足りないの
で、手直しのアイデアを書いている。難しい、演出家のセンスとこっちのそれとの
違いにも苦勞する。違った感性の人との
共同作業は難しい。

公演「児童相談所の日」（タイトルは違ったと思うが内容はそうだった）のシナリオを書いたのだった。シノプシスといった方が良いようなものだったかもしれない。中味の記憶が曖昧だが、福知山児相にいた小巻さんが演出した。児相研セミナーで主

に同業者に見せるモノだから、積極的に楽屋落ちと共感を狙ったモノだった。

当時はまだ、こんなに豊かに仕事と関わることが児童相談所において可能だった。状況が激変するのに、大した時間は要らないことが今になるとよく分かる。

10/5 FRI 朝一番に、児相研セミナーの案内をもって、本庁の主管課長のところに挨拶に行く。その後、三児相課長・係長会議。議題山積み。夕方、再び今度は呼ばれて府庁・児童家庭課へ。三児相課長で話を聞く。話が長引いて、出張開催している亀岡の勉強会は欠席。そうなる結果的に、「編集者講座」の遅刻出席が可能になる。講師はイラストレーター安西水丸氏。面白く話を聞いた後、有志で飲み会をやるのに初めて付き合う。12時前まで三条小橋「めなみ」でおばんざいを食べながら引き続き水丸氏の話聞く。

任意の団体が実施するセミナーを、京都府も応援してくれることになっていた。職場をあげて協力体制を組み、主催雑務への協力も取り付けてあった。(申込書が届く宛先、必要書類のコピー機使用、封入発送などの作業場提供、問い合わせ電話受信等、筋から言えば、いろいろ言われそうなことを、「一つよろしく」でお願いできていた。そして来賓として挨拶も頼んでいたと思う。そんな協議で、夕刻に再度本庁に出向いたのだったと思う。)

亀岡勉強会は川畑君と地域担当CWが行ってくれた。京都児相では、担当地域の学校教員達との定例よもやま相談会を、夜、地域に出向いて開催していた。乙訓地域も同様で、隔月交代実施していた。熱心だったなあと思える。

編集者講座の講師との飲み会がよくおこ

なわれていた。自分が酒を飲まないことや、公務員だから明日の勤務スケジュールがあって、あまり出席することはなかった。だからこの日は珍しく気が向いて同行したのだった。

この時、安西水丸ファンの人の振る舞いをみて、ファンとはこういう人のことを言うのだと感心した。とても彼のことをよく知っていて、著作などもみんな読んで記憶している。作家にしたら嬉しいだろうと思った。私はせいぜいイラストを知っているくらいだった。氏は村上春樹の本の装丁を、沢山している。

10/6 SAT 高校生の家庭内暴力ケースの家族面接初回。午後、二代前の相談所長・吉田研二さんの退職を労うパーティがあった。午後2時から始まって、最後のカラオケ店を出たのは11時過ぎだった。9時間あまり、ウーロン茶、ジンジャール、ジュースでトイレばかり行っていた。

吉田さんは中間管理職になったばかりの私にとって、とてもありがたい所長だった。そのことに本当に気づいたのは、後任の正反対の所長が着任したときだった。この二人が余りにも違っていただけから、管理職のあり方や、どういう事が問題になるのかも学んだと思う。

ある組織の職員相談室で受けるケースに、「希望したわけでもないのに管理職になって苦しい…」と訴える人が少なくない。しかし、子どもが出来たら親をやらなければならないように、そういうことは人生にあると、なぜ覚悟が決まらないのだろうと思う。

10/7 SUN 夜更かしが続いていたので、昼まで寝ていた。製作から発送まで思

いのほか時間がかかってしまったDAN通信の11号を仕上げた。

この時はまだ月刊ペースでミニコミ誌（D・A・N通信）を制作していた。原稿を書いて、コピーして、折ってシールを貼って、記念切手を貼って発送していた。一番長く続いた時期には300通くらい発送していた。毎半年賀状を出していたようなものだ。

今では、ブログもツイッターもfacebookも、書いたら即、送信である。手間は要らない。変われば変わるものだ。当然のことながら、メリット、デメリットはあるだろう。

10/9 TUE 夜、久しぶりに家族療法訓練の担当日だった。緊張しながら臨んだ分、非常に面白かった。

京都国際社会福祉センターの家族療法訓練はこの時、スタッフ三人で交代担当していたのだった。もう今では記憶もおぼろげだ。

10/10 WED 祝日。例によって昼まで寝ていた。その後、机の周りを少し片付けながら原稿を描いた。夕方、最近の知人のTさんから、会社の方針とじっくり来ないので転職を考えているという電話。「転職先は今の時代いくらもあるが、やりたいことをとるとナカナカだ」という。Tさんに幸運を。

そうか、この時代の感覚はこんなだったのだ。彼は放送局のディレクターで、管理職への人事異動を断っての退職だった。今なら、辞めたところで次の仕事そう簡単には見つからないだろうし…という事になるのだろう。そして私自身がこの8年後に公務員退職の選択をすることになるなど、想像もしていない。

時の中では、あらゆるモノが変化する。何がどう変わるかなどはさっぱり分らないが、同じままであるはずはないという点だけが確かだ。この「変化」に対して、ポジティブもネガティブもという当然のことへの確信のない人が、ずっとこのまま続くような気がするという夢を見たがる。

10/11 THU 受理判定処遇会議。夜は公演のシナリオ確定作業。いろいろあったけれども、とにかくいよいよ稽古に入ることになる。出演の皆さんよろしく。

児相で働く人たちが、日程を決めて集まって、芝居の稽古をしていた。京都府内三児相合同で演劇をする。今思うと、なかなか文化的な話だ。この時期、各職場にダウンして休職中という人はなかったのではないかと思う。そして児相在職年数は、みんな長かった。公務員職では恵まれた良い仕事だと思っていた。就職して以来、退職するまでずっと児相という元気なおばさんもいた。

10/12 FRI 「いい話の新聞」というのを企画している細見さんが来訪。これはその内いろいろな展開になっていきそうな気がする。

面接を一つした後、K子が弁護士と会った結果を話しに来た。帰路、葵橋ファミリー・クリニックにマンガ原稿を届けて、入口で事務局長・園昌和と立ち話。なかなか組織運営は大変という。彼は小学校の同級生で、ボーイスカウト時代から御近所の幼なじみだ。

細見さんの画期的な新聞は創刊された。私もコマ漫画を描かせて貰っていた。経営的には苦難の数年を、必死に持ちこたえ、そしてつぶれた。その後、彼は病魔に倒れ、亡くなった。

ニュースといえば他人の不幸、これが結局「新聞」「TVニュース」の限界なのだろう。良いことが沢山あることを告知するのが、世の中を良くする一つの道筋なのだが、よからぬ事のレポートの方を世間は求めてしまう。細見さんのコンセプトは間違っていないが、事業として成立しなかった。そんな起業家の話を、つい最近もNPOのスタッフとしたばかりだ。

10/13 SAT 第二・四土曜は閉庁で休み。読売国際漫画大賞の応募作品と「こども旅」の原稿を仕上げた。夕方から労演、「出雲の阿国」太地喜和子。何だか面白くない。その後、川崎、広谷のおっさんトリオが北山通でクレープを食べた。どうだ、似合わないだろう。

この時代はまだ、週休二日ではなかった。今ではもう、思い出せないくらいだ。太地喜和子が、下田の海で事故死するのは、この後なのだなあ。

10/14 SUN ずるずると読売国際マンガ大賞応募作品を描いていた。この賞はまだ、佳作に一度入っただけだ。



優秀賞を受賞して、元旦の新聞に作品が

掲載されることになるのは、この八年後の事である。(メダルはその時のもの。誰かに見せたことはないから、本邦初公開だ)

その日まで、この後もただただ応募し続けた。止めてしまっても良いのに、そうしなかったのはなぜなのか？不思議な気がするが、どこかで止めていたら受賞はなかったのだと思う。

もしそうだったら、自分のマンガ家としての意識は、多少違ったものになっていただろう。結果の見えない未来に向かって二十年以上も、毎年応募し続けたことに、我ながら感心する。

そして、こういう日々が、自分を根気強く粘る人間であるとか、諦めなければ陽のさす時は来ると思う人間に育てた。

結果ではなく、プロセスが人間を育てるのだと実感しておくことは、人生において大切なことの一つだ。

10/15 MON 徳島県児相から依頼されて16日午前中、家族療法の研修をすることになった。午後から出て前日泊の段取りになっていた。そうしたら妻が、私もついて行こうかなあと言いだして、そういうことになった。そこで遠回りだけれども、瀬戸大橋をJRで渡ることにした。パノラマ車両900円は十分値打ちがあった。

10/16 TUE 昼過ぎまで講演をした後、市内見物をしていた妻と合流した。鳴門へ行って渦潮を見ようという。せっかくだから潮の勢いのいい時間に合わせて行こうという。小型船で海峡にかかると、思ったよりはるかに大きな渦や波が見えた。その後、高速バスで淡路島・津名港に。そして高速フェリーで神戸についた。

まれに妻が講演に同伴することがあった。そんな時はちょっと足を伸ばして観光もし

た。記憶にあるのはもう一度、宇都宮行きに同行したとき、奥日光まで足を伸ばしたことからいだ。

10/17 WED 午前中、月例家族療法ビデオ・カンファレンスにケースを出す。午後、教護院(現・児童自立支援施設)との話し合い。「教育権保障」問題と「年長児処遇」問題がテーマ。主に非行のあった子供達が措置されている教護院は、現在の日本で唯一学校教育法に基づく義務教育の体制が未整備の所である。夜、編集者講座の予定が講師の発熱で中止になった。そこで見たいと思っていた映画「ゴースト・ニューヨークの幻」に行った。平日の夜なのに若者でいっぱいだった。甘口のセンチメンタルな分かりやすい作品だった。たくさんの女の子達がすすり泣きながら見ていた。こんなことに出くわすと「いいじゃないか、なかなか」なんて思う。

外部からSVを招いて、月例で家族療法のカンファレンスをしていた。そしてだんだん飽きてきたりもしていた。今考えると、贅沢な話だ。こういう状況を作り出せたのは、時代もあるし京都児相の取り組みの成果という部分もある。

京都府の三児相には全て、ワンサイドミラーの設置した家族療法室があった。この設備は要求して設置して貰ったものだが、本庁担当者の理解があって、宇治児相の新築時に三所一斉に設置されたものだった。主管課の係長が、児相業務を理解して、イロイロ尽力してくれていた。

当時の教護院問題は結局、内部の人たちの古い体質を、外から変えるのは困難だった。児童福祉施設全体に対する研修の働きかけにも拒否的なままだった。教護院は、

府県によって様々な状態のまま、児童自立支援施設という名称にかわっていった。

長い付き合いの早樫一男が、一時期、京都府の教護院校長職にあったが、私には結局、何が問題なのかすっきりとは見えないままだった。

10/18 THU 受理判定処遇会議。一時保護の女の子がいるので宿直。

全国をみわたすと、今も少数派で存在するようだが、職員が交代で一時保護中の子どもがいる日は宿直をしていた。負担だったが、メリットもあって、労働条件のことだけで一口にどうこう言えないところがあった。

宿直勤務時の子どもとの交流は、生活施設職員経験のない身には、なかなか貴重だった。食事のこと入浴のこと、それぞれの育った家族を反映した多彩さだった。

調理員さんが作ってくれたたくさんのご馳走を前に、いきなり白いご飯に醤油をかけて食べた子どもを見たのは、随分前のことだ。

そう言えばベストセラー「ホームレス中学生」の著者である芸人が、成功してから番組で、豪華な食事をしている所を放送していたが、辛くて見ていられなかった。

10/19 FRI 愛知県半田児相から(療育事業琵琶湖一周サイクリングなど)の視察に二人みえた。ビデオを見ながらいろいろ話す。夜は編集者講座。中西亮さんの世界の文字の話。非常に面白い教養講座。

全国の児相から視察者も多かった。京都見物を兼ねていた人も多いただろうが、熱心な人も多かった。自分たちの所の仕事を自慢に思っていたので、打診が有ればどんどん受け入れていた。2,3カ所からの視察が重なることもあって、遠方から来た児相職員同士の思わぬ交流になったりもした。

10/20 SAT 「いい話の新聞」の細見さんの紹介で、露路裏文化研究会(ロジケン)なるものの発足準備会に参加。会場が京都・島原の「輪違(わちがii)屋」というのに惹かれたところがある。初めて太夫なるものを見た。おまけに飛び入りでグローバル・アクション「サハラを2020年までに緑に」という運動の京都オフィス開設のため来日しているユーゴスラヴィアのエリザベス王女という人が、女性二人を伴って一同席した。とにかく何だか目まぐるしくたくさんの人と名刺交換をした。このごろ流行りの異業種交流みたいなものだ。

好奇心の塊のように動いていたし、成果を手にしたことも少くない。一方で、世の中の様々なことが、あっという間に過ぎていってしまうものだと実感した。

ユーゴスラヴィアは国自体がもうない。露地研も数年で消滅した。あの時テーマにされていた事が解消したわけではないだろう。問題はなくならないが、問題解決を唱えた方は居なくなる。これが世の常だと学んだことは、その後の自分の行動選択に少なからず影響していると思う。

10/22 MON 宿直勤務のアケで昼から出勤した。K子の事件のことで約束してあった河本弁護士の事務所に行った。時代祭のせいで道路が異常に混んでいて、自転車で行ったのに何度も道を迂回した。

戻って夫婦家族面接をして、その後、宇治児相の佐藤課長と二人で、福知山の鉄川課長の家に行った。

全国児相所長会の実施している非常に書き難い登校拒否児への取組のアンケート記入と、近畿児相長会議の議題の回答をまとめるためだ。時間がないのでやむを

得ずこんなことになった。そのあといろいろ四方山話。

おかしな仕事の仕方だと思うが、楽しんでいた。男三人で助け合いながら、三児相の課長業務をまっとうしていた。ちょっと部活のような気分の所があって、仕事がまったく苦ではなかった。ノルマという印象もなかった。得手、不得手があった三人が、お互いを尊重し合いながら仕事をしていた。

状況に恵まれていたのか、三人の人柄かは判然としませんが、葛藤は少なかった。サンショお互いの情報はスムーズに共有されていた。

10/23 TUE 福知山児相で業務検討会議。療育キャンプ事業の到達点と問題点、教護院の抱えている課題に対して、児相がどう係わっていくかを中心に話した。

以前も書いたが、業務検討会議(ぎょうけん)は三所持ち周り開催で、長い期間続けた取り組みだ。児童福祉司、心理判定員、一時保護所職員、庶務担当職員、そして管理職が各所5人一組で、あらゆる児相業務について見直しをしていた。

働く者が自ら、自分たちの仕事を「科学する」という言い方をしていた。業務の細部、一つ一つを検証していた。

仕事の中味について考えることなく、労働としての不満や、人間関係のことをグズグズ言うのは、労働者としても、人間としても、弱体化している。その先に病休しかないなんて、いかがなものだろう。

10/25 THU 近畿児相職員研修会が京都市の主催で行われた。僕は留守番をしていたが、戻った人達がそろって批判的だったのに驚いた。近いから余計に、要らないところまで見えるのだから、確かにちょっと

京都市児相は悪く変わってきたなあと
思う。

政令指定都市児相と、そこを含む府県の児相が仲の悪いのは当時定番だった。今、更に中核都市に新たに児相が設置されている。そこと都道府県児相の関係はどのようなだろう。

当時、京都府の児相は京都市児相に、伝統的に小言をいうスタンスだった。そしてたしかに具体的なエピソードとして、杜撰に思うことがいっぱいあった。京都市児相は臨床の専門機関だという意識が強かったように思う。私には似合わないことだが、府の中間管理職として、京都市児相の対応のまずさに、心理職出身の所長直々に、苦言を呈したことがあったのを思い出した。

10/26 FRI 向陽保健所主催の「保健・医療・福祉ネットワーク会議」に出た。痴呆性老人・寝たきり老人の問題がほとんどで、出番はなかった。しかしいくつか勉強になる事実があった。

この頃の私や児相の意識はこんなものだった。自分たちは児童福祉が専門だと考えていた。乙訓地域の保健所では、保健、医療、福祉のネットワーク化を考えていたから、こういう会合への呼びかけがあったのだろう。しかしここから何か新しい動きが開始されていった実感はない。

10/27 SAT 昼まで寝ていて、午後、こと葉(小二の娘)のバレエ・レッスンに付き合った。一時間、小さな女子達がアヒルみたいにチョロチョロしているのを見ていた。大きな窓から琵琶湖の見渡せるビルの三階から、イラクは遙か彼方のように思えた。

この時、湾岸戦争まっただ中だったイラクも遙か彼方だったが、8歳の娘の保護者として、レッスン場の隅にいた時間も、遙か彼方になった。

この娘が今や30歳。劇団四季では中堅クラスで、厳しい舞台に奮闘中だ。

10/29 MON 心理テストカンファレンス。三児相の判定員が月一度、集まってデータのブラインド分析で研鑽を深めている。しかしまだまだ負けない(何という根性だろう)。そのあと家族面接が一つ。

読み返してみてもあらためて、仕事を始めてから、勉強するようになった気がする。専門書ばかりではないが、読書もするようになったし、研修にも幅広く出向いた。自分を取り巻く世界の構成にも関心が向いて、乱読は加速した。元気で他動なため、仲間達と次々企画を立てて実現していった。

良い時代だったというのも否定は出来ないだろうが、受験や資格取得のための詰め込まれる学習はしてこなかったのも、学びのキャパシティは十分あった。それは自分の好奇心の持ち方で、計ることが出来ると思っていた。

螻螂の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第11回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

いじめ問題で大津の中学校が全国区の渦中になったとき、「第三者委員会には団さんが選ばれると思ってた」と言った人があった。何を根拠にそんなことを思うのか分からなかった。しかし、あそこはかつて私が在籍したことがある中学校であり、今また大津市民でもある。加えて、あの中学校には繋がりのある知人もいる。子どもが亡くなった直後、そんな内輪の話も耳にしていた。

しかし私は尾木ママの隣に座っていたいと思わないし、ニュース番組の取材対象になって、画面に映りこんでいたいと思わない。自分のコメントを誰かに編集されて、電波に乗せたいと思わない。特にTVというメディアは、目に見える、分かりやすいという呪縛への妥協の産物だと思う。だからずっと距離を置いてきた。ラジオの仕事は長く沢山してきたので、違いはそれなりに了解しているつもりだ。

そう思っているが、一方、自分のしていることを、多くの人たちに知って貰うことは大切だとも思っている。こちらが伝える努力をしなければ、届かない人もこの世界には沢山いる。だからメディアに露出させることが必要な場合はある。この点でラジオは弱い。近年、TV(チャンネル)の選択肢も増えて、みんなが見ているTV番組などもうないが、ラジオはもっと聞いている人が限られる。

だから近年の私の結論は、もう自分のすべき事をしていればよい。他人がそれをどう扱うかは、私に属することではない。そんなことまで意のままにすることなど出来はしないし、そうしたがったりするのも危うい。

だが、東北で展開中の、復興支援家族応援プロジェクト「木陰の物語」漫画展と小冊子の配布は、届かないと駄目である。多くの人にはではなく、必要な人に届いていて欲しいと思う。すると、やはり広報は必要である。だからマスコミから取り上げたいと言われると、受けようと思う。そして、本意の所を曖昧にしないで…と思って向き合う。

あるTV局から、震災復興支援家族応援パネル漫画展について、ローカルの震災復興支援枠で取り上げたいと、大学の広報を通じて打診があった。時をおかずスタッフから電話があり、今すぐ会えないかという。ちょうど仕事場で原稿を書いていたので、先延ばしするより、今の方が時間が取りやすいと応え、20分ほどで女性がやってきた。早速、この八月に京都で、被災地からの避難家族向けに開催したパネル展の話になった。これは昨年からの被災各地で継続開催しているものを、遠く離れた土地で避難暮らしする人たちにも、物語の力でエールをと考えたものだった。

実際、会場に来た被災者が、直接マンガの話ではなく、ひととき、避難暮らしの長期化による家族様々な苦労や事

情を、スタッフに語って帰ったりしていた。

人には皆、それぞれの物語がある。誰が正しいかではなく、一人ひとりが自分の物語を生きている。そんな物語が自然にこぼれ出て、誰かに受け止められるような空間づくりが出来たらというコンセプトの展覧会である。連続開催する東北各地では、そんなことがぼろりぼろりと、各会場にあった。

「カウンセリングだとか、困り事相談とか謳っているわけではない。その場が、巡り合わせで、そんなことの起きる場になれば、何百人がマンガを見に来て下さるよりも、意味は大きいだろうと考えている。誰にも相談などしないで、一人で抱えて生きている人が沢山ある。そんな人たちに、あなたの心の中の物語に呼応するような物語を生きた人が、昔も今も、他の場所にもいます。その方達の物語も聞いてくださいと示すのは意味があると思う！」

そんな熱い思いを、初対面の記者に語っていた。

そして結論である。「素晴らしい！是非、そういうことが起きている場面を映像に撮りたい」。

ちょっと待ってくれ。そういうことが一つでも二つでも起きることが大切なだと今話しただろう。そんな人が次々現れるわけではないことくらい分かるだろう。しかし彼女は、TVだから画がないと！、という点を譲らない。

思わず、言おうかと思ったら向こうから、「決してやらせではないんですよ」という。いやいや、それがやらせだよ！

展覧会を見に来た人が物語に触れ、会場にいるスタッフに前述のようなことを話しかけている。そういう画を撮りたいのだという。あきれてしまった。それなら会場にずっとカメラを置いて、張り付いておくことだ。

TVだから可視化された情報が…と言われても、そんな都合の良いシーンは無理だ。「それがないと、放送は…」と言うのでしばし議論になった。結局、持ち帰って上と相談してということで帰って行った。

数日後、残念ながら今回は…という連絡があった。その時改めて、貰っていた名刺を見た。TV局タイトルと名前の下に、KK…と書いてある。ローカルニュースを下請けで制作しているプロダクションらしい。

すると、デスクに座っている人から、「画はないの？」「TVだよ！」なんて言われている彼女が浮かんだ。TVだし、可視化が時代のトレンドである事もわかっている。

しかしだからこそだが、この世界には大切だが見えないものがある。見えるものはごく一部で、見えないからないわけではないことを、基本的には可視化を推進するとした上で、忘れないでいたい。

わかりやすさ、可視化は、用心が必要だ。「具体的に見せる！」、「態度で示せ！」、「証拠を出せ」というのは、結局脅しである。

若い人が勢い込んで詰まらないことを言うなぁと思ったが、若いからこそ、辛いこともあるんですと言われていたような気もした。でも、「それがTVなんです！」なんて言われても、合唱する気はまったく起きなかった。そんなこと言いながら、「決して、やらせではないんですよ！」なんて重ねている内に、自分のしていることが空しくて仕方なくなるんじゃないかいと尋ねてあげたかった。

こんな時、歳をとったのも悪くはないなぁと思う。若いということは、まだまだこの世界にアピールをしていかなければならない。80のモノならそれを100にも、120にも見せなければと、聞かされてきた気がする。今の私には、80のモノは80に見せるのがベストだ。そこに生まれるものが一番世の中のためになると思う。そういうことが腑に落ちて分かるために、私たちは齢を重ねるのではないかと思う。

(2012/11/25)

1990年11月

11/1 THU 定例受理判定処遇会議。その後続いて職員会議。会議ばかりしてという人があるが、事実伝達や、情報の共有のための会議は、削るべきではない。 unnecessaryなトラブル回避に、定期的なミーティングは不可欠である。それに全体が事実を共有することが、業務の平均的水準を維持する大きな要素になる。次の世代を育てる働きとしても、これは大切なことなのだ。

今、私が会議に出席することは皆無になった。大学院も特別契約教授という別枠で、教授会や大学運営用務は含まれていない。

社会的なポジションを要請されたりもしていないので、会議に出席することもない。もっともこれは、通俗的なレベルでの社会的信頼が低いのかもしれないから、恐縮すべきことかもしれないが、自分ではまったくそう思っていない。

今は何かを引き受けるか受けないかは、自分で決めている。あらゆる事について、そうしようとしている。これはとても清々しい気分だ。

でも最近、嫌ではないが過重だと思うことを一つ引き受けた。そばで見っていた人は、自分で断りなさいと忠告してくれた。

11/2 FRI 地域児童福祉司、心理判定員と3人で、現在進行中でありながら、少々手詰まりなケースの協議をした。昼休み「国連平和協力法」反対のデモに。久しぶりに歩いたが、参加者500人(主催者発表だよ)と思いのほか多い。

午後、講演とワークショップの打ち合わせに出雲児相からH川さんが来所。夕方、家族面接の5回目をした。しょうがない母親だと前評判のあった人が、きちん

きちんと息子二人を連れて通ってきている。

夜は編集者講座。講師がねじめ正一氏。詩人のH氏賞をとった後で、鈴木志郎康氏が講師をしているカルチャー・センターに通った話に、感ずるところがあった。

昼休みデモなんてすっかり懐かしいことになった。この頃そんなことは見かけなくなった。

家族面接もして、編集者講座にも通ってねじめ正一氏に会う。なんだか、今と比べても文化的日常だなぁと思う。

11/3-4 SAT-SUN 文化の日。何もなかった。レンタルビデオを3本借りて見た。「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」久しぶりに、登場人物、時間設定、場所に豊かなコンテンツを持った作品を見た感じがした。映画とテレビ作品の違いは、無限に大きいのかもしれない。「セイ・エニシング」青春映画は好んでたくさん見ている。その流れの一本。「スイッチング チャンネル」キャスリン・ターナー主演のTV'局物。三本ともそこそこ面白かった。しかし手帳を見ると、去年の今日、「最後のアドレス」リノ・ヴァンチュラ主演を見ていたのだが、それは89年で90本目の作品だった。しかるに今年はこれで53本。好きなことなら、時間を工夫して量をこなさなくちゃ。

いつの頃からだろう。年間に観ることの出来る映画本数がガクッと減った。映画館に行く頻度も、DVDを観る頻度も大幅に減ってしまった。

観なくても特別に困るモノではないなどと、ありきたりなことが言いたいのではない。そういう変化が何だか詰まらない。

読書量が減らないのは喜びだが、あの頃

は、鑑賞した映画タイトルをメモし、星取り表を付けていたのが懐かしい。今じゃ、見る尻から忘れてしまう。

11/7 WED 行事の関係で、受理判定処遇会議が一日早くなっている。ケースの運びのことで、担当福祉司と判定員に意地悪なことを言った。

何がなんでも上手くやりたいことがあるのなら、考えられるすべてのことを、骨惜しみせずやっておくことだ。結果が出た途端にする後悔の種など、誰にでも判るのだから。失敗の多い人は、プロセスで甘くなることが多いのだ。苦言のせいもあってか、すこし担当のテンションが高まっている。

20年前にこんなことをスタッフに言っていたのか……。厳しい上司だったのかなあ。記憶の中にはこんなシーン、微塵もない。不思議だが記憶機能の身勝手さを思う。どんなことだったのか、それでどうなったのか、気になるところだが、思い出す術がない。

11/8 THU 八木町で「府児童委員研修会」。民生委員と兼んでいる人の多い仕事である。午前中、杉本一義さんの話を聞く。初めて聞いたが、なかなか面白かった。午後、「地域の児童福祉の現状」をテーマに話す。45分の制限時間が短くて、あれもこれもで、つい舌足らずになる。

こういう場で話をするとフロアーから、「京都府さんは、どうお考えなのか？」なんて憤りを隠した質問が飛び出す。「京都府さんなんて言われても、そんな奴は居ないぞ！」と腹の中で思いつつ、違和感の中で応えることになる。まあ、おおむねは上手くやり過ぎて、それが組織の一員としての僅かながらの評価にも繋がるのだろう。しかし私にはまったく関心がないし、つまらない質問や、方向違いの矛先は、

それを指摘したくなる自分を隠せない。

11/9 FRI 睡眠不足なのか、体調なのか、とにかくえらいので午前中寝ていた。午後から出て、セミナーのためのレジュメ作りをし、講演のメモなども作った。

夜の編集者講座は小説家・橋本治氏。源氏物語の現代語訳のプロセスを聞いた。このごろ金曜日は、よくビデオを借りてくる。今日は「病院へ行こう」、「木村家の人々」をつくった監督の作品。とにかく面白かった。「計画性のない犯罪」、何かにチャットと書いてあったので覚えていた。

身勝手な公務員の気もするが、長い目で見たとき、社会資源たる人材を、どのように組織が養成したかがポイントだ。京都府はこの時期、私やその部下達を、長い目で見て人材として育てて、今の時代に届けたと思う。

11/11 SUN 娘を連れて近くの遊園地に行った。設備の安っぽいジェットコースターをはじめ、いろいろな乗り物は、整備状態や耐用年数への不安が重なって、中々スリルのあるものであった。

琵琶湖大橋たもとの今は廃業した遊園地だ。最後の頃、スクリー状態のアトラクションは、逆さ向きになると、何かの部品がポロッと落ちた。これにはびっくりしたが、下車時に従業員に渡すと、ちらっと見て捨てた。そこで改めてスリル満点になった。(これはギャグ)

時代のスポットライトを浴びていた場所が、陰りを見せ、やがて廃墟になっていく。こういう事は人にも起きる。ブームを作ったりする人にこの傾向が強いように思う。私はこういう物事のあり方が大嫌いだ。

一方、人生の中で、わが子の手を引いて遊園地に行く時期は限られている。その頻度は、決定的に少なかったなあ。

11/12 MON つかこうへい演出の時代から観つづけている風間杜夫・平田満・石丸謙二郎の芝居「夜明けの花火」を観に、大阪に出た。「即位の礼」とどう関係するのか判らないが、街の人出が本当に少なかった。阪急東通商店街のガラガラの店で寿司を食べた。

こんなメンバーの舞台を観ているのは我ながら自慢だが、それも通じなくなった。小劇場や小さなステージは今も青春に繋がっているんだな。

11/13 TUE 家族面接継続中の少年が、教師を殴ったと報告を受ける。「おっと」と、速やかな対応を求める学校を、気を悪くさせないように、しかしこっちはバタバタしないで、続けていくことが肝要。

月末の児相研セミナーの申込が190人を越えた。宿泊はとっくにオーバー。「嬉しい悲鳴」などと馬鹿な慣用句を使っている場合ではない。会場が狭いのだから困るのだ。多く集めるほど良いみたいな発想は、戒めなければならない。規模がそのものの性格を決定づけてしまうという側面を軽視すべきではない。

対教師暴力は小競り合いも入れると、外から見ている身には日常茶飯に思えた。中学生と大人がもみ合っている空間というのが、不思議な場所に思えて仕方がない。今の私は、中学校も、高校も好みではない。歳を取って短気になってきたのだと思う。

11/14 WED 月例家族療法ビデオカンファレンス。夜、日程変更の編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。出版企画のはなし、「文学の森」「哲学の森」文庫サイズの「にほん文学全集」などの四方山話。その後、飲み会。三条小橋の「めな

み」。小グループのこういうポジションがごろ僕には居心地がいい。

私は酒を飲まないで、宴会に行くことはない。ちょっといっぱいという機会もない。だからこういう場は限られているのだが、この講座に出るようになって、時々、こういう機会をチョイスするようになった。誰かが熱く話しているのを、そばで聞いている。今の自分とは遠くにあるものだが、興味深いことがあれこれ浮遊する。こういう経験を徐々にしてゆけばいいのだと思い始めていた。何かになろうとして受講していたのではない。受講生はほぼ一般企業人だった。

11/16 FRI セミナーの参加申込が210名を越えた。我々スタッフや近隣の当日参加者はいれないでこの人数だ。全部で200名位を考えていたから、ちょっと困っている。うまくさばかないと、混雑に苦情が出そうだ。

人集めが目的ではないとは分かっているけど、申し込みが多いのを嬉しがっている。

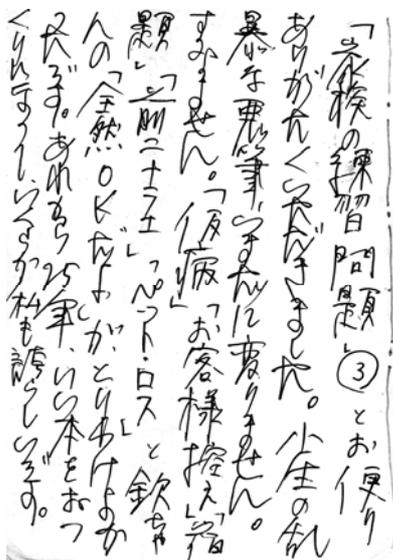
11/17 SAT セミナーの記念品選びに付き合った後、映画「飛ぶ夢をしばらくみない」の封切日に行った。久しぶりだなあ、封切初日なんて。土曜日の午後の映画館、観客12人、新京極はイッパイのひとつみなのに。山田太一の小説は、ものすごく興奮して読んだのだが。映画は、やっぱり駄目かなあ。石田えりのヌードがめざわりで邪魔だった。帰宅してNHK「結婚まで」山田太一脚本をみる。とても面白い。映画よりずっといい。

山田太一さんのドラマは基本的に今もずっと見続けている。お歳をとられたと思うし、往年の輝きには陰りもある。しかしそれでも、事件

ばかり起こして、びっくり箱のような物語しか書けないシナリオライターとは違う。

二十五年以上前、初めて一コママンガ作品集を自費出版したとき、読んで貰いたくてお送りしておいた。そうしたらお礼の感想を下された。とっても嬉しかった。

最近も「家族の練習問題(3)」を出したとき、ふと思い出して、久しぶりにお届けした。そうしたら、このようなお返事を下さった。四半世紀前に戴いたはがきで「癖の強い字だなあ」と思ったことを思い出した。



「家族の練習問題(3)」とお便り
ありがとうございます。小生の乱
暴を御覧いただきありがとうございます。
すみません。「仮面」お客様控えです。
黒い「前二ナエ」ってト・ロスと録音
人の「全然」ロ・バ・ヤ・カ・ト・リ・ア・ケ・ヨ・カ
又「おれ」も「おれ」の「おれ」の「おれ」の「おれ」
くり返し「おれ」の「おれ」の「おれ」の「おれ」

11/18 SUN 昨日の夜中からビデオばかり見ている。「俺達は天使じゃない」ロバート・デ・ニーロ。なかなか面白くてきている。カナダ国境沿い、川を挟んだ小さな町を舞台に、一昔前のヒューマン・コメディ。とてもよくできていていい。「ハイ・バブリバ」ユーゴスラヴィア映画。強引に一言でいってしまえば、思春期版「スタンド・バイ・ミー」。しかしあれより遥かに描き出されているもののふくらみは大きい。是非薦めたい一本だが、人に薦めてあまり面白くなかったと言われると、ひどくガッカリしてしまうので言わないことにする。

夜、小学校時代の恩師・西村先生の紹介という人から電話があって講演を依頼される。引受けるつもり。

映画好きは今も昔もだが、この時より更に遡って昔からそうだ。小学生の頃から好きなものの一つだったように思う。さらに、時期によってはマニアックなコレクターだったこともある。だから年季が入っている。ユーゴ映画なんて記載を見ると、この20年の間にさえ、様々に続き続けた変化の世界に生きてきたのが実感できる。今はもうユーゴスラヴィアという国がない。

映画に関しては今、家族療学会誌に数年、「連想映画館」と題して連載をしている。読める人は限られるだろうが、関心があればどうぞ。

11/20 TUE 朝五時半に家を出て、大阪空港から徳島に行った。先月に続いて、県児相の職員研修。準備をして、ビデオ、スライドなど持っていった。しかし材料が多いためか、自分の話の盛り上がりが何か違う。時間が足りなくなるだろうという予測も外れて、余るくらいだった。これは初めての経験だった。

日本エア・システムの徳島便は、空に上がった途端に着陸準備にはいるような短時間飛行だった。午後には大阪に戻って、喫茶店で「職業別幻話帳」眉村卓のイラストを描いた。それを持って夜の「桂べかこ独演会」のサンケイ会館(産経新聞社のビル。ホールもある)へ行って、文化部の上村さんと一時間ほど話した。

べかちゃんの話は、いつものことながら明るく、気取りのない心地好いものだった。

今読むと、ずいぶん自分勝手な動き方をし

ている。よくこれで勤まったなと思わないでもない。しかし一方、この時点で心にあったものと、今の自分の中にあるものに、基本的な変化はない。

その時々々の立場はわかまえたとは思。しかし、立場立場で何でも言えてしまう、心にもないことも出来てしまうのはごめんだった。

極力、何かのフリをして生きることはしてこなかった。自分の中に公務員退職の意志など微塵もなかったが、行動は今の自分に向かっていたのだなぁと読みながら思った。

そして、この時点で自分はとても良く機能する公務員だと信じていた。

11/21 WED 久しぶりに新幹線でワープロを叩いている。読売広告大賞の授賞式に行く車中だ。今年は欠席するつもりだったのだが、代理出席についての電話問い合わせを受けているうちに、気が変わった。巧くいっていることは変えないことである。今年の式は、福田繁雄さんの講演と、受賞作品一つずつに寸評があって、いいものだった。その後新宿に回って、映画「櫻の園」を見た。

どういうわけか、この読売広告賞では二年連続で入賞していた。会場では、「連続入賞というのは凄いことです」と、何人もの方に言われた。実際、連続受賞している人はほとんどなかった。

漫画家だけの賞ではない。ユーモア広告部門の作品として連続受賞していた。前回書いた読売国際国際マンガ大賞は二十年応募し続けたが、こちらは連続受賞したせいで三年目にはもう応募しなくなった。

今考えてみると、簡単に結果が出ないものの方が、自分のためになると思える。出ない結果を追い求めながら試行錯誤する間に、確実に人は成長する。それは夢が成長

するということでもある。

どういうわけだろう。この後一週間の日誌記録がない。大会準備に大わらわで、記録していなかったのだろうか？

11/30 FRI 第16回児相研セミナーの開
会。順調な滑り出しだが、外は季節はずれの台風。基調公演は出演の役者が驚くほどの大成功。客が作った部分の大きさに改めて感じ入る。講座も好評。

交流会だけが、マネージャーの甘い見込に、一杯食ってとんでもない混雑。後で調整してくれたが、多少問題残し。まっプログラムじゃないところでよかったか。

長々準備してきた大会は、大成功で終えた。懇親会は会場での宴会などにしないで、嵐山のレストランを、貸し切りという約束で予約していた。ありきたりな宴会パターンを考えると、なかなかセンスの良いアイデアだと思っていた。

しかし当日行ってみると、二階部分に一般客を入れていて、懇親会の参加者が多めになった分、対応キャバが不足した。わずかに数人のお客のために、全体の印象が悪くなってしまった。その客達も、ほぼ貸し切り状態の喧噪の中で食事しても、落ち着かなかっただろう。

店の事情もあったのかもしれないが、「約束が違うじゃないか！欲張るから、みんなの評判を落とすことになるんだ！」と腹の中で怒っていた。

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 最終回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

連載三年かけて、二十年以上前の私と職場の一年を振り返ってきた。あらためて思うのは、私だから容認されていた事もあるに違いないことである。しかし、その時私は決して自分のことを特権的であると思っていたわけではなく、だから許されると思っていたわけでもない。

むしろそれは、年次休暇をみんなが持っているのに、つかわないうるのを常識にするような職場の雰囲気不健康だと思っていたことと重なる。病気や身内の不幸で休みを取ることに寛容で、楽しみや喜びのための休暇取得には抑圧的な空気が、公務員生活にはずっとあった。私の行動はそれをシステム論的に変化処方したことになると思っている。私のチームの年休消化率はグーンと上がった。他から異動できた人たちが、一番実感したことだ。

また私が管理職の時、課員であった人の運命が大きく転じたことがいくつかあった。もう子どもは生まれなかった夫婦の所に、12年ぶりに第二子が誕生した。独身主義を主張し、シングル女性論者だった人が、7歳年下の男性と結婚した。起こらない、出来ないと思われていたことが動いている印象があった。

もっともその一方で、川崎二三彦くんがよく言うように、「団さんだから出来ることで、真似なんかしようとしたら、大変な目にあう！」というのも、最近になってそうかもしれないと思う。

しかし、世の中全般が行儀よくなってしまうと、あちこちの権力者は横暴化する事実は覚えておきたい。若い人には分からないことだから、これを伝えるのは、そういう歴史を知っている者の責務だろう。働く人たちが黙っていると、不作法で厚かましい条件を提示してくるのは雇用者側の常だ。なにも二者対立的に「資本家はー！」なんて大声をあげているのではない。公務員組織だろうと、そこそこの大企業だろうと、自分も宮仕えの中間管理職が無自覚に、簡単に手先になるのである。その人達は保身のために、そんなことは分かっておこなう。立場上・・・なんていうのだが、たいてい、自分の立場の話をしているだけだ。女子柔道界の暴力問題で、メダリストで役員の一員でもある山口香さんのとった立場は立派だったと思う。私もけっして得意ではないが、交渉というのは気の重いものである。

さて、次回からはpart 2に突入する。思いついている企画が二つあり、まだ決めかねている。どちらにしても「社会システム変化への介入」というメインテーマに変わりはない。どの角度から行くかだけだ。乞う、ご期待。

(2013/03/15)

1990年12月

12/1-2

SAT 分科会と基礎講座。これは各担当者に任すほかない。バラツキはあったに違いないが、おおむね好評。

SUN ディープ・インタビュー、これがこんなに当たるとは思いがけなかった。司会をしていて、あまりの展開に何度か感情の流れを自分で遮った。会場は一つになって、誰も空気を乱さず、逃げることも、照れることも、怯むこともなく、この場に居合わせる幸運をつかんでいた。こんなことがやれるのだなあと、つくづくみんなの力の大きさを思った。いいスタッフに恵まれることが、最大の幸せである。

ディープインタビューが好評であったことも、同じような企画をこの後も引き継いで誰かがやった記憶もあるが、詳細は覚えていない。

こんなに感激しているのに、このざまだから歳をとるのは残念だ。せいぜいツイッターにでも記録することにしよう。

インタビューさせて貰ったのは正津房子さんだったと思うのだが、それもおぼろげ。

正津さんとはいつの頃からか、親しく交流するようになった。次男を連れて出かけた我が家の親子旅第二弾でニューヨークに行ったとき、正津さんもNY在住だった娘の所に来ていて、待ち合わせをしてSOHOをぶらぶらしてCafeでダラダラだべった。

観光なんかちっともしないで、娘のアパートで暮らしている変なおばさんだった。二人の娘とその夫や彼氏とも、この後も何度か会うことになった。

私は自分からはあまりこういう事はしない人間だと思っていたので不思議だった。

この時のことをマンガ「親子旅・NY編」として雑誌に連載したこともある。

12/3 MON 興奮覚めやらぬ朝。北海道岩見沢児相からの参加者が、家族療法室の設備を視察に来る。丁度はいっていた面接を見ていった。

沢木耕太郎著「チェンスモーキング」を読み始める。氏のものを読むと文章が書きたくなる。それから、灰谷健次郎著「砂場の少年」も読み始めた。

日本中の児相から見学者が訪れていた。年度末に向けて、京都にあるというのは、こういう事だった。京都見物を兼ねての出張に、うんざりするほど付き合った。そんなことが出来ていたのは、まだ良い時代だったのか。

灰谷本は全く記憶にない。沢木本は装丁まで思い浮かぶ。この1月にNHKスペシャルで「写真家ロバート・キャパ」の一枚の写真に関するドキュメントを放送した。長年沢木さんがテーマにして取材していたものだった。月刊文藝春秋新年号に掲載されていたもので、単行本も2月に出る予定。その映像である。

12/4 TUE 職員会議の後、精更相のN川さんと話す。午後の福祉部会交渉で児相の人員問題。当局も分会も、問題を正確に把握することを放棄している。その場その場で、つじつま合わせのような言論をつかっていると、自分自身が言葉を信じなくなってしまうことに気付いていないのだろうか。

細かい事情までは覚えていないが、世間に溢れる現実に合わせて、こういう言葉の使い方は今も健在で、原発事故問題への関係者、研究者の言いぐさがこれだ。

こういう事の結果は必ず出る。京都府の児相が今おかれている事態は、この時に始まっていると私は思う。それまで京都府は、働く者も組合も、仕事をとても丁寧に扱おうとしてき

たと思っていた。

今振り返ると、このあたりで私が、当局も、組合も、信じられない思いを抱えたのかなと思う。自分の思い通りにならない！とほざいてただけかも知れないが、私利私欲はなかった。私にとって、児童相談所で良い仕事をするのが何のものにも代え難く大切なことだと思っていたが、周りのみんながそうだとは限らないと思いき知らされる出来事が浮かんで消えていった。

12/5 丹後・久美浜町教育研究会に呼ばれて、話しに行った。特急・丹後エクスプローラーで約三時間。新幹線なら東京に着いている。

こういう仕事をかなり積極的に受けていた。当時だって、頼まれ講師に関しては、イロイロうるさく言う人も状況も存在した。私が無視していた理由は、そこに理はないと思っていたからだ。

困われた雇用関係の中で生きているのではなく、この時代の一員としてあると思っていたので、頼まれたのが良い仕事なら、公務員である私の存在と矛盾などするはずがないと確信していた。

12/6 夜、KISWEC(京都国際社会福祉センター)の家族療法研修の1991年プログラムの打ち合わせをする。関わりはじめてから6年が過ぎた。

ここで既に六年目という事は、間もなく三十年になるということだ。継続は力なりと思っているし、そうしてきたが、それでも三十年は凄と思う。

やりたくても継続できない事情は、やまのようにある。継続するものは不変化ではない。日々、変化し続けているものだけが残って継続可能になる。

12/7-8 児童福祉施設中堅職員研修③。アドラー心理学について、毎年来てもらっている堺教育研究所の萩さんに話してもらった。二日目は京都児相の川畑くんが、目先の変った息抜きプログラムをやってくれた。

土曜の夜は「露路裏人類文化研究会(ロジケン)」の二回目。フィリピンンの国際農村再興研究所(IIRR)の Dr. フラビエルさんがゲスト。マグサイサイ賞を受けた精力的な活動家。

この会は今まであまり触れることのなかった世界と、触れ方の違いも含めて、見せてくれる。ここではまだ動けない感じた。

自ら、あるいは誘われて、興味の持てることには積極的に動き回っていた。根底で、自分が活動することが、公務員として有益であるに違いないと考えていた。

下世話な公務員批判に「休まず、遅れず、仕事せず」というのがあった。だから「休んで、遅れて、仕事する！」をやってやろうじゃないか！というのが何処かにあった。

ロジケンに興味深く、でも、こういうものが作り出す、人と人との関係の難しさも感じた取り組みだった。何処か自分の居場所ではない感覚がありながら、結構長く例会参加していた。

12/10-12 月例の相談判定課会議を済ませて、大阪空港へ。明日・明後日島根県出雲児相の依頼で講演とワークショップを出雲市です。飛んでいるのは一時間くらい。出雲児相の細川福祉司が迎えてくれて、出雲大社に案内してくれた。

夜は歓迎の宴。酒を飲まない僕としては、なくていいのだがあまりゴチャゴチャ言わないことにしている。11日は出雲市の教育・福祉関連の人達が多数集まって

の出雲児相 30 周年記念講演会。12 日は
島根県児相職員中心のワンデイWS。

その後、紆余曲折ありながら、また今、まっ
たく別の窓口経由で年に三回松江に通ってい
る。

継続は力なりと思うが、その中にはやむを
得ずの中断や、再開という巡り合わせもある。
どんなことが未来に、どのように繋がるのかは、
誰にも予言できない。

そうそう、この時の宴席は、県の幹部と児相
長と高級料亭での接待だった。酒を飲まない
私には、何の関心もない銘酒が登場して、酒
飲み達は盛り上がり、「そうですか、先生は
お飲みにならない、残念ですな」と言いつつ、
盛り上がり過ぎていた。今じゃもう、そんな宴会も
すっかりなくなった。

12/13 受理判定処遇会議。夜は忘年
会。三条小川通の GRILL「NORMANDI
E」。商店街のレストラン。メニューは厨房
の上にチョークで書き出してあって、雰囲気
はパリの下町レストランそのもの。安く
て旨いコース料理。幹事さんヒットです
ね。

個人事業主として一人で動くことが多くなっ
て10数年、一番減ったのは宴会だろう。元々
多かったわけではないが、それでも歓迎会、
送別会、忘年会、暑気払いなどといって、職場
や有志の会食はあった。酒を飲まない私には
面倒な付き合いではあったが、そういうこと
でもない、ほとんど出会わない人、出向かない
場所というのものもあることに気づく。



12/15 午後頼まれていた高槻市北大冠小
学校 PTA の講演。中学生時代に駆け回っ
ていた地域で、親になっているそのころの同
級生達を相手に話をするのは不思議な気
持ちだ。

長年、京阪津(神ではなく津、大津の津)エ
リアという地域社会に暮らしていると、時にこう
いう巡り合わせに会う。交通網としてはJR、阪
急、京阪が中心。他に近鉄も走っている。

車を運転しないまま歳をとった私には、世間
地図が鉄道網と重なって出来ている。道路網
で書き換えの起きた人たちや、最初から道路
マップで距離感が出る人とは違った世界を生
きている。大冠なんて駅から不便なところ…
とっていたが、車ならすぐだ。

12/16 サンタクロースはおもちゃ屋さん
に、それがどんなものかも知らないまま「あ
むあむ卵」というものを買に行きましたと
さ。

これを読むまで、この時点で娘が8歳だった
ことを失念していた。そうか、ついこの間の職
場の出来事であるような気がしていたが、娘
は今、30歳になっている。大昔のことだと言
われても、否定できない時間が過ぎている。

12/17 園部で教護院の先生達と児童福
祉司との懇談会。進路を控えた子供達の
ことを中心に話し合う。夕方京都に戻って
「基調公演」の打ち上げ。評判がよかった
ので、和気あいあい。

業務のコンテンツばかりではなく、業務を執
行する土壌の耕しや懇親を大切なこととして、
日常に含めている。

対策協議会や地域連絡会というのではなく、
懇談や懇親をせっせとおこなっている。古臭い、
無駄な…と私たち世代以降が思うようになっ

たことだ。しかし、仕事がこういった土壌のうえに構築されていた。

12/18 教護院の寮母さんの研修で、福井副校長ほか7名が来所。二時間程、治療・指導について話す。兎相で19年目になるが、こういう形でお目にかかるのは初めて。

24時間体制の生活寮に関わっている人には、勉強に出かける時間がなかなかない。まして、揃って何処かになんて、寮の留守番体制のことを考えると無理だった。

それを一工夫して、揃って来談されたのだった。昔の同僚、副校長がアレンジしたのだと思うが、そういう小さな変化を作り出すのもなかなかだ。

12/19 家族療法のビデオ・カンファレンスの日。SVIに事前情報なしで、面接ビデオを見てもらう。いろいろ情報に絡みつかれた担当者や我々の視点が鮮明になる。

外部から家族療法のスーパーヴァイザーを招聘して、定期的カンファレンスをしていく。そしてこういう試みもだんだん負担になってくるのだった。不足を言うのは簡単だが、条件整備されると、その活用の質を維持向上してゆく辛さがのしかかる。付いた予算を、適正かつ有効に執行するのは難しい

不足に文句を言って評論しているのが一番楽なんだということを実感した。継続するのは本当に困難。質を維持しながらというのはもっと困難。

12/20 受理判定処遇会議の後、少年鑑別所に面会に行く。今年二度目の収鑑というのに、気楽そうなので困る。会話が途切れると、気をつかって話題をふってきたりする。笑顔で「困った奴だなあ」と言いたい少年。

12/21 家裁の調査官と弁護士が来訪。月末に審判のある昨日面会の少年について話す。夜は久しぶりに編集者講座。あまり面白くなかった。

これは誰のことだ？と思い出そうとするが、多分彼のことだったと思う少年はいるが、記憶がおぼろげだ。記憶というのは不思議なメカニズムだと思う。だから、いろいろ解釈したり出来るのだろう。

12/22-24 暮れの押し詰まった時期に三連休。年賀状作りをこの時にできるなどか、溜まった用件が一挙に片付くなどか、思っただけの三日間だった。

定番である。時間があると、仕事ははかどらない。あわただしい方が片付いていく。でも、そのだらだら出来る感じが贅沢なのだ。

年賀状はずっと欠かしたことがなかった。それが2012年年末、つまり2013年の年賀状を飛ばしてしまった。年末、あれこれ片付けるべき用件が多すぎて、その気になれなかったのだ。

そのかわりに、1月から2月にかけて開催した立命館大学・朱雀キャンパスでの家族漫画展の案内を近畿圏中心に250通送った。例年の半分、関西以外の方には失礼したままだ。

12/26 WED 宇治兎相で業務検討会議。面接を続けている少年が、今年二度目の家裁審判。ほぼ少年院だとの予測の中で、保護観察になり、引き続いて私が家族面接をすることになった。ほっとする。

どんな家族面接になったのか、記憶にない。覚えていてもおかしくないのだが、このケースだという確信が持てない。忘却はこのように曖昧化して訪れるのか。

12/27 THU 今年最終の受理判定処遇会議。夕方、娘の正月用の服を選ぶのに付き合わされる。デパートを慌ただしく動く疲れるのは、古典的だか本当だ。

めったにないことだったからだろう、よく覚えている。貧しかった時期に、デパートの子ども服売り場で、ピンクの上下を買ったからだ。妻が大事に着せていたが、子どもは直ぐ大きくなってしまった。

後にも先にもこういう経験はないと書きかけて、そうではないことを思い出した。これに味をしめた妻が、こういう行動に私をかり出すようになった。その結果、時々こんな付き合いをすることになったきっかけがこの日だ。

12/28 FRI 御用納。午後から以前出していたミニコミ「四人囃子」のメンバーが集まって、昨年からはじめたビデオ版年刊「四人囃子第2号」収録。去年のを見返してみると、結構面白い。みんな一歳ずつ、自分の流儀で年をとっている。終了後、8:00PMに予約しておいて再度「NORMANDIE」。



ミニコミ「四人囃子」はいい歳をした男ども(鉄川、高橋、川崎、団)が、舞鶴児相と、福知山児相に勤務中に、はじめは月刊で、次第に間延びしながらNo. **まで発行した同人雑

誌だ。青焼きコピーで出していた記憶があるから、この二十年ほどでコピー文化が大きく様変わりした事が分かる。

青焼きから、ゼロックス、そしてPC普及と共にプリンターに。この変化は20年で一気にだったことになる。「四人囃子」は青焼きからゼロックスへの時期のことだ。

私の京都市内への転勤で日常の関わりも遠くなり、それぞれの関心も小さくなっていった。この連載原稿の一つ、川崎二三彦「落ちこぼれ家庭」がめっぽう面白かった。毎回奥さんは激怒していたようだが、本当に彼は面目ないことの多い日常を過ごしていた。

これが本にならないかなんて思っていたが、残念ながらこれは埋もれたままだ。しかし彼の文章は、その後沢山の出版物で読めることになる。

私もあれこれ書く方だが、質、量とも彼にはかなわない。調べたり、確認したりして書くのが好きな人だから、感覚で書き飛ばす私とはタイプが違う。彼を見ていると自分がマンガ家であり、パーフォーマーだなあと、改めて思う。

12/29SAT 例年のことだが、掃除をしようとか、かたづけものをやっしまおうとか思うだけで、結局のところ本当のOFFになってしまう。夜ふかしをして、ビデオをハシゴしているうちに大晦日になる。

一九九〇年の年の暮れはこんな風だったのだろう。記憶にあるわけではなく、毎年、年の瀬はこんな風で、正月もバタバタしている間に御用始めがやってくる。

まだ家族七人が揃って、新年のお祝いをしていた頃だ。あれから二十三年、今では夫婦二人きりになった正月を、ことさら感動もなく、出来合いのお節で迎えている。

以上、1990年(平成二年)終了

さあ、第二部！

蠅螂の斧

(とうろう の 木の)

社会システム変化への介入 part 2

KISWEC家族療法訓練 第一回

団 士郎 仕事場D・A・N/立命館大学大学院

千葉晃央(記録者)

1985年の年明け早々、「京都で家族療法訓練講座開講」の案内文が、近畿エリアを中心に流れた。1983年中京大学で開催された日本心理臨床学会で、亀口憲治氏の「児相に於ける家族療法実践」の報告に触れ、関心はあったが、一方で、流行モノのうさんくささも感じていた私には思案のしどころだった。当時、私は児相の心理職だったが、家族療法に関する偵察は、スタッフの誰かを派遣して対応していた。

しかし地元で開講されることでもあり、事前に講師(G. D. シメオン先生)との面接まであるプログラムに、いよいよ覚悟を決めて参加することにした。約30年前に年学費22万円という負担を覚悟して取り組みはじめたのが「家族療法」と関わる始まりだった。(このあたりのことは、「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版2002年刊に詳しく書いたので、興味のある方はご覧下さい。)

研修の行われる京都国際社会福祉センター(KISWEC)とは、結果的に30年にも届こうとする関わりを持つことになった。初めは受講生、そして伝達講習のような形から始めた家族療法訓練通年講座も約25年。四半世紀ともなるといろいろなことがあった。初期は三人で、その後、早樫との二人三脚だったが、この間には、私一人で担当していた年もある。早樫が勤務の関係でレギュラー担当できなくなった時期である。その年の記録を「蠅螂の斧—社会システム変化への介入— 第二部」として連載しようと思う。

年間プログラムの大筋は基本的に変更しなかったが、進行上細々した雑用がないわけではなく、千葉晃央(KISWEC所属)がアシスタントとして付いてくれることになった(彼もかつては受講生として一年過ごしたことがある)。彼は毎回、同席してプログラムの準備などサポートしてくれた。

しかし特別な任務が頻繁にあるわけではないので、講座の内容をその場でPC入力していた。今回の連載はそのテキストが元になったものである。千葉が入力した記録データを、LIVE感はそのままに、読み通せるように私が編集した。

第一回目の作業を実施しての印象は、一から書いた方が簡単だということだった。小グループでのしゃべりは、周辺関連事項等、余計な話も多くなる。加えて私は、そんなモザイク状の喋りが好きな人間である。

しかし、進行する講座を LIVE 記録し、それを振り返ることなどなかなかない。こういう方法だからこそ届くモノもあるかもしれないと思った。(それでも連想ゲームに近いような雑談はいくつか省いた)

あまり直接的技法を伝授していることにはならないが、幅広い人々に家族療法に関心を持って貰う現任訓練のあり方として、やや冗長になっても、そのまま記録しておこうと思った。

元のテキスト量が多いので、加筆は最小限にとどめたいと思っはいるが、すすめてみないと分からない。読者に楽しんでもらえるといいが。

*

前期・後期に分かれた訓練の前期は、「健康家族面接」を受講生全員が一度ずつ経験する事になっている。この年の受講生は8人であった。それぞれが手配してきた『症状、訴えを持たないボランティア家族』に、他の受講生が一回きりの家族面接を既に体験していた。担当以外の受講生とトレーナーはマジックミラーの後で観察する。

つまり受講生は前期に合同家族面接の方法の学習と、家族(主訴症状など、持たない人たち)との面接体験、そして七家族の面接ライブ観察を経験している。(これは一般的な日本の家族の持つ多様性を見ることになる)

後期は、前期の体験を念頭に、家族療法、家族の構造的理解、実際の臨床場面に於ける家族への関わりについて、事例検討も含めて学習を深める。これから述べるのは、その後期、いよいよ家族を構造的に理解し、そこに援助的関わりを展開してゆくことを考えるプログラムである。

受講生発言のひとつひとつを、現時点で了解を取るのは困難なので、講師、記録者以外の参加者名、開催年月日等の識別情報を伏せて記述する。

後期 初回

(前期から通算12回目)

後期開講

開講定刻18時45分少し前、部屋に入りました。すでにほとんどの受講生が到着していました。講師がパソコンをプロジェクターにつなぎ、パワーポイントの最初の画面が映し出され、後期が始まりました。

T. :こんばんは。お久しぶりです。今日から後期です。このクラスは、前期、皆勤賞でしたね。みんな体が丈夫なのか、強迫的なのか…。

受講生は現任者ばかりなので、仕事の都合や、家族事情など、やむを得ない欠席はあるものなのですが、全員

が皆勤というのは、ここでの長い訓練の歴史で初めてのことです。

休まずに続けるのは、なにか物事を成し遂げようとする姿勢として、とても適切です。暇ができた時にちょっとやってみるとか、面白そうなので囁ってみる等というものが学びになるはずがありません。

休まずやったからといって、必ず何かになる保障があるわけではありませんが、適当にやっても身につかないのは当たり前ですから、真面目に続ける方が可能性は広がります。こうして、皆さんが休まずに来てると、こちらも改めて、心をこめてやらなければならないな

と感じます。

いよいよ後期ですけども、従来、早樫さんと二人トレーナー体制で実施していた訓練を、今年は一人でやっていますから、今までと少しは違うのですが、おおむね例年通りだと思ってください。

あとの休憩時間に、今期の皆さんの時間割り当てを決めていただきます。後期各回の内容は、その日割り当ての人を中心に深めていく形になります。

で、初日の今日はジェノグラムをベースの事例検討です。

ここにいるアシスタントの千葉君は、立命館大学大学院で月に一回、『かじけん(家族事例検討会)』という勉強会をしていて、そこでも続けているやり方です。

毎月第三木曜日の18:30から(8月のみ休み)立命館大学・衣笠キャンパス・創生館411号室で開催しているケースカンファレンスは、現在も継続中です。

ルールは多くありません。正しかろうと間違っていようと、気にせず、その家族についてひらめいたことを言語化する。これが一番のルールです。

自分の職場でも、そういう役割の果たし方をしないと、他の人から意見はもらえません。職場にはパブリックな事例検討もあるでしょうが、参加者が多かったり、立場上の発言もあつたりして、なかなか細かいところまで話がなかなかつたりします。

規模が大きくなるほど、担当者の説明は周到でなければならぬし、一方、自分の欲しいものはなかなか貰いにくくなったりします。(公式見解として間違っていないことと、下世話だけれども役に立つことは、しばしば異なります)。だからというので、一人で抱え込んで独断で進めてしまうのも不安ですし、リスクも高くなります。

そんな時に、同じ職場やセクションの人たちに、『少し時間とって下さいますか?』と短時間、複数少人数でのケースカンファレンスを打診します。『ピアグループスーパービジョン』の形です。

提出者が延々とケース説明をして、聞いた同僚が『大変ですねー』とねぎらったり、SVが解釈コメントをして終わってしまうような形は採りません。

このピアグループスーパービジョンは提出した側が、必ず何か手に入るやり方をしないと意味がありません。自分の頭だけで考えていた見立や処遇のプランニングを、他者の頭も使ってやれるかどうかが大事になって

きます。

この方法は、自分自身の家族のことで思案中のことがあつたりした場合にも使えます。

『ちょっと考えてくれませんか?』と打診されて、わずかな情報だけを知らされた側は、いろいろ頭を使います。細かい情報を沢山伝えて、相手と自分を均等化して、何かをしようというのではありません。

『そのケースの情報は少ないが、家族一般についてはよく知っている人』というのは、提出者(担当者)とは違った機能の仕方が可能な人である、こういう風に考えます。

組織・チームで仕事をしていく時、自分と同じような人がたくさんいても、あまり有効には機能できません。自分とは異なる力を持ってもらった方が、チームとして機能します。似た人を求めるのではなく、違いを資源として生かすのです。

またこの事例検討の参加者には、それぞれの職場で、ケースの処遇展開のマネジメントも出来るようになっていただきたいとも思っています。

それも経験をして貰うのが一番だと思うので、今から、誰かにファンリテーターになってもらいます。進め方としては、出来るだけいろいろな意見が出てくるようにしてください。正しい答や結論があるものではありませんので、いろいろ声がもらえるように進めてください。

事例検討

今日は初回ですので、講師からケースを提供します。

まず家族の情報を自分の手でジェノグラムに落とし、この家族にどういう心配事があつたり、どんな事情があつたりするだろうかを考えてみて下さい。今後も何度も言いますが、言い当てたり、見破つたりするのが目的ではありません。

基本的に我々は自分自身の家族以外を、そんなに知らずに、『何も心配のない家族状態から、多問題の渦中という状態』までの幅のどこかを生きています。

パワーポイントで、以下の内容が示されました。みんなの視線がホワイトボードに移りました。

PP1

父	45歳	公務員
母	41歳	主婦
長女	19歳	短大生
次女	16歳	専門学校生

「では、この家族について各自、3分ほど考えてみてください」と、T. はキッチンタイマーのボタンを押しました。

私(千葉)は先ず、父26歳 母 22歳 長女0歳。父29歳 母25歳 長女3歳 次女0歳と、出産時の家族の年齢を整理しました。ここからおおよその最終学歴の見当がつかます。多分、母は高卒、父は大卒でしょう。

男一人の家族で、娘達が思春期。父親が気持ち悪がられて避けられるなんて話はよく耳にします。

早い時期から子育て専従の母親と娘達が強く結びついて、夫婦が疎遠化するなんて問題も聞きます。そんな状況では、父親に女性関係なんかも考えられます。妹が16歳で専門学校生は珍しいので、義務教育の部分で挫折した経過があるのではないかな…こんなことを想像していました。

ピピピッ、ピピピッ 時間です。

まずこういう作業、初めての人もいるでしょうから、簡単に解説しておきます。

子どもの年齢をみて、これは家族のステージとしてどういう頃だろう。家族員それぞれが、この時期にどんな時間の共有の仕方をしているだろうと想像してみてください。

『言い当てる』のは目的にしています。当たったところで、それが提出者に役立つことはありません。

どういう力動が家族の中で起こりやすい時期か。自分自身の体験を振り返ってみるなど、己を資源としてフルに使ってみてください。

ではミニディスカッション、8分です。まず、みんなが思うことを出し合って、それから、どんなことがあるだろうかと、話し合ってみてください。

3人1組でいきましょうか。もうみんなお互いに知っている同士ですから、誰でもいいですよ。

各組、お互いの声が気にならないように、部屋の中で

散らばって始めましょう。

8人+千葉で

PP2

3人組で考える。 3人で想像したことを話し合う

各組一斉に話し出しました。

8分経過 ピピピッ、ピピピッ 時間です。

「はい、時間です。ではここに(ホワイトボードを指して)今から、ジェノグラムを書いて、始めていきましょう。指名されたグループがファシリテーター(進行役)になって、ホワイトボードに書き込みながら、話が進むように全体を進行してってください。」

指名されたのは、Aさん、Bさん、Cさんの組でした。

「まずジェノグラムを書きましょうか。」

「公務員といっても、いろいろあると思いますが、何やろう?という話が出ていましたか?」

「本当にいろいろあるなど。父の仕事によって、生活が変わってくるのではという話が出ました。」

そのあと、教室がしばらく静かになりました。

T. :「黙ってたらかんで。」と促しました。

「上の世代との同居はないのか、なかったのかな」

「このお父さんが仕事に就いた頃は、バブルの時代と思うんです。その時代、公務員はあまり人気がなかったのではないかと思います。」

T. :「今の視点なんか大事やね。まずジェノグラム見たら、出ている年齢が現在のものか、過去のことを確かめないとイケませんね。この場合、実際はわからないね。」

過去を振り返る時、その当時の配偶者選択の多数派行動を考えたり、その時代背景を想像するという作業をします。すると、大変だったろうとか、今と違って、意外と楽やったやろうとか想像できるものもあります。続けましょう。」

再び、ファシリテーターの出番です。

「娘二人で気になったのが16歳の妹です。高卒後ではない専門学校生はあんまりいないかなと。そのあたり、おきかせいただけないでしょうか？」

T.「硬いな！」

教室は笑いで包まれました。Aさんはテレながら、「どうでしたか？」と言いました。

「16歳で専門学校はありえないと思うですよ。行きたかったより、そこにしか行けなかったのではないかなと。知的な遅れとかあって、専門学校というニュアンスかなと、

「なので、選んでではないだろうと。行かざるを得ない事情があるのではと。」

T.「昔、N県に生徒の半分以上が療育手帳を持っている芸術系の学校があったなあ。なにやってたのかなあ」

ここで、自分では選んでいないだろうと話が落ちつきそうになった頃、違う意見が出ました。

「逆に、選んだのではないかな。行きたいと思わないと専門学校には行かないのではないか。もし自分で行きたいと選んでいたのなら、この家族メンバーの中では異なったカラーの人かなと。」これで話は混沌としてきました。「結局、行かされているような感じじゃないかなあ。この時期の進路は、まるまる自分の意思で決めるっていうよりは、親の勧めがある時期じゃないかな。親の決定で行くことになっているんじゃないのかなあ」

これで行かざるを得ない派、希望で行きたい派、行かされている派、3派が集まりました。

ここで、遅れていたDさんが到着しました。これで前期と後期の1回目まで全員出席です。

トレーナーはDさんに状況説明をしました。

T.「今ね、こういう家族について考えることになっています。進行役はこのグループになっています。」

Eさんがさっきまでの話の続きで、「その理由は、私のところも、行かされてるというイメージです。」

書記のBさんが「誰に行かされてそうとかありますか？」とEさんを中心にしながらも、全体を見渡し、ききました。

「本人の意向よりは、親の意向のように思います。父はあえて、公務員を選んでいるのではないかなと、そういうところから、世間体とかを気にしていそうな気がします。」

と、父の職業選択に話が及びました。

「この年齢で、娘が二人とも言うこときくかな？とふと思いました。親の意向を考えて決めたかなあ？」

活発な姉妹なら、父を相手にしていないというのも、よくあるように思います。

「行かされているっていうか、行ける高校あるなら、世間体も考えたりするなら、高校に行かせないかなあ。」

「ものすごい(評判の悪い)高校いくより、専門学校なんじゃないかな。だから、自分でここ行くわと言った方が自然かなと。」

これもなんだか、少しありそうな気がします。

「親と話して、お互いの、ここならいくという妥協点なんちゃうかな。」

このあたりになってくると意見がぼんぼんと出てきていました。

「どんな専門学校かなという話が出ていて、まず美容師ぐらいしかないのではと。コンピューター関係もあり得るかな。」

T. はこれをきいてうなずいていました。

16歳からできる内容で、専門学校となると限られてくるかもしれません。ファシリテーターも慣れてきましたし、みんなが発言するので、次のフリです。

「そちらは、専門学校の件どうですか？」

「そんな感じかなと。16歳が専門学校に行く、と言ったら、父はどうかなと想像してみている」

「どう言うと思います？」

「せめて高校ぐらいは行っとけよというかな。親としたらそうですね」

T.「中卒では仕事がないからね。それが現実やし、求人広告見ても、まあ高卒やね。」

「うちのグループでは専門学校は彼女が選んだのかなと。父が娘のことに関心がなくて、あまり、父が近づかないからできたのかなと。親が近くにいたら、高校ぐらい行けと絶対言っている。」

無関心説ですね。誰が選んだにせよ、子どもの進学への関心度の強弱はありますよね。

「お母さんは専業主婦で、お金はお父さんなので、やっぱりかかわっているのではないか。」

お金を握るパワーのところですね。働いているのは父だけど管理は母という家も多いですね。財布を握っているのは誰でしょう？

「次女のことがなければ、一昔前の典型的な保守的な家

族の構成ですよ。」

「母は、学校卒業後働いていないかもしれないですよ。年齢的に考えるとそうですよね。」

「母は、ちょっとこのぐらいで、次の自分の生き方を考える時期に入ったのかな。まだ、もう一回仕事しなおせる年齢やし。」

女性の人生全体からみてみるとそういうこともありそうです。

「ずっとこの暮らし方をしてきたのかな？」

家族の居住形態の変遷についてですね。

T. 「はい、次のグループにファシリテーター交代しましょうか。姉の話があまり出てないね」と、みんなの方を振り返ります。

「ぼっーとしてるのかなあ」と言っていました。

「心配かけづらい立場ではあるよな」

妹はあんな状態ですし、長女という責任感もあって…というところですね。

「姉妹で三歳違いは受験の時期が同じになりますよね。その時期に、妹に親はかかりきりやったのではないかなあ。上の子はほったらかしみたいに。」

たしかに三歳違いというのは、家族にとってリスクがありますよね。受験の時期はダブルで家族に緊張感を高めますね。ここでしばらく沈黙。

T. 「司会の方、ファシリテートしないと。」

あわてて、ファシリテーターのHさんはいいました。

「19歳っていうたら、親から離れたら、これから関心が家から離れていく時期ではないか。姉は合コンなんかに行ってるそう。」

親の視点から、「子どもが親離れして、母は寂しいだろうな」という意見が出ました。そこから、

「お姉さんは母を気遣っているかもしれない」という声も。

「姉妹の関係とか、母子の仲良さは、どうなのかな。あと、家族に男が一人でお父さんは、しんどいかなと。女性陣が仲良いか良くないかで、かなり変わるのではないかな」

関係性の話、ここまであまり出ていなかったですね。

「16歳って難しい時期やん。お姉ちゃんは19歳で安定してるけど。姉とは対等にはなれないし、その辺はどうですか？」

それを受けて

「そんなに仲良くないのかな。」

「母が姉妹のどっちと、くっ付いているかによって、変わってくるかなと。上とべったりなら、下の子は自由に外に出て行っているのではないかな。」

母と姉、母と妹の関係性ですよ。

「個人的な意見としては、41歳と19歳の世代間境界がないとかいう可能性もあるんじゃないかと。よく言う『友達親子』みたいなやつ。皆さんの中では考えられないですか？」

いまの時代の家族のひとつですよ。

Hさんは、しばらく間を置いて「その友達親子の続きなんですけど、芸能人でいうと山口智子世代というか。友達親子のハシリではないかなと。」

芸能人での例え、そして山口智子という絶妙なチョイス、わかりやすいです。これは私(千葉)の世代だからかもしれません。

「主婦はパートではないのですよね…、やっぱりそこがなんか…」とことばが少し途切れしました。

「専業主婦も珍しいとは思わない。結構いるよ。どう？」

「いやいや、勉強になります。」と引き下がりました。

「母が働いていないのは何でやろう？母は時間あるよね。どこに住んでいるのかにもよるかな。田舎とか、新興住宅地とか。」

これ、ホント地域によりますよね。

T. 「お父さんの話、していないね。あとカップルの関係も。世代間境界やサブシステムのことも。一人ひとりについての資質はどうかとか。家族にとってどういう時期なのか。例えば、お母さんは更年期障害とか、お父さんなら思い切った転職をしたがる人もある時期だとか。」

この人達にどんなことがありそうか。では、ファシリテーター交代。」

「父、公務員ですよ。母が働いていないのは、転勤があるとか交代勤務があるとか…かな」

「結構いい公務員ではないかなと。」

「地方公務員？」

「いや国家のほう？」

「それ、ちょっと悪い公務員？」(笑い)

「キャリア系とか。お父さんの性格とか人となりからいくと、キャリアに加えて、警察、教職、裁判所関係があるかな。」

「他に何かありますか。」

「お父さんの家族の中での立ち位置は、どうやろうと考え

ると、お父さんへの反発とか娘たちからありそう。」
思春期の娘。父への嫌悪。洗濯物は別。よくききます。
「そもそも、19歳16歳の娘は、父と会話とかするのかな。」

「しなさそうですね。」

「娘たちの父親へのイメージは、頼りない、煙たいとかではないかな。あと、そもそも父と母はどこで出会ったのだろうか。職場恋愛？」

T. :「母親が大卒でそれだったら、職場研修が済んだくらいで、すぐ妊娠、退職とかになるよね。雇った側にしたら、割りあわへんな。」

「見合いとかは、どうですか？」

T. 「少ないやろ。」

「最近ですよね」、「オリンピックより後」、「結婚した時期は、バブルの時やし、遊びすぎなぐらいちゃうか…」と出会いの話が続きました。

「結構いい公務員だとしたら、忙しい時期、働き盛りですよね。家にはいなくて、家族の中で孤立しがちな頃ですよね」

「父は子どものことを、母から報告を受けている感じがする？」

「母は外では働かず、父は一杯一杯。上世代に頼っている面はないのかな。」

上世代(祖父母との関わり)の話が続きます。

「介護はまだ、考えなくていい時期やろうし。」

「この家族に外から何かを与える人がいるのではないやろか」

「あと短大は意外と学費高いよ。四大より高いところもあるし」

「専門学校も学費が高いよね」

家計の話も出ました。

「なんか、母にエネルギーを感じないなあ。何でやろう。ジェノグラムにパワー感じない。」

これははっきりしない直感かもしれませんが、これまで出たこの家族の想像のトータルの印象がそう感じさせたのでしよう。

T. 「はい、ここまでにしませう。非常に面白かったです。」

私の知っている家族と言うか、そんなに詳しくは知らないんですけど。これは早樫さんがよく使うやり方でして、新聞報道などで皆さんも知っている家族です。さて、誰でも

しょう？」

しばらくして手がぱらぱらあがり、誰かがわかったのをみて、言いました。

「そう、K市警察官の家族内殺人事件の家族。こうしてみても、あの年齢の専門学校の選択がわからないよね。父に女性関係があつて、その悩みを母が次女に話して、次女が寝ている父を斧で殺したということらしいのだけれどね。父もずっと家にいる主婦にうんざりしている雰囲気があるわけです。」

ここにもいると思うけど、自分のパートナーに限って浮気(婚外恋愛)は絶対にないなんていうのは、大間違いです。かなりの確率で男女共にありますからね。

妻はその悩みを次女に言います。カップルの問題を娘に打ち明けています。これは親子間の世代間境界破りです。

こういう問題の対応の原則は、とにかくまずは線引きする事だと思います。夫婦間に酷い話があつたとしても、それは子どもに話すことではない。

どうしても誰か味方してくれる人に言いたいなら、大めになるでしょうが、実家の母親にでも言いに行きなさい！という話です。

そうしたら実家の母は、「実はあなたのお父さんも若い頃…」なんて、びっくりの話をしてくれることがあるかもしれない。

無論それとて、内外の境界破りなのですが、母が娘に訴えてしまうよりはずっとましです。

ここでは加害者16歳、加害者の母、加害者の姉が残ることになりました。今後の家族は大変でしょう。

こんな結末を迎えるくらいなら、離婚したほうがずっと簡単。夫婦は契約関係なんだから、他人になれます。親子の多くは契約ではなく、DNA繋がり。そこが決定的に違います。

だから親子間には世代間境界が引かれているべきという考え方をします。この家族はそこに大きな問題が起きてしまいました。その典型的戒め、教訓の引き出せるケースかなと思って、ここで取り上げました。

16歳のその子には、いろんな思いがあると思います。父とぶつかっていたかもしれませんが。あと、警察官は男っぽい、マッチョ、体育会系の仕事だよね。

それに、さっきも出ていたけど、この配偶者に力が足り

ないのは、ジェノグラムからだけでも臭っているよね。
妹は美術系の専門学校らしいです。

追記 ここでは新聞のニュースから、分かる範囲の情報を材料に、家族の構造を念頭に考えてみました。

実際のこの事件について、正確なことが論じられているわけではありませんし、そんなことが目的でもありません。

後期オリエンテーション

先ほども話したように後期は、各回毎に担当を決めて、それぞれ自分がやってみたい中味をリクエストして取り組むこととなります。ケースカンファレンスでもいいですし、前期に面接した家族にもう一度会ってみたいというのなら、呼んでくれた人に連絡とってもらって、来てもらい、「その後、いかがですか？」というのでもいいです。

自分の家族について考えてみたいというので、それを事例検討に出した人もあります。自分の家族だと開示しておこなってもいいですし、伏せて行うこともできます。

他には、実際に仕事で面接をしていて、そのビデオがあって、それ観ながらのケースカンファレンスでもいいです。何でも構いません。情報は少なくともそれにあわせてやりますし、無論情報が潤沢にあるのは、それでかまいません。では、休み時間に担当順を決めておいてください。」ここで、休憩です。

休憩

後半が始まります。

T. 「次回から、前半にはディスカッション素材としてこのテキスト(平木典子・中釜洋子著「家族の心理」サイエンス社 刊)を使います。それぞれが読んできて、関心の向いたことを自由に話し合います。

次週は第1章、第2章をやりたいと思います。読んでおいてください。

この訓練で今まで、テキストを読んでくる課題を実施したことはありません。今年は私一人で担当することになるので、ちょっと工夫してみました。読んで貰うと、興味深い気づきや発見はあるものです。

では次は、この家族を考えてみましょう。」
パワーポイントで以下を示しました。

父	42 歳
母	39 歳
長男	16 歳 高2
次男	14 歳 中3
三男	11 歳 小5
父方祖母	

T. 「この家族にある大きな出来事が起きます。父親の失業に伴う経済問題です。そんな時、皆さんならどうしますか?」、とケースの父に年齢が近いであろう、Dさんにきました。

「家族みんなに話すかな。」

「嫁には言う。」

「子どもには言えないな・・・」

T. 「どっちがいいですか、女の人達どうです。これは流儀の問題ですけどね」

と、ここから始まって、しばらく、先ず誰に伝えるかあれこれ意見が出ました。

T. この夫は失業したことを、おばあさん(自分の母)だけに打ち明けました。すると、「そんなことは嫁さんには言うな!」とって30万円、用立ててくれました。

妻にいろいろ言われるのも鬱陶しい。とりあえず今月は貰っておいて・・・と思った夫はそれを妻に給料だとして手渡しました。

一度そんなことをしてしまうと、事実を打ち明けるのは、更にハードルが高くなります。結局それから1年数ヶ月、ずっと彼は自分の母親のから生活費をもらい続け、妻には給料を装って渡すことになりました。

そんなある時、祖母が銀行から現金を引き出し忘れたことがありました。毎月お金を渡している側からすれば、週末だったので、ついうっかりした程度のことでした。

しかし、給料日に理由なく支給されなくなる会社などありません。妻にどう説明したらいいものか、父親は焦りました。そして、こんな状況のままでは三人の子ども達の将来に自分は責任が持てないと思ったそうです。

父親は誰にも話せないと勝手に思い詰め、一家心中を考え、まず子ども達を殺しました。父親の中では一年以上悩み続けたにもかかわらず、打開策の見あたらなかった問題でした。

しかし、妻は聞いたこともない話でした。祖母にとっても、いずれ一人息子のものになる財産の少しずつの先

渡しでした。このように大人の受け止めは、三者三様でした。そして心中事件によくあるように、大人が生き残りました。

どのようなことであれ、起こった事態を引き受ける覚悟で向き合ったら、たいいていのことは引き受けられるものです。「私には考えられないことだ！」等と言っていたことも、人は平気で受け止めます。事実を共有できていたら、メンバーは知恵も手も出せます。

しかしこの家族には、秘密の取引がありました。『失業』は所帯にとって重大事です。本来、その事実は先ず誰に伝えられていなくてはならないかです。それが妻であるのは自明のことです。原則として上世代との間に、世代間境界を明確にしておくという課題もあります。そこが崩されたこのケース場合、父親の身に起きた失職、無収入問題より、そのために打った手(問題解決法)が問題になりました。

様々な問題が誰の身の上にも起きています。人は対策としていろんな事をしますが、時々、「それは間違いでしょう！」ということをしてしまう事があります。誰も正解を知っているわけではないからこそ、手順づくりの適切さが重要になります。

問題が問題なのではなく、問題解決が問題なのだという言葉を思い出すのはこんな時です。

こんな事件があると、起きてしまった後で、いろいろ言う人もいますが、あまり意味はありません。

皆さんがこんな家族のことを考えなければならなくなったとき、「おかしいな？」とか「危ない話やな！」と未来の危険について予知的に働くセンサーを、備えておくことは大切です。家族を守るには、そういうことが大事になってきます。

起きてしまったことに同情的で、もっぱら心情を受け止めようというスタイルの人からは冷たいと言われるかもしれませんが、こうした見方が出来るようになっておくといいです。

父と祖母で秘密を抱えてしまうと、妻との間は疎遠になるのが当たり前のことです。問題なのは、問題解決として、ちゃんとやるべきことをやっているかどうかです。

何かがあったところで問題を完全に抑止することはできません。けれども、考えている人には、そこから、整理してできることがあります。

子ども達は亡くなってしまい、祖母と母が生きています。父親は刑務所です。子ども達は気の毒としか言いようがありません。

「まさか、こんな事になるなんて・・・」

このつぶやきは、そうなのですが、でも、それを未然に防ぐために出来ることがあると申し上げておきたいと思います。

家族には、「他の人には絶対言えないと思ったことこそ、私には言いなさい！」という関係をつくっておくことが大事です。思いやりから秘密にしてしまう関係ではなく、信じて打ち明けられる夫婦、親子関係にしておくことが大事です。

そういう意味でも、世間の一般的なわきまえとは異なる、自他、内外の境界感覚は大切です。

ここの訓練の寄って立つ考え方は、S.ミニューチンが「家族と家族療法」で述べていることです。そこに書かれている家族の構造的理解がベースになっています。

もっとも私は、それを忠実に学ぶようなタイプではないので、そこからの体験的暴走もあるかも知れません。日本人バージョンというか、関西人バージョンです。

おしまいに家族療法関連の世界のことに少し触れておきます。といっても、技法や理論的関心は薄いので、渦中に居続けて見えた、私の目に映った、日本の家族療法三十年の印象になります。

日本社会にはっきり見える形で「家族療法」が登場したのは80年代。それまでも統合失調症の精神科医療の中に「家族で」という取り組みはあったようですが、それほど力を持っていたとは思いません。もっとも、これは今も続いていることかも知れません。「家族療法」といっても、通じる所も、実践者も限定的です。

私の前に「家族療法」が登場してきた頃には、精神科医療分野に限られてはいなくて、いろいろな問題症状の家族が対象であるように見えました。

「家族が変化すると、患者も変化する」、などという家族療法の話の初めて聞いた時には驚きました。

それまで私はというか、世の中全体が、言うならば個人療法視線でした。そこでは、母子面接をすることもありましたが、たいいてい本人(子ども)の足引っ張っている親といった感じで、困った両親が多いと思っていました。

一般システム論をベースの家族システム論は、従来型の因果論的、原因究明型の問題解決法ではありません。家族のどこか一部が変化すれば、家族全体も必ず影響を受けるものだということでした。

こういう考え方ができるようになると、何が悪いか、誰が問題かを追求するのではない問題解決が摸索できるようになるのに驚きました。

その後、ちょっとだけ家族療法はブームになりました。しかし、印象的だったビデオやマジックミラーの使用、バックスタッフシステム等は、どこでも出来る事ではないということで、フェードアウトしてゆきました。

実際、設備やスペース、人的なコストを考えると、このまま実現できる場は非常に限定された方法でした。

私が実践していた場所は、児童相談所でしたから部屋や設備は公共物として用意されています。そしてスタッフも公務員として、賃金が確保された状況でした。だから比較的長く実施可能だった側面は否定できません。

しかし考え方は、それまで私たちの持っていた基本枠組みとは異なっていました。病巣を取り除いて治すという発想ではない、問題解決。ざっと言うなら、これが私にとってのシステム論でした。

よくなったら、それでいい。どこかが変われば、他も変わる。ここが変わるべきだ！ではなく、どこが変わっても良い。

先に述べた警察官一家も、両親・夫婦で、浮気問題を話せていたら、結果は違っていたと思います。

「過ちを改め、生活を正すのは浮気している方でしょう。私は何も悪いことはしていないのに・・・」、なんて、かたくなにならずに、落としどころを当事者で探る手はあるのです。

でも人はなかなか曲げないところがあります。ありえないとわかっている、非のある相手を責めて、猛省を促します。

「そんなことは起きないのは分かっているでしょう、いったいどうしたいの？」と言いたくなるような状態です。

「相手に後悔させ土下座させて、その時に、離婚だっ！と言ってやる！」なんて言うんですね。

膠着状況を作り出し、身動きできない状態を作っておいて、グズグズやるのが習慣の人が少なくありません。

変化はいろんな要因で起きる可能性を常に秘めています。愛人に若い彼氏ができたりしたら、夫は帰ってくる

ことになって、夫婦の関係は変わっていったりしますね。

どこで変化が起こっても構わないし、正しく変わらねばならないなんていうのも、大して根拠のない信念です。物事はドンドン悪化することだってある。とにかく、無変化状態を変える、これを「変化の処方」と考えます。

前向きに考えるとしても、その時、変わりやすいところが、変わる方が楽です。変化はその人でなくてもかまいません。夫婦仲が悪いといっている、加齢と共に、老後のこと考えて、一人になるよりまだからというので治まるとかね。変わらないものはないということを知っている、家族についての考え方です。

以上、後期初回はニュース事例を二つ使って進めました。ではまた次回。

2013.5.25 追記

この事件の話を後日話題にした場での記憶にこんな事がある。

ある女性のカウンセラーが、父親殺しの事件を指して「これは確実に父親の性的虐待が絡んでいる」と言った。私はそんなことを考えたことがなかった。

そう言われてあらためて、家族に起こった出来事と、その原因と言われているものとのバランスを考えた。世の中には、「そんなことぐらいで・・・」と言いたくなる事件がたくさんある。その一方で、そんなことが起きるのは、よくよくの事だという考え方もある。

果たして何があったのか、それを確定するのが目的ではない。事実として家族にはこんな事が起きるのだと記憶しておくこと。その背景にどんな想像を巡らせるかを言語化する習慣を持つておくことは、今後のケース処遇に役に立つに違いない。



突如、変更しております！

蠅螂の斧

(とうろう の おの)

様々なシステムと私

第一回

団 士郎 仕事場D・A・N/立命館大学大学院

このマガジン連載では基本的に、書きたいことを書きたいように書いている。Part①1990年の京都児童相談所の一年を振り返る連載は楽しく終えた。Part②の連載もそのつもりだった。いくつか考えた末、KISWEC（京都国際社会福祉センター）で25年近く継続している家族療法訓練のある一年を取り上げて、たまたま存在する逐語録（千葉晃央・記録）を整理しながら連載することに決めた。金剛出版2002年刊「ヒトクセある心理臨床家の作り方」の続編のつもりもあった。

ちょうどこの時期に、長年のある意味で念願だった、家族の構造に関する教科書づくりが実現した。「対人援助職のための家族理解入門」中央法規出版2013年刊である。私はこのスタンスで飽きもせず四半世紀、家族を見つめ続けてきた。

そう思って、「さて次の仕事は対人援助学マガジンの新連載 第二回目・・・」と思ったのだが、まったく気乗りがしなかった。一応仕上げた長い二回目の原稿を見ながら、パート1に続いて又、過去のことを書くのか・・・とってしまったのだ。

今、私達の周りには、いろんな意味で家族を巡る事件や出来事が山積みである。そこに目を向けず、過去の出来事を書いていることが面白くなってしまったのだ。そんな時には変更してしまえばよい。自分が気の入らないことをやることはない。義務感で書いたようなものが面白くなるはずがない。KISWECの訓練記録は、またそのうち、違った形で手を付けたくなる時が来るかもしれない。

こういう事態は昔、「児相の心理臨床」という身内の雑誌の連載でも起こしたことがある。そして確か二度の変更後、開始した連載が結果的に「ヒトクセある心理臨床家の作り方」になった。

「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」という箴言もある。第一回で期待してくださった方があったらごめんなさいね。

◆月◆日 業者研修会

大阪で講演を引受けることが少ない。業者（今回は「田中教育研究所」田中ビネーの所だ）の研修会の一部を担うこともまずない。なのに今回引き受けたのは、「木陰の物語」をまだ知らない人に紹介できたらと思ったのだ。私が自分で届けられる範囲には限界がある。他の人のネ

ットワークに参加させて貰うと、思いがけない遭遇もあるものだ。そこで滅多に仕事でいかない大阪城公園内の大阪TWIN21 MIDタワーに行ったわけだ。高層ビルの20階、いかにもビジネスって空気感たっぷりの大きな会議室に昼休みに着いたのだが、ちょうど民間資格カウンセラーの取得試験やポイントの説明を熱心に行っているところだった。そこで130人の幼児教育関係者向けに二時

間の講演。ほぼ初対面のみなさんに、アロハシャツ姿、レジュメなし、90分三連続講演の真ん中でというスケジュールだったのにも、二時間やりたいと言ったからかどうかは知らないが、開講12時35分という変則。私はいつもの調子だ。受講生の中には、自分の中の専門家のイメージとのギャップを感じた人もいただろう。でも、これこそ専門的仕事なのだよ。二時間、あっという間だったでしょう？

厳しい時代だからって、専門家の仲間に入れて貰って、仕事なら何でもやりますというのは違うのです。

今は、そんな事が分かれ目ではなく、自分は何をしているか、していないか。どこに軸足を置いて機能しようとしているかが問われている。

専門風言葉を駆使し、世渡り上手な社交でクリア出来るなんて認識が、そもそも過去のものなのだ。



高齢者が老後のことを考えると、今の間に堅実な投資を考えておかねば・・・と思って振り込め詐欺などに引っかかる図式と同じ事が、仕事の世界でも起きている。

自分を弱小だと定義して、少しでも有利な技術の学びで未来の安心をなどと、資格商売が加速する。

でも実際は、そういう小市民的自己防衛や、資格を取って自分の未来を守ろうなんて志向性は役に立たない。そんな志が低いものが、長続きしないことは自分でも分かっているはずだ。次々変化してしまうものを追いかけても、自己信頼感はいつまで経っても届かない。残念ながら、持ち込んだ「木陰の物語」の売れ行きは低調だっ

た。翌週、京都の教育相談研究会に80冊持ち込んだのは完売だったから、大違いの結果になった。

この近くにあった劇場でミュージカル「アイダ」劇団四季を見たのはもう10年以上前のこと。娘が入団してまだ役をもらえない頃にゲネプロ（開演直前の通しリハーサル）を関係者がみせてもらえるという。関係者扱いされるのも嬉しく出かけていった。

◆月◆日 K I S W E C W S

京都国際社会福祉センター（K I S W E C）・家族療法ワークショップSTEP 1と題した三日間の入門講座を、もう25年以上も継続している。今回31名の参加。これをメモしている今は、タッグを組んでいる早樫さんのジェノグラムの書き方の実習中。この前の時間は私が面接VTRを使って、「観察」とは何が見えるのかをワーク。

STEP1は研修プログラムとして、かなり洗練されてきていると思う。20年、何度も改定を加えた現在の形は、そう誰にも真似できないだろう。自画自賛だと言われても分かる人には分かる。

あちこちで実施されるワークショップやロールプレイなど、実習を伴ったプログラムを見る。参加者もじっと講義を聴いているより退屈ではないから受けも良い。しかし、その中味に関して私には疑問がある。

それは随分昔のWSでの経験から、今も継続する感覚だ。最初の体験は外国人講師を迎えた二日間のWS。希望を募ってロールプレイをしていたが、私は退屈していた。通訳付きの、構成度の低いやりとりはダラダラしているだけだった。中央に集まったプレイヤーと事例提供者、スタッフは集中していたかも知れないが、観客ポジションに同じ緊張感はなかった。高い金を払って、人の輪の外縁部でうんざりしていた。

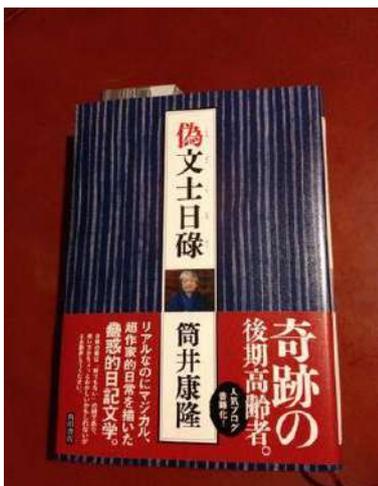
他にも、壇上で行われているロールプレイの稚拙さにあくびをかみ殺していた経験もある。多くの場合、理論・講義に比べて、実習の課題構成度が低いことが原因だと思った。その一方で、参加型のプログラムにすると単純に活性化してしまう受講者にも原因があると思っていた。だから実習を含んだプログラム構成の充実は、とりわけ関心事だった。

STEP 1 で実施中のプログラムの練られ方は中身だけでなく、使用空間の多様さや、使用機器や部屋数やホワイトボードの数からも、理解してもらえないかと思う。

三日間の修了証を手に、参加者が満足のコメントを残して、それぞれの居場所に戻ってゆくのを玄関で見送る。自然に生まれた毎回の習慣だが、気持ちを素直に形にするとうなる。年齢層も職種も様々な31人が、異口同音によく学べたと実感を語ってくれるSTEP 1 だ。

今ここに若干の懸念があるのは、近年、公的機関に勤務する人の公費派遣の出張研修参加が増加していることだ。基本的に学びは、個人が、自分の中で金、時間、エネルギーの三本柱を負担したときに、その人の中に力として定着すると思っている。

◆月◆日 **BOOK** 筒井康隆



今楽しんでいるのはこの本。筒井康隆氏は高校（大阪府立春日丘高校）の先輩だ。そして同志社大学文学部文化学科でも先輩だ。私は心理学専攻で氏は美学専攻だったと思う。そして更に、氏が最初に就職した乃村工藝社は、中学生の時に会って今に至るまで兄弟のような付き合いのR. A. 君が定年退職まで務めていた会社だ。

だから一方的に筒井さんは格別なような気がしているのだが、実のところなんだかずっとモヤモヤしている。ちょっと引け目を感じるのは、小説があまり好みではなくそれ以外の著作の大ファンだということだろう。

◆月◆日 **カウンセリング？**

♪ よく働いてはいるが、仕事ばかりしていると思っただけではない。何一つさせられていることはないのです

トレスもない。具体的に動けば、ささやかでも成果が届くのは喜びだ。

今朝も相談室で長い経過のある人と話しながら、彼の努力が報われ、事態が動いている事が彼を支えているなあと思っていた。結果は人を元気にしてくれる。大きくなくても構わない。他との比較でなくて良い。自分にとって、一歩前進を実感できるように支えることが成果に繋がる。これは単純なことだが、とても大切なことだ。

♪ 木曜日、午前中はある組織の相談室で諸々の相談対応。本日は継続の方と新規の方。組織の相談室なので、その枠の中の人とその家族の問題ということになるのだが、これがなかなか興味深い。担当するようになってもう十五年が過ぎた。

主観的なものだが、ここでの私の問題改善率はけっこうなものだと思う。子どもの相談、親子関係、夫婦の問題、病気・介護絡みの課題、職場関係、男女問題と、いうならば「中流小市民日本人」の相談の幕の内弁当である。

ここに効果的に働きかけることが出来ていることで私は近年、少々自信家なことを言っているような気がする。

とても大変な事態や酷い状況のケースに精一杯関わった援助職の人達をご苦労様と思う。そんな相談やそこでの出来事や事件が、世の中の話題の中心になる。あちこちの現場（職場）でも焦点はここに偏りがちだ。

しかし、例えば今日社会において、多くの市民の子育てへの関心の中心が児童虐待ということはない。高齢者が皆、ボケるわけではないし、男がみんなDVをするわけではない。著しい問題が、話題もエネルギーも全部持って行ってしまおうような社会づくりには用心が必要だ。

警察が凶悪犯罪捜査に重点を置いて、軽微な犯罪をおざなりにした結果、社会の秩序は乱れた。犯罪の検挙率は下がり、軽微な犯罪は増加した。まだまだ諸外国に比べれば安全な社会だとは思っている。しかし、ジワジワ崩れているものは、ある日堰を切ったように蔓延する。

市民社会は名探偵を求めていたのではなく、街のお巡りさんを求めている。だからKOBANが世界で話題になる。街の治安回復を地下鉄の落書きを消すところからというのは、ニューヨークで成功した取り組みだと聞く。同じメカニズムがあらゆるところで起きる。特殊疾患や

重篤な症状に対応する神の手ばかりをもてはやす社会は、町医者生き甲斐を削ぐ。

しつけの行き届かない子の診察に手こずりながら尽力していた小児科医が、クレマー両親にうんざりして看板を下ろす。我が子に小児科を継がせない。

一方、その正反対の動きしかできていないのがマスコミである。叩きやすい小市民の悪を徹底的にたたく。そのくせ、大きな不正や虚偽には向き合う気概も調査能力もない。原発報道に関する日本のマスコミを見て、世界のメディアからの日本評価は大暴落した。汚染水はただ漏れただけなのに、情報は漏れてこないなんて、東電はどこに壁を作っているのだろう。

スポンサーあつての一企業だから・・・とか、ジャーナリストも生活があるなどと戯言をいう。そして、ちいさな不正のあった小市民を叩いて、次に何か新たな事件が起こると直ぐ忘れる。大きな相手には、最初から抱き込まれていて、何も出来ないというのはどうしたことだ。

アラブの春のデモは早々に報じた新聞やTVが、原発反対の首相官邸前デモの報道に、随分消極的だったのには驚いた。

そして次々に、隠してあったことや、見ぬふりをしてきた汚染や失策が明らかになる被災地の現状を明らかにする事にエネルギーを向けようとはしないのはなぜだろう。

国民の70パーセント近くが「今の生活に、まあ満足だ」と答えたという調査。被災地ではどうだったのだろう。「あの人達のことは置くとして、私は今、それなりに満足です・・・」なんてことを言っていたら、我々に明日はない。どんなことも、他人事であるはずがない。

しかし、こんなことばかり言っていると嫌われる。

人々はほんわかしたぬるま湯が好きな時代なのだという。その湯はきっと原発からの夜間電力でまかなわれた、お得な料金で沸かしたもののなのだろう。何がお得なのかは考えない。

♪ 相談室の新件は、新任中間管理職女性からの相談。係員にとって、バランスの良い業務進行管理とはのノウハウを伝授する。カウンセリングではなく戦略会議である。

私の近年の相談は、ますますカウンセリングではなく、相談・作戦化している。気をつけないと細木大明神のよ

うなことになってしまいそうだが、占ってはいないし、運命だなんて思ってもいない。でも型どおりの受容や共感などとも思っていない。

気持ちのことばかりを大切だと語る世論が、いつの頃からか形成された。感情が大切ではないわけではない。しかし、寄ってたかってそんな話ばかりしていると、どうなるかを示しているのが、今の世の中ではないか。

自分で出来るレベルにある人には、頑張るって貰うのが一番である。依存的な病人ばかり大量生産して、短期的マーケットを築いても、未来に勝算はない。

◆月◆日 東京

本郷三丁目で家族心理学会の常任理事会。新幹線の車内でDVDを一本観ようと思った。加えて、書きかけの原稿作業もしたかったので、わざわざ本数の少ない「こだま」を選んで乗った。「のぞみ」なら2時間チョットで着くところを4時間。

それでも余裕をみて京都を出発したのに、「都内のゲリラ豪雨で一時運転を見合わせた影響で・・・」と小田原でストップ。「定刻通り、小田原駅を通過しました。あと10分ほどで新横浜・・・」じゃないのかよ！と心の中で突っ込んでみたものの、結果、この分では遅刻かもという事態に。なんだかなあ...と思うが、もともと大した役割もしていない理事なので、まあ良いか。世界はおおむね私とは関わりなく動いている。

結局、ぎりぎり定刻に間に合った常任理事会は、議題が多かったため21時30分頃終了。

通常なら日帰りも可能な会議なのだが、翌日はノルマのない日だったので、いつも使うビジネスホテルを取っておいた。



翌朝、一日フリーな東京で、さあどうしようかと思案。恵比寿にある写真美術館ホールで、映画「ビル カニンガム&ニューヨーク」を観ることにする。制作の喜びを満喫して生きる84歳のファッションカメラマンを追いかけたドキュメンタリー。NYのファッション界では知らない人はないが、重鎮でも何でもなし。みんなが写真を撮って欲しがりますが、権力とも金とも離れたところでカメラマンを満喫する生き方自由人。

カニンガム氏の縛られることの少ない時間の過ごし方に、幸せな気分になり、新たな創作のアイデアが生まれた。

その後、本館の東京都写真美術館で見たのは女性カメラマン米田知子の作品展。ある場所の写真をみせられ、そこにはどのようないわく因縁があるかという短い解説を示されると、見えるものが少し揺れるのが面白い。



◆月◆日 被災地復興応援プロジェクト

♪ 終日、9月のむつ市を皮切りに、岩手、宮城、福島と四県で開催三年目になる被災地応援家族漫画展用パネルの制作。手間のかかる作業で、やっと5作品中2作品完了。8月半ばまでに仕上げなければならないから早めの準備をする。東北以外の場所（京都、埼玉でも開催）での漫画展開催の希望があればお知らせ下さい。

♪ 三作目のパネル作業進行具合の関係で、キリの良いところまでやりたくなり仕事場泊。今週2泊目だ。そ

んなに仕事ばかりしてどうするのと言われそうだが、出来上がっていくのが嬉しいばかりという幸せ。

午前3時15分、第三作がとりあえず上がった。プリントアウトすると早速間違いが見つかったが、これは全作品完了後の修正だ。全作業の半分が過ぎて、まだ時間はたっぷりある。明日もこれにかかり切れる。今日はもう寝て、明日の昼前から第4作に取りかかるかな？それとも、気分転換に文章仕事をするかな？

♪ また、昨日から泊まり込んで一日仕事場に籠もっていた。パネル漫画展の準備を九割方仕上げる。業者さんにデータを渡してB全版パネルにしてもらうまでには、まだしばらくある。これから細々手を入れていく。三回目ともなると、定例の作業、スケジュールの感じがする。

3年目になるのだから漫画展に関しては、もう少し事前告知活動にかも入れようと思っている。たくさん来ていただく必要は無いのだが、開催していることを知らなくて来られない人があるのはつらい。

まずは8月30日金曜日午後から9月9日までむつ市図書館にギャラリーにて（これは、マガジン発行日には終了している）。つづいて、10月1日から10月27日までの約一ヶ月、宮城県多賀城市立図書館で長期展示。

その後も、11月第一週は岩手県宮古市（予定）で、12月の第一週は福島県（福島市。11月中旬には二本松市でも）で、漫画展&プロジェクトプログラムを開催する。都合のつく巡り合わせがあったらおいで下さい。（写真は2011年第一回むつ市図書館ギャラリー。中村正、村本邦子と）



同時に会場で、小冊子「木陰の物語 第三集 —side by side—」も配布する。

こんなことが何になるのかなどと短絡的なことは問わない。復興とは何か、支援とは何かなど、簡単に答えは出ないし、出たところでそんな言葉はきっと不十分だ。

あの大きな被災と、そこから続く現在のような全体を網羅できない事態に向き合うには、今、出来ることを、それぞれが継続して担うことだろう。

◆月◆日 マンガ集団「ぼむ」



この店でこのようなものを食べながら、月例の漫画集団「ぼむ」の集まり。40年以上も、それぞれが無事元気で活動しているのだから、先ずは良いだろう。もう少しクリエイティブなプランが出てきてもいい気もするが、仲間の年齢を考えるといつまでも先頭を走りたがるのもなあとも思う。

メンバーの篠原ユキオは8月末に東京で三度目の個展。今、大きなキャンバスに一コママンガを描いているらしい。観に行くのが楽しみだ。

私は彼のような絵描きではないので、そういう作業はできない。我々のグループにはそういう作画のできる人が三人いる。カワキタカズヒロ、柳たかお、そして篠原。この三人は読売国際マンガ大賞のグランプリ受賞者である。世界中から1万5000点くらいの応募がある大規模な賞で、賞金もグランプリは200万円。三人はやはり絵描きとして実力者だ。

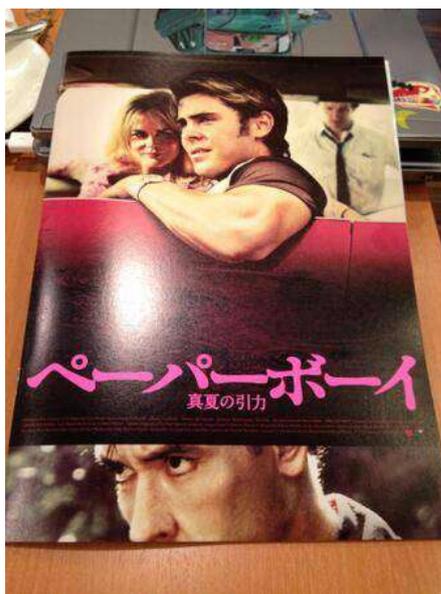
◆月◆日 Cinema アメリカ映画

「ペーパーボーイ」は曲者の映画だ。「プレシャス」の監督の次回作。こういうのを観ると、自分の中にあるア

メリカの歴史記憶が蘇る。日本が今のようじゃなかったように、アメリカも今みたいじゃなかった。

米国が抱えていた問題は、貧富の差だけではなく、様々な人間の生活の匂いがしていた。1970年代を描いた暑苦しい、湿気の高いアメリカ映画、好きだな。

パニックと自分の家族だけを助けようとするヒューマニズムがセットになった泣けパニ（泣けるパニック映画）の対極にあるような作品だ。



◆月◆日 日常

♪ 朝から雑誌連載の「木陰の物語」新作下書き完了。午後からは大学院の「家族療法・家族面接技法」の授業。その後、桃山K I S W E Cに出向いて家族療法入門講座を3時間弱。

予定通り、スムーズにこなして終了後、C君と時々行くめし屋・伏見食堂で遅い夕飯を食べながらいろいろ話す。ここのおばちゃんは、「22時過ぎると、おかずは全品半額になるから、ちょっと待っとき！」と以前教えてくれた。その時、21時55分くらいだったのだ。

食べながら新刊「家族理解入門」の感想を聞かせてもらう。なかなか楽しい。

♪ 少しゆっくりしていたせいで、ぼんやりとスタバで原稿をいじっていた。だが「ぼつぼつ何かの締切かなあ…」とったりしていたのは、完全にボケていたわけではないということ。でも、8月にも同じようなことがあったから、やはり少し惚けてきているかも。

今日中に発送しなければならない原稿が複数あった。夜は大学なので夕刻までに、途中まで書いて置いてあった各原稿を、納得のいくよう仕上げて三件、必要なイラストも二枚仕上げて送信しなければならなかった。そんなわけで、急に活気が出てしまった。あーあ。

♪ 大学院の前期プログラムが今日で終了。後期から始まるM1クラス生の顔見世もあった。後期から4人の教員で10名の院生を1年半、指導することになる。社会人が4人含まれているのは良いが、全員女性は家族クラスター開始以来、初めてのことだ。皆、興味関心も多岐にわたっていて、今後の展開が楽しみだ。

◆月◆日 Cinema 宮崎アニメ



久しぶりに公開初日の映画館で、「風立ちぬ」を観た。宮崎駿さんが思い入れのある物と人の人生を、走馬燈のような物語に仕上げた大人のための作品。

主題の一つに結核が登場するので、我が身の経験から思い出す記憶があって、いろいろ考えてしまった。

この作品、世間は賛否両論だそうだが、私にはいい映画だった。批判の中に、今の感覚である当時のあり方を責めている人がいる。そういう人はおそらく、将来又、その時の感覚で、今を責めるのだろう。

私はそういううつろいやすい正義感のようなものを信用しない。長続きするものしか信じないのは、自分に確信があるからではない。時代に左右されるところを自分も持っていると思うから、声高に今を叫ばない。今など、明日の過去に過ぎない。

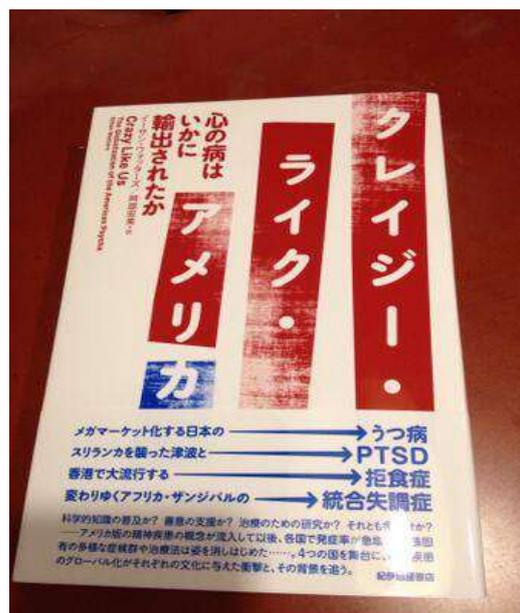
しかしだからといって、現在に無関心な人のあり方も支持しない。否応なく形成されている今の意味を吟味することなしには、過去も未来も語れない。

時代は同じ所を回っているのではないはずなのに、今また日本社会は、過去にもあった空気を醸し出している。選挙で選んでしまった者たちの愚かしい行いに、選んだ側が引きずり込まれてゆく。

意見の違いや、見解の相違を「ねじれ」等という別の言葉に置き換えてイメージ選挙戦略を立てたあざとさで、まふまふと結果を手に入れて、それを恥じることのない政治家が、まともな大人であるはずがない。

経済のことばかり口走る政治家は、「要するに、金だ!」と言っている事になるのを、平気なのはなぜだろう。そんな言い草が下品である認識は、日本社会の大人の良識として身につけてきたはずなのに。

◆月◆日 BOOK ジャーナリストック



Facebook でどなたかが、お勧めになっていたのをみてamazon で夜に注文。翌日には届く魔法のようなシステムの気持ち悪さは、又別の話題だが、この本の中で触れられる日本社会の鬱病の蔓延とは無関係じゃない。

読み始めたらとにかく面白い、面白い。第四章の「メガマーケット化する、日本のうつ病」から読み始めたのだが、久々に膝を鬱、いや打つ、うつ。

要するに抗うつ薬パキシルの販売戦略と医療者のコラボレーション。だからこれを、米国製薬メーカーの日本進出戦略だと思えば、大成功した事例である。

数年前まで、ほとんど業績というようなものなかった国で、爆発的成功を収めたビジネス物語。だから、ビジネス書の所に置かれていたらいいのだろう。筆者が書いているのはそういうことだ。

この本で取り上げられているのは四つの国の別々の精神疾患。それぞれ違った精神風土の下の疾患を、DSM標準にラベリングして、治療目標もアメリカ標準化して治療理論や薬を販売する。

抗うつ剤の効能に関する疑義を医療ジャーナリストに批判されたことをうけて、米国精神医学会会長ナダ・ストランドは、「現実には誰もがやっている活動に対して、医者だけが墮落しているとみなすのは不公平だ」と語ったという。

この意見の正直さは、面白すぎて笑えない。臆面もなくこんな事が言えるメカニズムが、あらゆる事の経済化であり、グローバリゼーションなのだろう。

◆月◆日 禍害ということ



対人援助学マガジン連載中の中村周平君のことが、今日の朝日新聞で大きく取り上げられている。学校スポーツ事故の再発防止に関して、「過失責任を問う流れでは、被害者は救済されないし、再発防止への道筋作りとしても弱い」という話。ぜひ、無料webマガジンの連載をご覧ください。

この問題は今、同根である柔道における学校スポーツ事故問題として注目を浴びている。柔道界は最近、ごたごたが続いているが、この問題とも無関係ではない。

学校スポーツの中で、柔道とラグビーが飛び抜けて重大事故が多い。これはネット統計などみれば直ぐ分かる。加えて、諸外国の同競技の学校スポーツ事故件数と比べると、日本がやたら多い。この事実にはもっと誠実に向き合わないとも何も変わらない。

周平君はラグーマンだが、そのたどり着いた姿勢が凄いの、彼は被害当事者として学校や関係者の過失を問うという従来型の裁判モードから脱却しようとしてきたことだ。

誰かに重大な過失があったから、重大な事故が起きたという文脈では、不可抗力に近いかたちでも起こりうる学校スポーツ事故は語れない。誰かに悪意や重過失があったから起きたという発想は、そうでなければ事故は起きなかったという根拠のない結論に導く。

そして当然、状況そのものへの改善の議論にはならず、過失責任者を指弾して幕引きし、問題点には着手されない。

◆月◆日 大学院

♪ M2修論の第一段階の詰めが迫っている。それなりのものにするなら、この時期の絞り込みが的を射てなければならぬ。たった一つの言葉との遭遇。それに出会えると、自分の中の問題意識や疑問、好奇心などがググッと釣り上げられてくる。そんなフックになるキーワード探しに、今日も一時間半付き合う。

問題を見つける面白さは尽きない。いろんなジャンルから入学してくる応用人間科学研究科・対人援助領域。中でも我が「家族機能・社会臨床クラスター」は、世の中に対する疑問と好奇心の巣窟である。

♪ M2には最後のポスターセッション。5つに分かれたクラスターごとに、30分ずつの発表が入れ替わりで3時間続く。ここまできると問題意識もそこそこ面白くなってきていて、期待の持てるものも多い。しかしい一方、まだまだ緻密化しない総論もあって、早く身の程を知らないと心配もする。

♪ 立命館大学院応用人間科学研究科の十周年記念に刊行した二冊。家族クラスターを卒業した院生たちが沢山、それぞれ活躍している分野のテーマで書いていて嬉しい。2冊合わせて550ページの大部。機会があれば、部分的にでもご覧いただくと有り難い。

私は、十年以上継続している地域でのワークショップが、どのような根拠で形成され、その継続が何をもたらしたかを「融合と連携」という言葉で整理して書いている。

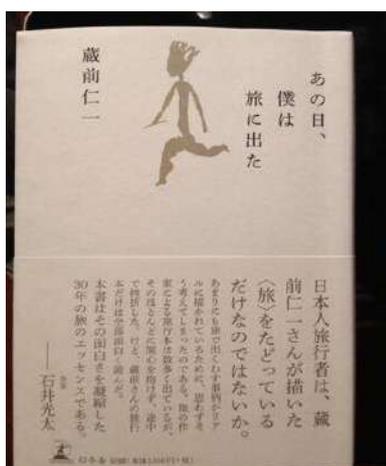
「地域ネットワークの形成」というありきたりな話題が、真に形成定着するために、何が自覚されていなければならないかを書いたつもりだ。



◆月◆日 旅行人

発売を心待ちにしていた本を見つけた。蔵前仁一さんは「旅行人」という雑誌を長い間出していた人だ。

その愛読者の集まりが京都であった時に出掛けて、お目にかかったことがある。二十年以上も前のことだったか。旅好きな私には、とても近い感じのする著者だ。旅することとそれを語る事は楽しい。



私の中にあるもので、比較的露出の少ないのが、旅の体験談だ。仕事で文章化はしたことがない。息子達との「父子旅」はマンガにした事があるが、妻との旅の失敗

談は書いたことがない。そのyり、どこかに書いてみるかな。

◆月◆日 自由時間

木曜14時。今週のノルマが終了して、週末の出張WSの入っていない今週は、日曜深夜までフリーだ。何をしようか、何もしないでいようかと考える贅沢。とにかくいい自由時間。

まずこの映画「偽りなき者」をみる。緊密な地域ネットワークというか、閉鎖社会と言うか。同じ事でも言い方によってずいぶん違う。これがある事件を通じてコロコロ入れ替わる怖さを描いた映画。

嘘とか本当とか、加害とか被害とかに、当事者だけではなく周りも揺れる。主人公はその場に留まって和解。しかしそこに沈殿したものは、これからどんな意味を滲ませていくのだろうか。

パンフレットの隣の果物皿は、入ったことのなかったショッピングビルの地下にあるフルーツパーラー。女性客が圧倒的な店は、ちょっと気恥ずかしい。だからこそ、ジュースやコーヒーではなく、本日のフルーツ盛り合わせを注文。食べ始めてから気づいて慌てて写メ。マンゴー、オレンジ、バナナ、パイナップル、スイカ、ブルーベリー、キウイ、バニラアイスクリームで900円。いろいろは似ていたけど美味しかった。



◆月◆日 BOOK 季刊雑誌

季刊「マグナカルタ」の第3号。どれくらい売れているか知らないが、まだ継続発行されている。おっさん向けの読み物かもしれないが、第3号なかなか読みどころが多い。

新連載のサントリー佐治敬三（故人）社長の物語。鳥井一族の子でありながら佐治姓を名乗り、サントリー躍進の名物社長になった人の家族の物語が興味深い。

この雑誌の編集長は島地勝彦。開高健との交友でしられ、何冊も本の出ている業界有名人。企画も面白く、対人援助学マガジン連載企画の参考にもさせてもらおうかと思ったりした。（インスピレーションですけどね）

面白いと思える雑誌が少なくなった。かつて愛読していた雑誌はほぼ皆、休刊になった。雑誌は時代の生き物なのだろう。



だから思うのだが、「対人援助学マガジン」などという季刊雑誌を三年も続けていられるのは幸せだ。

私は趣味でこれまでミニコミはいくつも出してきたし、マンガの同人誌も長々発行してきた。新聞のコラム連載や雑誌連載、出版社から本もマンガで10冊、家族心理臨床系で10冊あまり出せた。それぞれ楽しく、嬉しい経験だった。

そして今、かなり勝手な編集長として季刊誌を出し続けている。世の中とインフラがこんなことを可能な状況を形成してくれていればこそその快挙だと思っている。

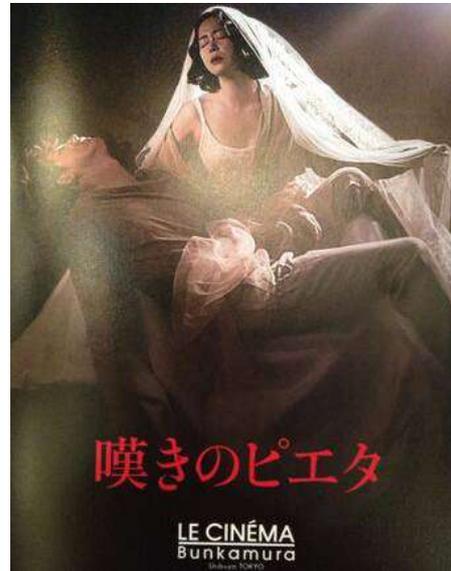
カラーの頁、自由な構成。頁数にこだわらない掲載。一人作業ならHPかブログになったのだろうけど、それよりもマガジンが魅力だ。

◆月◆日 Cinema 京都シネマ

是非ともこれとは思っていたので、時間を作って京都シネマでこれを観た。母の愛を知らない男が愛に目覚め、それを失う物語。知らなかった時よりも幸せだったろうと思わせてくれるが、残酷な結末。

おそらく皆、観たものが異なるのではないかと思われる物語の顛末だった。

予め失われた世界で生きてきた者は、己の喪失を知らない。誰かがそれを失うことに、どれほどの苦痛を味わうかも想像できない。ただし、それが不幸かどうかは、簡単には言えない。知らない方が良いという事態は少なくないように思う。



しかし知らない者は永遠に、知った上でそれを乗り越える苦しみと、その試練から得る人生の価値の両方を知らないままだ。

この映画のことは、家族療法学会誌に連載中の「映画の中の家族・連想映画館」で次回、書くことになると思う。

◆月◆日 連載

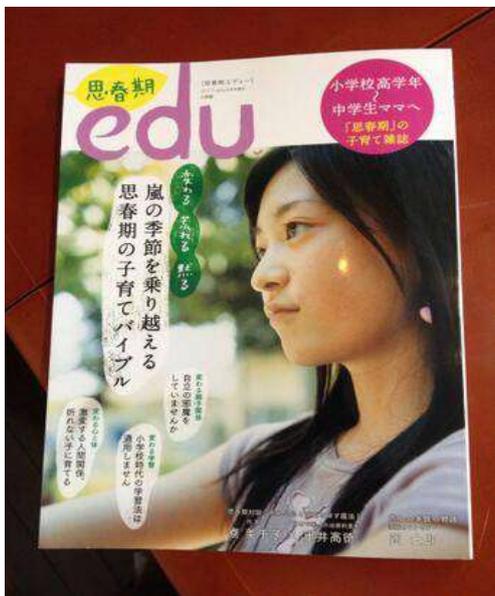
♪ 午後からペン入れを始めた「木陰の物語」新作が完成。絵を描くだけではなく、完成までに手間のかかるパソコン仕事もあるのだが、出来上がると嬉しい。

毎月一作、14年も続けている事がもたらしてくれる幸福感がある。作品を連載し続けることで「漫画家である」と自認できるのはいい気分だ。

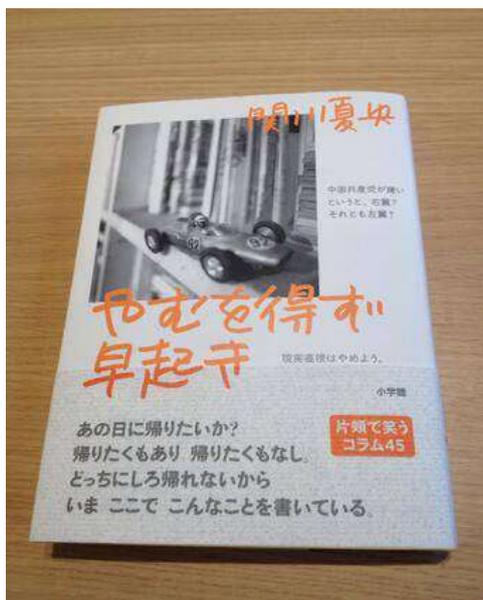


♪ 三日間留守にしたので、仕事場D・A・Nのポストは一杯。その1つがこれだった。連載誌とは別の増刊号。既にあるものを編集して1冊にと聞いていた。

新たにレイアウトされた木陰の物語「三千里」を読んでウルツときてしまった。過去に自分の描いたものを読んで、いったいなんだそれはと思う。物語の働きは不思議だ。



♪ そもそも、「家族の練習問題」という私の本のタイトルの由来はこの本の著者にある。関川夏央著「ソウルの練習問題」はとてもいい本だった。そのことがずっとアタマにあって、木陰の物語を本にすると、タイトルを求められて出てきたのが「家族の練習問題」。まもなく第5巻が出るが、こんなに続けられるとは思わなかった。



長男（遊）が発行人として仕切ってくれているから続刊出来るのだが、コンスタントに細く長く売れる商品になっている。第一巻が今でも売れてくれる。2005年末に発行したのだから八年も前だ。

関川さんは「週刊現代」に毎週、こんなことを書いておられるのかとちょっと驚く。とにかくコラムが濃い。

◆月◆日 **BOOK 堤 未果**

書いてあることはおそらくこのような事であろうと読む前に分かっていた。岩波新書の大ベストセラー「ルポ 貧困大国アメリカ」の続刊三冊目である。著者は放送ジャーナリストばばこういちさんのお嬢さんで、HIV訴訟団原告で参議院議員の川田龍平氏の妻だ。



で、読むとやっぱり面白い。アメリカさん、もう少しちゃんとやろうよなんて思う。米国に暮らす人たちの圧倒的多数は、少し賢明さの足りない弱い庶民（ごめん。チャンスの平等、そしてアメリカンドリームなんて絵空事に、丸め込まれているからね）。

一握りの悪賢者に何もかも、もっていかれている。民主主義と資本主義の名の下に、結果自己責任の競争原理をたたき込まれて、負けたら仕方がないと思われている。ルールがフェアじゃない。ローンの払えなくなった一戸建ての家から、車一台に家族乗り合わせて放り出される父親に、イラクに行けば美味しい仕事があるよと誘いかける金持ちがやっているのが自由競争なものか。

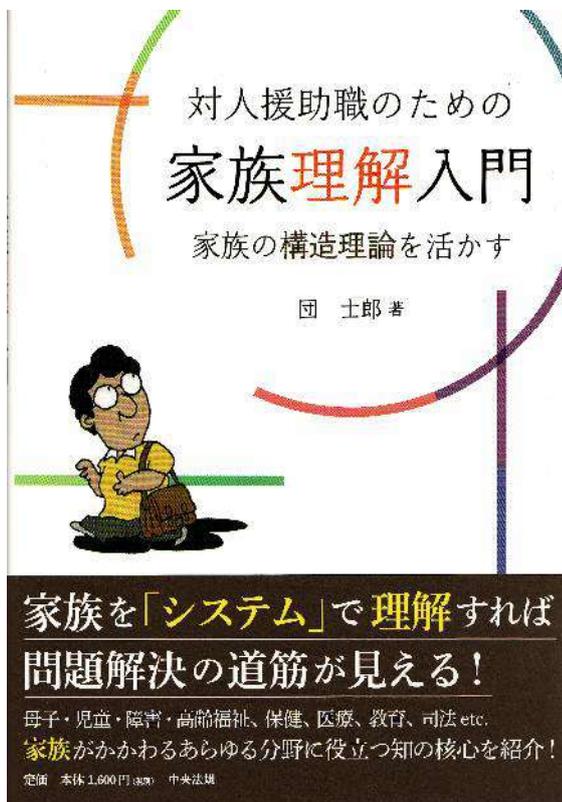
この本では、アメリカの農業を支えてきた中小経営者を、食品製造過程の安全管理強化と称して沢山の書類手

続きで追い込んで、土地を手放さしてしまうやり口が書かれていた。

アメリカンフットボールじゃないんだから、勝ちか負けかしかないなんて事はない。悔しいだろうなあ、普通のアメリカ人、もっと怒ったら！と思った。

◆月◆日 家族療法学会 & . . .

三日間、家族療法学会で東京、船堀。学会三十年の総括シンポを聞いていると、いろいろ思いたすことがあって楽しい。しかし新しいことを学んでいるという感覚の楽しさはもうない。長くやってきた末の合点に会う旅のような気分だ。会場で広島岡田隆介さんとダべっていると楽しい。それにしても、なんだかあちこちから、いろいろよくしてもらって感謝だ。



新刊書「家族理解入門」中央法規出版も、学会場で用意された40冊完売だったときいた。ありがとう。

引き受けていた事例検討は、提出者のY君が楽しんでくれていたようなので、それで十分。司会の先生にはほとんど活躍の場がないようなことで、申し訳なかったが。

WSも会場一杯の参加者の中には、経験豊富な方達も沢山いらしたのに、楽しんでいただけているようだった。

引き受け過ぎ感があったが、こういう結果だといいかんと思う。この気分が継続していたのか、来年2014年の

神戸での家族療法学会のワークショップも、大会長の植村さんの依頼で、引き受けた。「ジェノグラム面接法」を又やることになる。工夫を加えておこう。

そうだ、来年は京都教育大で開催の家族心理学会でもワークショップを引き受けることになるような流れだ。来年も暇にはならないなあ。

* *

最後に、新刊書について、今私の思っていることを述べておく。

この本に関して私はとても満足している。編集者の手を通して完成した一冊の本として気に入っている。そして同時に、初めてなのだが不安もいっぱい持つことになった。

理由は、これは専門書のジャンルに入れざるを得ないし、同時に読む人にとっては手引き書のカテゴリーにも入ると思うからだ。

ここでは、「私は家族とはこのようなものだと思う」と宣言している。しかしそれは当然、私の考える家族にすぎない。それを誰か他の専門家の理論や概念で補強していない。構造派のミニューチン氏が、「私が言っているのは、そんな意味ではない」というかもしれない。

それくらい、私の届く範囲の今日の日本の家族を考えた。きっと役に立つと思うが、正しいかどうかは疑問な所があるに違いない。

そんなことを考えているので、出版した後も、ちっとも終了しない。度々手にとって、ランダムに拾い読みして、「うん、やっぱりそうだよね!」と独りごちている。

2013/08/25

蠅螂の斧

(とうろう の おの)

様々なシステムと私

第二回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

前回、前々回と書くことが変わった。そしてこういう書き方もあるなあと思った。その時、書きたいものが書けるように、連載の幅を広めに設定しておくのだ。

この範囲で書かねばならないという制約を窮屈に感じるか、制約を設けるからこそ描けるのかは昔、「漫画家」として同人誌発行計画の中で何度も話し合ったテーマだ。締め切りの問題も同様で、作品が出来たときに出すのが自費出版の同人誌のあり方で、締め切りに終わって描くのは作品じゃない、仕事だと言ったメンバーがあった。

もっとも、これはべつに大した話ではなく、そういうことが何にもあるなあという程度の思い出話だ。

四方田犬彦著「アジア全方位」は、たまたま書店で手に取った本だった。氏の本はいくつか読んでいた。様々なジャンルに発信している人なので、全てに興味を持てるわけではないが、日誌風の読み物の中から見て取れるライフスタイルは良い感じだ。中でも旅日記が私には最も好ましく感じられるので、この本も気に入った。長短併せて、旅に関するここ十年ほどに書かれた文章が集められている。そして、こういう書き方もしてみたいなあと思った。

今、目の前にあるものが、私の中で何と繋がり、どんな連想を呼び覚ましているのか。同じ時刻に同じ場所で、同じものを見ていても、人それぞれが受け取っているものの違いはここから生まれる。これはまさしく、個人の内的記憶・無意識と外界に存在するものとの間に構築される個別のネットワーク世界だ。

必ずこれとこれが繋がるなんて保証はない。そこに合理的根拠を求めすぎると世界がつまらない。びっくりする楽しみは、生きている楽しみだ。「そうか、そうだったのか……」と感嘆の声を上げる権利は失いたくない。そして出来ることなら、誰かにそう言わせたい

私が世界のあちこちの場所が好きなのは、日常とかけ離れた場所に自分が身を置くと、日常とは少し異なった自分が作動し始めるような気がするからだ。旅好きなのに世界遺産を巡ったり、駆け足名所ツアーにあまり参加しない理由はこれだ。逆に、近くまで出かけておいて、そこには行かないなんてことは意識的にも、余り意識せず結果的にであってもする。

だからといって日常が離れたくて仕方ないものかというところと全くそんなことはない。日常をどう充実させるかは、海外旅行やイベントよりもずっと楽しい。日常を平板にしないために、いろんなアイデアを求めて外の世界を旅しているのかもしれない。だから、そんなところは日本人観光客は行かないと言われても、足を伸ばすこともあるのだが決して冒険家ではない。その結果、一見、手間と暇がかかって収穫は少ないように見える。しかしその体験は私の中では面白く積み重なる。

留学をしたことがないので、日本以外の場所で長期間の生活経験がない。もう一度、生きることがあれば、今度は留学というか、遊学してみるのも良いなあとは思っている。しかし、実感的には私の今の暮らし方は、かなり遊学的である。この連載が لندن、そんな匂いのもになってゆくと良いと思っている。

(2013/11/25)

なんで、イスタンブール？

【日誌】2001/08/25（12年前）

国内線が多いが関西空港の利用頻度も増えて、だんだん慣れてきた。

7月1日から日本の出入国カード記入が不要になったので手間が省けた。今から乗るのは、イスタンブール直行便（トルコ航空・JALの共同運行）。どんなルートを飛んでゆくのかと思っていたら、機内誌掲載の飛行ルートでわかった。

「関西空港」→「北京上空」→「ウズベキスタン・タシケント北部上空」→「アラル海上空」→「カスピ海上空」→「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」→「イスタンブール」到着。

飛んだことのないルートだった。昔、ヨーロッパ線は南回り、北回りと言った。北回りはアラスカ・アンカレッジで給油してヨーロッパに入った。地球頭越しである。とにかくヨーロッパに着きたい一心で機中を我慢する。アンカレッジは夜行バスのトイレ休憩のイメージだった。

そして選択肢の一つとして初めて南回りのシンガポール航空機を選んだのは、35年以上も前のことだ。四方田は著書の中で、「ヨーロッパに行くのに、北回りを選んでいような人に作家の資格はない」と開高健が書いていと書いていた。確かに、あちらは何も起きないルートなのだ。シンガポール、コロombo、テヘラン、ドバイ、パリ、アムステルダムと、各駅停車状態の長時間飛行。シンガポール→コロombo間だけで乗降する客など、バス乗り場状態。立席の人はいないからかろうじて飛行機なんだけど。当時はまだソ連や中国の上空など飛べなかった時代だから起きた選択だった。

それが「関西空港」→「北京上空」→「ウズベキスタン・タシケント北部上空」→「アラル海上空」→「カスピ海上空」→「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」→「イスタンブール」着である。丸ごと中国、旧ソ連上空である。なんだかワクワクしてしまう。

北京は然るべき時期が来たらと思っているうち、だんだん訪れにくくなった。PM2.5は相当に酷

そうだし、日中関係も、まともな市民レベルには影響はないと思うものの、気はそがれる。

CHINAエリアは香港もマカオも上海も杭州も成都も、九寨溝・黄龍なんて僻地にも、台北にも出かけたが、北京は残ってしまった。

ウズベキスタンはソ連時代、ウズベク共和国と言って首都はタシケント。周辺にシルクロードの街々、サマルカンド、ブハラ等がある。

40年前、初めての海外旅行がここだった。ソビエト連邦は共産主義の国。出入国にも持ち物やカメラ撮影場所などには、気をつけて日ソツーリストビューローのツアーに参加していた。そんな私には、サマルカンドの道ばたで平日昼間からチャイや水タバコを吹かすおじさん達の群れは違和感があった。

「真っ昼間から何してんだ。働かないのか！」と思ったのだ。その頃からウズベキスタンはロシアとは別の国だったのだ。

更に国営航空会社アエロフロートの勝手な事情で、前日、モスクワ経由という考えられない迂回をさせられた旅行者にとって、首都の人々とウズベクの人々の、何もかも違う有り様は、とうてい一つの国とは思えなかった。そしてその後、ソヴィエト連邦は沢山の国に分かれていった。

アラル海と聞くと思い出すドキュメンタリー映像がある。砂漠の中に取り残された船である。かつてそこはアラル海の港だった。ちいさな湖ではない。とても大きな内陸部の塩湖である。これがソ連の計画経済政策による水資源利用によって、流入する川の水量が大幅に低下して、湖は大規模縮小をきたし、元のアラル海は見る影もない大環境破壊事態を作り出した。



大アラル海と呼ばれていたところは2010年代には完全に姿を消して砂漠になるだろうと言われている。

想像力を働かせてみよう。その湖岸で生計を営む家族にとって、縮小する湖は文字通り自然破壊と生活破壊である。にもかかわらず、ジワジワ進行する被害にはおそらく保障など用意されなかったのではないか。

小アラル海の復旧計画もあるらしいが、今ではそれぞれ別の国になった沿岸諸国の様々な利害関係もあって、文字通り覆水盆にかえらずを見せている場所である。

その先のカスピ海沿岸、アゼルバイジャン、バクー油田は、意味なくいつか行ってみたい場所の一つである。しかし1991年のソ連崩壊後の独立に伴って抱えた国内紛争は治まっていないらしい。

こんな上空を飛び越えてトルコ領内に入った飛行機はイスタンブールに到着する。



十二時間余りでイスタンブール・アタチュルク空港に到着。見知らぬ国の空港に着くといつも、ちょっと不安がよぎる。理解できない世界がここを出ると広がっている。

私は全く知らなかったのだがこの時、後日判明した驚くような事実が発生していた。

というのも、この同じ便に、青森県弘前で継続開催しているワークショップの参加メンバーが、新婚旅行で乗っていたというのだ。

彼女は直ぐに私に気が付いたそうだが、女性がご一緒だったので、声を掛けませんでしたという。「奥さんだっちゅーのに！」

しかし、この対応は「エチケット」という英国紳士のたしなみに照らすと、正しい対応であるらしい。こういうシチュエーションでの対応が「エチケット」では定められている。

曰く、先方が気づいて、こちらに挨拶があったとき、初めて気づいたように挨拶を返す。これが「エチケット」だそうだ。ああ、面倒くさい。

とりあえずガイドブックは有り難い。手荷物を取る前に書かれているように、空港内で素早くトルコリラに両替。100ドルが14400000TLになる。訳が分からない。一億四千四百万トルコリラ。

あちこち旅をしてきたが、こんなにゼロの数の増えた両替は初めてだった。そして後にもない。経済に疎いのでよくは分かっていないが、何だか気の毒感の伴う両替だった。

日本の旅行社HISで三泊だけ予約済みのホテル（後の4泊は、現地で街をうろろしながら探そうと考えていた。）がどんな場所にあるのか。アクサライという地名を頼りに、空港ビルを出たところが乗り場の空港バスに乗車。

タクシーで行ってもいいのだが、最初にそれやると、何でもタクシーになってしまう気がして。それに、いきなり運賃をぼられたりすると、あとあと印象の悪い後遺症が残る。

空港は空いていて、出国手続きも簡単に出国にも書類はなし。パスポートチェックだけで、手荷物検査もなしである。

夕方から夜になりかけた街を疾走するバスでアクサライにむかう。といっても、アクサライ行きではないので、乗るときに何度か「アクサライ？アクサライ？」と連呼しておいた。

すると近づいたときには、乗務員や客が「ここだここだ！」とみんな教えてくれる。こんな事一つで、良い国だなあと思ったりする。アクサライは地元の乗客もたくさん下車する旧市街中心の一つだった。このバスはこの先、新市街タクシム広場まで行く。

アクサライは雑然とした街、ガイドブックの地図上にイメージしていたのとは大きく違った。ホテル

の客引きに声をかけられ、逆に予約したホテルを尋ねるとすぐ教えてくれた。

このホテルに決まったのは偶然にすぎないが、この時間に、ここから路面電車で観光の中心スルタンアフメット近くのホテルを目指す人は、ちょっと心細かっただろう。

典子は早くも、「機内で眠れなかった、バスに酔ったみたいだ」と不調を訴える。チェックインしても何も食べたくないというので、私一人でホテルのまわりを探検散策に出る。

21時過ぎ。裏通りの八百屋でぶどう、モモ、りんごを買うことにしたが、ゼロが無茶苦茶ついている金の単位がわかりにくい。適当に出したら、何十円の買い物を千円札でしたような具合で釣り銭がまた一杯。

表通りの店ではビン入りのりんごジュース、そしてレストランのテイクアウトでドネル・ケバブ（あぶった薄切り肉のバゲットサンド）を買ったら更に残金が増えているような気がした。ホテルに帰ると、典子もそこそこ食べた。

個人別 出版事情

【日誌】2013/10/30（今です）

多忙なポンコツ気分を立て直してくれる良いことがあった。「家族理解入門—家族の構造理論を活かす—」中央法規出版2013、7月発売が二刷になったと編集者から知らせがあった。とても嬉しい。読んでくださった人たちに認められた気がする。昨日も読書会のテキストとして良いと褒めてもらったところだった。

本を出すと売れ行きは気になる。印税が気になるのではなく、出したものが世の中にどう受け入れられるかが気になるのだ。

増刷は一つの承認の表れだ。多く売れる本が良い本だと思っているわけではない。同時に、良いものはなかなか一般人には分からないから、認められないなんて傲慢な気持ちもない。

出来れば多くの方達に認められて、長く愛して貰いたいと思う。その現れの一つがロングセラー、増刷だと思う。

以前、文春新書で二冊出して貰った。一つ目は「不登校の解法」、これはとても良く受け入れられたのだろう5刷になって、今も書店の棚にある。

ミネルヴァ書房刊 季刊「発達」の連載をまとめたものだった。気をよくして、二冊目を考え、継続していた連載のその後の分を一冊にして出した。



内容は前作とほとんど変わっていない。連載中のものの続編だった。タイトルは「家族力×相談力」にした。「**力」が流行していたのを少々意識していた。

これが見事にこけた。増刷はかからず、早々に出版社から絶版にするので、残部廃棄になるが、希望があれば差し上げると言われた。そして新書300冊余りを無料で貰った。

きっと「不登校の解法 2」にすれば良かったのだろう。そうすれば読んで貰えた人はもっとあったに違いない。新書の**カブームに惑わされてしまった。

だから「家族理解入門」の二刷りが嬉しかった。そんな話をしていたら、「家族の練習問題 第一巻」がそろそろ3刷になると聞いた。そして「第二巻」も二刷だとか。

本を作るのはとても多くの人たちの手を煩わせる。そしてやっと出来上がっても、思いのほか伝搬力は小さい。文春新書の初刷は1万2000部だったと思う。これはとても大きな数だ。2, 3000部の増刷をかけて6刷なら、二万部を超えている事になる。

専門書の単行本は、多いものでも3000部から

なんて世界だ。1000部スタートのものだって沢山ある。出版界はなかなか厳しい。

そう言えば、川崎二三彦君は岩波新書「児童虐待」が10刷になったとツイッターに書いていた。

それでも、みんなが軽く口にするような印税生活なんて、とてもではない。今となっては、夢の印税生活という夢そのものが絶滅危惧種扱いにならざるを得ないだろう。

そして私は、このような、原稿料も印税も無関係なWebマガジンの編集長をしている。

読みたいと思ったときに、バックナンバーを素早く手にしてもらえることが誇りだ。支払いも手間も求めない。何かの会員であることも要求しない。「関心がある」、このモチベーションだけがドアを開く鍵になる。

音響担当

【日誌】2013/10/30

米原市で講演とQ&A対談。彦根児相長のS野君と。参加者も様子のわかった人達で話の流れも順調なはずだったのだが・・・。

マイク不具合頻発にチョイイラ。ハプニングで自分のモチベーションが揺れるのが鬱陶しい。出来るだけ冷静なコントロールをと思いつつ、準備した中味がグチャグチャになるのが許せなくて(^_-)・・・。

講演会場のマイク調整が出来ていなかった。そのために、話の腰が何度も折られた。聞いている人たちには、講演の中で起きている私の側に属する不備だから、心優しく待っていてはくれる。しかし私にすれば、この状況はまったく理不尽な災難である。

こんな事は今年初めに、大津プリンスホテルの大宴会場で800人近い人の集まった講演でも起きた。演者はどうしようもなく、修復を待つしかないのだが考えてみて欲しい。

舞台のクライマックス直前に音声が中断し、しばらくお待ち下さいとスタッフが入ってきて、修理後、引き続き盛り上がってください！はないだろう。

こういうハプニングまで、演者の対応力にゆだねられるのは我慢ならない。演者は、その会場に来てくれた人に、満足して帰って貰う責任を負っている。

そのために、この催しに適切な内容を直前まで準備してここにやって来ている。

会場準備をする側は、私の接待をするよりも、場内の音、光、使用機器のコンディション調整が優先作業である。無論、会場の世話役がプロではない場合も多い。だからこそだが、慎重でなければならない。

近年ますます、主催者は事前に何度も、打ち合わせをしたがる。様々な問い合わせもしてくる。メール時代になって簡単に送受信ができるようになったせいで、安易な問い合わせや確認も多い。

依頼文書を郵送していた時代なら、連日のそんな通信はおかしいと思われるだろうから、自粛するのにはである。

そして当日、会場にやってきたら後はよろしくというつもりなのだろうが緩くなる。その結果、何度も何度も、マイクロフォンの不調でドタバタを演じなければならないことになった。

客席からはコミカルに見えるかも知れないが、それを見せに来ているのではないので、内心イライラする。それが講演の展開に影響する。前夜、最後の詰めをした周到さは消されてしまい、同じ所を何度も繰り返し話したりすることになる。

こういう準備はプロではないから仕方ないではなく、プロではないからこそ慎重でなければならない。臨床ってそういうことを言うのだと思う。本番で、緊張して失敗してしまいましたというのは仕事としては通用しない。近年、こういう事の重要性をひしひしと感ずるので、準備の出来るところ、慣れたところにしか出かけないようにしはじめている。

負担が大きく、結果の手に入らないミスに、自分が巻き込まれるのは、ほどほどにしておかないと、自分が消耗してしまう。

編集長作業ミス

【日誌】2013/10/29

学会誌ニュースレター用に戴いた原稿の掲載漏れという事態を起こしてしまった。

メールアドレスを2つ持って連動させてiPhoneとデスクトップの併用をしていると、何かの拍子に

確認が甘くなる。せつかく書いて頂いたのに申し訳ない。仕事が多すぎるとこういう所でミスが出る。



中益さんの思い出

平木 典子

中益さんのお慶びをしてみました。お許の方が、「よく学生さんが来られますよ」とおっしゃって、案内していただきました。9月28日、亡くなってもう1年が過ぎました。

この1年、直接指導を受けていた学生さんたちは言うまでもなく、「中益さんがいたら」と思いながら過ごした人々は多かったのではないのでしょうか。その存在の重さは、いっしょにならなかつた方がいっそう感じられ、残念さもつります。

9月の下旬は、中益さんにとって気持ちが危がせられた時期だったことを思い出します。TPIの帰り道は報告の音が落ち始め、それを見ながら、毎年のように「もう秋がきたよ」とつぶやいていました。

昨年の今ごろ、中益さんはどんな思いでこの時期を過ごしていたのだろう。「もう秋が来たよ」という言葉もきけないままの別れになってしまいました。

一方、日頃の中益さんはそんなことをつぶやくとは思えないほど、多くの仕事を着々と成し遂げて私たちに発達してくださりました。冷静な人柄は、誰にも公平であることでやさしさと厳しさにも包まれていました。その見識と専門性は日本にとってもかけがえのない力となったに違いないことを思うこともしばしばです。

私たち身近な者にとってほほえましい思い出は、中益さんはときどき下ジをしてくれたことでした。二人で箱根のホテルの会合に夕方遅く、遅刻して出席しようとしていた時のこと。駅からタクシーに乗って、中益さんが乗ることなく「〇〇ホテルに行ってください」と告げましたが、ホテルに着いてみると、そこは会場ではありませんでした。私たちはしばしその場に立ち尽くし、おもむろに案内状を見直して、再びタクシーに乗ったのでした。私はホテルの名をうろ覚えで、あまりにも袋々で行き先を告げた中益さん任せで、車中でも別の紙に花を乗せていたのです。仲間内では、そんな出来事もよく話しては、笑い合ったこともありました。

そんな中益さんを私たちはとても大切に思っていました。

前項、音響問題では文句をたれたが、だからといって私が、用意周到で失敗はしない男であるなんて言いたいわけではない。

家族心理学会のNL編集をしている。毎回原稿を募って、再度お願いし、それをレイアウトして24~32頁の冊子に仕上げている。

この作業中のあつてはならないミスの話である。十年近く編集をしてきて初めてのことだった。戴いていた原稿を掲載から落としてしまったのだ。

要因はいろいろあり、振り返ってみるとそこが落とし穴なのは理解できた。執筆にはお詫びして、次号での登場をお願いしたが、原稿そのものは今のものなので使えない事になった。

なかなか原稿をいただけず、ページ割りが確定しない中での出来事だから、自分的にも残念で仕方がない。あの原稿があったら、4の倍数の28頁立てに完成させられたのだ。

私は今、この対人援助学マガジン約200頁を年間4冊と上記の家族心理学会ニュースレター約30頁

を年二回、合計6冊の発行物の編集長をしている。二ヶ月に一度、発行日が来る計算だ。

当然、編集長として精読して校正して等と考えていたら、自分の時間はなくなってしまふ。だから、マガジンの方は信頼できる実績の人の原稿はフリーパス。必要なレイアウトをするだけである。それも自分でしたい人にはレイアウトもお願いして、PDFで届けて貰う。そうすれば作業はページナンバーを確定することだけになる。

マガジンの方は全記事連載だから、「締め切り日の告知」だけしておけば、後は個々人の自覚のみ。ほぼ皆さん届けてくれる。

一方、30頁ほどだが「家族心理学会ニュースレター」はそれと比べると手間が要る。執筆依頼が必要だからである。しかも、みんなが書きたいというわけではない。打診して断られ、予定変更で無理だと告げられ、続けて書いてくれる人頼みにしていると、執筆者が偏って固定化することになる。

私は原稿集めに苦勞していない方だとは思いますが、それでもなかなか大変だ。そんな中でやっているのだから・・・と言いたい気持ちもありそうだが、それは言いたくない。基本的にやりたいからやっているのだから、やる限りは周到に完成させた。

失敗は取り戻せない。繰り返されないように自戒するほかない。次々に担当者が変わり、前にもあった失敗が繰り返される世の中は、その当事者だけの責任ではない。社会構造上の弱点、欠点である。

それを個人の力量如何のように語るのには、システムの発想を知らないと言うことである。

スケジュール管理

【日誌】2013/10/27

金、土、日の出張を繰り返していると1週間が恐ろしく短い。月、火、大学院での仕事をして、水曜に地域でのあれこれ仕事、木曜午前の相談室対応をしていると、本当にあつという間の週末だ。

漫画の新作ペン入れは月末の水曜の夜から夜中に泊まり込みでということになる。これが好きなのだから仕方がないが、困ったものだ。

九月、十月、十一月、十二月の第一週末は、2011年秋以来、10年間、ずっと東北巡業にスケジュールされている。

被災地復興のためにマンガ展など何になるのかとか、いつまで続けるのかといった議論を排除してしまうために、長期プランを最初に確定してしました。同僚のMさん、Nさんと三者合意の10年間ある。

すると急に、秋が窮屈になった。秋には札幌、前、東京、埼玉、金沢、松江、広島、の週末WSプログラムが例年計画されている。そのほかに学会、演や一日WSを、名古屋、山口、京都、大阪等で行っていて、ここに大学院の授業とゼミが入る。木日の定例相談室仕事もあって、めまぐるしい。ここに月刊連載二本と季刊などの連載三本が入る。

だからマネージメント出来ないといつてもないことになる。そうならない為には、自分で着々と付けていくしかないのである。

列記すると大変そうだが、順番に片付けると確実に減っていく。そのうち新しいものが追加されるのだが、スケジュールを見てため息をついても、何も起きない。

台風と飛行機

【日誌】2013/10/25

遠くでヤキモキしていても意味がないので、伊丹空港で様子を見ようと、大幅に早目に空港バスに乗った。その車中のスマホ情報で、前の便が出発してから、機体整備のための引き返したことを知る。台風のことには書かれていない。よく分からん情報だ。15時50分の便は飛ぶのか？飛ばないのか？を今からカウンターで確かめる。

空港内アナウンスに、「目的地の天候不良のため、引き返す事があります。ご承知おき下さい・・・」というのが増えてきた。青森行きもそう言っている。そして伊丹の天候も、悪くなってきている。

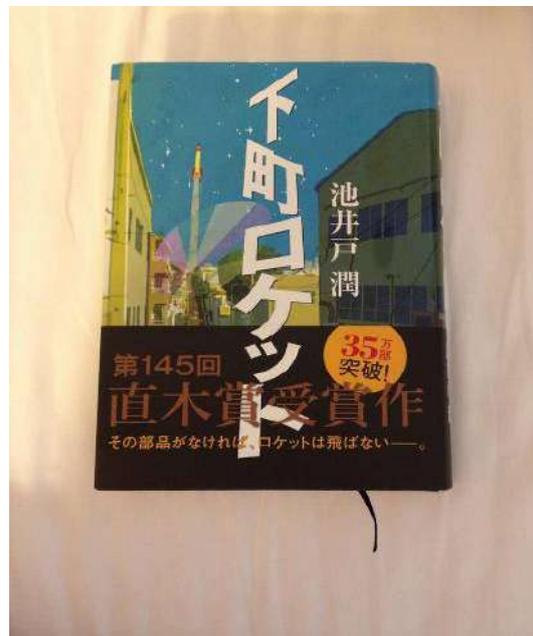
もし青森が天候不良で大阪に引き返したら、伊丹は今より天気は更に悪いだろう。台風はいよいよ接近してきている。

しかし空港ロビーの全フライト表示を見ると、ほとんど欠航便はない。台風は風より雨や高波の警戒が主なようだ。

しばらく空港内で食事をし、お茶を飲みながら原稿を書く。その間に状況が激変したりしないことを祈る。前便は機体整備不良で引き返したのだった。

【日誌】2013/10/26

昨日は一日、無事青森につけることを願って待機をしたり、早目に対応したりばかり。その間に、なんとなく読みそびれていたこの本を手にした。その結果、400ページ読了。面白い、これも半沢直樹じゃないか。やられたらやり返す。



久しぶりにエンタメ系の次々手を出させる作家と遭遇した。どれも同じじゃないかという自分の中の声を無視して、同型の繰り返し娯楽を楽しむ。TVドラマ放映後直ぐ、「ロスジェネの逆襲」を読み、その後、「空とぶタイヤ」「果つる底なき」とまだ飽きていない。

飛んで、イスタンブール

【日誌】2001/08/27(12年前)

映画007の映画「ロシアより愛をこめて」だったかで印象に残っている地下宮殿貯水池に行く。ここは是非来てみたかったところ。こんな広大なモノが都市の地下に昔に作られていた事実が驚く。

そこのカフェテラスでお茶。地下にあるので涼しい。でも、プールのカフェみたいな感じでもあり、ツアー観光客はとっとと通り過ぎてゆくから、店でゆっくりする人などいない。ここで1時間ばかりくつろぐ。

時代を問わず、人々が集う街が形成されると、そこには自ずと必然となる機能が生じる。

道路や水道、下水処理、やがて電気、ガスということになるのだが、その片鱗を目にすると、人間の知恵に感動を覚える。特に生命には不可欠の水がどのようにもたらされたのかの物語は面白い。

東京江戸博物館の展示とビジュアルデータのところで、江戸の町の水利（玉川上水）を見たことがあるが、大したものだと感嘆した記憶がある。

世界のあちこちに水道橋や通潤橋がある。長い運河を整備した場所も沢山ある。そんなものを感じながら見ているのが好きだ。。



今泊まっているロイヤルホテルは何の特徴もないツーリストホテルだが、悪くもないので連泊を打診する。しかし、週末は団体が入っているのか、明日一泊だけ延泊可能になった。しかも、日本で予約した値段より十ドル高い、六十ドルである。

そこで明後日からの宿の確保に街に出る。ガイドブックのトップに登場するフォーシーズンホテル。

（世界展開する有名な高級ホテルだ）イスタンブールのは昔は監獄だった建物をリノベーションしたとある。ぜひ泊まりたいと思ったので、訪れてフロントで尋ねたら空いていた。一泊320ドルの高級

ホテルを旅の最終日二泊することに。

その後、地下貯水池近くのプチホテルに部屋を見にいった。こじんまりした綺麗なところだったので一泊70ドルで2泊予約。近所にはランプで有名なプチホテルもあった。

街のホテルはどこも、けっこう空いている。観光シーズンといってもこのくらいなのだ。日本のあれこれの予約状況を考えると不思議。

まず大前提に日本の人口密度の問題があるとは思いう。しかし予約の問題は国によって随分状況が違う。

ヨーロッパで移動手段に列車を使った経験はかなりある。駅で特急列車の座席を求めて列にいたことも少なくない。イタリアでは自動販売機で座席指定の購入もした。連番の座席を買ったのに、乗ってみたら変な並びの席だったのはご愛敬だ。シートのナンバリングがいまだに謎だ。それに走り出してしまえば、空いている席には指定客でなくても座って構わないのは合理的だ。

でもとにかく、当日でチケットはある。基本はこれだ。ホテルだってツーリストインフォメーションであたれば、希望のグレードのホテルを大抵紹介してくれた。

ところが日本で移動するのに、当日チケットやホテル探しをしたら、えらくストレスフルだった。その日の気分で行き先を変更などしたら、宿や列車のチケット確保に大変なことになる。だから旅の自由さが確保できない。

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第一回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

二〇一四年、新年早々に泊まり込んだ仕事場で雑誌を読んでいた。そこでひらめいたプランがとても良いように思えるので今回はそれを書く。上手くいけば、このシリーズで継続することにする。

手にしていたのは「本の雑誌」一月号。記事は津野海太郎氏の連載「百歳までの読書術・老人にしかできない読書」である。要約してしまうと、「それから何十年かの時間が経過した・・・」と言えるのは老人だけだ。忘れなければ過去の読書の記憶を、現在に呼び込んで、縦横無尽に語ることが可能だという話である。

こう書いて直ぐに気付いたが、それは連載の第一部で行っていたことではないか。二〇年前の児童相談所の日誌をひもといて、今その事を洗い直してみる。私の記録を私が見直すのだから、客観的事実ではあり得ない。しかし、これこそ記録される歴史であり、時間を経たところで行われる検証だ。ここ二回ほど似たことを、時間を行きつ戻りつ行ってきたが、いよいよ第二部を開始する切り口が見つかった気がしたのである。



時は二〇〇一年、今から十三年前。私は京都でトークライブと称するものを始めていた。最近ではトークライブという言葉を目にする事も多いが、その頃は誰もそんなことは言わなかった。ライブはミュージシャンの専売だった。「報道ステーション」をやり始める前の古舘伊知郎氏が、喋りっぱなしのライブを「トーキングブルース」と名付けて東京でしていたのを知っていた。そして自分もそんな事が出来るんじゃないかと思ったりしていた。

そんな時、以前講演を依頼されたことのあるビジョンヘルスケアズ kkの石田章一さんから、「京都駅前ルネッサンスビルの部屋を継続して使用する事が出来るんだけど、私の所のプランは一区切りするので、団さん、後を受けて何かしませんか？」と打診された。

頼まれて講演する事は多くなっていたが、自分で準備して、しかも定期的に開催するような企画は考えたことがなかった。そんなことをすると、集客や採算、告知や準備で一人大忙しになって、結局祭りのあとの脱力と孤独を引き受けることになると思っていた。

ところがこの会場に関する条件が画期的だった。よみうりカルチャーセンターの枠内に位置づけられた会議室使用料金は、その日の入場者の売り上げの半分。高いような気がするが、これは多数の集客を必須にする必要はないということでもある。1000円の入場料で一人しか来なかったら、500円支払えばよいというわけだ。正規に部屋を借りたら、京都駅前の一等地のビル、とてもそんな値段にはならない。ちょっと面白そうな気がした。

椅子を並べて定員50くらいの部屋に、結果的に最高50人余り。だいたい20~30名くらいの有料入場者のために毎月、一時間のネタを二本立てで実施した。これを結果的に三十七回続けることになった。

第一回の演目は(一)「女子大のユーモア特論」(二)「シリーズ 家族カタログ①《時事問題としての家族・子育て》」

そして開演までの時間つなぎにと、毎回配布したのが「仕事場D・A・N通信」という名のミニコミ小冊子。中味は「木陰の物語一篇+先月の私の活動日誌」だった。

ここではその日誌を掲載し、第一部同様に、その時間を今の目で見つめ直してみる。一昔以上前のことではあるが、昔話にはしないのを身上に書き始めてみたいと思う。

*

2001年4月から、私は立命館大学大学院応用人間科学研究科・家族クラスターの教員になることになっていた。1998年に京都府を退職して、ワークショップをしたり、相談室のカウンセラーをしたり、いくつかの大学の講師をしたり、初めての単著新書を書いたりして3年、様々なことが現在の形に向かって動き始めた年だったとも言えるだろう。

2014/02/15

では、2001年春三月

3月★日 和歌山県山中にあるフリースクールを見学した帰りだと中島弘美さん（本誌連載中）が来訪。私立全寮制、週末帰省方式の学校である。イギリス・サマーヒル（フリースクール）の日本版。今春、高校卒業生が出るそうだ。その人たちの十年後が、学校理念の成果となるだろう。ここは不登校や非行生徒を集めたタイプの学校ではない。在校しているのは、親が比較的裕福で教育に意見を持った家庭の子という気がしたとか。はたして今後日本に、もっといろんな学校が出てくるのだろうか？でも、学校教育制度っていつも、経済的社会的階層とリンクしているから…。

確かなことが言えるわけではないが、こう書いた時と比較して今、日本の学校に関する話題展開は更に悪く変わってきていると思う。

定着した不登校問題は相変わらず動かない。その後、学級崩壊や発達障害など、次々に新しい事態とキーワードが登場し、スクールカウンセラー配置

の十数年を経て、スクールソーシャルワーカーも配置されている状況がある。

いじめの温床のようにメディアが書き立て、警察や市長までが口を出す状況に、私が住む津市の中学校は追い込まれている。良くなったことなどないから、更に**専門家と称するトッピング**が現場に配置されていくのだろう。（これが大したキャリアなどない、新種の一人配置専門職）

長期ビジョンなど持てない教育系公務員が、短期で異動してゆく現場に、確かな教育システムが生まれる気配はない。

そんな中、わが子だけはと思う中流以上の豊かな層（最近、中流小市民が大幅に減少だが、大企業のサラリーマンや共働きの教員など、まさにこれ）が、有名私学を選択させてお受験に向かった。子ども達はますます早期から塾通いに取り込まれ、地域の公立校はそこからこぼれた子達の通う場所になる。

地域の力とかネットワークと言いながら、私生活では地域の社会資源である子どもを、隔離してしまうように遠距離通学させる。

そして更に近年は、学校が塾や予備校産業に迎

合である。共同で・・・などと言っているようだが胡散臭さが消えない。現実(日本の受験制度)という身も蓋もないごり押しの言説に、学校の弱腰が透けて見える。

そしてこんな事態になると、政治が教育にあれこれ口を出して憚らなくなる。詳細に関心を持っているわけではないが、道徳教育を正課とか、教育委員会制度の見直しとか、現実を上手く構成できない現任者の力不足が、外圧をつけあがらせている。

3月★日 朝からK I S W E C (京都国際社会福祉センター)で家族面接担当。Sさん夫婦はゆっくりでも何かいい変化を作りつつの日常を過ごしている。積極的に変化をしかけるより、お母さんのテンポに添った面接。久田さん、千葉くん(本誌連載中)らバックスタッフと一緒に昼食。午後はKさん夫婦の面接。次々ととんでもない事件の起こる家族。進級問題はどうなるのか?展開次第だが。

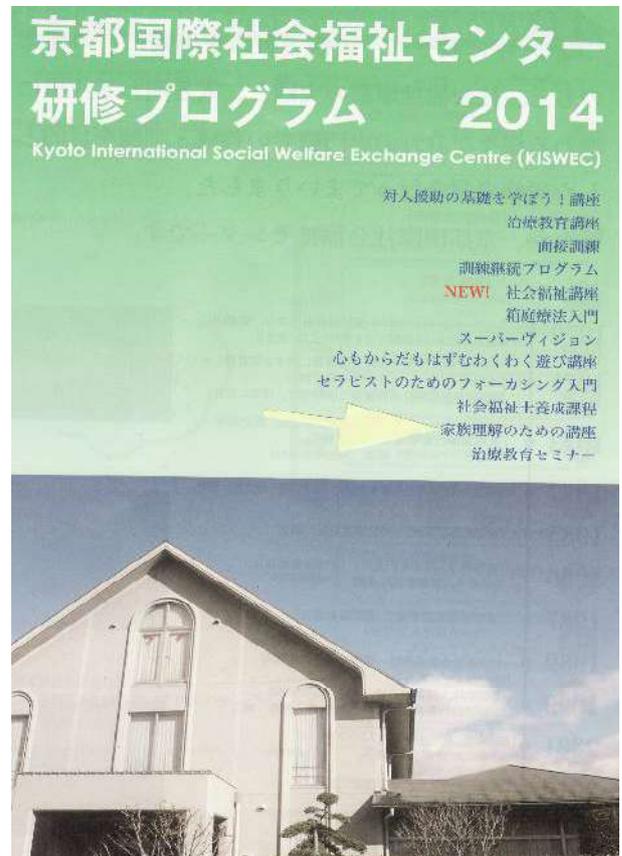
現在に至るまでなかなか軌道に乗りにくいのがK I S W E Cの家族面接室である。ここでの家族療法訓練は25年に及ぶプログラム継続があり、「step1,2,3」、「原家族WS」など多様に安定的に展開している。(K I S W E CのHPに案内あり)

しかしここを常設の家族療法クリニックのような形式にはできないために、研修プログラムに比べて実践の展開はもどかしい。形が整えられない結果だが、常勤専任家族カウンセラーの重要性を思う。昨今の世間は非常勤専門職で溢れているが、そこでは目に見えない不備が重ねられているに違いない。

新たにその職に就く人は、予め奪われているのだから、働き始めてその問題に気づくことは少ない。業務をそういうものだと認識してしまうと、そこからしか新たな言葉は始まらない。

しかし、本来整っていかなければならない形式の不十分によって、業績や担当者のキャリアが定着蓄積しないことは、システムを考える人

間としては気づいておかなければならない。個人の力量に収束してゆく程度の専門職ばかり増やしてゆくのは、世の中や、その業界を壊しにかかっているのと同じかもしれない。



03/★ 奈良市生涯学習センターを会場に、奈良wsプログラム。参加者十九人で順調にすすめる。昼食は明倫館というレストラン。欧風手料理という、なかなかのおいしさ。南さん以外にも意欲的な奈良市の保健師さんたちがいて、継続の匂い。午後は話をちょっと多めだったが、ビデオの見直しと、名付けのエクササイズ。帰路の近鉄特急に乗ったら疲れていた。

奈良のWSプログラムは結局、数回で中断になった。熱心に児童福祉に取り組んでいた南さんが、一般行政職員だったため、畑違いの職場に異動してしまったのが大きかった記憶がある。

地域の継続WSは様々な要因で頓挫する。現在十ヶ所以上の地域で、続いているのは奇跡的だ。何でもそうだが、上手くいかない理由は山のようにある。

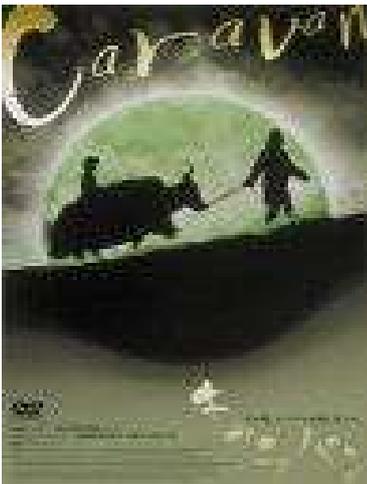
上手くいくとは、それを乗り越えて、持続が形成できるといふことである。

失敗にではなく、成功に学ぶべきところが多いはずだが、世の中の人たちは上手くいかない話の方に関心が強いようだ。また、システム・枠組みを作ることがいかに大変かということに気づいていない人も少なくない。

経済学用語に「フリーライダー」というのがあったと思うが、仕組みへのただ乗りのことである。当然、システムそのものも利用者からの還元、フィードバックによって支えられている。

利用者のコンテンツの不備から、システムそのものが崩れることも少なくない。そしてそこには大した思考も反省も働かず、元の本阿弥に帰す。組織や仕組みが、こんな事を繰り返しているのを見ることも多い。

3月★日 昨夜は珍しく早く寝た。そこで朝も八時半に起床。九時半すぎには、三条大橋のスターバックで鴨川を見ながら住友金属の原稿描き。三月中に予定している作業のはかどりが順調なのでゆったり気分。今月は出張仕事が比較的少ないので、自由になる時間が多い。



で、ちょっと迷っただけけれども、映画「キャラバン」を観ることにした。小劇場ゆえ最前列に座っていたのだが、二列目でガサガサ音がする。同じように気になるのだろう、四席向こうの女性がちらちら後を見るが止まない。合図してみたが、画面に集中しているのか伝わらない。だいぶ時間

は経っていたが、気になって仕方ないので、ふりかえって身を乗り出し、カバンのなかの食物を摘み出している手をつかんだ。怪訝な顔をするので、この音がうるさいというサインをした。

その時わかったのだが、耳の遠いお爺さんだった。だから自分のガサガサが気にならないのである。何だか気分が迷惑モードじゃなくなってしまい、同じように耳の遠くなった父親を思い出してしまった。

字幕映画はストレスなく観られる楽しみなのかもしれない。昼一番の映画を、ものを食べながらの鑑賞。それくらいの自由があっても良いのかもしれない。

耳が遠くなると自分の声が大きくなったり、他人の話が聞こえにくいので、自分の話す量が増えたりする。私など、そうなる前からこれだから、だんだん耳が遠くなるとどうなってしまうのだろう。

映画館のこの手の迷惑行為は時折経験する。自分のたてるガサガサ音は案外気になっていないものだ。だが、「迷惑」を言い過ぎると、とても他人のミスに手厳しい社会になってしまう。

私自身はミスの少ない方のタイプ(最近、なくし物が増えてきたが)だと思うから、気をつけないと、とても暮らしにくい、不機嫌な世の中作りの一員になってしまうのだろう。

住友金属(社内報「鉄っ子」の仕事)というのは、三十年近く続いたイラスト仕事。新聞などの漫画連載は、半年、一年で変わってゆくのに比べると、安定した原稿料収入として有り難かった。ただ内容は全く注文通りなので、作品として残ることはなかった。

3月◆日 年度末の空気のせいだろうか、時間があっても、次々雑事に追われている。坂口(税理士で義弟)に作ってもらった青色申告書を大津税務署に発送。2000年も一年、順調だったということだ。

「児童心理」5月号原稿の校正。編集担当者が講演会の告知欄外掲載を打診してくれる。トーク2001のチラシ・イラスト入りを完成。夜は川

崎君（本誌連載中）が来る。四方山話が楽しい。

1998年三月末で公務員を辞めて独立し、2000年度の確定申告で、まずまず順調だと書いている。

この段階ではまだ立命館大学には勤務していない。50歳からフリーで働き始めて丸三年。今振り返ると、よくぞあの時思い切ったものだと思う。そして一度の後悔もなく現在を迎えられていることには感謝である。

「あの時でなければ出来なかった・・・」、後からそう思うことは沢山ある。「あの時、思い切ってやっておれば・・・」と思うことも沢山ある。するも、しないも、自分の選択だからね。

月刊誌「児童心理」に連載することになったのも、トーク2001を開催する事になるのも、みんな思いがけない巡り合わせだった。

3月◆日 朝、妻から昨日おこなわれた娘の声楽の先生のところの試演会の話を書く。年長者が多かったらしいが、こと葉はなかなかの評判だったとか。仕事場にきても日曜日だからのんびり。

「季刊発達・春号」の校正をしてイラストを描きあげて発送。仕事場D・A・N通信の製作準備をはじめ。

帰宅夕飯後、アーカス（自宅近所の映画館）に電話すると「小説家を見つけたら」をやっているというので出かける。いい映画だった。「**第一稿はハートで書け。推敲では頭を使え**」に、わが意を得たりの気分になる。

それにしても今年は一月から、映像に淫している。そうしようと思っているところもあるが中毒はこんな感じかとも思う。

気になるのは、この頃映画館で上映中に必ずトイレにいきたくなること。癖になってしまっただけで二時間もたない。直前にトイレにいったら、心配になる。他ではそんなことはないのに、映画館だけである。夜になるとおねしょの心配していた小学生時代のようなのだ。

そうか、こんな時期からもうトイレが近くなっていたのか。最近のことだと思いこんでいた。今も夜中にトイレに目覚めることはほぼないのだから、確実に心理的なモノである。

それはさておき、ほんの十二、三年前なのに、あの頃はまだ映画の上映情報は「ぴあ」か、新聞告知か、映画館の電話サービス頼りだった。

一昔遡るだけで、社会のインフラがゴロツと違っている。産業構造も大きな影響を受けてしまう。終身雇用制を維持し続けた日本社会の労働慣行が立ちゆかなくなった背景だ。

そして新しい、労働者の権利擁護システムに向かわず、ぼっさり大量の非正規雇用化を押し進めた。その結果、給料の安い、雇用の安定性のない、専門職パートタイマーも世に溢れることになった。

これに手を付けることを黙認したのは、当時中堅どころにいた団塊世代の我々だろう。

「自分たちは既得権を確保しておいて、次世代に厳しい条件を押しつけたベビーブーマーめ！」と、世界中で思われている。

年寄り達も、振り込め詐欺や投資詐欺にあたりしていないで、下の世代のために出来ることを真剣に考えなければ駄目だろう。アンフェアな変化を是正するために動こうとしない持てる者は、加害者である。

娘の声楽の話に私はほとんど関わっていないから知らない。ミュージカルを勉強したいと言い始めたときに、ならばと動いたのは妻だった。私はそんなことに意味があるかどうか・・・と思っていたが、さすがは母親だった。姉の知人声楽家を紹介して貰い、付き添ってレッスンにも行った。後から考えると、これは有益に機能したのだが、その時にそう思うことは難しい。

チャンスのありそうにない我が子の未来の夢に、効果があるかどうかなんて問いたさず、目いっぱい可能性を拡げる努力に付き合う人を偉いなと思う。私には出来ないことのような気がする。

そういう有り難い親の下で育つ人もあるが、そんな親ばかりではない現実もよく知っている。

3月◆日 毎年一度、年度末に描いている京都府知的障害者更生相談所の機関誌 t a n t o 用のイラスト原稿をフィニッシュ。

夕刻、妻が車で迎えにきてシメオン夫妻宅へ。いよいよスイスへ戻れることになって、お別れホームパーティ。深作さんと早樫君(本誌連載中)夫婦が一緒。スイスの家庭料理(フォンデュなど)をご馳走になる。出かければ楽しい時間を過ごせるのだが、私はこういうパーティのような場には出無精である。限られた馴染みの場や、心地よい一人が好きだというのは私達夫婦共通している。

退職後もしばらく、知更相のニュースレターイラストを描き続けていた。この機関誌は自分が在職中に創刊したものだったから愛着があった。しかしそんなものもドンドン風化して消える。発展解消するのではなく、消えてしまうのだ。

京都府での組織仕事の中に今も残っている私の発案もあるようだが・・・。

公務員は組織で仕事をするのだと言われ続けたが、仕事の出来ない人を組織が守ってしまうところもあると思っていた。言ったらやらなければならないから、「触らぬ神にたたりなしだ、私の在職中は騒ぐな!」、と本庁係長だった男から、暗にたしなめられていた気がするのは被害妄想かな?

シメオンさんは第一期の KISWEC 家族療法訓練の先生である。先ず通年で二年間、そしてその後のプログラムで、繰り返しお世話になった。

スイスへ戻れることになり、訓練の後を継ぐ者を募られた。そして通年コース並びにWSを私達(団、木村、早樫)が引き受けた。この勧めに応じたことが、その後の私の人生全体の展開に繋がっている。

シメオンさんはそれから数年して再来日され、又一緒に仕事をするようになった。そして、この時はいよいよ、完全に日本を引き払うことになるお別れの会食だった。

3月◆日 朝は相談室。午後、立命館大学へ。大学院の「家族クラスター」担当者三人、第一回の打ち合わせである。学而館の場所が分からず焦る。村本邦予さん(本誌連載中)に初対面。二時間ほど新スタートのプランなど話し合う。仕事場に戻って、家族面接中のKさんの学校の担任と生徒指導の訪問を受ける。

そうか、この時が村本さんとは初対面だったのだ。中村正さん(本誌連載中)と彼女は多少面識があり、仕事上の関わりもあったらしい。私とは全く接点のなかった二人と、この時の遭遇から14年、結果的に随分長い付き合いになった。出会いとか相性というのは不思議なものだと思う。

3月◆日 隔月に開催する日曜日の「仕事場D・A・Nミーティング」。古川くん(本誌連載中)、久田さん、千葉くんの三人が出席。話題の一つ、「性教育の話がセクシーじゃない」ことについての議論が面白い。あつという間に時間が経つ。

公務員退職前に、京都市内の便利な場所に、ちいさなマンションを借りておいた。1998年4月1日、仕事場D・A・Nと名付けてスタートしたが、ここで開業する気持ちはなかった。

場所を設けたのは、京都府を辞めて一人仕事になる中で、近接領域の人たちと交流できる空間を確保しておきたかったからだ。今はもうやっていないが、この隔月日曜日の午後半日かけたフリーミーティングも結構長く続いた。

組織業務なら会議やミーティングが必然だろう。しかしフリーになって動き始めると、ドンドン孤業化していく気がした。ネットワークといいながら、公式の場でしか会わなければ、公式見解にしか触れることは出来ない。非公式の集いの持つ意味は大きい。

この長く続いた集まりは、徐々に参加者が増えて7、8人が集まることも多く、遠くから来る人もあった。本誌16号から新連載の大石仁美さん

の病児保育所計画を話し合ったのも、このミーティングだった。

3月◆日 今朝の家庭裁判所の新件は、あまり一般的な訴えではない。変なファクターが入ると、双方が変になるのだろう。

退職して直ぐ、家裁の調停委員の仕事を手野田正人さん(花園大学)から打診された(野田さんは今、立命館大学院で同僚だ)。関心なかったし、思ったこともなかったが、五十歳そこそこの男性調停委員が欲しいということと、心理臨床経験者という二点から、強く求められて受けることにした。結果的には興味深い経験になり、五年余り、その後、参与員なるものも併せて引き受けることになった。

親権問題や離婚、DV等、児童相談所時代に養護問題として遭遇していた家族に、夫婦として数多く会った。そしてここで会うのは、児相時代も経験がなかったわけではないが、それより多くの嘘つき達だった。

結婚の破綻というのは、いきなり元の赤の他人に戻るプロセスだから、それぞれの親世代もつるんで、児相のような親子関係の問題解決の場よりも、更に誠実さは蹴散らされていた。

3月◆日 朝は相談室勤務。Sさん夫妻来談。ニコニコである。五年間不登校だった娘が、受験してT高校に合格したのだ。本人も不変だったろうが、よくやった。親を勇気づけて、次は妹の課題にも取り組みを。

午後、決まっていたS県での講演が、相手方の都合で日程変更の連絡。しかしその日程が合わず、苦心の末、中止。夜はK I S W E C月例SVプログラム。参加者から事例提供二件。

不登校、引きこもりケースには数多く会ってきた。家族を対象に問題解決を考えるようになってから、見守って待つだけのようなことはほとんどしなくなった。

一律になどとは思わないが、家族力動に焦点を当てると、何かできることはあるものだった。そしてたくさん家族の課題を軽減、解決出来てきたと思う。

世の中は相変わらず不登校、引きこもりからの長期化課題を親に抱えさせたままだ。教師、援助職者、その他の専門家は、そう遠くない日に手を引く。永久担当者など居るはずがないから、仕方ないことだ。そして最後に親が残って、見通しもない長い道の子どもと歩むことになる。

他に出来たことがあるのに、なぜこんな事態を懲りもせずに量産し続けているのか。カウンセラー、相談員、ワーカーなどと名乗っている人たちに問いたい気持ちが今もある。

そしてそんな業界を形成して、そこが飯の種になっている大学教員にも苦言を呈しておきたい。

私達は内面や心だけで生きているわけではない。積極的に何とかしようとする努力を、無神経で強引な業だと批判しておいて、見守りのあげく、最後には手を引いてしまうのはいかなものか。

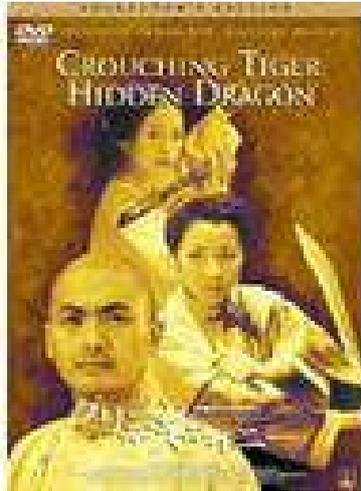
人はなぜ思春期のつまづきを、一生の課題などとしてひきづらなければならないのか。片付くものもあることや、そこから新たな人生が拓けることを、なぜ軽率なことのよう語るのか。我が子に長い苦難の道しかないなどと、言わなくても良いのではないかといつも思う。

3月◆日 昨日から読んでいる宮部みゆき「模倣犯④」、今のところまだのめり込みがない。DAN通信を完成させ、折って発送準備。講演会の告知、4月23日からの「ぼむ」漫画展(大阪・現代画廊)のこともあり、関西エリア分を先に発送。

広島震源地の地震、思ったより被害が出ていて驚く。広島市在住の岡田さん(本誌連載中)から無事だが、家屋被害あり…とのメール。京都ではほとんど感じないくらいだったので、神戸の震災時より鈍感だったが、あの記憶がみんなにあるから怖かったろうと思う。

ちょっと忙しいのだが、みなみ会館のレイトショー「グリーン・デスティニー」を観にゆく。ア

カデミー作品賞候補になっていることには、少々違和感がある。でも、確かによくできた映画だと思う。ワイヤーワークも凄い。ああいう技術を駆使できるのは中国映画だけだろう。「初恋のきた道」のチャン・ツイイー、まったく違った役だが、キリッとしている。



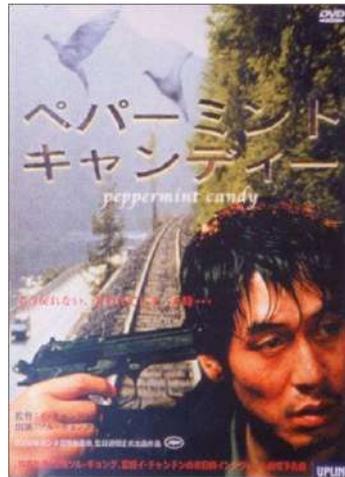
好きな映画を観る。好みのものや良かった映画のDVDを購入する。好きな本を買って読む。時には、買ったまま置いておく。こういう贅沢が出来るようになった。これ以上の贅沢を思いつかないから、欲望を満喫できている。その結果が仕事場や自宅の壁面を覆い尽くす。

「断捨離」の言葉を目にすることが多くなった昨今だが、そんな気はさらさらしない。好きなものに囲まれて、許されている時間を満喫したい。本の背表紙それぞれに、思い出や意欲、後悔が張り付いている。後始末のことを考えるより、まだまだ前のめりに好きなものの世界を満喫したいと思う。

3月◆日 通信の発送を済ませてしまいたくて、つけっぱなしのTVの横で、ひたすら折ってシール、切手を貼って、ほぼ400通の発送準備が済んだ。

一日TVを見ていると、ワイドショーでいろいろ言っている人のレベルがわかる。そしてもう、マスメディアのコメンテーターはやめておいたほうが賢明かなと思う。何にでも意見を持ってしまおう出演者の恐ろしさ。

夜中、新作ビデオ韓国映画「ペパーミント・キャンディー」を観る。時間をさかのぼってゆくことで、結末の哀れさや無情がひしひしと伝わってくる映画である。まるで、お葬式の時に故人の思い出を、それぞれの時代を共有した人が口々に語るような作り方。ちょっと感動的、いや大いに感傷的だった。



ここで書いている通信は、「DAN通信」。手作りの郵送で四百部余りを発送していたモノだ。今ならツイッターやfacebookで簡単にメッセージや情報を届けることが無料でできる。

しかしこの頃は、制作して、コピーをして、封入して、切手を貼って、投函する。手間暇コストを考えると、よくやっていたモノだ。

当時、ラジオや希にTVにも出演していた。そして文化人枠のコメンテーターに分類されつつあった。自分を大事にするなら、そんな場でコメントしたり、振る舞ったりするのは危険だと感じていた。他人に嫌われたくはないと思ってしまう人間だから、余計に用心が要ると思っていた。

映画「ペパーミント・キャンディー」は韓国の苦い名作だ。TSUTAYAレンタルで観たのに、後日DVDを購入した。そして、家族療法学会誌の連載「連想映画館」でも取り上げて長い文章を書いた。

3月◆日 4月早々に娘がいよいよ東京の専門学校に出発する。その引っ越し荷物も家を出た。

父親として、はなむけのメッセージを何日かかかって書いていたのを完成させる。それを三年前、

自分が独立して仕事場D・A・Nを構えた時、挨拶状に使った春色の紙にプリントアウト。出発の朝に手渡すつもりである。

今夜は祖父母含めて一家七人で本宮の家に集合。長男の東京進出と、長女の入学祝いの宴。就職して家を出て、独身寮住まいの次男。このフルメンバーが揃うのは最後になるのではないかと思う。

父は八十四才だし、母も七十九才である。居なくなる順番さえ入れ替わったりしなければ、幸せだと考えよう。

父は八十八歳、母は八十六歳で亡くなった。四年後と七年後だ。だからこの日の後も、何度かは正月などに一家七人が揃うことはあったと思うが、家族は発展的に散らばり始めていた。

娘は未だ自分がどうなるのか、皆目見当も付かない状態で、「ミュージカルの勉強がしたい」と言って、大学ではなく、舞台芸術学院という専門学校を選んで東京に出発する四月だった。

娘に宛てた手紙といらのは、ずっと昔、付き合っていた女性の妹に、彼女が厳しい状況に直面したときに、父親が手紙を書いた話をしていたのを覚えていたことだ。いつかそんな事があつたら自分も思っていたが、ここで実物になった。

そして私もこの4月から立命館大学大学院の教員になることになっていた。振り返ってみると、沢山の出発が交錯した春だった。

編集後記

- 当然のことながら芸人ではありません。藝と呼べるようなものの持ち合わせはありません。ならば有益な情報かと問われても、ためらいはあります。「何なんだ？」と聞かれると、説明に困るのです。「面白いのか？」と問われたら、面白いと思ってもらえるよう努力したいと答えます。多くの人を集めようとは考えていませんが、来てくださった方が楽しんでいただけたら、「人生は表現行為でありエンターテインメントである」と考えている私の本望です。
- ◆トーク2001に来ていただいた方に、何かお土産を。そう考えてつくったのがこの冊子です。昨年の第一回目の講演会でも同様のものを作りました。多くの方は既に、「仕事場D・A・N通信」をご存じだと思います。ご覧になったことがない方は、お帰りになってから、「仕事場D・A・N」に住所氏名をハガキでお知らせください。最近号をお届けします。

トークライブ2001用

仕事場D・A・N通信 第一号のあとがき

ここで書いている第一回目の講演会は、「不登校の解法」文春新書 を発行したときに、早樫さんと古川さんが開催してくれた出版記念講演会。(於・ハートピア 京都)

大学院で教員をすることに誘ってくれた中村正さんは、この講演会で私の話を初めて聞いて、後日仕事場にやってきた。

そうそう、この新書「不登校の解法」は知更相時代の同僚CW芦田さんの弟さんが、文藝春秋・新書部にいるという話から、出版への道が拓かれていったのだった。

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第二回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

♪2014年前半は過去のあれこれを振り返っても、ことさら慌ただしい半年として印象に残ることだろう。年末あたりから浮上していた話が立て続けに動いて、2月末からロンドンに、3月中旬にはNYに、下旬には台北に出かけることになった。そしてGWには、雲南省・麗江と上海にでかけた。

それぞれ目的、理由があつてのことで、思いがけない発見が多々あつた。同行したのは皆、仕事関係者というより長年の友人達。気の合う仲間と長旅ができるのは、私の人生にとって格別に恵まれたことだと思う。

考えてみると、強い権限というのを持たされた立場にいたことがない。人事権など持つ前に公務員組織を離れることになったし、今も大学教員としての権限や義務は制限されていて少ない。専門分野の一員として機能はしているつもりだが、その業界団体の年長者として背負わされている立場やノルマもとくにない。(自覚していないだけかも知れないが)

イメージとしては独自商品を専売する個人商店主といったところだ。だから対面するお客の信頼が一番大切なことになる。そして「あきない」と言われるように、細く長く飽きずに現在に至る。

もしここに我慢が入りこむと、ストレスになってしまう。そうではなくやってこられた50歳以降の人生の助走が、この連載の時期にあるのだろう。

今、全国各地(現在10カ所)で長年に及ぶ「家族理解」の地域プログラムを実施中だ。お互い歳を重ねながら、引き続き呼んでいただける間はせつせと通う。いずれまもなくなくなる日は来るのだから慌てることはない。この仲間も時代を共にする時間の旅人同士である

旅では日常を離れたところで、長い時間一緒に過ごす。当然ハプニングもある。それを一緒にやり過ごす。お互い様の迷惑の掛け合いを了解して時が過ぎる。これが9時～5時のビジネス時とは違った時間の共有しかただ。

自分が歳をとっていくことを否定しない。物忘れも多くなる。新しいことが頭の中に定着しない。そしてその内、知っていたはずの古いこともこぼれ落ちていけよう。覚えている間にしか書けないことがある。

正確な情報、知識なら、然るべき場所をたどれば誰もがたどり着ける。だが、私の主観による繋がりや関係は、私にしか再現できない。ここに細々と書いている事もその内、私の中からも消えてゆく。だから自分のために、正確に書き残しておきたいと思う。

2014/05/25

2001年4月(十三年前)

04/◆ 日曜日、例によって、遅くまで寝ていてから仕事場D・A・Nへ。特にすることもなく、コミックス「クロサワ」を読む。映画「トラトラトラ」を降板することになった経緯を描いた作品。黒澤明については神格化されたことしか言っではいけないという日本の雰囲気には悼さすものとして評価したい。少なくとも、映画文化の中の人には書けなかった物語だろう。

トーク2001の第一回の中身を練る。自分のことをよく知ってくれている人たちを前提にネタ作りするのは危険だと思う。今のところ電話予約は10人だと聞く。昨年の新書「不登校の解法」出版記念の会を考えると十分の一。何人入るかじやなく、コンテンツ作りの機会にしたい。

独立して丸三年。ゆっくりしているなあと思う。最近の慌ただしさを少し反省する。でも、まあ元気で動いているのだから有り難いと思わなければ。忙しい、忙しいは趣味であり、自分自身への自慢だ。

04/◆ 朝、こと葉(娘)に声をかけて家を出る。今日で子ども達と一緒に暮らしが、終了。

仕事場で雑用を済ませた後、草津へ。性教育研究会の人たちの依頼で本のかたちになるよう、漫画家・外村晋一郎君に声をかけて続けてきた作業が大詰にきている。本のタイトルは「ちんちんがやってきた」一男の子のお母さんになったら読む本一に内定。この編集会議は現役の女性教員4名と外村と私で続けてきたのだが、学ぶことが多かった。同時に、月並みな感想だが性情報の氾濫にもかわらず、性教育はマイナーをなかなか脱出できないだろうとも思った。

記憶になかったが、娘が東京に出発するのを私は見送らなかったのだな。旅立ちに向けて書いて渡した長文の手紙データが今も私のPCの

なかにある。

娘が新幹線で読んで泣いたと語る文面を今読むと、私なりに頑張っていたのだなあと思う。

この性教育本は現在も継続販売されている。当初企画の進んでいた出版社で出せなくなって、知り合いの編集者に紹介してもらった別の出版社から出たのだった。この時一緒に執筆、編集作業をしていた寺田さんはまだ若いのに癌で亡くなった。

出版については、締め切りや約束を守らない学者先生の話をよく聞かされた。出版契約書なども、ほとんど交わさない業界慣ゆえか、約束を反故にされても泣き寝入り。

でも逆に出版を約束しておいて、大方書き上げた段階で、難しくなると聞かされる経験もこの時の他に、私はもう一度ある。本が売れなくなってきて、出版社も厳しくなってきた頃だったかなあ。

04/◆ 典子(妻)は娘を送りだしてほっこりしたのか、眠っている。私も朝は特に用件がなかったのでゆっくり。その結果、世間とはかけ離れた火曜日の朝である。

仕事場に来て、ICHIROのマリナーズデビューをBSで見ながらあちこちのワークショッププログラムへの返信を片付ける。

トーク2001の電話申し込みが20人になったとFAXあり。一昨日10人との報告があったから、担当さんは喜んでくれているだろう。「木陰の物語」新作を描きださなければならないのだが、まだノリがない。月刊「児童心理」の連載校正FAXはすぐに返信。

夜、映画「あの頃、ペニーレインと」を見る。青春ドラマである。思い入れの多い人がたくさんある物語だろう。私には普通。

妻は「空の巣症候群」にわりと直ぐになった。そして回復したと思う。私は、そんなことにはならないと思っていたし、実際ならなかった。それが現れたのはずっとずっと後のことだっ

た。その時のことは「家族の練習問題 第4巻」の前書（以下に掲載）に書いた。

＊

三人の子ども達が順に家を離れた時、かねてからの持論通り当然だし、ありがたいことだと思った。ことさら寂しいとも思わなかった。

妻は三人目が高校を卒業して家を出た後、「空の巣症候群だと思う…」といて、しばらく落ち込んでいた。私がいあまり反応しないのは、子育てにさほどエネルギーを費やしていなかったからだと言われ、そうかもしれないと思った。そして自分は冷たいところがあるのかなと思っていた。

しばらく後のことだが、子ども達はそれぞれ独立し、関東エリアに住むようになっていた。東京出張の折には、時間が合えば食事に誘い、近況を聞いたりしていた。

久しぶりに会って、元気な様子を確かめ、楽しく話して食べて、良い時間を過ごして別れた。

そしていつも利用するビジネスホテルに着いて、部屋のブラインドを閉めようと深夜の東京のビル群を見ているうちに、なぜか強烈に寂しく、つまらなくなった。「会わなければ良かった…」と突然思った。それぞれが元気で頑張っていることが、なんだかつまらなくて、どうしようもなくなった。わけの分からない感情だった。

三人の子がそれぞれ、みんな自分の場所で確実に歩みを進めていた。親として、これ以上有り難いことはないと思っていた。なのに、この感情はなんだ？と戸惑った。

その後も、子ども達に会って話すと、ホテルに戻ってからこんな風になることが数ヶ月続いた。そして、半年ばかり経って消えた。

ずっと後の事だが、このことを思い出してある人と話していて、これが私の空の巣症候群だったのかも知れないと気づいた。

私が居なくても、みんなもう大丈夫だと思えることが、そんな自覚はなかったのだが寂しくて堪らなかったのだろう。

まさか自分が…と呟く出来事は少くない。あの時の私は、まさにそれだった。

＊

04/◆ 夕刻からシメオンさんと佐藤さんの退職の送別会。御車会館で立食パーティである。K I S W E Cの関係者中心のこじんまりした集まり。

15年以上の時間と、今の自分への大きな道標になったシメオンさんとの別れである。佐藤さんはずっと我々のサポートをしてくれていた人だが、この夏から勉強をするためにアメリカにゆくとか。

自分にとっての先生は？と振り返ると、一番実質的な手ほどきをしてくれたのはシメオンさんだ。家族療法の第一歩からをシメオンさんから学んだ。

将来への目標をたてて、着手するところを間違えないことや、妥協しないことの大切さを教えられた。内容と同じく形式(枠)も、適切に設定できることが、未来に繋がることを学んだ。

耕した場の十年後に、実りがあるのを当然だと思えるようになったのは、シメオンさんからの学びだ。その実りの一つが自分だと思える教育を受けたのは良い経験だった。

04/◆ 漱石「坊っちゃん」の朗読（風間杜夫）を聴きながら「木陰の物語・好きになる力」のペン入れ。風間杜夫の声がとっても作品の空気に合っていて楽しい。



この頃、日本文学の朗読CDを購入して、多数の日本近代文学の古典を聴いた。そのおかげで印象に残ったものも多い。幸田露伴「五重塔」など、自分で選んで読むことはなかつたろう。

「好きになる力」はこの時に描いたのか。遠い昔の話だなあ。

04/◆ K I S W E C定例の面接日。朝のSさん夫妻、無事引っ越しの知らせ。M駅近くに、自分たち、息子、娘の三軒のマンションを確保。この線引きからどんな新しい暮らしが生まれるか。

昼食を観察者と「さと」へ。午後のKさんの面接、3時キャンセルの伝言に続いて、5時から可能だろうかとの打診。空いていたので入れる。それまでの間、スタッフみんなで雑談。なかなか楽しい。

最近は少なくなったが、月に一度の面接日。次々とケースがあり、私と早樫君が交代でセラピストを担当していた。

この家族は「変化」に分住を選んで実行した。

04/◆ 大学院事例研究クラスター全員集合の初日。60人ほどの学生と10数人の教員の顔合わせ。講義形式の授業はもう始まっている。「事例研究」は各クラスターにわかれて、15人ほどの学生に3人の教員によるチーム・ティーチングである。今日はその全体のオリエンテーション。

終了後の懇親パーティでは思いがけずたくさん学生の学生が話し掛けてくる。色々なつながりで私を知っているのだ。とりあえずなんだか嬉しい。自分は信じているが、他の人はわからないかもと思っていたことが、ポピュラリティを持ってきていることを発見。

Mさんのオープニングの話は、とてもよくわかった。そして私が求められた理由を他の人から耳にした貴重な機会のような気がした。これからも自分の代わりに忠実にやっていくことだ。

十数年前、大学院の創立時がこのようなであったことの記憶が薄い。一期生にはあちこちで活躍中の人が多い。それ以降との比較が正確にできるわけではないが、今も顔を合わせる機会の多い学年だ。

04/◆ 着々と新年が動いている。四時からF井くんがケースSVに来て、事例ではなく、心理療法全般についての質問をする。心理学を体系的に学ぶ機会がないまま、こういう実務世界に教育サイドから入ってくる非常勤労働者の安定基盤のなさを思う。

夜、八時すぎに仕事場を出て、映画「ハンニバル」を観にゆく。基本的に原作どおりで、よく作ってあるのだが、だから面白くなかった。ラストはまったく異なるエピソードにしてあって、そこだけが印象に残った。しかし、あの機内食のエピソード、原作で読んだのか、ほかでの記憶なのか……。

F井君……この頃から今もだが、新しく登場する専門職の仕事デザインがイージーなことを案じていた。食べていけない、実家住まいでなければやれない、来年の雇用はどうなるか不明。こんな専門家がどうやってキャリアを重ねていくというのか。

Dr. ハンニバル レクターの話はさっぱり覚えていない。機内食のエピソードって何だろう。再見するしかないのかな。でも残りの人生、時間に限りがあるからなあ、などと、いちいち思うこの頃。

04/◆ 読売新聞夕刊の死亡欄を見て驚く。頼藤和寛さんが亡くなった。ガンである。子どもが4人あったのではないか、まだ成人ではない子も。何だか自分にも起こり得る五十三才（同い年）の死である。いま発売中の文芸春秋に、頼藤さんの手記が掲載されている。そして、彼の遺作が文春新書で四月二十日にでると告知。まだ死ぬつもりなどなかっただろうに。でもいつ死んでもおかしくはないのは、誰にもあてはまることだ。

夕刻から草津の教師勉強会。境界例の診断をどこかでもらっている中学一年生のリストカット少女の事例。オープニングトークも長目に。質問もでて余計に長話になる。先月協議した昏倒する子の事例は、小学校卒業後、中学校には元気に通

学しているとのこと。

頼藤さんは大阪府中央児相の精神科医として、良い仕事をしておられたのだと思う。他府県の者にはお目にかかる機会も限られたものだったが、近畿の研修会でご一緒してから、大阪現代画廊でのマンガ展にも顔を出していただいた。そうか、13年も前になるのか。早逝した人のことを思い出すと、私は長生きして何が出来ただろうかとい



つも思う。

04/◆ 朝から今夜の第一回トークライブ2001の準備。次回以降のチラシ製作、そして内容の詰め。勝手に始めたトーク2001がいよいよスタートする。

いったい誰が来てくれるのか、不安がなくはなかった。しかし一方、京都駅前ルネッサンスビルの会場であるにもかかわらず、会場費負担が入場売上額に対する比率であるため、赤字になることがないのはおおいに勇気づけられた。

会場一番のりと思っていたら六時にすでにTさんとA野くんが来ていた。私が家族療法訓練を継続しているK I S W E Cの講座パンフレットを配っていいかといわれていたのである。

月刊DAN通信と重ねて参加者に受け取ってもらう。七時スタートの段階では二十人不足だった。五分だけ遅らせてもらって開会。この段階で三十数人、開始十分ほどで、五十人不足の参加になり、最終的には配布パンフレットの残部数から関係者も含めて五十六人の参加だったと判明。

Mさんが同僚とみえていたのは意外。ニコマの講演演題、それぞれまずまずの出来だったと思う

が、家族カタログのほうはもうひと工夫あってもいいかな。

終了後、受付を手伝ってくれた典子と浜大津に戻ってカプリチヨーザで夕食。疲れていたが、ほっとしてもいた。やはり多くの人に来てくださったことで、安心したところが大きい。

話したくて、伝えたくて仕方ないことが沢山あったのだろう。その情熱は今よりも強いだらう。

当時、講演を頼まれることも少なくなかったが、リクエストの内容は基本的に類似したものだった。「不登校の解法」(文春新書)がそこそこ売れて、この関連の依頼が多かった。それも悪くはないが、もっといろんな話がしたかった。

聴き手は求めていなくても、立川談志の事とか、一コマ漫画との出会いとか。そういう話はこんなかたちで、了解してくれた人の集まりで話すのが、双方に一番ストレスがない。

それにしても、入場料1365円とって、50人以上って、よく集まってくれたものだと思う。授業でも頼まれ講演会でもない、演芸会に近い。

04/◆ 土曜日、今夜は仕事場に泊まり込んで住友金属kkの仕事や展覧会の作品づくりをとっている。「児童心理」の今月号もまだ書いていないが珍しいことだ。やはり新学期早々色々立て込んだせいだろう。その割に効率が悪い。右半身がぴりぴりするのが気掛かり。

午後、久々にジャージに着替えて、御所一周に出掛ける。速歩していると元気になるような気がする。御苑のなかは春の土曜日で、沢山の人が出。戻って風呂に入って、読書して・・・とちっともはかどらない。

公務員を退職して3年。フリーとして立ち回り先や、やりたい企画が固まってきていた。健康のことも考えて京都御苑を歩こうなんて考えてい

た。ウォーキングなんて、何だか自由業だなあって感じのする行動だった。だが、ジム通いも含め、どれも定着しなかった。

加圧トレーニングと朝のウォーキングが継続するようになったのはこの、3、4年のことだ。

04/◆ 十二時頃、仕事場で起床。泊まり込んだわりに効率的ではない過ごし方をしてしまった。ぼむ展の準備をしながらPRIDE 13（格闘技）を夜中に見たりしていたのがよくない。ここにテレビデオを置いてから、つい見てしまうものがふえて能率が悪い。ながらの漫画家仕事の仕方になってしまう。

講演会にきてくれた人やメールの届いている人に返信など。余計な時間がいくらでもすぎる。夕飯には戻って二人で食べる。週一回、日曜日はこうするペースになっている。



その後「スターリングラード」を観にアークスへ。J. J. アノー監督作品。物凄い戦争再現である。戦争が膨大な消費活動であることを改めて思う。気をつけないと、経済の行き詰まりが大きな消費を熱望することになるんじゃないかと思ったりする。映像はすごいと思ったが、話は普通であった。この頃めったにいいなと思わなくなってしまう。

夢枕獏著「神々の山嶺」下巻に入っている。高校時代、山岳スキー部で山に登っていた頃の、関心の持ち方や話していた言葉を久々に思い出す。

格闘技が嫌いじゃない。やってみたいと思ったことはない。誰かのファンだったこともない。でも、結果的にはバンコクのタイ式ボクシングリン

グサイド観戦にまで出かけた経験があるくらいに、選択肢に入ったジャンルだ。

自宅近くに映画館があって、夕飯後、思い立って徒歩で映画を見に行けるのは理想だ。レイトショーも、終映後すぐ帰宅して風呂に入って寝る。

好条件下にあった滋賀県大津市浜大津のアーカスシネマ。唯一の不満は、先にオープンしていたシネコン・ユナイテッドシネマ大津より、椅子がチャッチーこと。どうしてここで金をけちるかなあと思うくらいお粗末東宝シネマズ。

j.j.アノー監督作品はデビュー作「ブラックアンド ホワイト イン カラー」1976年制作を大阪・エキブドシネマ例会で観て以来、「薔薇の名前」、「愛人/ラ・マン」、「セブン イヤーズ イン チベット」、そしてこれとよく見てきた。好きなんだけど、これという代表作のない人だなあと思っている。

「神々の山嶺」は興奮して読んでいた。面白かった。なのに、振り返ってみると夢枕獏著の本を、この後に読んだ記憶がない。氏が釣り好きで、世界の川や海に出かけた紀行文写真集「愚者の杖」は魅力的な大判本だが、買ったまま読んでいない。私もフライフィッシングを10年以上しているのだから、読めばいいのに。

釣りに全く関心のなかった時代、開高健著の「オーパ！」は大興奮して読んだのになあ。

04/◆ 月曜日、文学部の授業「人間関係論」の二回目。満員の教室である。まだ大学の中で落ち着いていられる場所がないので行って帰る。所要時間の見通し甘さとバスの遅れなどで、タクシーに乗ることになる。

授業で、自殺者の話をし、野田正彰さんの「喪の途上にて」のことを伝えると、終了後、本の情報を聴きにくるものあり。自分の周囲に、そういう人がいるとのこと。教室一杯の学生の集中は大したものである。

仕事場への帰路、乗り間違えた市バスのせいで、四条通りに出た。そこでずっと気になっていた大丸のp a p a sにいった。そこで麻の変わっ

たスーツを購入。ズボンの裾仕上げ即日でもらう。

仕事場にもどって住友金属のパンフレットイラスト、仕上げに手間取っている。明日の院でのファーストトークが気になる。

Papas で購入したぶかぶかのズボンはほとんどはなかった。しかし、麻デニム風のジャケットはすり切れるほど着た。破れ目が見えてからも、デニム風なのを良いことに、着ていたかった。しかしとうとう着るのを止めることにして、二代目を求めて papas に行った。同じものはなく、同系のもを買ったがお気に入りにはならなかった。

04/◆ 京都保健衛生専門学校からワンデイWS形式の「人間関係論」をとのリクエスト、承諾書を書いて返送。

同志社女子大(非常勤)の一回目と、院のファーストスピーカーと続けて話をしなければならず、ちょっと気掛かりだった一日。概ね順調だったが、女子大にいま一、作法の見えない娘がいて話のリズムに乗り切れず、時間を少々もてあます。ジョインニングセッションは難しいものである。次週、上手なリカバーが必要。

大学院の方が気になって、少し早めに終了して近鉄に。院では、児童福祉司の配置定数と虐待絡みでの増員状況の府県間格差の一覧を配布しながら、国の予算に見えるエッセ本気度や、社会の浮かれ風潮についてあれこれ話す。

あまずところなく話そうとして、あれこれ小出しになってしまったが、学生も教授陣もよく聞いてくれていて反応もいい。後半は小グループに分かれて話し合い。四人のグループに入り、質問を受けると話がとまらない。

帰宅して夜中の夕食の友にプロジェクトX「液晶にかけた男」を見る。なかなかいいのだが、従来のものからするといま一、押しが弱い。編集なのか、キャラのせいなのか。

あるキーワードを種に、予算獲得や人員確保は行うけれど、肝心のその対象に、効果はいまいち。こういう事を続けているのが、今の行政システムである。それは今に始まったことではない。

04/◆ 夕刻から門真教師家族療法WSのため、京阪大和田へ。早めに出て、うろろうしつつ現地入り。第二クール始まり。F君や第一期の世話役の先生の転勤などで、メンバーは多少入れ替わっているが、参加者の気分は上々。ここには今、K I S W E Cで訓練を受けた人はいない。この状態は弱いのではないかと思っているが、さてどう展開するか。茨木市WSプログラムは類似の状態で、二期で終了したのだった。

この時期に始めた地域の継続勉強会は、中断するものも少なくなかった。結果的に、現在に至る十年以上継続プログラムと、先細りになったモノとの違いがよく分からない。たまたま、運、とでも考えるしかないのか。

04/◆ 朝は相談室。定時制高校に入った子は、久々の学校にカルチャーショック受けつつも頑張っている。

午後、家裁で新件。同居中なのに、裁判所からの呼び出し状で初めて知らされる妻の離婚申し立てという奇妙なケース。

彼女はもう30代になってバリバリ働いているだろうか？お母さんになっていてもおかしくない。時が経つとはそういうことだ。そして、こんな時間を、「登校刺激は与えず、見守ってあげましょう」と言って何も起こせないまま、やがて「ひきこもり」とラベリングしただけで無為に過ごさせ、手を引いた専門家もたくさんいた。

一緒に暮らしている妻に、知らないうちに離婚の申し立てをされ、遅く帰宅した夕飯のテーブルに家裁からの呼び出しが載っているというのは、相当にシュールだ。

04/◆ 朝、ゆっくり目に家を出て名古屋経由で、名鉄・日本ライン今渡駅へ。岐阜県可児市で民生児童委員の研修会で講演。

可児市は住友金属の資源ゴミセンターの取材に以前行ったことがあって少しは知っているところ。犬山市の奥である。150人あまりの出席。まず順調な話になったと思う。年配の男性が多かったので、面白さより、シリアスと意外、納得の展開にする。

女性に比べて男は、歳をとるほど弾け方が鈍くなる。感受性の年取り方に間違いがあるように思う。これと中年の男の自殺の多さは関係あるだろう。

新幹線の車中「永遠に去りぬ」ロバート・ゴダード著を読んでいる。深作さんに会った時、読み終わったからとももらった本だ。深作さんには以前、アゴタ・クリストフの「悪童日記」も教えてもらった。読書を自分だけで完結させてしまうと、どうしても似た傾向のものになってしまう。信頼できる読書人を友人に持つのは幸運である。

京都に帰り着いたのは7時半ごろだった。もう本日は終了と思わないでもなかったが、展覧会の準備を明日、明後日、心置きなくするためには、住友のパンフレットの仕事を今日中にすませたい。



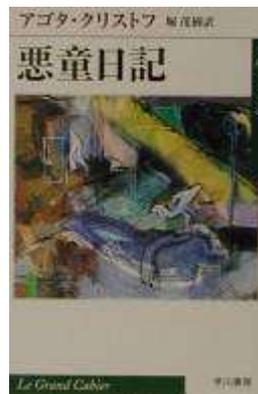
そう決心するために、自分へのプレゼントとして久しぶりにDVDを三枚購入。「グラン・ブルー」「ナイトメア・ピフォー・クリスマス」そして「グラディエーター」、みんな一度は観たものばかり。いつ観られるかわからないが、好きな映画のコレクションが少しずつ増えていっている

のが楽しい。ビデオで見ているのと違う感じがするのはなぜだろう。映像を記憶できている気がするのだ。

仕事場で最終電車ぎりぎりの時間までかかってパンフレットを仕上げ、確認のFAXを送信してから帰宅。

今とは別の意味でよく働いている。

もう亡くなったが、深作みどりさんには本のガイドをして貰った。元々は家族療法訓練のシメオン先生の通訳として毎週、二年間付き合ってた。その後も、通訳としていろいろお世話になった。そして「悪童日記」を紹介された。アガサ・クリスティ?と思ったこの作家が凄かった。



長く続いたレンタルビデオの時代に代わって、DVD時代の幕開けだ。TSUTAYAの並びが刻々変化していた。ビデオの時代には我慢することにしていた映画コレクションを、DVDになって解禁した。

今も続く趣味だが、その結果、死ぬまでに観ることはできないに決まっていると思う量に増えた。でも、楽しいのだから良いのだ。これが道楽というものだろう。

04/◆ 今日、明日でぼむ展の作品の仕上げをしなくてはならない。ひたすら描いて張って彩色して、を繰り返す。この間、朗読のテープをずっとかけていて、「坊っちゃん」CD4枚で全5時間を聴き終える。それから泉鏡花「高野聖」(朗読・佐藤慶)を怪しく聴く。なかなか面白い。

その後、研究者の解説CDを聞こうと思ったの

だが、声の悪いのに愕然。朗読のあとに聴けたものではない。

なかなか明治期の日本文学に手が伸びない。そんな時に朗読の日本文学集を見つけた。そこそこの値がしたが、読む機会のないままになることを考えたら決断はついた。

毎月送られてくるものは全部聴いた。マンガ作品のペン入れをしている時に、BGMとして聴いていると程よかった。

04/◆ 朝、篠原からの電話で、昨日ギャラリー展示したパネルの三分の一くらいが落ちていると連絡があったという。両面テープの粘着力が弱かったのか。急遽対応が必要だが、私は授業なので無理だと断る。画面にピンで穴を明けることになるので、販売も中止しようと思うという。

仕事場に二件、講演の打診。一件は日程あわず、もう一件は、「更正保護」関連で、近畿保護司会の話。6月の夕刻1時間半ほど。引き受ける。

「人間関係論」の授業、教室は一杯。あれこれ話そうとしたわりに、イマイチ盛り上がりの欠ける結果になった。コンテンツが多すぎるのは考えものということ。マンガ展案内状を欲しい人にどうぞと教壇に置いておいたら50枚あつという間にはけた。誰が見に来るかは疑問だが。

いったん仕事場に戻って大阪現代画廊に。近くに事務所を構えている義弟の坂口会計事務所に立ち寄ると、姪の相談をしてくるので思うところを話す。

ぼむ展にはKさんが来てくれた。彼女の新しい仕事展開の相談にのる時間をとる約束をする。その後、Nさんもみえる。

ゴダード「永遠に去りぬ」読了。最初の数ページにしか登場しない人物の影響力を、ずっと維持し続ける力量に関心。人間の持つ、事実認識のうたかた性を看破される気がする。動機をたどれば、事実が見える気も、あらためてする。

04/◆ 文春新書編集部のUさんと久しぶりに話

す。三刷の話をFAX通知受けながら、なかなか直接話せずにいた。

女子大の二回目。ポディワーク取り入れて、なんとか集中させる。だんだん馴染んでくるから、時の働きとは大きなものだと思いためて思う。最初の印象に頑固になってはいけない。毎年のことだから分かって良さそうなものだが……。そのあとは衣笠に駆け付けて大学院の合同講義。Tさんの「応用行動分析」とFさんの「REHAB」の話の50分ずつ。共に現場にいる人なので、具体的で果敢である。

04/◆ ちょっと遅れて16時すぎにぼむ展会場に。Cさん夫妻が来てくださったのに不在であったことが心残り。展覧会ではこういう傷がときどき残ってしまう。義弟が娘の入学祝いを届けてくれた。

終了後、梅田の大和証券に勤務するいどむ（次男）と夕飯を食べる。「吉在門」は国府に教えて貰った比較的安くおいしい魚料理を食べさせる店。仕事のこと、生活のこと、イロイロ話す。同期がいなくなつて、ちょっと暇しているという。

我が家では次男だけが、いわゆる就活をして、企業と呼べるところで働き始めた。私も公務員だったから民間企業生活には馴染みがない。健康で頑張ってくれていたらいいと思っていたが、山一証券が倒産した翌年に証券に入社した選択は、そもそもが主張的なものだった。

十年後、会社の意向と本人の希望にズレが生じたとき、妻子もあつたが退職をした。そして同じ業界の外資系に再就職した。

04/◆ 朝は相談室。今日は画廊に行かない。夕刻からはK I S W E Cの月例S V。出足が鈍いが最終的には15人出席。メンバーにとってのこの集まりの意味が何となく分かる気がする。滝川一廣「ころはどこで壊れるか」洋泉新書が面白い。興味深い学びや整理がある。

この相談室は今に至るまでずっと続けている家族心理臨床の現場だ。様々な問題、家族と出会う場は、私にとって大切だ。

04/◆ 金曜日の夜、画廊に春日丘高校山岳部時代の友人5人が集合。それにJが加わって6人。いつもの中華屋で年に一度の会食をし、若者一杯のC a f eへ流れて雑談。

会場に来てくださったのに、お目にかかれなかった方があった。この会場での展覧会は来年がフィナーレ。三十数年続いたものを一応終えて、新たな出発を考えているのは若いということかな。

この集まりは私にとって、珍しく同窓会的だ。だから、展覧会がフィナーレを迎えたことで、この集まりも途絶えた。

年寄りが集まって昔話をしているのが私は嫌いだ。今の方が面白いし、もっと言えば、これから何があるかの方が絶対に楽しみだ。

04/◆ ぼむ展に。夕刻、典子が来て、篠原の奥さんや国府夫人も、外村の奥さんにカワキタ夫人も。約束していた訳ではないのにみんな集まる。奥さん達の井戸端会議状態。

これから十年経つか経たない間に、篠原夫人が、そして外村夫人が癌で亡くなった。時は強引に人を変化させる。何が起きてもおかしくないと感じさせられた。

それぞれの子どもが、ギャラリーで走り回わるのを叱っていた頃から40年近い年月。その子達がそれぞれ親になっているのだからなあ。

04/◆ ぼむ展最終日。昼過ぎに会場に行く途上、南光さんから電話。立命の授業で彼について話したことを、奥さんの友人が受講していて、伝わった旨聞く。縁は不思議なものである。

その後、千客万来でバタバタ。しかし事前のハガキ案内状を出さなかったことで常連の中に顔を見なかった人も多かったような気がする。

その一方、大学の教室で配ったことで、社会人入学の学生がたくさん来てくれた。新しいお客さんが来てくれるのは嬉しい。展覧会を撤収してみんなで会食をし、夏のフライフィッシング合宿日程を決めて帰宅。

遊(長男)が戻ってきている。典子と夕飯を食べながら話しているのに加わる。その後、映画「あなたのために」ナタリー・ポートマン主演を観にゆく。なかなか良いドラマ。ビデオでもかまわないと言えばそうだが、「ビューティフル・ガール」をビデオで見たときに残念だったから。

帰宅してK-1の録画を見ていると、外出していた遊が戻ってきたので一緒に見ながら、遅くまで仕事の話をする。あれこれ、同時並行的展開をしているようだ。

この時、息子はまだ会社を立ちあげてはいない。大阪の編集プロダクションで走り回っていた頃だろう。そう考えると10年という時間は本当に大きな変化を作り出す。しかし一方、私自身について言うなら、基本的には今と変わらない。



蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第三回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

年寄り臭い、ありきたりな言い草であることは承知で書くが、人は本当に自分の未来のことなど何も分からないものだ。後になって意味づけたり、説明することはいくらでも出来る。しかし事前に、そのように予測しうるかと言えば、そんなことは先ずない。結果を約束された未来のために準備することなど不可能なのだ。

出来ることと言ったら、その時、自分のしていたことを、結果の如何を問わず「よくやった！」と後で言ってやれるように最善を尽くす、これしかないと思う。こんなことをわずか十三年前の日誌を読みながら繰り返し思う。

さらにたいいていのことは、本質的な部分はなにも変化しない。オプションは次々変わるが、基本は繰り返しが多い。それが人の生きてゆくということなのだから仕方がない。

そんなことを覚悟しながら読み返す13年前の日誌は、思いの外面白い。何を思って五十代前半の自分を駆動させていたのか。そんな事が少し見える気がする。

*

相変わらず家族が事件や出来事を中心にある時代が続いている。家族受難時代のようにも思えるが、少し考えてみるとそうではないことが分かる。戦時中には、各家庭で一家の担い手や息子が召集され、南方の戦地では沢山の命が失われた。それを戦争だったからやむを得なかったなどと、生き残って言う人を信じない。

私の人生六十七年を考えると、戦場に行かなかったし、戦死者を家族に抱えなかった。見渡せばいろいろあるけれども、幸運な巡り合わせであったことを否定する理由はない。私の父は戦地から戻ってきていたし、祖父も当然のように戦争に巻き込まれていた。私は自国の戦争が身近ではなかった初めての世代人なのである。

だから今、私達の社会が抱える様々な問題を、どのように発生予防し、起きたことに対応するかを考えるのは、我々の仕事である。過去からの教訓に学ぶことも大切だが、それだけではなく、今の社会が指し示す出来事の中から、未来への教訓も引っ張り出しておかなければならない。

人は愚かしい。なにもかもに飽きるし、やっと手にした平和に退屈する。こりごりだと思ったはずの過去に簡単に決別し、刺激を求めて根拠薄弱な暴論を口にする。長持ちしない言葉は空しい。十年もしたら誰もが忘れてしまうような言い草で、平均八十年ほどもある人生をカバー出来るはずがない。

●今回、2001年5月の日誌を読み直してみて、一番の驚きは、全く記憶にないことが登場していることだ。記憶はたいいてい、少々ヒントを与えれば再認は出来るものだと思っている。だから全く記憶にないこの事態は、少々恐怖である。「絶対にそんなことはない！」と確信を持って言ってしまう嘘が存在し始めているということだから。

2014/09/10

2001年5月(13年前)

05/01 5月になった。GW中だが、感覚がそうではないので同志社女子大(非常勤講師「ユーモア特論」担当)の授業、休講など考えもしなかったが、休んだ方が学生は嬉しかったのかも。ほとんどがよく聴いているので、ごく一部の息の合わない学生が目についてしまう。ケータイを手放さず、ずっとメール送信している姿を見る。立命館大の「人間関係論」では10倍の学生がいても、そんな姿を目にすることはない。彼女の中に住みついている「授業」イメージから解放してやらなければならないなんて使命感が芽生えている。

夜は草津で「男の子を育てる母親向け性教育本」の最終編集会議。時間がかかってしまったが、ライト感覚の本ができたように思う。最終の手を入れて、形にして出版社に打診しなくてはならない。ひょっとしてブレイクすると面白いのだが。

女子大の講師仕事は二年で修了した。「一年間でユーモアを理解するいい女になる」という趣旨のシラバスはなかなか良いのではないかと思っていたが、短大の廃校整理に伴う人員合理化の余波でクビになった。

「ちんちんがやってきた」(学苑社刊)、この本は絶版にもならず今に至っている。私が深く承知している世界というわけではなく、4人の女性教師と漫画家・外村晋一郎の合作である。今もたまに話題になることがあり、ロングテール商品とはこういうものかと思う。



05/02 GWということで、こと葉(*1)が戻ってきているが風邪気味で体調不良。専門学校(舞台芸術学院)や東京暮らしはとても楽しいらしい。

依頼より早めに完成できないかとSさんからFAX連絡があった仕事を仕上げる。なかなかきれいな仕上がりになった。(*2) GW中であるが、関係なくどンドン仕事をしている。片付いてゆくのが結局一番のストレス解消。

夕刻、教育相談員FくんがケースSVを受けにくる。彼の話を聞いていると、チームでケース検討せず、受けた者専任で、年度末には例外なくいったん終決なんてシステムは、何が目的の相談機関なのかとさえ思う。

新年度には、同じ生徒を新規相談の受付としてカウントするのだそうだ。学校教育の枠組みに、カウンセラーがずるい関与をすると、こんなことになるのだろう。戒めておかないと、数を根拠に大変さを煽る世論や、骨惜しみな口先文化人のようなカウンセラーが学校教育場面に湧いてくるだろう。

どうあろうと、学齢で押し出せてしまうトコロテン処遇が、学校に於けるカウンセリングを弱いモノにしていると思う。

そして怪しいエビデンスの一つが数値である。数え方に言及できずに、総数であれこれ言うのが空しい事は、昔から言われていることだ。

例えば不登校児童は進級させないで留年、そう決めただけで教員も親も本人も、統計数値も変化するだろう。これは決して本人へのペナルティなどではない。

現行の、取り組みの質も、結果も関係なく卒業させてしまうシステムが中味を貧しくしている事への提案だ。

05/03 午後、Kさんが個人相談室開設の相談にやってくる。彼女にすれば不当な人事異動発令を受けて、公務員退職の決断をしたものだ。経過はともかく、新しい人生をスタートさせるきっかけになったことは悪くない。何かが始まるには、最後の押しをしてくれる要素があるものだ。それにしても私の回りには途中退職者が目につく。

ベテランが定年退職を待たずに退職を選択す

る。職場の同僚は急に戦力が抜けてしまう不安を感じただろう。しかし長い目で見ると、いつまでもベテランが居座っている組織が良いとは言えない。途中退職者のその後は、元の組織員にも聞こえてくるものだ。その内容が励みになったり、自分の今後を考える種火にもなるだろう。定年退職時期が目安ではなく、いつでも世代交代できるように、次世代育成が取り組まれているシステムが健全というものだ。

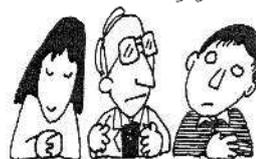
05/04 「木陰の物語・第十五話」をなかなか描く気になれずにいた。こんな時って、あれこれちよつとずつネタがあって、そのどれにも突っ込みきれない。でもタイムリミットは来ていた。そしてようやく、全然違うテーマで点火した。ゼスト御池(京都地下街)の喫茶コロラドで話をまとめて下書き。仕事場に移ってペン入れをする。正午くらいに始めて、夜九時過ぎに一応完成。

調子に乗って月刊DAN通信の日誌のまとめに入った。のってくと驚異の効率で仕事ははかどる。ここで飛ばしておいて、一日、二日クールダウン後の目で読んでみるのが楽しい。眼鏡が見当らなくなった。

カウンセリングの世界で三十年近く仕事をしてきたのだから、知らないわけがない。



強かったり、弱かったり、藩つきやすかったり、タフだったり、さまでまである。



人の心がみな同じではないことくらい知っている。

第十五話 優しく傷つく



しかし近年とみに思ってしまった。



この時点で、まだ第15話。現在174話だから、積み重ねは大きいなあと思う。多分このころ、いつか単行本になって出版できると良いなあとは思っていた。しかし一方、漫画本の出版は難し

いことも知っていた。それが今、第五巻まで出ている。十三年の時間は現実を大きく変えている。

05/05 桃山KISWECの面接日。朝一番はSさん夫婦。妻が朝、通院後、少し遅れて来談。娘、息子、夫婦と三軒のマンションに別れての近所暮らし、それなりにやっている様子。

午後一番は新規ケースで、私の本を読んだという工務店経営のMさん。Hさんに担当してもらおう。両親は自分たちのしていることに自信を持っているようだが、こどもは壊れかかっている。

肥満、過食、不登校、高校中退など、何があっても、自分たちは一般よりも愛情あふれた、子煩悩な親だと主張する。娘の必死の主張にも、すぐさま反論を試みる親である。

バイト先や親戚の店では、ちゃんとやっていることに気づきはないのだろうか？初回の面接ビデオを見ながら、反省会をしてみたら良いのではないか？

三時からのKさんケースは無断欠席。予約した意識はなかったのか？GWは旅行に行くといっていたのだったか？

仕事場に戻って、トーク2001用月刊DAN通信を完成。「人間関係論」の授業で配るバージョンも作る。雑誌「編集会議」と「ジグソウパズルの男」購入。最近、買ったのにまだ読んでいない本が増えてきた。

当時は京都国際社会福祉センター(KISWEC)で、土、日に時間をとってケース対応していた。最近はこちらの多忙もあってケース数が少なくなってきたが継続中だ。この時の家族は十三年経った今、それぞれどうしておられるだろう。

05/06 明日からは走りっぱなしの連日になる。眼鏡が見あたらないので、古いのをかけているが度が弱い。「メガネの愛眼」について、映画観賞用にピンポイントタイプのメガネを作る。

出来ることは今日のうちにしておかないと、と思っているのに、なかなか本の製作に手が伸びない。雑用をこなしてやっと「ちんちんがやってきた」の出版社プレゼン用

の作業に入ったのは四時過ぎ。三時間、集中して半分まで形にする。残りは明日だ。

帰宅夕食後、次男が薦めていたという映画「リトル・ダンサー」を典子と観にゆく。OTSU7シネマの会員制度が告知されていたので入会。格安で観ることができる。もう1800円で封切りを観ることはなくなっている。

「リトル・ダンサー」は原題「ビリーエリオット」。映画から舞台になって、今もロングラン中のロンドン発ミュージカルになった。

しかし、これを映画館に出かけてみた記憶が全くなかった。長野県での講演会のためにDVDを購入して観たと思いこんでいた。記憶なんて、あてにならないものだ。だから「確かに覚えている！」なんて言うものではない。

05/07 立命大の人間関係論4回目。三年目になる家裁調停での体験絡みで、時代の人間関係を話す。人は騙されたがっているのかもしれないという話。

正式の受講登録者数が確定。1011人、そんなバカなのである。レポートを読むのがまた大変だ。割り当てられた教室は530人くらいのキャパ。これで良いのか？と思う。今日の授業もいささか不完全燃焼。どうしてだか、この頃クリーンヒットにならない。

終了後、大学院事務室に顔を出すとあれこれ郵便物を渡される。Nさんが顔を出して、院生のMさんの地域活動協力依頼の話などする。院と地域社会をどう結びつけるかの手練手管について話す。

大学院の建物が竣工し組織も動き始めているが、まだばたばたしているという。健康保険証が出ているというので、職員課に取りにゆく。家族それぞれにカード保険証がでている。合理的だなと思う。

性教育本の制作二日目。5時すぎに仕事場に戻って、集中してかかって11時まで。だいたい形になってきた。しかし、よく働くものだ。この作業中、立命から電話。文学部では1000人を越す授業は初めてなもので、他学部に教室を融通してもらおう段取りだとか。

とんでもない受講数だと思う。レポート提出時期には、毎日カバンに100通ほど詰めて、移動

しながら、のべつ読んで採点していた記憶がある。

05/08 午前中かかって、「ちんちんがやってきた」の漫画と文字原稿をとりあえず本の形に完成させる。執筆者たちに返して、意見をもらって校了にもってゆく。女子大のミニレポートに目を通して、話の展開を決めて早めに出発。今日の授業は、今年度一番のできた。学生の集中度、関心の持ち具合がフィットしていた。この出席は45人くらいである。今夜からまた一年間、KISWECの家族療法訓練も始まる。定員に一人多い11人の参加。

とにかく仕事の数をこなしているなあと思う。若かったのだろう（今より）。

05/09 明日の下京区役所主催の講演会、レジュメを練る。明後日のトーク2001のプランも。H大のHさんから、特任教授をうちでやらないかとの誘い。立命館のことも知っていて、契約は何年？と聞いてくる。新潟のOさんから7月のWSの事で電話。

夕刻、八日市へ向かう。M小学校の教師勉強会が三年目に入る。二十一人のエントリー、よく続けし、よく学ぼうとするものだと思心。遅刻しても良いからかならず来るようにとメッセージ。初参加の人も四人。

提出事例に、いわゆる教員のくせがもろに出ている気がする。曰く、愛情不足、父親不在などの決め付け物語り。そして最後には母親から、「あんた達がイロイロするから娘がこんなになったよ」と批判攻撃される始末。

能動的指示しか地質にない教師である。ぼつぼつ学んでいってもらおうか。

帰路の車中、Hさん、おおいに語る。JR近江八幡着自国が最悪で、電車は22:11に出たところ。次は38分という。おまけにやっと着いた膳所駅も、乗り換えの京阪電車は出たところ。また20分待ちはうんざりなのでタクシー。1030円かかってしまう。

八日市市（元・東近江市）へも長年通った。教員主体の家族勉強会は今も草津市で継続中である。「学校」と「家族」を繋げることの重要性をずっと言ってきたが、私の力不足なのか、世

の中がその認識を共有してくれないからなのか、なかなか拡がらない。一人職のSSWでは弱いのだ。教員はたくさんいる。その人達の家族理解がもう少し深まったらと思いつけている。

多方面、多分野で「家族」の重要性は認められてきているが、そこからの展開が弱いのは、家族療法・家族心理学を担っている者達の力不足だろう。技法や流派理論の中の住人である限り、今のままだろう。

05/10 木曜日、朝の相談室は予約がなかったのに、本庁担当部局の若者二人がやってきて、つい話しこむ。午後はキャンパスプラザ京都で下京区の人権講座。200余人参加。本を50冊足らず持って出かけたが、販売はそう期待できないかと思っていた。なにしろ参加者の年齢層が高く、男性も多い。ただ、話はえらくノリノリで受けた。その結果、書籍は完売となった。この空気よく覚えておこう。

終了後、明日の資料を取りがてら、本宮の両親宅を訪ねる。久しぶりに茶を飲みながら話す。二人とも元気で何より。

夜は草津の教師勉強会、少し早めに会場に到着。サンドイッチとお茶をと思って買っていった。ところが会場がしまっていて焦る。仕方なく隣の芝生にキャリーバッグを置いて腰掛けながら町中のピクニック気分。通る人が見る。定刻過ぎに鍵を持ったWさん到着。いつものように勉強会は進行。

頼まれ講演で分かりやすく、面白く話すと本が売れる。少しシリアスに問題提起すると、きめんに本は売れない。送った本が沢山残ってしまうのは恥ずかしい。でも早々に売り切れてしまうのも残念だ。商人ではないのに何冊発送するかは今も悩む。

05/11 朝から月例トーク2001、二回目の準備。あれこれ思うことがあって手間取る。この間に住友金属に電話。「きれいなものが仕上がって…」と喜びつつ、またごちゃごちゃした注文が出てくる。関係者がいろんなことを言うのである。何度も彩色するのは嫌なので、提出物で対応

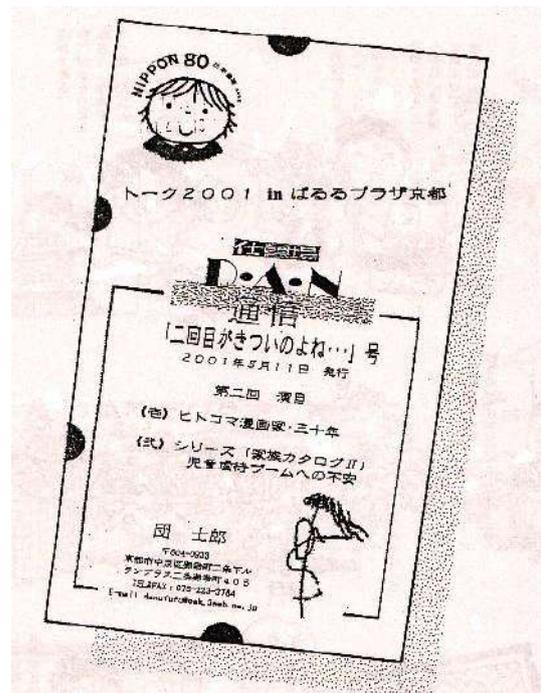
をしてくれるよう頼む。良いものは作っているのだから、黙って受け取れば良いじゃないかと思うが、通り返りの上司のようなのいろいろ言いたがるものだ。

開演1時間前にやっと準備完了で会場へ。出足を心配していたが、前回同様の人数が来てくださった。連続参加者ばかりだったわけではない。ちょうどいっぱいので、気持ち良く話す。

一つ目のひとこま漫画家30年はいわば話し慣れたこと。二つ目のブームについてが、内容を用意しすぎた気がして端折ったら、思いの外、時間があまった。そこでもう一度戻って、端折った話もしたので、私の日常会話のような話し具合になってしまった。

K君がこれを称して、講演的ではなく、普段喋るように話す講演で、これはなかなか誰でも出来ることではないと言った。

顔見知りの人や勉強中の人、大学生、大学院生、教師など、いろんな所から来てくださっていることに感謝。後からテープ録音を聞いてみると、もう少しゆっくり丁寧に話したほうがいいのかとも思うが、持味は出ているし、いいかな。



トークライブ2001、二回目。自分で会場を確保し、受け入れ準備をし、待ち時間の友にと「DAN通信」を作って手渡す。入場料1300円余りを頂いているから、もてなさねばならない。依

頼られて出向く講演会とは真逆の設定だ。

それでもこんな事がやりたかったのは、ミュージシャンのライブを羨ましく思っていたからのような気がする。あるいは、落語家か漫談家になりたかったのも影響しているのかも。でも、そこに唯一ためらいがあったのは、あの人達は毎度同じ歌を唄って、話をしていて、飽きてこないのだろうか、嫌になったりしないのだろうかという事だった。それは学校の先生が、教室を変えながら、おなじ話を繰り返しているのを見ても思っていた。

トークライブでは毎回違う話を三十数回した。そして、同じ話であっても、まったく同じには出来ず、繰り返すほどに、上手く話せたと思えることは希だということにも気づいた。

今では、同じ話なのに、毎回違うと思って貰い、話している自分にとって満足度が上昇する技は、どんなものかに関心が強い。

05/12 KISWECで「教員のための家族援助WS」、第一日スタート。14人の参加者、養護学校、高校、私学、公立さまざまである。所長があいさつで、スクール・ソーシャルワークの話をしたのに驚く。なかなか定着しなかったプログラム企画だと語る。参加者はみな意欲的で、個性もヴァリエティに富んでいる。途中、H君の担当している時間、久しぶりにうたた寝する。今朝早かったからな。

終了後、仕事場に戻るが土曜日の夜なので、事務連絡はない。メールチェックすると、昨日のトークライブの感想が二通。怒濤の一週間が済んで、ほっとしている。来週がゆっくりするわけではないが、まあとにかく今週は済んだ。

夜中に見た、自分の懐かしい曲を聞いたり語ったり、歌ったりのTV番組がえらく心に残る。

教員対象の集中事例検討プログラムは、残念ながら続かなかつた。SSWが表に出てくるようになった今、ますます必要なプログラムかとも思う。でも、十分多忙で、もうそこまで手は出せないかなあ。

05/13 日曜日、昼過ぎに仕事場 D・A・N に。朝日新聞読書欄、話題の本を面白くなかったと書く小野寺某。参考にして買うのをよす。読売新聞の読書欄、永沢まことのイラスト以外見るべきものなし。安藤忠雄の教会造りの本が大宅賞を受賞。発売されてすぐ読んで面白いと思った本が、みんなにも認められて嬉しい。道中、糸井重里著「ほぼ日刊イトイ新聞の本」を購入。インターネットで発行されている気の入ったネット新聞創刊顛末記。このホームページはよく見る。鳥越俊太郎がやっている「あのくさこればい」というニュース解説が面白い。

S. ソダーバーグ監督「トラフィック」を観る。複雑な映画だが、メッセージのリアリズムはドキュメンタリーだ。「麻薬戦争に、もう政府は負けていることを知っている。摘発や密告は、対立業者の利益になるだけ。相手はそれを知っていて、麻薬取締官を利用している。密告はもう一方の麻薬密売勢力の仕業である。国家予算に負けない収益を稼ぎだすビジネスを、正義で取り締まれるものか……」。

一般家庭、青少年の生活に入り込んでくるドラッグ。能動的被害者である子供を、敵には回せない親の戦いは、どこを向いて長期戦略をたてなければならぬのだろう。禁酒法のようなやり方しかないのかと思った。つまりは敗北である。アルコールをやらない私は、依存や飲酒による病気などを見て、これが必要悪と認められるようになった経過と、ドラッグの違いを思う。

国家統制で、税金を徴収のうえ、ドラッグを販売する国が出てきてもおかしくないということか。本当に、酒、博打などのうまい話は国がマフィアが取り仕切るのだな。

最近、こんなに活発に考えていないかもと反省する。今もなくなっているわけではないが、社会への疑問や不満が言葉の端々に感じられて頼もしい気がする。

でも近年は、批判のインパクトは抑え気味になった分、具体的に取り組める事への意欲は増している気がする。「言っていないで、やれ！」と自分に言っている。そして取り組み始めて、随分長い時が経ったものが多くなった。

結果が成果なのではなく、続けて取り組んでいることが成果なのだ。

05/14 月曜日、人間関係論の教室が変更になった。1000人教室である。五年前にここを使っていたが、散漫で好きになれなかった。今回も最初に、十分そのことを受講生と協議したが、やはり影響はあった。以前の教室の方がずっと一体感があった。終了後、大学院のNさんを訪ねたが会議中のような感じだった。それに院の研究室は新棟に引っ越していた。私の研究室(相部屋だそうだが)がどこなのかもまだ分からない。夜はN本さんがSV来談。二時間話して帰る。権威主義的体質と過剰な自己防衛の習慣から抜け出すのは、なかなか大変。こういう人の職業選択として、高校教員というのはどうなのだろう。話題になっている生徒の話の方がずっと健全。そういう子に支えられているのだからが…。

05/15 KISWECの家族療法訓練、いよいよ今年も健康家族面接の開始。ボランティアで来て貰った家族。両親と、長男、妹の四人。長男が最初から女の子に見えて、とても一年生とは思えなかった。入室前にトイレで失敗して、本人も親も焦っていて緊張。妹は活発に、家庭事情の暴露役をしている。

夜中に見た「カル」は変な映画だ。一度見て理解できた日本人はないと思う。そういう声が大きかったのか、ビデオの後でインターネットになぞの解明したホームページがあると案内している。グロテスクだが分かりにくい、編集失敗の映画だろう。理屈を考えれば、全体像は頭のなかに描けるのだが、映像として出ていないから、観客はなんだか分からない。

この面接も映画も、あきれたことに全く記憶がない。印象的な出来事があったはずなのに、忘却処理に私の記憶装置が働いている。なんでだろう？

05/16 一日くらい、仕事場でじっとしている日がないと、雑用が片付かない。空いているところを見つけて、新しい依頼を入れるからどんどん窮屈になっている。朝ぐらいゆっくりして、睡眠は確保をと思うと、午前中はほとんど何もできない。住友からのパンフレットOKのFAXIに返信。群馬のWS時間などの打診。門真勉強会の準備。ち

よっと早い目に出て、吉野屋で昼食後、京阪萱島駅へ。待ち合わせ場所が変更になったので、不安だったのだ。駅前のミスタードーナツで読書。やはり「心はどこで壊れるか」はとてもおもしろい本だ。滝川一廣さんは鋭い指摘を連発している。

十八時から教員の勉強会。オープニングトークの後、事例が出てその検討。二時間半はすぐに過ぎる。



あらためて、この時期から今に至るまで、行動の軸はそんなにかわっては居ないことに気づく。確かだと思えるものを摸索していた時代ではあるが、その結果、多くのスタイルが継続して今に至っている。コロコロ変化する世の中や言葉(流行語)にアンチを強く主張した過ごし方である。

05/17 朝、相談室。Kさんの息子が、治療施設入所に向けて動き始めている。自分から父親に話しかけたりしたとか。母親も一安心している。

Sさん一家の娘達は、長女は頑張って定時制高校に通学中。次女は、医者への指導で膀胱を発達させるための我慢を自分で訓練中。みんなにこにこしている。

無印良品へ行ってファイル30個購入。久しぶりに昼間、河原町をうろつく。夕刻、カワキタカズヒロ君の個展を見に岡崎公園に。とても綺麗である。典子が車をこすってしまったと落ち込んで電話してくる。

様々なケースと関わっている。関連施設の利用

も当事者判断はサポートするが、こちらから薦めたり、紹介したりは一切しない。

自分の手に余るからといって、よく知らない誰かにふったりはしない。どのような援助者と出会えるかもクライアント、家族の運の一つである。私との出会いだって、それを幸運だと押しつけることはない。場合によっては不運かも知れない。押しつけもしないし、巻き込まれもしない。面白けれど、クールな臨床家のつもりである。

05/18 仕事場で群馬WS用のファイルなどをピックアップして東京行きである。こと葉の通う舞台芸術学院、たまたまいぐらい一度見ておこうと思う。池袋西口から徒歩5分ほどの静かな住宅街にある学校。隣の教会は知人のUさんが関わっているところだと聞いた。

携帯に連絡すると今終わって、着替えているという。学校の前で待っていると、学生が数人、どこから戻ってくる。その中の4人連れが目礼して、「こと葉のおとうさん？」と話し掛けてくる。仲良し6人組である。しばし歓談していると、こと葉が出てきた。

池袋駅前でコーヒー店で、学校の話を楽しく聞く。あれこれ意欲的。モダンバレエは授業後に、夜のレッスンに出向いているらしい。声楽も考えていることがあるとか。クラシックバレエは物足りないので、習いにいくことを考えているとか。

ボブ・フォッシーの話や、NYブロードウェイ・ミュージカルの話題など、だんだんその世界に馴染んできている様子。てんぷらが食べたいというので、西武7階の「天一」へ。なかなかおいしかった。八時前には別れてホテルへ。二度目の利用の西麻布apaホテル。

東京で一人暮らしをしながら学ぶ娘に、父親が面会に行き食事をする。絵に描いたようなパターンだが、そんな時代も昔話になった。

この後の10年に娘に起きたことを知っているから、この時点の記述の一つ一つが夢のようだ。まだ何も始まっていないところで、努力する対象を見つけた娘が頑張っているのは、父親として幸せだった。そして、今、それを振り返るのは二重に幸せだ。何もかもが時を刻んで、過去に

なってゆく。書き記しておかなければ、いずれ誰の記憶にも残らないモノになって消える。

先日、遅い目の夏休み谷川岳の麓、谷川温泉に出かけた。散策していると「天一美術館」というのがあったので覗いた。洋画、日本画共になかなかの画家達の小品がコレクションされていた。

このコレクターが天ぷら「天一」の創業者だという。今まで気付かなかったが、これを書いていて天ぷら「天一」が登場している偶然に驚いた。

05/19 西麻布のhotelをゆつくり目に出て、上越新幹線で高崎に。高崎高島屋で昼食とコーヒー。約束の時間に前橋着。早々にプログラム開始。いつもよりちょっと少ない23~4人の参加である。

全国児相の児童福祉司数の一覧を配って話す。群馬はびりから二、三番目の実態。つづいて合同動的家族描画法のデモンストレーション。楽しい家族が出てきて盛り上がる。夕飯は前回も利用したホテルの個室で6人。前橋家裁・M調査官も参加。若い世代の資質低下を嘆くが、その理由に、上世代の力量不足ありという。もつともだ。

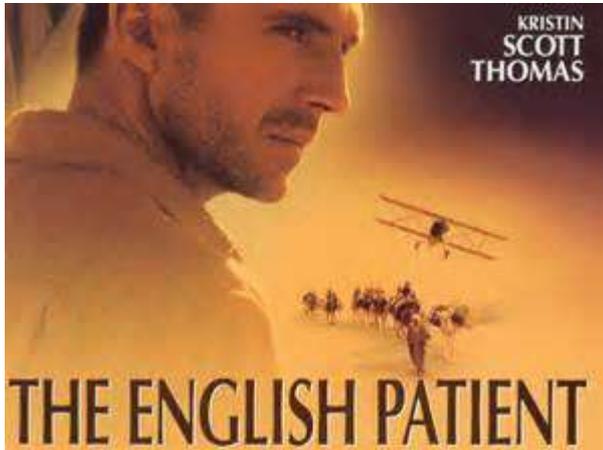
群馬WSはIさん中心に数年継続した。関連して、いろいろな動きも起きていた。児童相談所が中核を担って、地域で様々にプログラムが発展してゆくのは本意だった。この時の参加者で、今、実施中の東京・家族理解ws（アソブロック）に参加してくれている人がある。これも10年以上付き合いである。

05/20 出先で54才になった。前橋（群馬県）のこじんまりしたホテルで起床。9時10分に迎えが来て、一日プログラムを実施。まず順調に参加型のWSを終了。

帰路の新幹線で、来るときに観はじめた「グラディエーター」終了。映画館で観た時よりも感動的。吹き替えの方が、画面に集中できるのかもしれない。続いて、「イングリッシュ ペイシエント」を観る。これも映画館で見たときより感慨深い。

「イングリッシュ ペイシエント」は好きな映画である。DVDを持っているので、この後もも

う一度観たが、オープニングからの映像美に引き込まれていく。そして物語が何か変なところにも心惹かれる。戦争、戦場、その時代、立場、そして場所。これらと不確かな人の運命が絡み合う。



「グラディエーター」は、何が起こるか分からないと語りながら、起きることが分かっている物語。そして「イングリッシュ ペイシエント」は、分かったことが起きているのだが、誰にも分からない物語だ。

05/21 立命の学部の授業。続いて大学院クラスターの第一回。Mさんとも久しぶりに会う。研究室、Rさんと共用ではあるが421号室。大学内に居場所があるのは良い。床に寝ころんでウトとしてしまった。16時20分から授業開始。Nさんの進行ですすむが、今後どう展開してゆくか？

借してもらって聞き始めたMさんの講義テープは、なかなか面白い。緻密、正確の人である。

05/22 仕事場でメール対応。女子大からの問い合わせ、履修登録トラブル学生の件を調べる。

「届かなかった手紙」クレスマン・テイラー著、見つけて購入、読了。何だか気味の悪い話だ。登場人物の人間関係を、元々そんなにいいものだったと思えない行間である。「朗読者」「ベルリン1933」には劣る。書かれた時期が1938年であることを考えると、それはすごいことだが、本当なの？とも思ってしまった。

女子大の授業、ここまでちょっと小話大会になっていた。活をいれる気で性的虐待の中三女子の物語をする。約1名、どんな話をして私語する奴がいる。60人足

らずには固唾を飲んで聞いている。教室が大きすぎるのが問題点。場の凝集力のことを思う。

夜は、kiswecの訓練。お願いしてあった健康家族、40分近く遅刻、これ自体が訓練テーマとなりえる。やはり本物の家族はロールプレイではなくおもしろい。Mさんが面接担当。上手だが、長男への面接に終始した。ストレスのかかる質問は、本当にしにくいものだ。

最近、読みやすいものばかり読んでいるのではないかとフツと思った。厚い、文字が小さい、二段組、などの形式から選択が逃げているのではないか。

05/23 タイヤ付け替えのため、典子に指示されて本宮に運びにゆく。オヤジをプリンスホテルで行われる同窓会に送ってから、車で降ろされて仕事場へ。

立命の職員紹介書類の作成に手間取る。昨日の授業を受けた学生から、自分の経験の告白メールが届く。そういう経験をしている人はけっして少なくない。

夜中、「クロスファイア」ビデオを見る。そこそこの長さで、いろいろ散りばめてあるのに、物語の厚みを感じにくいのは、主演女優の人間のみえなさか。何だか日本映画のパターンにある不幸と、母子だけの秘密・・・、こういう紋切り型が感じられてならない。犯罪もうんざりするほど紋切り型だ。

しかし、最近世の中がこの空気に似てきている気がして仕方ない。動機や人間としての行為の積み重ねゆえのやむにやまれなさなど微塵もなく、ただバカがバカなことをやっているようにしか見えない犯罪や事件は薄ら寒い。人間が薄っぺらくなってくると、刺激しかない世事に取り込まれるということか。

13年前にこう思っていた。そして今、更にこの傾向で突っ走る世の中だ。それをカバーする道具や理論が受け入れられ、みんなが揃って同じものを持ち、同じ事を語る。同じ気持ちになろうとアジる世論もある。

昔、笑い声の追加されたTV画面が鬱陶しかった。ここで笑えと指示されているようで不快だったのだ。でも今は、この話に感動しろと強要する

社会になって、お互いがそれを拡散しあっている。

05/24 札幌の家族療法学会に出掛ける。この学会は久しぶり。助言者を頼まれたので、出掛けることになったものだ。事前に送られてきたレジュメを読むがさっぱりわからない。こんなものにどう助言するのかと思うが、まあ発表者の話をよく聞いてみようと思う。

昼すぎの飛行機に乗るために伊丹でH君と待ち合わせ。ANA札幌行きは満席。隣も学会行きの女性だった。初日はゆっくりしている。夜、一般公開講座を聞く。しかし、ここでも虐待、暴力被害者に関する、専門家の紋切り型表現の横溢を目にする。そんな反論の余地のないようなことを言っているのだろうかと思う。

この段階で既に「虐待」話は定番化している。そして解決や予防への道筋は今に至るまで、たいした成果は見せていない。家族心理臨床の現場の知恵が心理学の中でなかなか力を発揮できないのには、私にも責任の一端があるのだろう。

私なりに頑張っているのだが一方に、「なかなか、家族療法は根付かない・・・」などと弱音を吐く人が少なくない。自分が上手くやれないのを、方法・理論のせいにしてしまうのはいかなものか。業界のメジャーになり損ねたと、敗北宣言しているように聞こえる姿勢も気に入らない。

売れるか売れないかではなく、「家族」を扱う事への使命感がないのか？

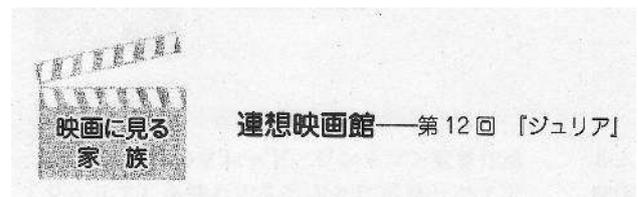
05/25 学会初日。H君の自主シンポに参加。彼がうまくコーディネートしている。現場での実践展開、みんな関係したところの人たち。午後の全体会での感想はある意味で、こういう学会にきた時にいつも感じるものでもある。学会にすっかり出てこなくなっていた理由をあらためて思う。「面白いと思わなくなったから・・・」と答えるだけなのだが、なぜ面白くないのかは解ってきている。こういうことの意味を感じ取れないからだし、こんなことして良いのか？と聞きたい気持ち一杯なのだ。

でも、そういっただけで、「ジャーどうするのか、団さんやって下さいよ！」と気軽に言う人があるのも解ってい

る。もう、他の場所で、他の方法で実践する方がずっと効果的だと気づいたのだ。

学会への参加、関与の仕方で揺れていた。しかしこの後、選挙で選ばれて「家族心理学会」の方は理事になり、互選で常任理事になった。そしてニュースレターの編集長も8年以上になる。(NLのあり方だけは変わったが、これとて編集長が交代したら、又変わってしまうだろう)

一方、この「家族療法学会」の方では、バトンタッチされて執筆し始めた「映画にみる家族」(連想映画館)の学会誌連載が10年近くなっている。学会誌に論文や専門情報ではなく、映画にまつわる話を毎回4ページも掲載していることには、いいのか？といつも思っている。



05/26 K出版のIさんと初対面。なかなか独特の雰囲気のある女性。つまり、ホワーンとした系のなかなかのキャラである。正反対の女性陣にはたくさん会うので、彼女のような人と話していると和む。(この後、Iさんは「ヒトクセある心理臨床家の作り方」を編集、発行してくれた。ここには巻頭に初めて、家族心理臨床を題材にした一コママンガギャラリーがカラーで掲載された)

学会二日目。座長を依頼されていた。病院で入院を利用してやっている一応不登校事例というのだが・・・あまりぴんとこない不登校分科会だった。私の司会がまずかったかと思ったりしなくもない。SVのI村さんもそつなく役割を果たしてくれた。

姉弟二人を入院処遇している親。要するに、健全な子育て機能を持ちえていない両親の可能性大なのだが、そんな話にはならない。つまらなく一時間を過ぎて、感謝もされずに終了、あーあ。その後のHさんの発表の方がおもしろかった。

午後、ジェンダーの自主シンポに入って、おかしな目に

あう。フィッシュボール・プラクティスというグループ討議。9名の参加男性のフリートークを、まわりで31人の女性が見ている。ヘンナノ。

千歳空港17:15発で大阪に。MKタクシーの乗り合いで京都に。21:00には仕事場D・A・Nに帰着。メールなど雑件片づけて、午前0時前に帰宅。夕飯後、「ボーイズ・ドント・クライ」ビデオを見る。ヒラリー・スワンクが賞をもらった演技。何だか切ない映画だ。「ダンサー・イン・ザ・ダーク」を連想したが、この方がずっと好ましい。

Iさんと会って、本を出して貰うことになり、表紙づくりに、出版社も訪問した。ハードカバーの良い本だと思うが、そう売れなかったようだそしてIさんは他に移っていった。



学会の司会、助言者を断るようになって久しい。査読も断っている。今は、自分の得意だと思うことだけをしている。

05/27 日曜日、一日かかってマンガ原稿を仕上げられればと思っていた。しかし、やはり北海道行きの疲れはそれなりにあって、屋すぎまでグズグズ。

出勤途上ゼストの紀伊国屋で「もひとつま・くら」柳家小三治著を見つける。一冊目「ま・くら」がとっても面白かったのでCDまで買ってしまったものだ。

それとOさんが批判していたKさんの編著の現代のエスプリ「学校心理臨床と家族支援」を購入。この対談写真で、昨日札幌で挨拶して下さったのが中釜さんだったか・・・と思い出す。Kさん批判は、学会のWSやシンポに、全く準備してこずにさんざんの結果ということが、立て

続けだったとのことについてだった。忙しすぎると、そういうことにもなりかねない、自戒せねば。

仕事場にきたものの気がのらない。「メッツ・新庄」のドキュメンタリーを見たり、本を読んだりして過ごす。

典子が町内会の役員会で夜、本宮に行く。そこで落ち合う約束をしているので、八時半ごろ本宮へ。おやじ、おふくろ元気である。母がちょっと痩せたことに気付く。聞いてみると、一年一キロずつ減っているとか。親父が買ったものの、大きくて着られないSONY通販のフランネルのシャツをくれる。上物である。

耳の遠くなった親父が、ヒトクサレ時事放談をすると、母はうるさがる。まあいいではないか。ラジアルタイヤを車のトランクからおろすのを頼まれていたので運ぶ。

典子が戻ってきたので、豆ご飯をもらって帰宅。九時半頃から二人で夕飯。我が家のメニューにしめじご飯があったので、かやくご飯二色。

そうか、13年前、まだオヤジもお袋も元気だったのか。そう考えると、10年という時間は激変をもたらすのだなあ。この時期、私と妻は浜大津のマンションに住んでいて、本宅の自治会活動に戻ったりしていた。

この時点で、私はまだ中釜洋子さんを識別できていないようだ。その後、親しくいろんな話をしたり、学会の度に、彼女の院生達も一緒にワイワイ食事するようになった。常任理事会などで、定期的に会うようにもなった。そしてあつという間に彼女は居なくなってしまった。なにも永遠なモノなどないのだから、今できることは、今しておかなければ。

05/28 月曜日は12時前の市バスで立命館大にむかう。いつもの59番がくる気配がないので、別のバスに乗って等寺院口で下車。知らない道からキャンパスに。定刻前に教室に向かうが、相変わらず多くの学生がいる。でも1000人教室だから、以前の教室でやっていたときのぎっしり感はない。あっちの方が集中したなあ。終了後、児童相談所のことを聴きたいと、先週から言っていた学生とラウンジで話す。

いよいよ大学院クラスターの修士論文のテーマの頭出

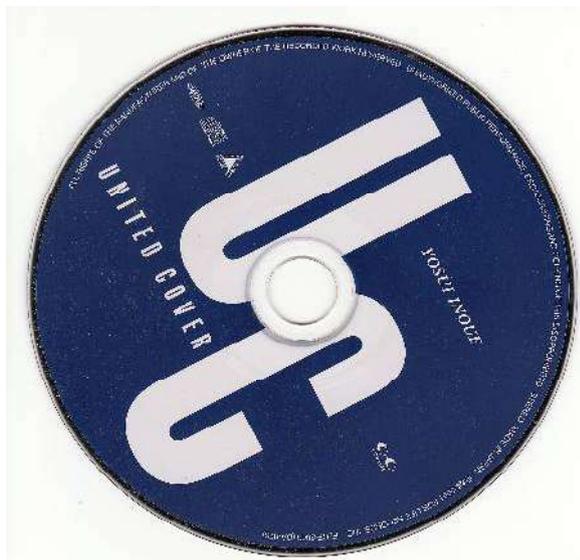
しを順次開始。3時間、3人の学生の現在の問題意識の披露である。それに対して三人の教員と学生が質疑。なかなかおもしろい三時間だった。

終了後、十九時四十五分のバスで仕事場に。八時半前について最終電車まで、原稿の推敲。

0時半ごろ帰宅して、メジャーリーグで活躍する日本人のダイジェストを見ながら夕飯。彼らを見て頑張ろうと思う。ポール・ニューマン「暴力脱獄」を少し見る。就寝はまたいつものように午前三時。でも十時頃まで眠るから、睡眠時間はとれている。

05/29 ゼスト御池のコロラドで「発達」の原稿の詰めと整理。本日発売の井上陽水のカバー曲CD「UNITED COVER」購入。それを聞きながら、冊子を読んでいると、おもしろいことが書いてある。「花の首飾り」をうたうことになったのは、沢木耕太郎さんが忘年会の流れでカラオケに行ったとき、リクエストしたのだという。

私はNHKの番組「ハロー、グッドバイ」の時に、陽水のコーヒールンバを聴いて、とてもいいと思った。あの時UA(ウーア)という女性歌手が歌った、「傘がない」も絶品だった。



女子大の準備を手早くして出発。ケンタッキーに寄ってから大学へ。先週印刷しておいたひとこま漫画の事を軽く話して、ミニレポート話に。今日は何だか出席率が高い気がする。

シンガーや歌の話は、どうしても世代の話題に

なる。陽水も沢木耕太郎さんも同じ世代人だ。音楽は簡単にその時代の自分の記憶に連れて行ってくれる。その曲の流れていた風景にワープできる素晴らしいパワーを持った装置だ。

漫画を描きながらいつも思うのは、マンガがそんな風に働くことが出来るだろうかということ。みんなが集まって、一つになるなんてコンサートみたいな事は出来ない。

ユーザーの違いもあるかもしれないが、漫画家にはミュージシャンにあこがれている人が少なくない。

陽水さんや沢木さんなどのクリエイター達への関心は、14年経った今も変わらない。ただ、少し変化があるとしたら、あの頃ほど彼等の仕事に憧れは持たなくなったことだ。そんなものは確実に減退している。そして、自分のしている事への関心は深くなっている。バロメーターは世の中に起きている事への関わり方の深さだ。相変わらずの好奇心は失せたわけではない。

05/30 季刊「発達」の連載原稿、最終校正にかかっている。テーマとリード文がちょっと気がかりだ。K出版での企画のリード文を思いついてこれも書く。

大阪でCさんと面談。ケースの話をしていて、あらためて自分が病気に鈍感であると思う。

「そのケースは境界例だと思うという。ちょっと魅力的で、まわりの人間をみんな引きずり込んでいく。そして事件は次々に起こる。これはそうでしょう」という。

依存、巻き込み、そして期待を満たされないと反発。私は父子関係のエピソードがどうも得心がいかず、インセストの問題が発生していないかと思う話すと、「そうだろうと思う」という。

佐世保の事件で又「病気」の話題が沸騰している。私は基本的に、人を分類や診断で区切る事へのためらいをずっと持ち続けるスタンスで、この業界で生きてきた。

それを絶対だと思っているのではなく、なにも絶対ではないから、立場は並立しているのが良いと思っているのである。

どの理論も方法も、普遍化できることはないと考えている。だから自分のあり方も絶対だとは思わない。そして、そういう姿勢を他者にも求めてきた。

ところが世の中やキャリアの浅い業界人は、しばしば時の勢いある売り出しのモノに巻き込まれて、取り込まれる。誰も彼もが同じ事を言い、結果には責任を持つとしない。

その戒めに、10年前、自分はどんなことを主張し、世間はどんなことを言っていたかを振り返ることは大切だ。もっとも最近、圧倒的多数の人が、十年前は全く別のことをしていたと語る。

これは戦争反対の姿勢にも繋がっている。知りもしないで声高に何かを煽る人間には用心した方が良い。忘れっぽい者や、知らない者に罪がないわけではない。

コントロールできないモノを作って絶対安全だと語って平気だった人間が、戦いの準備をしたからといって、戦争なんかするはずがないと語る。そういう人間が、手を変え品を変え、似たようなことを言ってきたのを忘れてはならない。

話を業界に戻す。数日前の発表で、小中の不登校が増加になったという。オイオイと思う。スクールカウンセラーやSSW、発達相談員や諸々の専門家がどれだけ増えたと思っているのか？

子ども数が増加に転じたとは聞かないのに、不登校だけ増えてどうする。いよいよ、専門家達が飯の種に、ダブルカウント、トリプルカウントする病人を作り出しているのではないかと懸念する。

統計数値はいつも、時代の欲望を映し出している。けっして、実態を示しているのではない。

05/31 朝は相談室。ケースがなくて助かった。疲れていたの、受付のAさんにことわってソファで寝る。十二時ごろ変な夢を見て目覚める。

午後は家裁に。同居している妻からの離婚申し立て案件の二回目。次回成立の運び。

夜のKISWEC月例SV。Yさんが一件目のケース提出。借金地獄の中年の妹(独身)に振り回される、姉二人

の家族物語。次はHさん提出の、四人の子供を立て続けに産んだ二歳姉さん女房の家族問題。なかなかニュアンスづくみの家族力動。あーあ、五月がおわった。六月も引き続きバタバタする。休憩を取る時間の工夫を。

この頃と比べたら、今はゆっくりしていると思う。忙しいという言葉はいつでも、今話していて、過去のことは忘れてるらしい。今後、多忙であると言いたくなったら、歳の割にはと言うようにしようか。

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第四回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

自分が、難しいことを言っているという自覚はなかった。むしろ、分かり切ったようなことばかり言っているのではないかと思っていた。資料を集めて自分の意見を構成したりしない。世の中に漂う気配や、現象には関心を向けるが、誰かが既に明らかにしたことには関心が薄い。本当にそうなら、自分もいずれ行き着くだろうなどと思っている。だから多分そうだろうと思って話していると、「××さんもそう書いていますね！」と言われることはある。読書中に、「世の中には私とよく似た事を考える人があるなあ」と思うこともしばしばだ。

オリジナリティを、他にはない珍しいモノのことではなく、自分の中から湧き出てきたものことだと思っている。だからその内容が、他の誰かと似通っていたりすることもしばしばある。自分の言っていることを誰かから「**と似ていますね」と最近の分類診断名で指摘されることもあるが、同時代性とか共時性と言われるようなものだろうと思っている。

「ここまでは既に明らかになっている。今、この次の一步が摸索されなければならないのだ」と思うことも増えた。そして、その一步にさしかかっているものへの気づきもある。分かり切ったことを口にして、正しかったとしても、何の手柄にもならない。「手柄」というのも、最近、使わない言葉な気がするが、とにかく次のステージに歩みは進めなければならない。そこは分かり切ったことを示し合う世界ではないと思う。

*

この日誌懐古形式の書き方において最近、覚えている出来事と、記憶にない記述事項の印象が違ってきている気がする。以前は、覚えていることも、覚えていないことも含めて自分の過去だなあと思えた。覚えてはいないが、いかにも自分にありそうなことだと思って読めた。しかし今、十四年前の記述を読んでいて、全く心当たりのないことが登場しはじめている。こんな事は知らない！と思うのだ。

ということは、記録がなければおそらく、「絶対に心当たりがない！」と主張することだということになる。心理学をやっていた人間だから、「記憶」というのがどんなものか知識がないわけではないし、記憶にまつわる様々な偽証、冤罪事件や、誤認の歴史も知らないわけではない。

しかし我が身にこういう実感が登場すると、本当に自分も含めて、人間の「確かに覚えている！」など、あやふやなものだと思わざるを得ない。そして今、ひらめいているのは、これを逆手に取れるのではないかという思いつきだ。

2001年6月(13年前)

06/* もう6月になった金曜日。久しぶりに一日仕事場 D・A・N で用件ができる。講演依頼のFAX二件。一件は日程があわず、もう一件はギャラがあわず断る。連載の季刊「発達」原稿をFAX送信。晩年学フォーラム通信の原稿、思案の末、マンガは5年前の時事モノを使って、リメンバー1995と文章で構成。ケースSVIにF君が定刻来談。二時間3件のケース検討。性教育の本の企画を進めてきたのが大筋まとまった第一稿を芳賀書店編集部へ送付。この出版社はちょっといわくのありそうな書店である。

新聞が郵便受けに貯まるばかりでほとんど読めない。郵便物のじゃまになったりする。ほとんど捨てるだけになっているので、しばらく仕事場 D・A・N の新聞は止めることにした。その件で新聞販売店、外交の粘りに対応。

近年、講演料の話で不快な思いをすることは激減した。単発の講演を引き受けることがほぼなくなったからだ。「家族の練習問題1～5」(ホンブロック刊)の出版記念や、販売促進目的のものを受けることはたまにあるが、何処かのイベントの一コマを私の講演で埋めることの実りは、私にも先方にも少ない。各地での継続的ワークショップ実施に比べると、格段のエネルギー効率差がある。それだけでなく今の日程はギリギリだ。

まだ、余興に巡業しようとは思えないから、気楽な漫談講演会は、もし需要があるなら老後の楽しみにとっておく。今はやはり、次世代育成のトレーナー仕事優先だ。自分が育てて貰ったと思うので、そのお返しはしておかなければならない。こう思って10年以上やってきたことが、あちこちで実っている実感があるから、今の忙しさにも不満はない。

晩年学フォーラムを主催していた上野瞭さん(故人・児童文学者・私に同志社女子大で、氏の後の授業を斡旋してくださった)の依頼で、通信に連載「D'angle」を持っていた。この頃から「近過去」を見るのが好きだった。今と過去の特定の時点と、そしてイメージできるあり得るかもしれない未来をひづるめて考えているのが好きだ。

芳賀書店は会社内のごたごた事情に巻き込まれたの

ではなかったかと思うが結局、「ちんちんがやってきた」は別の出版社(学苑社)からでて、ささやかなロングセラーだ。

06/* 土曜日、KISWECの面接。Sさんは定刻に来談。息子のこと、娘のこと、なにもないわけではないが、でも順調に暮らしている。母親がぼんやり時間を過ごせる人になってきた。これはいいことだろう。兄嫁さんと仲良くなって、二人でぶらぶらして、楽しんでいるらしい。午後のKさんは朝になってからドタキャン。そういう人たちだと、あらためて思う。似たもの父子なのか。ゆっくりバックスタッフと食事をして解散。仕事場でくつろぐ。

06/* S金属・環境エンジニアリング部のプレゼンテーション資料用表紙イラストを仕上げる。時間が押してなかなか手が付けられなかった仕事。イメージのような仕上げで完成、発送。夕飯後、アーカスシネマで韓国映画「JSA」を観る。「シュリ」のような話かと思っていたらちがった。なかなか複雑な心境の作品。気楽な国にいる私には、想像もしがたい物語はおもしろかった。夜中、長男が泊りにきた。飯を食っているのを相手に一時間ばかりあれこれ話す。

長く関わってきた大企業の仕事も、大きな産業構造の変化から、会社が合併されるところまでいくと、出入り業者になる私など、新状況下では吹き飛んでしまう。世界がそういうものだと思われ知らされるのは、民間企業との接点においてである。

大プロジェクトとして開発されていた事業が、水泡に帰すのも見た。依頼された仕事をしながら、こんな商品は現実的ではないなあと考えていた。ただ、民間の活力はこう言うところから発揮されるもので、それを私が知らないだけかと思っていた。それと比べると、公務員生活や大学教員生活には、なんと言おうと、あてに出来るものが確保されている。

06/** 朝、家裁の調停委員仕事。わけのわからない頑固親父とその娘(四十代になる子連れ)の再婚トラブル。済ませて仕事場であすの準備。その後、津市へ。

この行程を「駅スパート」で検索すると、いくつかルートが出るのだが、経路によって七十三キロと、二百十キロとあ

る。後者は京都から名古屋にいて、そこから津へ。これだと、新幹線4500円余に近鉄特急、もしくはJRの特急利用になる。7000円くらいか。ところが前者なら1450円。おかしくないかこれ。

ひなびた沿線、結構高くそびえる鈴鹿山脈を縫って走るエコノミールートが、時間的に大きく遅れるわけでもない。ただ、ルートとしての過疎。その結果、まるで繋がりが無いようなゾーンになってしまっている。初めて通ったルートであったが、興味深い沿線。元々の東海道は亀山・柘植をこえて来たのだったと思う。

津に到着すると、駅前のグリーンパークホテルは真新しい高層ホテルだった。向かいのうなぎ屋で夕食。うなぎの佃煮かと思うような焼き方と出し方。甘辛い甘辛い、これは中部地区の味付け文化だろう。

携帯にラジオ局Oさんから連絡。池田小学校の児童殺傷事件、電話コメントをといわれるが断る。なんだかこういう打診のされ方に不快感がある。ショックで立っていられなくなっていた母親の姿をニュースで見た。わが子があんな目にあったら、どう心を鎮めればいいのかと思う。

何でもそうだが時は無慈悲に風化させてしまう。もう、話題にすることもすっかりなくなってしまったのが世間だろう。死んだ子の歳を数えている人だけが記憶を新たにしてく。

劇場型犯罪などとも言われ、加害者側の親族が酒を飲みながら評論家の様なことを言うのをワイドショウで垂れ流していた事件である。心のケアが高らかに叫ばれ、被害者周辺にいた子どもたちのために臨床心理士が当然のように動員されるようになったひとつの事件でもあった。私がこの時に感じた違和感は今もそのままだが……

06/** 日本家族心理学会IN三重大でワークショップを引き受けている。朝食にマクドナルドのホットケーキセットを食べて、バスでキャンパスに向かう。思ったより早く到着。大会委員長とあいさつ。講師控室の隣にHさんがいるのを発見して立ち話。学会理事選挙で、私が次点だったとか。辞退者がなかったのか……というトンでもない話を聞く。次点で結構。誰が投票したのだ？

そしてWS開始。十数人の参加申し込みらしかったが、佐

藤悦子さんのプログラムが中止になったとかで、そっちから回る人もあるとか。窮屈な会場でのプログラムになったのは、国立大学の学生用の備品の狭苦しさのせい。

そこそこ快調に済ませて昼食。一時半から総会で、二時半ごろから全体WSだという。二時間以上時間があるので、思案の末、ここで辞去することに。O君がいたので、その旨伝えて出る。駅に着くと、ちょうど十三時発の亀山行きがある。それに乗って帰路に。

このあと仕事場にもどって最終電車の時間まで「木陰の物語」のペン入れ。帰宅、夕食後、夜中、ビデオ「アリー・MY LOVE」を観る。おもしろい。

この時点ではまだ日本家族心理学会にそれほど関わっていない。選挙のことも後の話として聞いたものだ。学会に積極的に関わらなければならない必然が自分の中にない。論文執筆にもアカデミックな様々な動きにも興味がないので、無縁でいようと自分の道筋を作っていた。

その後、次の理事選挙で選ばれて、いろんな経過で常任理事を引き受け、学会NLの編集も引き受けて9年目になる。この間、様々なことが起きるのだが、基本的に私は受け身だった。

06/** 文学部での授業「人間関係論」、9回目である。冊子のコピーを配布したが、650部印刷したのは、大幅に残った。何人受講しているのやら。4時20分からの家族クラスターは、それなりにおもしろいが、出てくるテーマが総論にすぎで、どう手をつけるのやらと思うばかり。早めに終了後、トロント大学ホリスティック教育のジョン・ミラーさんの講演を聞く。瞑想の話だが、外国の人は好きだねと思う。

終了後、創思館の前のベンチで、院生から相談されていた話をする。家族面接に興味をもっているのだが、家族がなかなか同意しないという話。するとその前を、KJが通ったので驚く。講演を聞きに来ていたらしい。

06/** 朝は京都私立幼稚園城南地区研修会で講演。本の販売とパーティー。(翌日の連絡で、150冊売れたそうだが。もっとも8冊分集金が足りないと言っていたが)。会場はいい感じのホールにいっぱい上々。お土産にと持たされた缶入りのオカキが一日の荷物になる。

近鉄で新田辺に。王将で肉団子定食(餃子付き)を注文したが、食後もたれていることに気づく。もうこんなものは食べないほうがいいということか。喫茶店に移動して女子大の授業の詰め。横になりたくて仕方ないほどエライ。昨日、一昨日と睡眠不足のまま走り回っているからか。授業後、講師控室で出欠チェックして、そのまま駅へ。興戸駅のベンチと各駅停車の車中でミニレポート読了。KISWECの訓練は半分すぎたが順調だ。

06/** 10時まで寝ていた。起き抜けはだるいが疲れはとれている。今週のトーク2001の冊子作りに一日かかってしまう。その間に届いていたメールの処理。いどむ(次男)の証券マンミニレポートが面白い。

院生・Nさん依頼の講演会、何か面白い企画にしたい。門真の勉強会に来ているTさんから、東大阪のK中学校での講演依頼。受講生の顔は極力立てようと思っているので引き受ける。

06/** トークライブは今日も56人(75部用意した通信が19部残った。有料入場者は51人だそうだが)の参加。会場にちょうどいっぱい。いい感じである。初めての人も、何人かあるようだ。今日は快調に話す。前半は、「50才・退職の決断」と題して50分のもりが、ノリノリであつという間に一時間。休憩を5分はさんで、後半、「カウンセリングルームのなかでは」は時事問題・池田小学校児童殺傷事件に言及。個人の危機管理と安全は環境問題であるという視点で話す。

21時ちょうどに終了して、京都駅から伊丹空港に向かう。空港バスは離陸時間帯を過ぎたこの時間にはもう運航していない。京都—(JR)—新大阪—(地下鉄)—千里中央—(モノレール)—空港の経路で。21時17分発で22時40分着だった。移動中、新大阪で買った八角弁当をホテルの部屋で食べて寝る。

06/** 朝、5時に一度目覚めもう一度眠って、7時半に大阪エアポートホテルで起床。8時35分の青森行きにのるためだ。ホテルが空港内にあるので、チェックアウトして搭乗手続き窓口へ。この時間の伊丹空港の人出におどろく。いったい皆さんは何時に自宅を出ているのか？時間があるのでベーグルの朝食をカフェで。

飛行機は青森空港上空にきて前離着陸便2機を待ち、到

着がちよっと遅れる。昼食後、12時30分プログラム開始。オープニングトークと最初の事例検討の練習で3時間15分とばす。16時から健康家族面接ビデオを一本、そして症状のある家族のビデオ。18時終了でホテルに。19時から近くの中華「豪華楼」で懇親会。

06/** 日曜日、研修二日目。シティ弘前ホテルの12階レストランで朝食。目の前に雄大な岩木山の景色がひろがる。7ケース提出予定があつたが、結局、やはりあれもこれもはやめておいた。2ケース検討。児相の家族援助勉強会の青森開催を応援しておく。空港でいつものように海峡の幸定食を食べる。京都の仕事場に戻つたのは21時半頃。FAXとメールのチェックをして対応。そして夜中に帰宅。

マドリードの日本人学校教師・K本くんから、今年の夏にスペインにいらつしやる予定はありますかというメール。そういわれて思案する。現地に知人のいる旅はなかなかおもしろいからなあ。

この時点で、地域の継続ワークショップを開始している。札幌がいったん休止して、数年後に再開し、現在に至る。だからこころが先陣を切つて、もう15年近くなると言うことだ。

この間、同じように受講し続けてくれる人があり、新しい人の参加がありで、継続のダイナミズムが順調である。金沢や東京も長期になった。松江、高知のWSも基本同じ形態だ。関西エリアでは月例の家族勉強会を草津、大津、京都(立命館大)で継続中だ。

打診されたスペインには行けなかった。K本君は帰国して、本務校に復帰。突然、脳梗塞で倒れて、リハビリの後、復帰した。

06/** 定刻12時半頃、衣笠に。研究室でパンと紅茶少々。授業は社会システムと親子関係。国籍と戸籍からみの家族事件を話す。

大学院のクラスター終了後、教員三人で研究室で話す。ここで初めて一緒になったメンバーだが、クラスの中でいろいろ感じてきている関係づくりがおもしろい。なんだか久しぶりに仕事をするチームを持った感じた。クラスターになにか実感できる課題を持ち込んでみようと言つた。

今これを読むと不思議な気がする。中村正さん、村本邦子さんは十四年間、今もずっと一緒の同僚である。揃ってシドニーにも、ソウル(二度)にも、ロンドンにも、上海にも出かけた。飽きることなく話し続けて十四年はまあ立派だ。

途中から尾上明代さんも加わって、毎週月曜夜、クラスタ終了後の「さと」での会食も、ハンパない回数になっている。基本このまま、私の定年退職まで続くのだろうか。公務員生活25年だったが、立命に定年まで居たら17年ということになる。やっぱり私は根気の男なのだよ。小学校の通知票に「根気がなく、気が散りやすい」と書いた高橋先生は間違っていた。授業でやっていることがつまらなかったのだと思うよ。

06/** 遅れている季刊「発達」のイラストをコロラドで仕上げる。本当に慌ただしく、映画館にも行けない毎日である。午後の授業の準備しながら、文部省に出さねばならないという業績書の記入。ここ二、三日の間にも、本意な講演依頼が着々と届いている。依頼者は勉強会に参加している人、訓練してきた人、大学院の社会人入学生など。

06/** 昼間はいろいろ雑用をこなして過ごす。青森の大会は早速日程変更しなくてはならないのか？九州の会合なんて聞いてない。どんな集まりなんだろう。夜は門真市の勉強会。講演を依頼してきたTさんがどの人か判明。

勉強会で質問されたから応えながら考えた池田小学校二学期まで閉校の件。詳細はわからないが、なんだかとても大げさに構えた合意だという気がする。父兄たちの多数がそれを承知したというところに、在校生の家庭環境が透かして見える。一般社会では、明日から小学生が二学期まで家にいるなんてことになったら、暮らしが成り立たない家だっただろう。なんだかたまらない気がする。

特別扱いが嫌いだ。昔から附属小学校という存在も、そこに通わせながら親も、特別だと思っている意識も嫌いだった。しかし世間はますます、お受験ブームで、我が家は特別、うちの子は特別の方向に流れていった。「発達障害」の一群とも相似形なものを感じる。そして「学校環境」は誉める人の少ない、クレマーの巢のようなことになった。

そんな世の中になって久しい。個別に見れば、事情は誰にもある。そのことは認め合えばいいし、それこそお互い様だ。ところが世の中には、アンフェアだとも思えるような特別扱いがある。病気に逃げる、流行の症候群になって利得を確保する空気が蔓延する。そしてそれをネタにしたビジネスが隆盛になる。

社会システムの視点から見れば、いつの時代にもヒット商品や、新たな消費構造が作り出されてきた。近年、うつ、発達障害、不妊治療、高齢者の健康問題とそのターゲットは不健全化の一途をたどっている。「不安」産業ぐらいにしか、もう商機は見いだせないマーケットが思っているのだろう。

健康な人が健康な消費をしてくれる健全な社会の比率をもう少しあげる努力をしないと、ますます消費はネガティブをカバーするためのエネルギーに向かう。

振り込め詐欺も同じ図式だ。原野を売った詐欺師達は、二束三文ではあるが原野を用意していた。今の詐欺師達は原野すら用意していない。支払い手の中にある不安を煽っているだけで、電話一本で札束を送らせるのである。

06/* 保健衛生専門学校で一日WS「人間関係論」に9:30~16:00まで。元気な小娘たちなので、キャーキャーワーワー騒がしい。話を聞くこともできるのだが、楽しませてやると頭になる。単発で集団を相手にするのは疲れる。最後はブラインドウオークを用意していたので、それで一息つく。

終了後、仕事場に戻って一息。夜はKISWECの理論講座二週連続の一回目。好調に話すが、聴衆は中味がやや真面目気味で戸惑いがあったかも。でもセンター職員はじめ、感触良好。

新書「不登校の解法」が19冊売れる。40人余りの参加でこれはすごい。その後、山形から送ってきたというサクランボをいただきながら、所理事長と歓談。まだ22時前なのに、今日は帰宅の途に。

我ながら元気だなあと思う。近年、こんな仕事の仕方はしなくなった。朝、昼、晩と一日中、こんなに詰めなくなったのだ。その結果、忙しそうだが、あちこちにゆとりはある。

06/** KISWEC教師のための家族理解WS二回目。「境界」がテーマの一日。朝は、家族面接のデモンストレーション。その中のひと組みの話を聞きながらちょっと感激する。

名付けが一人の子供の運命を変えていった話。外国航路の船員をしていた父は不在がちだった。初めての子供が産まれたとき、両親はその時父の乗っていた船の名を娘に付けた。やがて次女が誕生。その時同居させてもらっていた伯母宅には子どもがない。名前を付けさせてほしいという希望を受け入れて、優子とした。やがて跡取り問題が話題になったとき、彼女を戸籍上のことだけでと養女にした。両親は本人にも意思確認をした。小学校2年生の時だった。

ところが6年生のとき、一家は引っ越しをすることになった。手狭になってきた住宅事情が影響していた。その時、親は娘が当然ついてくると思ったという。しかし本人の意志を確認したところ、世話になっている、年取ってきた養父母を置いていけないといった。そして親子はわかれた。

それから30年。いまま養母は私の家の裏で一人暮らし。実父母は健在。後年、姉は「あのとき、両親はあなたがついてくるものだと思っていたからショックだったと言っていた」と語ったという。

決定を自分に任せられ、意志確認をされることの苦しさを思う。幼い子に責任を押しつけてはならない。ある年令まで子どもは、よい結果だけを与えられて生きていいのだと思う。後になって、そうだったのだということを理解すればいいのだ。

午後一番のプログラム、早樫君はずいぶん話し好きになったものだ。三コマ目に担当する連れ子夫婦家族の事例、準備をすっかり忘れていた。緊張感が足りない。心せねば。

夕刻、業績書記入のため資料が必要なので本宮に。母が稲荷寿司を作っていたので食べる。しばし話し込む。

帰宅すると長男が来ていて映画「みんなのいえ」を見ているところだという。戻ってきて元気があったら「A. I.」の先行レイトショーにいくつもりとか。結果、午前0時から二時半すぎまで、一緒に見にいって疲れて帰宅。長いけれども、面白味のない映画。「母を訪ねて三千年?」、とにかくぐったり。

06/** 久しぶりに仕事場DANでのフリーミーティング。Mさんが二時五分前にきた。まだ椅子や机が用意できていな

い。Fくんは定刻に。Kさんが来てCくんがくる。Hさんが来て、Nさんが来て。KJさんがKKさん(洛北高校)を連れてきて、私をいれて9人は限界に近い。あれこれ話しは飛び回り愉快愉快。何を話したかは大方忘れていますが、楽しかった。たくさんの差し入れにテーブルは山盛り。

当時、そもそも京都市内にワンルームマンションを借りて、仕事場DANを開設した理由のひとつがこれだった。

人はあらゆることを職場に支配されがちだ。生活の糧(経済)を牛耳られるし、人間関係も職場を基盤に大きくコントロールされる。時間もそんなに自由にはならない。

この場所は、近接異分野のいろんな人が意見を交わせるようにという目標があった。当時流行だった異業種交流、名刺交換会みたいな顔つなぎ会にするつもりはなく、各分野のコンテンツについて、近接領域の人から自由に個人的な意見が欲しかった。そして、この目的は十分に果たせた経過が産まれた。

06/** 早めに寝たので早めに起きて、早めに仕事場に。文部省に提出しなければならぬ業績書作りにかかる。児相時代、出し続けていたレポート(紀要)がずいぶんたくさん、しかもテーマも多岐にわたって存在することに気付く。これらを一度読み返してみようと思いはじめる。大学の授業(学部)はもう十一回目になっている。

夜のクラスターは懇親会。大学近くの「嵐」で会費三千元。えらく楽しいのは何だろう。中村さんが遅れて参加。Uさんは来ていない。就職が決まって両立は困難になってきているのか。Gさん、Q君が両サイド。Tさんは映画をやたら観ていて、健康器具の通販にはまっている。話が合うので笑ってしまう。二次会に白梅町の喫茶店で七人でデザートを食べ解散。九時すぎなので仕事場に戻って、業績書の記入続ける。今月中が締切だ。

06/** 朝、携帯にFくんから電話。来年二月の門真市での講演依頼。夜は八日市勉強会が入っているが十三時半からで受ける。午後は女子大。前期あと一回である。アノレキシアの話をすると、教室はシーンとする。

家族療法訓練のボランティア家族は父母娘の三人家族。

微妙な話だが、ある種の典型パターンに気が付く。大学入学をきっかけに、家を出ようとして敗北した就職浪人物語。「発達」の次回原稿案。自立に関わる今日的な親の罨、子の罨、これは面白いテーマとしてかけそうだ。

06/** 朝一番、7シネマで「マレーナ」を観る。やっぱりいい。年上の女性に憧れる少年の物語はジャンルパターンだが、それでもやっぱりいい。終了後、パンフレットを買って、一階のMUJIでランチ。水曜日だからレディースデイとかでオバサンがおおい。

仕事場に戻って、メールの対応。新旭町の講演依頼、門真の講演依頼、情短全国大会のWSレジュメなど作って発信。月刊「児童心理」の原稿校正。業績書のチェック。夕刻からの八日市勉強会レジュメ作っていると、注文してあった日本近代文学の朗読テープが届く。そんなことをしていると出発時間になる。

教員が提出の事例は養護問題背景の子どもの話。ネグレクトで訴えれば、虐待対応可能だと思う。

06/28 あれよあれよで6月がおわる。今月はなにか知らない間に過ぎてしまった感じがする。朝は相談室。話に聞く児童福祉センターは、温泉旅館の増改築の結果のような肥大化に、働くものが悲鳴をあげている。専門性の使い方も、チームワークも、昔感じていたどうしようもなさそのままである。午後は家庭裁判所へ。離婚調停、三回で成立。同居している妻からの離婚の申し立てを、呼び出し状で知ったという変な夫婦だった。その後、次回の新件のことで、調査官と話す。児相も関わっている中学生。

家庭裁判所での体験は、私の児童・障害者相談機関での経験を、相対化させる力を持っていたと思う。「法」がベースにある場での、当事者間紛争解決の道筋作りは、福祉、教育のそれとは大きく異なっていた。

だから面白かったし、同時に、共感できないことも多かった。それは多分、どちらが適切かという話ではない。大きな秩序維持システムの中の各論としての整合性の具体化なのだ。それにシンパシーが持てないだけの話だから、私にとって法の世界はずっと関わっていたい世界ではない。

06/** 朝から桃山で家族療法のケースをとっている。Sさん、順調な印象あり。しかし一方、自分のセラピーの見直しもしたくて、午後はSKさんを中心に、NSさん、CB君、OR君とH君でケースカンファレンス。いろいろ思うこともあり、人の言葉に誘発される発言もある。

終了後、夏の旅の思案に、昨年同様HISへ。何となくトルコが再燃。でも直行便は一杯だとか。仕事場に戻って明日の「家族相談士プログラム」を準備をしながら、今日午後のカンファレンスを思い出しながら、いろいろ考えた。

本人にはほとんど合わなくなっている事実。そのために効果はどうなのか。そういうスタイルの治療的展開。

この時、54歳。もう十分に経験を積んでいるはずだが、それでも家族面接のすすめ方に、いろいろ思っている。67歳になる今、あの時と同じだとも思わないが、大して違ってもいい。新しい人に会い、そこから何がはじめられるかを摸索する作業に、もう分かった！と思える日は来ないのだろう。だから飽きないどころか、面白いのだ。分かってきたことが増えれば増えるほど、わからなさの世界の組み立てが興味深い。よくもまあ、こんな面白い世界と関われる仕事に遭遇したものだ。

夏のトルコ旅行は結局イスタンブールに一週間ステイする旅になった。妻と二人、市内のホテルを二度引越しながら、トルコの大都会をあちこち散策した。

おかげでイスタンブールの街は結構見当がつくようになった。この後、別の旅行の途中、乗り継ぎでアタチュルク国際空港で半日時間があつた。久しぶりのボスポラス海峡ウオッチにガタラ橋たもとのカフェに。馴染みの街が出来るのは素敵だ。

トルコ人が日本最良のように、私達もそうだった。しかし、国際的な課題を前にすると、クルドをはじめ、歴史的にもトルコ帝国は強大な軍事国家だった。

蠅螂の斧

番外編

2015 NYマンガ展まで

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

一年前にNYのギャラリーを訪れて決めてきたマンガ展。いよいよ、準備が大詰めの日々。カラー版の作品づくりは、このところ毎年のことだからストレスも感じないが、慣れない海外展覧会の準備となると、些細な気がかりがあれこれ出てくる。これはそんな日々の大詰めの記録。

終わってみれば、案ずるより産むが易しなところも沢山あったが、そんなことは後だから言えること。渦中ではなんやかやが気がかりだった。とにかく、一年かけて準備したことをやり終えた安堵感は半端ない今である。

2015/1/7

「そうだ、日記を書いておこう」と思った。

二ヶ月後の今日は、NYマンガ展の会場にいるはずだ。どうしてこんなことになったのか。さかのぼるもよし、あればの話だがそこに向けての抱負を書くもよし。

対人援助学マガジンの連載に、2015年(現在)を挟んでみるのも良いかと思った。

NYマンガ展は3月5日～11日が団士郎・東日本大震災復興応援プロジェクトマンガ展。そして3月12日～17日は篠原ユキオヒトコマ展である。

この二人連続のマンガ展をNYで開催できることになった経過と、今からの二ヶ月を、書いてみたいと思ったのだ。

*

さて、NY展は何処まで遡ればより正確な事実に近いものになるのだろう。現実化の始動は、2013年師走、篠原ユキオが「いよいよその気になったので、NYに下見に行ってくるわ」と知らせてきたことだ。

NYでの一コママンガ展開催は、大分以前から彼に勧め続けていた。彼のキャリアや受

賞歴を考えると、もう日本の雑誌や新聞で連載が始まったとか、終わったと言っている時期は過ぎたと思っていた。しかしなかなか腰の重かった彼が、やっと動くという。「だったらNY行きと一緒に付き合うよ」と返した。

私はNYにこれまで二度出かけたことがあった。一度目は次男の成人記念父子二人旅で20年近く前。その後は13年前、舞台芸術学園でミュージカルの勉強をしていた末娘の、成人記念親子旅(これは妻も一緒に三人旅になった)。そして今回、久しぶりのNYだった。

篠原ユキオは40年以上の付き合いになる漫画家だ。私が23、4歳の頃、大学生時にお互い一コマ漫画描きとして、新聞の投稿欄での遭遇が最初だ。その後、産経新聞ヤング面企画連載漫画「eye」の執筆陣として編集部との仲介で会うことになった。

その時のメンバー、安芸ヒロシ、篠原ユキオ、団士郎、そして私の高校、大学とマンガ研究会の仲間だった山口博史で結成したマンガ集団が「ぼむ」である。「ぼむ」は我々のグループの名であり、同時に定期発行で30数号

を数えた一コママンガ同人誌の名前でもある。

当時、篠原は京都教育大の学生で、卒業後は中学校の美術教師になった。安芸も山口も卒業してサラリーマンになった。私は一浪して同志社大学心理学専攻に入学していたが、結核を患って一年留年し、ひとつ年下の篠原が先に卒業、就職という時期だった。

一年後、私は心理職の公務員として京都府に就職した。

その後、篠原は教員を辞めて漫画家として独立。新聞を中心にあちこちで精力的に漫画仕事をし、数々のコンクールでも受賞した。

私は50歳になるまで心理職公務員の仕事と漫画家の二足草鞋で多忙さを楽しんでいった。

50歳で退職し、京都市内に仕事場D・A・Nを構えたのは、篠原のアトリエの真似である。そこで私が制作にいそしんだかどうかは分からないが、出勤するオフィスを構えたのは今考えると良かった。

独立して数年後、「月刊/少年育成」誌で長期連載に入っていた「木陰の物語」が、単行本「家族の練習問題」として、長男(遊)のホンブロッコ(アソブロッコk.k.内出版部門)から出た。

その前には、文春新書で「不登校の解法」も出して貰っていた。出来ればいいなと思っていたものが、幸運にも次々と形になっていった。他にもいくつか出版の機会に恵まれ、50歳前から今までで、20冊近い本を出してもらえている。半分がマンガで、半分は一応、家族心理臨床の専門領域のもの。このバランスは本意なモノである。

また、2001年からは誘われて立命館大学大学院応用人間科学研究科に籍を置くことになった。そして2011年秋、東日本大震災復興応援プロジェクトがスタートした。「家族応援マンガ展」は2014年には全国13カ所で開催された。

漫画家として活躍していた篠原ユキオは10年程前、誘われて、京都精華大学漫画学科の教授になった。天性の教育職者なのだろう、二足のわらじを多忙に充実して過ごしているようだった。



●篠原ユキオ 作●

しかし私にはずっと忘れていない希望がある。それは篠原ユキオが一コママンガのアルバムを出すことである。

我々日本で一コママンガを愛し、描く者にとって、憧れのひとつに欧米の漫画家のヒトコママンガのアルバムがある。

絵が良い、アイデアがしゃれている、上品だけど、辛辣なところもある。これぞcartoonという作品集だ！

インターナショナルなルートで、彼のそんな作品集が出ることを私は強く願っていた。更に、雑誌「ニューヨーカー」の表紙イラストレーターとしてのデビューも勝ち取ってほしいと勝手に強く思っていた。

彼は面倒見のいい男で、いろんな人の世話をする。しかし自分のことは自分でやりたい人間で、誰かの世話になるのは下手だ(嫌がっているのかもしれない)。だから私は友人と

して、口出ししてやろうとしてきたし、今もそう思っている。それが形になったのがNY行きのプランだった。

ギャラリー

NYで会場を確保して、マンガ展などが出来るものかどうか、全く見当がつかなかった。彼が下見にと言ったのはそういうことだった。

チェルシーのギャラリー街をあたる段取りは、彼の元教え子でNY在住の女性のアポを取り付けたという。

ただ、仄聞するところでは、NYの画廊において、日本で考えるような個展を開くのは簡単ではなく、現実的には不可能に近い。そこで私としては、次善、三善の策を摸索していた。

そんな時、「家族の練習問題」を出してくれている息子が、大阪のイラストレーター・上田しずかを連れて新しくオープンするNYのギャラリーでのグループ展に出かける話を聞いた。時期がほぼわれわれの渡米と重なっていた。是非、現地で何か相談に乗って貰おうと段取りをした。

更に、NY展計画を「家族療法WS」のスタッフ同僚の早樫一男に話していると、彼に繋がりのあるNYのギャラリーの話が出てきた。こうして、思いもかけないルートから、ワシントン広場近くの天理文化協会のギャラリーが浮上した。

いずれにしても、やはり行ってみなければ分からない話で、紹介を受けた福井館長さんにまずはアポを取らせて貰った。そして結果的には、それが今回の開催に繋がったのだった。

作品様式

私は現在、準備の大詰め真っ直中。作品は基本的に、雑誌連載用のモノクロ原稿を、photoshopで彩色して、拡大プリントするものである。

15年間連載してきた「木陰の物語」の中から、専門家に英訳して貰った9作品を持ってゆくことにした。(＊1)

見せ方に思案が必要だったが、なかなか妙案がなかった。

ギャラリーは天井までの高さ5メートルの真っ白い壁が、延べ32メートル用意されている。そこを一人で充実させなければならない。

2011秋からの東北被災地各県でのマンガ展で、だいぶ個展にも慣れてきた。長いこと漫画を描いているし、「ぼむ」マンガ展のようなグループ展は40年近くやってきた。しかし近年まで、個展は一度もしたことがなかった。そんなことをしたいと思う動機がなかったのだ。

個展のきっかけは、東日本大震災とむつ市図書館ギャラリーの二つ。絶妙のタイミングで、下北半島の奥で、2011年9月、第1回の個展が動き始めた。それが、今回のNY展に繋がってくるのである。

そしてある時、日本から物語を持っていくのだから、絵巻物や掛け軸はどうだろうとアイデアがひらめいたところで、すっきりした。

英会話

今日も先ほどまで英会話学校 Berlits いた。せっかくアメリカまで出かけて、ギャラリーに詰めるのである。そこで無言というのは愛嬌がなさ過ぎるだろうと思った。

日本語なら必要なことは何でも話せるが、もともと社交的などではない。まして見知らぬアメリカ人と英語でハーイなどとやれるわけがない。そこで、外国人に慣れておくことを考え、高い授業料を払って、展覧会までの6ヶ月、Berlitsに通うことにした。

ここで痛感したのは、記憶力の減退である。元々丸覚えは大の苦手。加えて加齢による記憶力の低下。惨憺たるものだと思うが、その状態でも好意的な外国人の前には平気になった。(＊2)

1/8

昨日の夜中、NY 展のキュレーターから篠原と私宛にメールがあった。

NY Gallery Guide に掲載するインフォメーションが必要になったので、至急、展覧会のタイトル、簡単な説明、作品の表現方法を知らせてくれと言う。加えて、展覧会のプレスリリース用にアーティストステイトメント、作品のコンセプト、経歴書、作品の写真が必要だという。

時差の関係でこの着信は午前3時過ぎだったが、読んでいたら篠原から午前3時15分にメールがあった。こちらは時差の影響があるわけではなく、この時刻に起きているのである。私が直ぐ返信すると彼から、「4日間連続で徹夜をしている」と無茶な返信が届く。大学への通勤の運転中に、寝ていのではないかと心配になるが、昔から我々は、こんな時間に起きている二人なのだ。

そう言えば以前、誰も見ているはずのないNHK の「のど自慢予選会」というBS深夜ドラマ長時間放映を、流しながら仕事をしていて、その話で二人だけで盛り上がったことがあった。

1/9

制作、プリントをお願いする業者「す屋吉」(京都)に、試作品を作ってもらうためデータを送ろうと宅ファイル便を起動したら、トラブルで送れない。

メインPCがまだウィンドウズ xp だからなのだが、前には送れていたのに、全く困ったことだ。動きが悪くなったので、不要だと思われるモノをアンインストールしたら、必要なものまで消えてしまったらしい。我ながら、くだらなくてあきれれる。

1/10

日常業務やスケジュールは詰まっているが、時間を見つけては、マンガ展データに手

を入れている。しかしまだ、全ての整理はできていない。数が多いので、細部の手作業をしていると、全体が見えないまま時間が過ぎる。もう、一ヶ月くらいで完了してしまわなければならないのだから、何処かで見切らないといけない。

そのためには全体を整理して、新しい進行管理表を作らなければならない。前のやつは書き込みが多すぎて、何か分からなくなってきた。

NY作品進行表

	英文	原稿	制作	印刷	展示
1	① 藤子と...	1			①
2	② 藤子と...	2			②
3	③ 藤子と...	3			③
4	④ 藤子と...	4			④
5	⑤ 藤子と...	5			⑤
6	⑥ 藤子と...	6			⑥
7	⑦ 藤子と...	7			⑦
8	⑧ 藤子と...	8			⑧
9	⑨ 藤子と...	9			⑨
10	⑩ 藤子と...	10			⑩
11	⑪ 藤子と...	11			⑪
12	⑫ 藤子と...	12			⑫

1/16

楽しみにしていた掛け軸の試作品を持って「す屋吉」の磯貝さん来訪。

今回の仕事も、毎年東北展で世話になっているここをお願いすることになっている。渡された掛け軸は想像以上に大きかった。無論寸法は合っているので良いのだが。

黒い棒で、掛け軸風に仕上がった作品は展示壁面ですっきりぶら下がってくれるだろう。大きい方が、ギャラリー壁面が貧相にならない。

このままで完成品として了解なので、この仕様で、他の作品も仕上げて貰うようお願いする。

それから、白い壁面对策として考えていた、カラーボードに一色プリントのB2日本語

版作品のお願いと、「故郷」の巻物版制作も依頼する。

輸送問題でコストの話や、発送の段取りなどの話もする。出来るだけ早い時期にこちらの作業はフィニッシュして加工に入ってもらえるよう話す。輸送日数の事は郵便局に確認しておかなければならない。

1/17

同僚の村本さんから、中村さんとNY展訪問の計画を聞く。それぞれの研究課題に引っかけてNY出張を組んで、そのついでにギャラリーをのぞいてくれるという。

被災地復興支援・家族応援プロジェクトは毎年、三人のむつ市からスタートだから嬉しいことだ。私個人の「木陰の物語」展という位置づけでは、弱いところがあるなあと思っていた。

これでマンガ展以外の展開も、無理のない範囲で拓かれるかもしれない。何もかも自分でまかなうのは大変だが、展覧会趣旨に添ったサイドメニューや告知活動、調査があるのは有り難い。



1/18

作品輸送の件で、郵便局のHPでEMS(国際スピード郵便)のことを調べる。すると凄いことが判明。京都からニューヨークと入力すると、到着にかかる日数は二日。「どうなってるんじゃ!」と思う。

サイズは1.5メートル×2メートルくらいで、

料金は重量による。最大30キログラムまで可能で、最も重くて35000円くらい。

輸送の件では篠原ユキオが運送会社から取った美術品輸送見積もり(百数十万円)とは大きな差。これだけ違うと、EMSで発送できるサイズになっているのが、有り難い。

1/22

本日でほぼNYマンガ展の作品準備は完了。まだ細かいことはあるだろうが、とにかく告知看板や、解説パネルなどのデータを準備して、出来るだけ早く業者に発送せねばならない。

す屋吉 kk 磯貝様

予定より早く仕上げました。
お願いを箇条書きします。

(1) 掛け軸は作品8作、既制作の「幸福な人生」を含んでいますので、掛け軸制作の残りは7作品(14本)です。

(2) そしてショーウインドウ用の掛け軸1点。

これは作品の掛け軸と同じ仕様で上下中央部に、告知内容が来るのが良いかと思えます。

(3) 作品「故郷」を巻物式に。巻物の天地は厳密な寸法は拘りません。横長になって壁面展示されることを想定したものに。

(4) 展覧会趣旨の英文と日本語の告知ボード(B2)、一枚に入れてしまうのが良いか、二枚並べるのが良いか、悩むところです。読みやすさは文字サイズにもよりますね。ご意見あれば。

(5) 東北巡回展のイラストボード英語版

ボードサイズがバラバラなのは見苦しいかと思うので、B2横で入る縮小で。

(6) B2ボード(フレーム無し・パネル)展示8作品(故郷をのぞく)の日本語版 黒一

色をいくつかのカラーボードに印刷。

ボードの色は出来るだけ、洋色ではなく、和色の、イラストが見えにくならない程度の濃色で。

掛け軸作品の横に、同じ日本語ボードが並ぶので、色彩対比がある程度配慮されているのが望ましいです。

いろいろ書きましたが、まだ、不明なところがあるかと思います。実際に作業を進行していただく中での確認も必要かも知れません。

ひとつの物語の順は、画面上に数字を入れるのは見苦しいので、データ番号が付いています。順番が入れ違ったりしないよう、ご配慮下さい。

1/26

ドンドン日が過ぎるが、まだ最終データが送れていない。さっさと発送して、す屋吉さんに作業して貰わないと思うのだが。

明日にでもとりあえず、発送をと思案。ここまで大きなデータをネット送信するのは不安なので、USBを宅配でと思う。

1/28

レターパックでUSBを発送。担当の磯貝さんにメールも送信。これで私の方の一区切りがついた。

1/30

送ったデータに関して、いくつか確認のメールと制作費の見積もりが出てくる。NY への発送も含めてやってくれるが、総額70万円程の金額。掛け軸17本、巻物1本、告知パネル、作品パネル32点など、数も多いし当然だが。

2/4

いよいよ、オープニングまで一ヶ月になっ

た。村本さんから現地の3.11追悼集会で、30分ほど話す時間を貰うことになったと連絡。そこでマンガ展の告知も可能とか。ドンドン情報をよこせと言ってくるが、なかなか他の段取りがはかどらない。でも、現地のアクセスポイントが増えるのは良いことだ。

2/6

巻物の校正データが入る。長さ、7メートル近い作品。これを壁に貼る。ギャラリーならではの楽しみ。



一方、カラーボードの仕様について意思疎通不十分点が発覚。制作日程をギリギリにしておかなくて良かった。やりとりで、出来るだけこちらの思いのものにして貰うため、磯貝さんと会って、パネルに和紙を貼る案が出て来てる。それは素敵だが、色はどうなるのかなあ。

2/8

現地での催しに、チラシを置いて貰ったり、こちらも参加したりという話に村本さんが活発に動いてくれる。中村さんとのNY来訪話が確定。その結果、せっかくならと上積みされたことが増えた。

ギャラリー・マンガ展の案内カードが届いているが、微妙な誤植に何となく配布が消極化。まあ、日本で配っても、来る人はないんだろうけど。データを配信できるところには配ろう。何人かの方から、「告知してあげるからデ

一タ発送して」と言ってくさる。有り難いこと。

Great east Japan Earthquake
Family Support Project
Manga exhibition
DAN SHIRO
Rikumeikan University
Graduate School of Science for Human Services

in the shadow of the family tree
木陰の物語

TENRI CULTURAL INSTITUTE OF NEW YORK
2015 March 5~11 12:00 ~ 18:00
43A WEST 13TH STREET, NEW YORK, NEW YORK 10011

一週間で切った。出発までしておくべき事。展覧会とは別口の、追悼セレモニー用のパネル 4 枚をEMS国際スピード郵便で明日に発送。同時に、ギャラリー向けに冊子200冊も発送。輸送は重量問題だから一冊 100円ほどのコストになる。

24年度確定申告の準備を済ませて税理士に発送。週末は松江で土曜、日曜、それぞれのプログラム。

展覧会関係は済んでいるので、NY旅の前後の対応が主だ。ギャラリーに誰が来てくれるのか気になり始める。展示は簡単に済むような気がしているので心配していない。(＊3)

大学でやっている東日本大震災復興応援プロジェクトの一環としての位置づけが明確になり、出張旅費などが支給されるようになったと知らせを受ける。

自分で勝手に計画して、準備して実行しようとしていることを応援してもらえるのは、とても有り難い。恵まれているなあと思う。追悼集会での告知チラシもなかなか良いできた。

2/15

掛け軸16本の校正 巻物、告知看板の校正など、必要なことが済んだ。後は完成して発送して貰うだけ。

私も一作品、B2版4枚(一作品)を別口に発送しなければならない。現地で「ほくほく会」という東北出身者の小規模な追悼イベントが行われる。これは継続的に開かれているらしい。そこで展示してもらおう事に決定。

東日本・家族応援プロジェクト

団士郎「木陰の物語」漫画展
2015年3月5日(木)~11日(水)
12:00~18:00pm 最終日18:00まで 日曜閉館
天理文化協会(TCI)43A West 13th, NY

立命館大学大学院応用人間科学研究科では、2011年から10年計画で、毎年、東北4県(青森・岩手・宮城・福島)を巡り、東日本・家族応援プロジェクトを開催しています。団士郎・家藤達美画十数種をモニターを通じて、被災地の方々にエールを送りながら、復興の証人(witness)として存続し続けたいと願っています。
このたび、NYにて、団士郎の漫画展を開催するとともに、小さな報告会を開催しました。皆様お聴き合わせのうえ、是非いらしてください。

報告会 プロジェクトから見える被災地の今
日時 2015年3月10日(火) 18:00~20:00pm
場所 天理文化協会
報告者 村本邦子・中村正・団士郎(立命館大学)

団士郎プロフィール

- 1947年 東京都生まれ、慶應義塾大学卒
- 1972年 東北大学大学院文化科学研究科修士課程卒業
- 1998年 住友信託・A・N設立
- 2001年 立命館大学大学院応用人間科学研究科修士課程修了
- 2002年 駐日団士郎・日本復興推進委員会
- 1993年 第二編纂作業員(立命館大学)
- 1990年 第一編纂作業員(立命館大学)
- 1999年 第二編纂作業員(立命館大学)

被災者にマンガ家ができること
マンガ家は、自分の創作に活動したい、マンガ家は活動の場を確保したい、マンガ家は大きな役割も果たしたい。
だからマンガ家は、小さな事をそとやる。多くのモノを失った被災地の人に、誰かの小さな役割を持って助ける。
それ以外の活動の中にも起っているもの。
何もかも奪われたような悲しみの中、そんな役割があったら、少しは心が軽くなるかな。
団士郎

主催 立命館大学大学院応用人間科学研究科、立命館大学文学部、立命館大学文学部附属立命館学術センター、立命館大学文学部附属立命館学術センター、立命館大学文学部附属立命館学術センター、立命館大学文学部附属立命館学術センター

2/25

2/28-3/1

直前、最後の出張。去年はロンドンから戻ったその足で、空港から松江に直行だった。今回は逆。松江の社会福祉協議会で講演2時間15分。翌日は松江WSで6時間。

3/2

明日の朝が超早いので、伊丹空港ホテルに泊まることにして準備中にJALからのメールあり。

Web 事前座席指定の手続きが、入国手続きの不備で完了していないという。意味が分からないし、メールで問い合わせは出来ず、当日カウンターでその旨伝えるようにとある。

まったくわからない。更に、理由なくこういう事がありますなどと断り書きもわからない。

ESTAというアメリカ入国のエントリーを必ずしなければならないが、準備段階で二年間

有効だと知らずに行った。

しかもその手続きが知らない間に業者が入っていたらしく、手数料が高い。おかしいなあ、値上がりしたのかと思った記憶がある。その業者から、手続きをしたら既に登録されていたので、返金するという知らせがあったのだ。

そんなことがあったので、その不備でも絡んでいるのかと心配した。出来るだけ不確定要素は排除して行動しているのに、こういう分からないことで不安に思われるのはストレスだ。まさか成田で出発できないなんて事はないだろうなあ。

伊丹泊にしたので、今夜の内にJAL国際線のカウンターで確認するつもり。そういう意味では空港ホテル前泊が、別の役に立った。

そんな中、次のメールは中央法規出版の柳川さんから。「家族理解入門」が三刷になるそうだ。有り難く嬉しいこと。新しい本のプランも動かしてみようかと思いはじめ。

3/3

早朝に目覚めて一階のJAL空港カウンターへ。問題なく発券された。今から成田に向けてNY便に乗り継ぎである。

千葉君と伊丹で、上田さんと成田で、そして搭乗少し前、遊とこと葉が登場。

事前予約で取れていた席は通路側で良かったのだが、やはり何か不都合があったのか、搭乗ゲートをくぐってから、別に呼ばれて確認を受ける。何があつてのことなのか分からないが、クリアできて良かった。

NYまで昼間を跳び続けて、同じ日の朝に着くという離れ業？。3月3日11時40分成田発で3月3日10時頃にNY、JFK空港着。

明日はいよいよ発送済みの作品群と初対面。サンプルは見たが全作完成品をNYで初めて見る。楽しみだ。機中では5本の映画を見て、一睡もしなかった。



ワシントン広場（*4）

3/4 展示

12時過ぎ、ワシントン広場経由でギャラリーへ。去年同様、NYらしい佇まいの街並。

滝沢さんが出てきて迎えてくださる。福井館長、一年ぶりの再会。



早速送られてきている作品の梱包を解く。思ったような出来映えで一安心。少しは瑕疵もあるが、それには目をつむる。

遊君、千葉君、上田しずかさんの三人で展

示を試行錯誤しながら開始してくれる。思ったよりも時間がかかったが、満足な仕上がりになった。さあ、いよいよ展覧会の始まり。

準備中に、ギャラリー関係の人が、会場での催しに来訪。その人達が準備中に見て、声をかけてくる。巻物マンガを「ちょっと見始めて、終わりまで読み切っていました」という。伝わっている。そして早くも、NY在住の日本人の人は表現、感想が活発な気がする。

さあ、いよいよ明日、オープンだ。



*** 1** 英訳は基本的に私の日本語に対してどうなのか分からない。

今回の訳を、長年現地で暮らす日本人来場者に複数うかがう機会があった。皆がよく訳してあるといった。ニュアンスがよく出ているという。そうなのか・・・と思ったが、分からん。

*** 2** 結果的にだが、会場には常に日本語が溢れ、訪れる外国人達も、片言の日本語を話す人が多かった。

全くの英語でのやりとりをしたのは、2、3人だった。展示の漫画も、英語版のモノより、日本語版を読んでいる人の方が圧倒的に多かった。日本語版小冊子も配布したが、英語版の制作を求めた人は数人だった。



*** 3** そう思っていたが、実際はなかなか長時間かかってしまった。千葉君と遊、そして上田しずかさん

が頑張ってくれた。私はいつものように見ているだけだったが、まあそういうものだ。

*** 4**

この時期、NYは寒いとは思っていた。でも、マイナス10度なんて気温は、日本の冬でも余り経験しない。乱暴な寒波だ。そして数日後には、日中の気温15度位になったりした。激しいというか・・・。

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第五回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

この連載で何をしたいのかを改めて考えてみた。よく言われるように、世の中の出来事の移り変わりは繰り返すだけだ。テクノロジーの革命的変化は否定しないが、それを享受する側の人間は、怠惰になったりする傾向はあっても、大きく進歩した事実はない。変化はいつも外に起きていて、人間の内側にはそれ程起きない。

だから外界に次々起きる物的変化や、流行の言葉を追いかけていても、大したことは何もない可能性がある。無論、大したことがしたいかどうか、起きて欲しいのかどうかにも議論の余地はあるが。

私には、同じ事を泡（アブク）のように繰り返すのではなく、ささやかで良いから次の一步を刻んでみたいという欲望が強い。だから言葉ひとつとっても、お約束のラベルのようなものを次々合唱する業界人になりたくない。世間が言うことも、業界人が口を揃えることも、心の中で呟く昨今の言い回しも、皆、流行の類型である。

こんなことを言いたくなる理由は、多くの人たちが一所に留まって事態を深めるほど、そこにはいないからだ。誰もがつぎつぎ移ろって、さっさと居なくなってしまう場所に、何かが根ざしたり芽吹いたりはずまい。一生懸命ではない、一所懸命が言葉としては先なのだ。

14年前の日々、私が記述していたものは当時の主観的現在だ。そして今も又、今から10年後から見れば、過去と呼ばれる主観的現在を記述している。比べてみると過去も現在も大した違いはなさそうだ。

常に私はその時の現在にすぎない。現在は、いつもその時の自分でしか語れないということだ。なのに10年経ったら、「過去」という言い方で今のことを語る。

テクノロジーに関わって何かを論証していたなら、その後の10年間に新しいことが発見されて、昔の話は陳腐化しているのかもしれない。しかしそんな中味ではないから、修正したり言い繕ったりする必要もほぼない。私はそんなことを記したいのではなく、時代の事実、現在の主観を述べてきた。それが10年経った今の私に、何に見えているのか。10年の時間が何を及ぼすのか、そんなことを考えたがっている。

樽詰めされていた言葉の封をあけて、空気にさらして、今の自分が味わう。それは昔話とは違うのではないか。なつかしいだけの過去話などしたいと思わない。「今、だろう」といつも思っている。今が一番面白い。その理由は、沢山の振り返ることが出来る経験を自分の言葉で重ねてきたからだ。

誰かに借りた言葉でその時々をやり過ごすのは、ただの消費者でしかない。そこで何かを見つけることも、気づくこともないだろう。そうではなくありたいと思ったとき、一つの方法として、自分の10年前の言葉を、自身で吟味するのは面白いのではないかと思ったのだ。

2001年7月

(14年前)

07/01 日曜日、午後から関西カウンセリングセンターで家族相談士養成講座の講師。会場に川上範夫さん(奈良女子大)が待っていて久しぶりに対面。たいへんな事態のなかでよく生き延びたものだ。受講生65人だが、申し込みは120名を越えたと聴くと、すごいなと思う。センターの常連顧客群がそれだけあるのだろう。

講座のデモンストレーション面接にボランティアで出てくれたDさん。結構たいへんな情況を抱えていることが判明して、どう聴いたらいいものか少々躊躇する。あっという間の3時間はいつものこと。

終了後、受講生のなかにいたNHKの人が、夏休み中の番組出演の打診にくる。企画が通ってタイミングがあえばと答えておく。

旭屋書店で中村正さんの新刊をみる。なかなかきれいな装丁の本である。

川上さんとはそれ程親交があったわけではないが、同時代の業界人。大学が絡んで勢力争いがスキャンダルの様相を呈していた。私は探偵ではないので、真偽など知らない。裁判官になるか、弁護士になるか、検察官になるか。姿勢は個々人で決まっているような気がする。

Dさんは遠方から参加していた人で、これをきっかけに、KISWEC(京都国際社会福祉センター)の通年訓練にも新幹線で毎週通ってきた。人が学びに動機づけられる要因の一つに、個人的事情が大いにあるなと思った。

07/02 産業社会学部の授業12回目。今回は技術と人間をテーマに「人間関係論」。終了後、研究室の床で1時間眠る。起きだしていつものレストランでカレーを食べてクラスターに。村本さんのグループワーク、参考になるところあり。その後、三グループに別れて話し合い。ついつい私が話してしまう。原因のひとつはUさんだったかも。いろいろたいへんな情況での通学だときいているので、氣遣ったのもある。終了後、教員三人で打ち合せと雑談。中村さんにサバティカル(一年の研究休暇)の話があるらしい。しばらく延ばすそうだが…。

大学院がまだ、今の全体体制に固まる前のことのように思う。忘れてしまっている事も多いが、変化し続けているのだなあ。中村さんはこの翌年だったか、サヴァティカルで一年シドニーに滞在。その間の助っ人に、先端研の立岩真也さんがクラスター担当で来てくれた。

07/03 連日熱帯夜だ。クーラーをかけて寝ている。同志社女子大は今日が前期最終講義。今年度いっぱい終了にするかなーと思いはじめている。コスパからいうと、時間を取られすぎるのである。でも、レポート読んだり、顔を見ていると可愛いしなあと思ったり。夜の家族療法訓練には、久しぶりにアンコントロール・チルドレン登場。父親の情けなさや妻の変な自信はパターンのような気がする。

火曜日午後は新田辺の同志社女子大で「ユーモア特論」の授業。その後、夜は伏見桃山でKISWEC家族療法訓練の通年コースを担当。それに、午前中、依頼のあるときには大津家裁で調停の仕事を入れていた。今考えると、よく働いている。五十代半ば、張り切っているなあ。

07/04 予定の少ない水曜日。コロラドで「木陰の物語」の下書き。なかなか決まらなかったが、この線でいこうと決心して描き始めると二時間。仕事場にきて雑用を片づけていると、Nが来る約束の時間になる。1時間半ほど、大学の話や近況の雑談。6時からF君がケースカンファレンスに。今日は彼自身の出身家族について考えたいと話し始める。ルールをきちんと守って、節度を持ちすぎたために感情がどこかに消えてしまった家族の物語だった。今、脳梗塞で入院中の母親の病室が、彼が婿養子に入ったF家のお産を迎えた時の病室と、余りにも違って…と呟く。

彼の父親は妻の病状について、医師に詳しく説明を聞いたりもしない人だという。教員カップルの二人の息子が、故郷によりつかない。彼も家を出たかったという。地元公務員を退職して、婿養子に入ってフリーターとは奇妙な選択だ。

連日、いろんな人にいろんな役割で会っていた。今もまだそういう傾向はある。しかし、そこそこでパートタイム労働をしている気はない。むしろ、自分を浦島太郎化させないように、様々な切り口でモニターしている。蛸壺入り専門家にならないように、業務全般をデザインしているつもりだった。

そして今、その目論見は概ね果たせているように思う。それは、この時期の働き方と今が、それ程変化ないからだ。たいていのまがい物は、説明はあげさな割に続かない。あれは何処に行ったの？と言いたい事象は多い。しかし私の場合、ここに書いていることの大半は、現在も進行中である。

07/05 「木陰の物語」のペン入れの時間が、締め切りまでにどう探しても見つからない。やむなく仕事場泊まり込みで仕上げをする。久しぶりだ。翌朝は、起きてそのまま相談室に。このところ新規相談の予約が減っているので、まあなんとか…と思ったらやっぱり予約ゼロ。昼食のついでに書店をのぞいて5冊購入。趣味的なものばかりだ。「シーナ映画とコーキ映画」高間賢治著、「こんな映画が、」吉野朔美著、「プラハ旅日記」山本容子著、「来て見てトルコ」小林けい著。そして「地球の歩き方 21・イスタンブールとトルコの大地」。

この夏休み、トルコに出かけてみようかと思っている。夫婦二人珍道中にするか、久しぶりにパックツアーの参加者になるか、まだ思案中である。

紙司・柿本から、DAN通信用の紙のカットが出来ましたと連絡あり。夜はぼむの例会に大阪へ。今日の集合は徹底されていなかったのか、みんな忘れている。篠原と坂口の三人だけ。それなりに面白く話して過ごす。

別居、自活をはじめた娘、大学を退学することになりそうな娘。各家庭でいろいろなステージが始まる。

吉野朔美さんは私の新刊「家族の練習問題6」に原稿を寄せてくださっている。山本容子さんのリトグラフが一点、我が家の玄関に架かっている。プラハにはこのしばらく後に妻と二人で旅をした。DAN通信を出していたこの時代、ツイッターやfacebookはまだなく、ホームページ作りが主流だった。なかなかそこには手が出ずにいた。マンガ集団「ぼむ」のメンバー、それぞれの家庭事情

は、この後の10年で大きく変化することになる。今なら全て分かる変化を、この時点には何一つ知らない。人生はそういうものなのだ。そして次の10年もきっとそうなのだ。

07/06 新潟プログラムの準備をする。夕刻のANAに乗るまでにやったらいいのだから、比較的ゆっくりしている。土曜日は三十人、日曜日は二十一人の受講生とのこと。新作・木陰の物語(第十七回)を修正して完成。「少年育成」誌に発送。

八条口から空港バスで伊丹に。レストランで胡麻冷麺をたべて、スタバで金剛出版から出したいと思っている本のプランを練る。定刻発の519便、お婆ちゃんばかりである。なんかそういうツアーで埋める時期なのか。新潟空港から宿舎の厚生年金会館に。ロビーにKさんが待っている。騒がしい居酒屋風の店で、食事をしながらいろいろ話す。つい、相談を受けてしまっている。

木陰の物語17回だと！現在183回だから、よく続いているものだ。「月刊・少年育成」は2011年に休刊になってしまったが、連載は他で続いている。

金剛出版から出したいと思っている本とは「ヒトクセある心理臨床家の作り方」。まだ出ていない時期なのか。

この後も数回、新潟を訪れるようになったが、地域継続プログラム実施の試行錯誤期だといえる時期である。

07/07 さあ、新潟プログラム。第一日は初心者のための講座。話と実習と、ビデオで。30人弱の参加で、初めての人が圧倒的に多い。入門プログラムを繰り返すことの意味は大きいと思う。理論や技法がどんどん進化して、追っかけている人以外、手出しできなくなるパターンは駄目だと思う。なかなか好評裏に一日目終了。

世話人Kさん宅で打ち合せ。こどもたち小学校3年と1年の男兄弟と一緒に回転寿司屋に。おいしい店で一皿100円ではない回転寿司。8時すぎにはホテルに戻って休息。

07/08 第二日は継続的に学習している人たちが中心。順調なプログラムはこびだったと思う。今回は昨日の初任者、今日のリピーターともに、医療関係者比率はそう多くなく、標準的な受講者群。みな、地域で力のある専門家

だという。昨日の感想文を読んで、絶賛に近い反応に喜ぶ。来年の日程の仮押さえも。

この頃から現在に至るまで、地域で家族理解WS(家族療法WS)の継続開催に知恵を絞ってきた。各地で事務局を担ってくれる人たちの苦労を、それ程分かっているとはいえないが、とにかく結果は出る。続いている地域、立ち消えになった地域。

その分析に関心はないが、私的に継続の秘訣は思うことがある。それは受益者自己負担の原則である。予算の組まれたWSは皆終了し、再開することはない。自分たちのお金を出し合い、週末休日に、有志が事務局を引き受けて準備したモノだけが、10年を超えて続いている。

07/09 文学部「人間関係論」の授業最終(来週は群馬行きなので休講)。終了後拍手がわく。何度目かだが嬉しいものである。研究室でゆっくりしていて、院の授業まで過ごす。

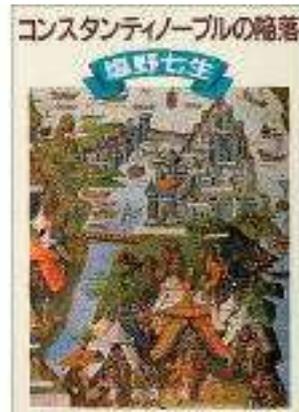
今日は私が家族療法の訓練ビデオを使って、あれこれ話すことになっている。三時間あるので、ゆっくり目にみんなに家族を鑑賞してもらった。終了後、次週私が不在のプログラムや、秋からのことなど話す。文部科学省へ提出の私の業績書も完了のようで、中村さんのペーパーワークに感謝する。

バスでいったん仕事場に戻って、こと葉に電話。今週末群馬に行くが、レッスンとの兼ね合いで会えるか打診。火曜日夜はレッスンだそう。夏休みの帰省も聞くと八月二十日頃になるらしい。二十五日からは我々が海外旅行に出る予定。典子はちょっと迷うが、結局行くという。

娘はまだ舞台芸術学院の二年生。何も決まっていはいないが、合っていた道なのだろう。熱心に学校以外のレッスンにも出向いていた。一年目、女子学生ばかりの管理人の居るマンションに住むよう手配したのだが、その夫婦からがんばりを誉めて貰っていたことを思い出した。そして二年目は一人暮らしのマンションに引っ越したのだった。

07/10 女子大の春学期が終了した。夏の後半の旅はイ

スタンブールに決めてH. I. Sに。窓口の近藤くんは、昨年カトマンズの旅を薦めてくれた担当。トルコ航空直航便は空席待ち、KLMなら確定で一応そっちを確保しておいてキャンセル待ちにする。八月二十五日出発確定である。帰国は航空会社がどっちになるかで多少差がある。その後、夕刻まで仕事場で月刊DAN通信作り。思った感じに仕上げる。kiswec訓練は、子供のいない中年夫婦。こなれたカップルだと思う。よくも悪くも防衛が上手。世間知、如才なしをみる。



イスタンブールは一週間、異国の街を堪能した。塩野七生著「コンスタンティノープルの陥落」をその街角の歴史遺産に居ながら読書する贅沢を体験。これはなかなか楽しいものだった。「読んでから行くか、行ってから読むか」の究極的折衷。

07/11 今日の午前中までがゆったり気味の隙間だった。午後から東大阪市立金岡中学校で教員相手の講演。紹介してくれたT先生は純朴な人。しかし60人くらいとの触れ込みながら、実際は20人弱。教員が駄目なのはこの選球眼の悪さにあらわれている。ここは選んで聞きに来んかい！バカ教師ども！！と思う。本が8冊売れたのだから、来た人は皆思うところがあったのだ。終了後、校長室で1時間ばかり続きの演説をしてしまう。でも教頭は、実はわからない人なのだと思う。無駄だったかもしれない。

大阪にきているので、いどむ(次男)に電話すると、相談があるから会いたいというので仕事が済むのを待つことにした。一日中あちこち営業で出かけているようで、川西で電話に出た。今から会社に戻ってからというので、大阪駅のカフェで、来週の仕事の段取りをあれこれ。ハードスケジュールなのに準備がまだまだ。お茶を飲んで、書

店でめばしいものを見繕って、そのあと梅田新道交差点の会社の前で待つ。我ながら変な父親かも。会えたのは21時15分、しゃぶしゃぶ屋で食事をしながら健康問題(メンタルではなく、痔だ)について相談を聞く。

教師を一般化して語っても意味はないが、教頭の集まりや管理職の研修会に呼ばれての感想を言えば、総じて根拠もなく横着な人が多い。生徒・子どもを相手に過ごし、教員だけのコミュニティでの少々、疎まれ者をやっていると、そうになってしまうところがあるのだろう。

どんな業界にも少なからずあると思うが、井の中の蛙にならないように、外の世界に目がいくように心がけておくのは重要だ。

一昔の大学人だって、自分で言ってる「学者バカ」なんて謙遜じゃなくて、そう言っていたら許されると思っている甘えだ。

振り返ってみると、こんな風に仕事場近くに出かけて、大企業勤めの次男に会うのは、後にも先にも一度だけだ。

07/12 朝、相談室は新規ケースと経過のある不登校改善カップルの二件。終了後大津へ。家裁で新件の調停一回目。いわくつき、なるほど。そして一度仕事場に戻る余裕などなく、草津の勉強会に。フリートークで、盗む子、嘘をつく子の話。

07/13 タイムスケジュールを綱渡りのようにこなしている。準備時間に制限が出てきているのがきつい。朝はいったん仕事場に出て、今夜のトーク2001の準備。そして大津に戻って家裁に。調停二回目の親子である。穏やかに装っていた爺さんも、時間が経つと正体があらわれる。日本語のあいまいなこと極まりない一家。孫娘の羨ひとつまともにできないで、音を上げて、自分の娘を批判する。いい歳して何を言ってるんだと思う。結構暇がかかって京都に戻る。

結局、冊子は二つ折りにできないまま持ってぱるるプラザに。長谷川さんと支配人に手伝ってもらって完成。いつもよりちょっと少ない目の五〇人弱の参加。暑いさなかに上出来である。典子と京都駅ビルの回転寿司を食べて帰宅。

調停の仕事を5年で辞した。だんだん新件を受けなくな

ってフェイドアウト的に最後にした。一番の理由は、ここに訪れる人たちが真面目ではないと思ったからだ。

嘘つきなのである。言い方を変えれば、それを自分の言い分だと思っている。ばれなければ何を言っても良いし、批判される筋合いはないなんて思っている業界だった。

いろいろ思うことはあったが、カウンセリングの世界で長くやってこれた理由の一つは、それでも何とかしたいと願いを持って居る人とあえたからだ。

白黒付けるという結論がつかまらない。そういう意味では調停は悪くないのだが、弁護士が入ってきて、裁判にしてくれと言っている方も、言われている方も、人間としていかなモノかと思うような司法内ストーリーしか持てない人たちが多かった。

流儀が違うのだと思うから、そのゲームからは降りたいと思った。

07/14 教員のための家族理解ws三回目。サブシステムがテーマ。話しながら、時代が携帯電話で自他境界を壊しつつあることに気付く。一日楽しく学んでいただいているようで安心。18:00 までを長丁場だとも思わずやりきる。いったん仕事場に戻って、明日からの群馬行きの準備である。メールの返信もだしておかなくちゃ。いどもに約束したことも問い合せて調べておかなくちゃ。

当時、電波という侵入物に学校、教室という場が、何の知恵も持たなかった。受信機である販売物に関する取り決を「校則」として語っていただけだ。

今振り返れば分かることだが、ケータイ電話は、ケーターからスマホへと進化し続けた。一方、校則は力もないまま、陳腐な後追いを今も続けている。

コンサートホールや劇場空間はスマホの電波が圏外になるように設定されているところが増えた。そういうことは可能なのだ。

規制緩和と野放し、やり放題の区別をつけないでどうするのだと思う。

07/15 九時三十四分京都発のひかりで東京へ。新幹線乗り継ぎで、高崎から前橋に到着。S井さんに迎えられて「ぐんま思春期研究会」の会場へ。

近年ますますその印象を強めている、親の側の自立援助力低下を、具体事例をあげながら話す。終了後、S井さんの車で伊香保温泉までドライブ。一時間ほどの行程。二十年ぶりくらいの伊香保だ。PCAの第一回合宿で平木さんと初めて会ったのがここ。

夕食後、十人で家族面接ビデオを見ながら事例検討会。親子に見えず、夫婦に見えない三世代家族。施設入所少年の一家。母親の非常に不活発なのが目につき、抑鬱を疑うが、はたしてそうであった。

二件目は緊張感のかけた母子三人。父親は直前に欠席。活発でいい加減な家族。小学校六年生で繰り返される万引きがあり、半年ばかり日に三本の煙草をすっていたことがあるとか。なんだいそれ！といいたくなるエピソード。自分に見えることがことごとく意味を持っていたりするので、まんざらでもない気分になる。



07/16 八時頃おきて朝食に。部屋で児童心理の校正。今日、明日は群馬県主催の家族療法勉強会。最終的に91人の参加申し込み。さて実際はというと、欠席者もある一方、申し込んでなくて当日参加もあり、結局90名。すごい人数の会になった。企画者は大満足だろう。この中から地域ネットワークのキーパーソンになってくれる人が輩出してくればいいのだ。レクチャーの後、デモ面接にT君が拳手してくれて開始。一日目にぎやかに終了。中央児相の事務室から「児童心理」校正原稿をfax送信。その後いつものロイヤルホテルのレストラン個室で、養護施設職員4人とさんで食事。9時半頃までサービストーク。ホテルに戻って1時就寝。

07/17 7時半過ぎに起きて朝食。公所主催の研修会なので、9時開始。しかしなかなか定刻には集まらない。30分ほど調整トーク。一徳ビデオを見て考えるプログラム。午後は事例提供して、検討。順調に終了。時間にゆと

りがあると、少々くどくなる癖がある。さて80人ほどのなかから連続的に学ぼうとする人が何人あらわれるか。

駅に送ってもらって東海道新幹線乗り継ぎを尋ねると、米原一岐阜羽島間集中豪雨のため現在運行を見合わせているという。なんだ、なんだと思いつつ東京へ。到着時間丁度に運転再開の報せ。運のいいこと、一応指定席券を購入したが、ホームにいた出発待ちひかりの自由席にのる。その結果、通常よりも早めくらいに京都に。明日は夕刻からの仕事。

群馬での継続WSはここから始まった。数年通い続けることになったし、そのメンバーの人たちが各部署でリーダーになり、管理者として組織を活性化させていった。今も音信や交流のある人もある。群馬で児相研セミナーも開催された。

07/18

怒濤の一週間が終盤を迎えている。なんとか乗り切った。今夜は門真に行って、明日嵯峨野高校で出張三昧は一区切りだ。

地下鉄をおりたところで、引きずっているトランクの上に置いていたカバンが落ちた。いやな予感で中からポータブルdvdを取り出してスイッチを入れたが、映像がでない。あーあ、壊れてしまっている。液晶は落下に弱いという話をきいたところなのに、ものの見事にである。しかしその時のがっかり具合が低レベルであったことにも驚く。モノで気持ちがゆさぶられる度合いがホント小さくなった。ただ、修理に持っていかなかちゃならない。その手間が面倒…。そうだ、図書館の本も返却しなくちゃ、督促がきている。門真の勉強会の準備をしていて気がついたら、出発予定時刻を過ぎていた。あわてて京阪電車に。寝屋川駅で同じく遅くなっていたKさんに鉢合わせ。Yさんは、駅前の車中で待っていてくれた。

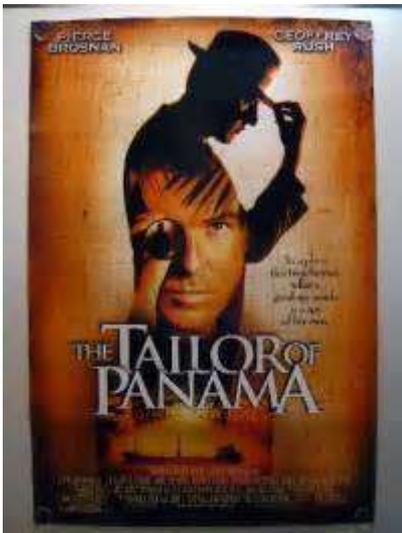
「必要ですね」と、携帯電話の番号交換する。それにもかかわらず後刻、登録されていないのを発見。まったく、手持ちの道具ひとつまともに操れない。

待ってくれたYさんは、結婚して関東に移動した。そして10数年後、神奈川のNPO主催のWSの講師として呼ばれたのだが、事務局は彼女だった。

長期展望での取り組みには、関係者の異動や、転身も含まれている。そこにしかないのではなく、他の場所にも、更に時が経ってもなのである。社会システムに変化を処方するとは、そう言う息の長い繰り返しの営みだ。

07/19 朝は相談室。このところ、どの曜日にも新規ケースは減っているらしい。暇なのは結構なのでゆっくり、アレコレ雑用を片付ける。午後は嵯峨野高校PTAで講演。高校山岳部時代の同級生Hさんの依頼。Kくんの娘も通っていた「こすもす科」がある高校だ。女生徒が7割近いそう。快調に終了して、仕事場に戻ると芳賀書店からの封書。変な感じであけてみると、出版ができなくなったという断り。なんということだと思う。自社事情と社会情勢ばかり書いた挙げ句、こちらの作業が遅いのでこうなったみたいな言い回しに呆れる。これでは出せたとしても、とたんに倒産なんてことも考えられる。このところ、出版話は立て続けに不調である。文春新書が快調なのがうれしい。出版の不況は、こんな無礼なことを平気でやるようになってきているのか。

壊れたDVDの修理依頼に久々の自転車で。寺町のタニヤマ無線でDVDソフトを眺めたりして楽しむ。久しぶりにゆっくり遊んだ気分。上映時間を調べて、「テラー・オブ・パナマ」を観に。狙いすぎかなと懸念はあったが、案の定、失敗だった。ジョン・ブアマン監督に3000点のつもりだったが、はらたいらに3000点にするべきだった。ともかく予告編は楽しかった。今月末は映画三昧にしたいものだ。



今では通じない時代の冗談。はらたいらに3000点

は、巨泉のハウマッチという番組のパターン。

出版話はこの頃からドンドン苦しくなって今も進行中なのか。この時、計画して完成間近だった本「ちんちんがやってきた」は別の出版社から出た。そして、絶版にもならず、今もロングテール商品としてネットで見かける。

07/20 海の日。超久しぶりに約束のない一日。マイペースで過ごせる。金剛出版の石井さんから、性教育本の出版のことで、見てみたいとEメールで言ってくれたので、「一癖ある心理臨床家の作りかた」の連載コピーと一緒に送る準備。明日のWSのレジュメ。月曜日の茨木天王小学校講演の準備。

07/21 教員のためのWS第4回。終了後、いったん浜大津に戻って準備をして湖西線マキノ駅へ。ぼむの釣行である。みんなは既に今日一日やっている所に合流する。白谷温泉八王子荘、ってどこだ？ 二十一時過ぎに駅について、タクシーを呼ぶと、「十五分ほどかかりますけど、本当に待ってますか？」と言われて驚く。人気のない駅前で、カメムシの飛んでくるのをはらいながら待つ。考えてみるとフライロッドに触るのは前回の釣り以来。何の準備も工夫もない、最低のフライフィッシャーである。着いたのは何とも言えない宿。「老人憩いの家」と看板。宿泊客なんていない。夕刻は、温泉だけに入りに来た客でごった返していたらしい。朝霧駅の花火大会事故のニュースをきいて、想像力のない人間ばかりの不注意時代になっていると思う。素人ばかりで、勝手な思いつきイベントで人を集めたりしていると、こんな事になるのだ。

07/22 六時起床で、知内川の支流八王子川上流で釣り。何もかからないし、釣れない。場所を変えてさらに少々。しかしまったくかかる気配なしに近い。それでも坂口と、川辺で四方山話をして楽しんでいる。いい気分だ。小物が何匹かあがった人もあったが、釣果のないまま陽が昇って終了。朝食後ゆっくりして、ドライブを経てブルーベリーの里のレストランに。なかなか美味しいランチ。こんな山のなかにこれだけの集客は、立派なもの。野々口に乗せてもらってケーキ屋に寄ってから帰宅。夕食後、「千と千尋の神隠し」のレイトショーにあって驚く。なんとチケット完売、売り切れである。アーカスに入れられないなんて、どうということだと思いつつビデオを借りて帰宅。

今も、釣り旅行と称した温泉旅を漫画家仲間と継続中。フライフィッシングはイメージとして美しい。でも、自然溪流で釣れるほど上達しなかったし、したいと思っても居なかった(私は)。テンカラ竿で釣れない川に、二三次キャストイングして、ぐだぐだ喋って、魚を追いついていたら十分だ。いつも言うように、キャッチする前にリリースしている。彼岸に殺生するモノではないと南光さんは語るが、私は年中殺生しない。できない。

40年付き合いの漫画家親父達と、10年以上フライフィッシング。例会では基本的に毎月会う。継続は力なのである。

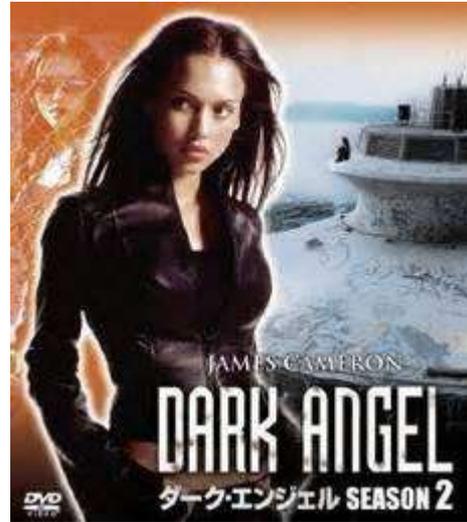
07/23 朝から茨木市の天王小学校、校内研修会に。勉強会にきていたY田さんの斡旋。校長にあつて話すと、春日丘高校の同級生T君だという。記憶も面識もないが向こうは名前は知っていた。茨木市のY口やK瀬、H田等の連れである。おもしろおかしい二時間を過ごしてもらって終了。

あまり暑いので、そのまま京都に戻る。仕事場 D・A・Nに戻って、戸口の「管理会社にお電話下さい」の張り紙に首を傾げたが、ドアを開けて納得。玄関入ったところ水浸しである。電話で聞くと、五階の住人の洗濯機の蛇口が外れて水道が全開のまま水びたしになった模様。全くまいったなあ……。管理会社の社員が掃除に来てくれて、損害について聞いてゆく。上の住人が損害を補償するという。DVDの破損、出版企画の直前オジャン、マンションの水浸し、ああこれで三つの悪いことが終了か。そう思うと、そんなに被害が大きいわけではなかったもので、良かったと思ったりする。修理、修復すればいいモノばかりで、有り難い。

E県児相から虐待イベントで講演の依頼。しかし予算が決まっているという。一応、こちらの定価を話すとちよつと検討をといった後すぐ、断りの電話。あまりにも余地のない反応に驚く。遠方から二日取られて、その言い値ではあわない。基本的には自分の提示価格を守ろうと思ひ直す。

今日こそと思って「千と千尋の神隠し」レイトショーへ。思ったとおり今夜も列ができています。入場は十分でしたが、時には私一人のこともあった映画館で、こんなにたく

さんの人が・・・と宮崎駿監督の力に驚く。そして実際映像はまたまた物凄い。こんなイマジネーションはどうしたら湧いてくるのか・・・と絶句。宮崎作品のなかでもかなり好きな一本だ。帰宅して夜中、ジェームス・キャメロン「ダーク・エンジェル」(1)を観る。そこそこ面白いのだがテレビシリーズだなと思う。



講演の謝金など定価のあつてないようなものだ。だから法外な芸能人のギャラもあれば、交通費に負けるような既定も存在する。

フリーで仕事を始めた頃、行けばいくらにはなるが、断れば一円にもならない現実と遭遇した。更に、多くは大学の教員など給与保障のある身分の人が大半を占めたため、暗黙の了解として、「他にちゃんとお給料貰ってるんだから、これで来てくださいよ」と言うメッセージが蔓延していた。

これでは駄目だと思った典型が、最後まで謝金の話はしない依頼だった。過去の繋がりもあつたので引き受けたものだった。

終了後に受け取った封筒を見て「そんなバカな」と思った。半日かけて出かけて、図書券5000円が入っていた。

このメカニズムが反映されて酷いことになっているのがスクールカウンセラー(SC)の世界だ。私はSCをしたことがない。臨床心理士ではないから依頼されなかったこともあるが、ルールがいい加減なのが好きになれない事とも大きく関わっている。

SCは最初、当時のカウンセリング業界(一部には、個

人開業の人や、カウンセリング料を決めて面接していた人はあった。当然そこには、当時の目安金額があった。概ね3000円～5000円だったと思う)からすると、法外な価格設定でスタートした。

カウンセリング経験の長短にかかわらず、時給7000円とか聞いた。時の勢力が後押ししていた時期だったのだろう。半日4時間で28000円。半日ずつ週二回を、他勤務との関係で一日にまとめて日給56000円。週一勤務で月給224000円だという。

これこそバブルだろうと思った。大学の教員が週一でSCを引き受けて、この支払いを受けていた。それに、依存的な新卒SCも乗っかっていた。

私は法外なことなど続かないし、社会の標準から外れた優遇は、必ず問題の火種になると思っていた。そして実際、ダンピングの繰り返しと、ドンドン卒業する臨床心理士に仕事をと言うので、臨床心理系大学院の教員は卒業生をSCに配置した。その結果、既得権者の年配SCは仕事が減った。と言うことは、赴任校が減らされるということだった。三校に行っていたものが二校に。二校に行っていたものが一校に。それは給料が三分の二、半分になるということだった。

こんな事が起きても、働いていたSCは文句を言わなかった。自分たちの身分問題を大多数が大学教員で構成された府県の臨床心理士会に委ねていたからだ。

今、SCは国家資格問題でも、給与問題でも、厳しい状況を抱えている。今だけを語れば、いろいろ事情があることだろう。私は内部の者ではないから、知らないこともあるに違いない。

しかし、忘れてはならないのは、物事の社会の中での成り立ち方である。自分にだけ都合の良いルールや仕組みが定着することなどない。

どのような制度設計や規定だと説明されても、納得のいきにくい好条件は用心が必要だ。

お金の話はみんな苦手なようにふるまう。拘っていないかのごとき見栄を張ることを日本人は過剰に世間から学ばされる。そして、世界に向けても、「金のことばかり言うな！」と気取っている。その口調で近隣諸国に上から目線の苦言を呈している。

若者達はpかねを使わない満足を希求し始めている。多くを望まないで、幸せに暮らす。自己満足は出来るだ

ろうが、その人自身が持たされていたはずの使命感は消えてしまうのではないか。

07/24 大学院前期最終の日。午後は仕事場で「晩年学F通信」の原稿完成。「児童心理」の原稿おおかた完成。金剛出版の石井さんから、とても面白く読んでいる。さっそく「一癖ある心理臨床家の作り方」の出版企画が通ったとメール。うれしかぎりである。夕刻から立命へ。創思館ボックスで先週のテープを受け取る。研究室で、聞き始めるが、中村さんのはなし、面白い。今日は前期最終の、全体説明。その後、勘違いで臨床心理領域の説明会に入ってしまう。Tさんはやっぱり変だと思う。学生をなめているのか、子供扱いしているのか。とにかく不思議感拭えない。村本さんが後で、ブーブー。

07/25 今日は一日仕事場D・A・Nに。コロラドで木陰のプラン。部屋の水漏れは止まらないし、クーラーからも水漏れ。まるで水浸しマンションだ。昼食に出ている間に、管理会社の人が入って天井の電気設備のところに穴を開けている。漏電していたようだ。なんだか凄いことになっている。「児童心理」の原稿完成。家裁の記録完成して郵送。19時にIさんがSVIに来談。専門校で授業を始めたことや、施設利用者間の恋愛沙汰のメカニズムなど、22時まであれこれ話す。

07/26 朝、約束の時間に空調設備会社の人に来てくれる。階上の水漏れとは関係なく、排水が詰まっていたようで掃除してくれた。きちんとメンテナンスをしてくれる人に感謝である。たまたま昨日、久しぶりにアドレスを目にしたのでメールしておいたら、大学の同級生タッキーから返信。

頼まれていた全国情短施設研修会にYくんを訪ねてゆく。ホテルを借りて、完全に昔型の研修会である。情短はほんとうに目的に見合う機能ができるものとして動きだしているのかどうか、分からない気がする。ないよりはある方がいい、昔そう思っていた前提を崩された記憶は今も鮮明だ。本当はこの世界で、一緒にやってくれないかという声がかかってもいいのだろうが・・・

連日、水漏れの話題連発。長い賃貸マンション利用の中で、初めてで、おそらく最後のトラブル。滅多にこういうハプニングには遭わないのだが、この時は参った。

07/27 KISWEC嵯峨野WS、出向く前に仕事場に。クーラーかけるとまた水漏れ。直っていないじゃないか。親切そうな奴だったが技術者の未熟にも困ったものだ。管理会社に電話しておく。でも今日から三日間は不在。

今回のWSは27人と少なめ。しかし、これくらいの方がなにかにつけて運営しやすい。川畑くんのオープニングトークから開始。夕刻、決定をキーワードの初期インタビュー実演と訓練。夜は例によって、22時から講師室に千客万来。

07/28 二日目。朝から一日家族作りと面接展開。小グループ、張りつきの日。夜は少ない情報からイメージを使っただけの事例検討の練習。京都南部は昨日から大規模断水。川畑くんの家はたいへんそうだ。

07/29 三日目。午前中は早樫君がいつものNAKATUK Aビデオを使ってセッション。午後の質問コーナー、早樫君は仏教大学の通信スクーリング出講で不在。

KISWEC家族療法訓練 STEP1, STEP2を嵯峨野の施設で合宿形式でしていたのはこの頃までだろう。施設の運営母体が変わってしまい、いろいろ変化せざるを得ない中で、新築なったセンターの建物で開催が変わった。そして合宿形式でもなくなった。その方が現代的なのだろうが、形式の持っていたのりしろ部分の良さは減じた。



07/30 やっとゆっくり出来る夏休み。もらい物の株主優待券で「猿の惑星」へ。まあこんなものだろうと思っていた程度の映画。でも納得。映画館が混雑しているのは良いが、ざわつくおばさんに注意する。

ゆっくり本屋を散歩。ポブ・グリーン新作「デューティ」、
「千尋と不思議の町」、「好きになっちゃったイスタンブール」三冊購入。

道中スタバで「発達」の連載原稿、「知的発達障害と家族援助」の原稿案を書く。木陰の物語新作はフィニッシュして発送。

まったく郵便局の不在時の小包み対応は腹立たしい。取りに来ないなら返送するからね！が最初に書いてあるような文書を入れておくな！でも仕方ないので、同志社女子大からのレポートを局まで取りに行く。久しぶりに自転車に乗る。

帰路途上の喫茶店で開封、半分採点する。あまり内容がない。こちらの情熱が冷めてきたのだろうか・・・。

07/31 火曜日。そこそこの時間に出掛けて、コロラドであれこれプラン。女子大の採点済ませて記入。仕事場のクーラーの水は元気よく落ちる。もはや楽しみである。夜はKISWEC訓練の最終回。Uが思いのほか力のないことに気付く。若いということを差し引いても、K、S、Uと似たタイプの腑甲斐なさをKくんが抱えている気がするのももつとだろう。女性の方がバイタリティがある。

夜中、期待してみた「ブルー・オブ・ライフ」、何だか冗長な映画だった。もっと短くテンポのあるドラマにすればいいのにと考えた。

夜中、期待してみた「ブルー・オブ・ライフ」、何だか冗長な映画だった。もっと短くテンポのあるドラマにすればいいのにと考えた。

今より多忙な日々を過ごしながらか、夜中にせっせとDVD を見ている。好奇心と時間配分の変化なのだろうと思うが、もう少し映画は観たいと思う。

キネマ旬報を毎号配達してくれていた街の書店主が体調を崩したとかで閉店してしまい、配達されてないことにしばらく気づかなかったという迂闊さも手伝って、30年以上継続購読していたキネマ旬報から遠ざかった。そうしたらしばらくして、映画情報に疎くなっているのに気づいた。

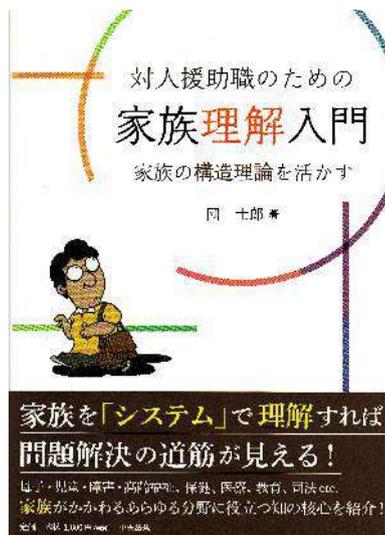
一番顕著だったのは、機内で映画を見る機会があったとき、ほぼ事前情報がない事態だった。今から公開される作品について、何も知らなかった。

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院



三刷発売中

ぼつぼつ始めなければと思っていたことを開始する。「家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」(中央法規出版)の続編である。

一冊目(上の表紙)では実際の家族を提示して、どこに構造的特徴が見られるかを解説した。「構造理論」のキーワード理解のために家族に登場して貰った。

今回の意図としては、様々な家族に登場してもらい、その課題解決に向かうにあたって、焦点になる(なった)と思われる家族の構造的特徴を見いだしながら、取り組みをプランする。そして関わったケースに関しては、実際にやってみた結果も記述する。

当然のことだが、『その後、家族には何も起きませんでしたとさ・・・』等という、おとぎ話はない。何かが付けば、又次の何かがやってくるのは人生の必然である。ただその時、初めての時よりも不安が小さく、自分たちで何とかできるかもしれないと希望が持てるようになっていたら、その前に起きた問題は困っただけの事ではなくなる。

近年、日本の家族は「もし、なにかあったら・・・」と思い過ぎる余り、保険にエネルギーを使い果たしているように思う。人生は長い。家族で居る時間には様々なことが待ち受けている。それを否定する必要も、恐れる必要もない。さて我が家には、何が待っているのかな?と、ドラマを楽しむように自身の暮らしを楽しめばよい。

家族は千差万別で、同じケースなど一つもない。だから処方箋もみんな異なっていて当然である。だが一方で、家族は時代(社会システム)と構成(家族システム)によって、かなり似通っているとも言える。そこが家族の面白いところでもあり、生活のヤレヤレ(懲りないで繰り返す)なところでもある。だから、楽しんだ者勝ちだと思って暮らせばいい。

★「続」と銘打ってはいますが、一冊の本として原稿が完成しているわけではなく、むしろ二冊目に向けた素材として、手持ちの過去に既発表のものと、今考えていることを混ぜ合わせての記述を続けます。
【書き下ろし以外の初出誌は、季刊「そだちと援助」(明石書店)、家族療法学会誌連載(金剛出版)】

構造理論で読み解く現代家族

症状、問題、事件、障害、疾病・・・等、こういうキーワードで専門分野のことを語る人はたくさんいる。

しかし、人が暮らす世の中で起きている多くのことは、細分化された専門領域毎の出来事ではない。大半は、最先端のハイテク対応事象ではなく、これまでも繰り返されてきた、ローテク現象である。更に問題(疾病や事件)が起きている場所に、複合的問題(貧困や無知など)が存在することも少なくない。その一方で、なぜこんな事ぐらいで大騒ぎするのか・・・と思うようなことも、世の中にはたくさんある。

家族の問題は診断名や分類名の付いた症状より、それを扱う人々の関係の中で起きていることが多い。だから私達は今、専門細分化しないところで、家族のことを考える必然に向き合わされている。

そうしないと、専門家ばかりが揃ったと思っっている世界で、誰にもどうにも出来ない複合問題を抱えた家族の今を生きなければならないことになる。

ここで扱いたいのは、どちらかと言えば大問題より小問題。ささやかそうでやっかいな問題を、どう解決するのか。そこに道筋はあるのかということを中心に考えたい。

これは都市の治安問題を考える時、しばしば話題になることに似ているように思う。専門家が大事件ばかりを追いかけている都市の治安は、けっして良くなる。落書きや、痴漢などの軽犯罪を、丁寧に対応してゆく活動が、街の治安向上に繋がる。

みんなが大好きなコンビニ刑事や、名探偵が大活躍する街は、けっして良い社会とは言えない。

ケース

藍子さんは三十代前半の公務員。大学卒業後、いったん民間企業に就職したが、やはり元々やりたかった専門技術を活かして働きたいと転職した。年齢を考え、結婚もしたいと思っっているが、なかなか交際が長続きしないと語る。年子の妹は、実家で両親と暮らす同業の資格専門職だそうだ。

彼女の訴えは、男性との関係が上手くいかな

いのは、両親の夫婦関係を見て育ったせいだと思っようになっていることだった。

藍子さんが小学校時代、父には母へのDVがあった。子どもに手を挙げることはなかったが、母はかなり酷い暴力を受けていて、肋骨が折れたこともあった。事が起けると、妹は怖くて自室に逃げ込んでしまっていたが、自分は止めなければと思って随分苦しい思いをした。

近年それを思い出すと押さえられなくなり、最近も実家に帰った時、母になぜあの時離婚しなかったのかと問い詰めた。すると母は今でも離婚したいと言った。

それならと藍子さんは母親と一緒に、マンションを探しに不動産屋に出かけた。手頃な物件が見つかり、手付けも打って帰宅し、妹にこの話をしたところ、妹は「私はここに残る」と言ったという。

読者への質問

藍子さんはこの先、どうするつもりなのだろう。一人暮らしの現状を引き払って、母と同居するのだろうか？妹の返事をどう聞いて、今後どう扱うのだろうか。

あなたならこの話を聞いて、どこからどのように手をつけるだろう。少し考えてみてから、先に進んで貰いたい。

彼女の心の中には様々な葛藤や言葉が溢れていたに違いない。しかし多くは独り言である。彼女は妹とも、父親とも、今回の件について何も話しあっていない。

訴えに急性の症状はない。藍子さんの思いもまったく理解しないわけではないが、診断・分類名を付けて処遇するようなものではない。

だが、この問題を家族の構造的視点からとらえて整理すると、とても特徴的なことが見える。

一つ目は親世代の夫婦問題に子ども(藍子さん)が口を挟んでいる世代間境界の侵犯である。理由がどうあろうと、子どもが両親夫婦の婚姻関係の今後に影響力など持つべきではない。

そんなところに拘り続けること(かかわり続けさせられること)自体不健全である。夫婦の三

組に一組は離婚をする時代に入っている。カップルのトラブルもますます増加することだろう。その一つ一つに子どもや親族が巻き込まれていると、紛争ばかり増大する。

そんな時には、誰が直面すべき課題なのかの原点に戻って考えることが大切だ。子どもや上世代が夫婦問題に参入するのは、しばしば問題を更に紛糾させるだけである。

二つ目は、同胞サブシステムの一員である妹に、家探しの経過は何も話さず、結果だけを伝えて断られている件である。これは「姉妹サブシステム」の形成し損ないの結果だと考えられる。

ここまでの生育史に事情はあったのだろうが、姉妹はコミュニケーションが上手くとれていない。姉妹のこれからの人生を考えると、不確定要素は一杯だが、「同胞サブシステム」の修復は、今の問題と関わりなく大切になってくる。

両親の加齢が進み、病に倒れたり、寝たきりになったりした時のことを考えてみよう。彼女たちの人生がどう変化しているかは予測できないが、その時、姉妹で向き合って話し合うことが出来なければ、その後の関係は決定的に壊れるだろう。

現在、藍子さんは父親も受け入れることができていないようである。だから母親だけを救い出し、父親は放棄するような提案をしてしまったのだろう。

構造的視点で考えると、今回の問題をきっかけに、姉妹サブシステムの再構築を図っておくのが、家族の今後にメリットが大きい。

そこで藍子さんに、妹と一度話し合う機会を持つ努力を、次回面接までにしてもらうよう勧めてみた。



次の面接の冒頭、彼女が嬉しそうにこんな報告をした。

「前回のお話の後、すぐやってみました。妹に電話して、一度二人で会いたいと言うと、意

外なことに妹は快諾しました。そしてその週末に会ったのですが、嬉しい驚きの連続でした。」

「妹は大人になっていました。私よりしっかりしてるかも…」

以前、藍子さんが話していた、「妹は私と二人になると、ほとんど何も話さない」という彼女ではなかった。よく考え、行動を決める大人になっていたと思ったという。

「いつまでも妹だと思っていた私の方が、彼女のことが見えていなかった…」と語った。

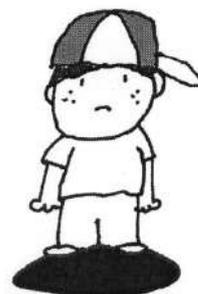
構造再編

藍子さんの訴えのような問題を、今だけの事にして論じても、過去の傷つきだと定義して論じても、得られるものは多くない。ドライなことを言えば、両親はそのうち亡くなる。一緒にという事はないから、どちらかが残る。その後の一家の暮らしは否応なくリセットされなければならない。

その時に、姉妹が話し合うことが出来ない関係だったら、やっかいなことになるのは当然だ。何もなくはいられないことが分かったら、何かあった時の対策を協議できる関係に自分たちを整えておくのが、未来を見据えた賢明さというものである。

五年余り関わった家庭裁判所の調停委員時代、最悪の状況で財産分与の話をしなければならない人達と会った。当然、事態は紛糾し、決着後も二度と交流しない兄弟姉妹になっていった。あそこには明らかに、親世代にも子世代にも、家族の構造の持つ一般性への知恵が足りなかった。

家族の境界と社会



子どもの頃、私は自分の暮らしている場所の他に、どこかに居場所があるなんて考えられなかった

たまに、悔しいことや悲しいことがあると、家出したくなったりはしたが、行き場所を想像することはできなかった



気楽な人たちが言う



内と外

もつともそれは大した不幸もなかったせいかもしれない



家族には内外の境界というものがあって、これが各家庭においてどのように形成されているかは興味深い。

昨今のプライバシー感覚からすると、一般的には閉ざし気味、防衛的であるのが通常感覚だろう。戸締まりもせず、近隣の住民が、気の向くままにズカズカ立ち入ってくるような昭和30年代の日本家族は今では想像しにくい。

昼間、家族は出払っていて、施錠の留守宅というのが一つのパターンである。こういう家の子が増えてきた時期に、「鍵っ子」なる言葉が流行した。

かつて、少しゆとりのある都市部の一家では、知人の子を居候させたり、親戚の子を預かったりすることもあった。

日本の家庭のオープン度合いは、核家族化、都市生活化に伴った家屋の手狭さや共働きによって、急速に低くなったのだろう。それは善し悪しの問題ではなく、これが平均的で今日的な日本の家族の内外感覚ということである。少し融通しあうような他家族との相互浸透性は弱くなる一方の今だといえよう。

児童虐待が話題になって、児童相談所の対応が甘いとか、不十分とか、そんな話が世の中をにぎわす



境界設定

だからかも知れないが、対人援助場面において、この内外境界感覚に違和感を覚える人達と出会うことが少なくない。思わず、「内外のけじめはないの?」とか、「他人と身内の区別

はすれば！」と思わされる事態に遭遇する。

家庭事情にやたらに他人が関わってきていたり、金銭管理や所有感のズレが目につく暮らしなどである。

子どもの生活に目を向けてみると、圧倒的多数の子は夜になると家に帰る。かくも多様に家族はあり得るものか・・・と絶句するような事情を抱えた家もあるが、そこにも子どもは帰る。他に行き場がないからだという人もある。無論、そういう側面もないことはない。しかし他にいくところがあったら自宅には戻らないかといえはそうでもない。家出している子も結局、家に帰る。いろいろあるだろうが、圧倒的多数の子ども達は家を捨てない。

日本社会の子育てテーマが、自宅から離れない子どもと離せない親問題になって久しい。

今まで持続されてきた内の世界と、「こっちの水は甘いぞ」と誘う外の世界。思春期になると、日々どちらを選ぶか、悩ましいのが当然であった。むろん、実績は圧倒的に内の世界にある。

にもかかわらず、魅力と誘惑に溢れた世界が外だった。海外留学や世界一周は簡単には叶わない夢だったからこそ誘引力が強かった。それに青年期の原則、「遠くない時期の家族からの分離独立」があった。

このメカニズムの中で、子ども達は皆、自立していった。時期は個別的で、各家庭事情が重なっていた。

ところが現在、被虐待などの厳しい家族状況下の子には、早期の分離を促す。そして、中流小市民の安定した家庭の子達は、長々と実家に居座ることになっている。

こんな現実だと認識するが故に、家族にいくら重篤な問題があろうとも、子どもに家族を捨てるなどと、軽々しく言いたくない。誰の人生デザインにも組み込まれている自立を、「心理的虐待」などのラベリングで、早々と親子分離を推し進めることに不安を感じない人たちへの疑念が拭えない。自立は古典的で、大きな人間成長のテーマであって、行政の児童福祉対策などではないのだと思う。

かつて、家族が諸悪の根元だ！家を捨てるという論調が流行った時代があった。

そして近年のように、少子化や非婚化の話が出てくると、反動で家族は大事、不妊治療を応援して、人口を増やせ等という論調が台頭して

くる。

私はそのどれにも与するつもりがない。家族に追い風が来たからといって、それ程家族第一主義者になりたいと思わない。

家族は面白いものだと思うが、結婚式の紋切り型スピーチのように、「夫婦というものは・・・家族とは・・・」などと結論に至れるようなものではない。夫婦関係と親子関係という二つの親密性の難題を抱えた、ややこしいものなのだ。

世界に目を向けて家族の有様を見れば、この地球上、同時代でありながら、なんとバラバラである事よ・・・とため息の出そうな国家間、民族間、宗教間の較差である。

そんな中で、たまたま日本で生まれ、今の時代に思春期、青年期を迎えた者が多数、同様な症状を抱えている問題は、どう捉えるのが賢明だろう(たとえば不登校、ひきこもり、うつ、発達障害etc.)。

日本でだけ、あるいは類似の先進国だけで起きている現象など、どう考えても社会的要因故の流行病だ。

たまたまかかったインフルエンザは、速く治すことを考えればいいだけで、インフルエンザとは何かを患者全員が理解する必然などない。多くの人たちは無関心であってかまわないし、ごく少数の評論家や研究者がいれば十分である。

そういう話を耳にすると、いつも思いつくことがある



「当たり前」の少年のことだ



大島渚監督が「少年」というタイトルで映画にもした実話である



やがて事件は発覚し、両親は逮捕された



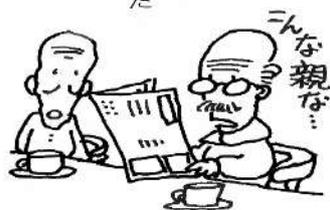
両親と弟がいたのだったか



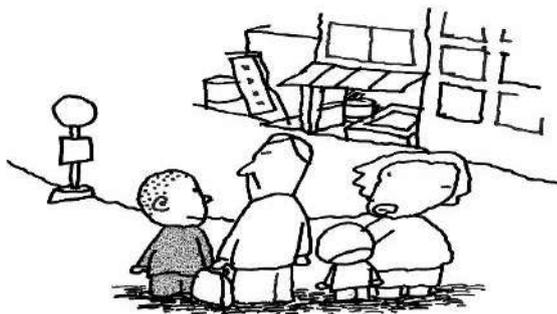
しかし息子はそこで家族を守ろうとした



子どもに当たり屋をやらせていた親である



一家で放浪しながら暮らしていた



彼に同情し、ひどい親があつたものだと世間は大いに憤慨し、やがて忘れた



車の前に飛び出して、ドライバーからせしめる示談金が生活費だった

最初は母が、やがて息子も生活のために、走ってくる車の前に飛び出すようになった



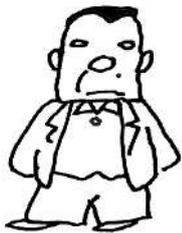


彼らの10年後、
20年後を
知る人は少ない

この言いくさは今も生きていて、
世間はいつも健忘症



当事者だけが忘れることも、
消すこともできない現実を生きる



当たり屋の少年の両親はとんでもない奴だろう。しかしそこで育った子どもがいる。あの少年を、酷い親に強要されて、当たり屋をさせられていた可哀想な子だと語るのは簡単だ。しかしそんなものは語る側の一時の同情気分の発露に過ぎない。なぜ子どもはそんな状況でも、家族や親の味方をしようとするのだろうか。これを考えておかないと、結局家族のことなど何も分かっていないことになる。

これについては企業人が内部告発する時の例を考えてみるのが近いのではないかと思う。我々は内部告発者の語ることを自動的に正義だなどと認定しない。組織内不適應を起こし、個人的恨みを抱えた人間が告発的行動に出たりするのはよくあることだ。

だが、内部告発をみなそうであるなどとも考

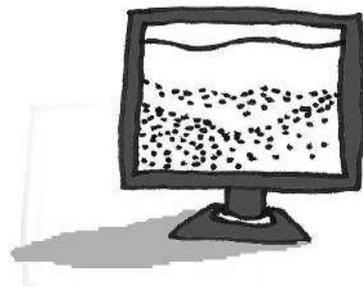
えたりもしない。動機の形成のきっかけがどのようであろうと、社会にとっての不利益がそこで明らかにされているならば、それを理由に、その内部告発を採る。けっして告発者が正義のための行動を採っている等とだけ考えているのではない。

同じように家族において、組織内構成員である子どもが訴えることを、このスタンスで受けとめるとよい。子どもも大人も家族の一員として、自分の出来ることや使える手段を駆使して生存を確保しようとしている。ならば、外からの判断は結果として、より良い生き残りが、中長期的に達成されるものであればよいことになる。

通りすがりの他人から、「お前の親は酷いことをさせる奴だ」と同情されるたびに、彼は家族への忠誠心に燃えただろう。自分の家族を他者から批判されて平気な子どもは少ない。そこで子どもの中に生まれた世間に対する感情は、長く心の内に沈んで消えないだろう。

「けしからん！」と憤慨した世間は、さっさと忘却してしまう。人の生きていく時間は三年や四年で終了はしない。七十五日で忘却モードに入るのはいつも、世間とニュースショーだけである。

「お前の育った酷い家や、親のことなど忘れる。そしてこっちのまともな世界に來い！」と善意の他人は強く勧める。だが、そちら側に行った途端、平凡な家に育った子どもと同様の適應を求め。そしてそれが難しいと、「酷い環境で育った子は、そんなことになる」と批判的な解説をする。



不朽の名作「砂の器」が今、
TVドラママ化されて
放映されている

タイトルバックで
父と子が
山陰海岸を
巡礼する



世界のどこでも自分は生きてい
いんだ!



それを見ながら私にも
思い出す息子との情景はある



そんな風に思えたら、
人は楽になれるのだろうか

誰の人生にも悲しい思い出や
苦しい記憶は刻まれているものだ



子どもが
そう思えるように
なるためには、
親を捨てればいいのか



「砂の器」の主人公は、
逃れて逃れて、
結局
逃れきれなかった
ものに破れる



自分が確保した
幸運はしっかり抱えながら、
まだ幼い他人に
そう言い切る大人が
信用できない



砂の器

2004年、TVドラマ「砂の器」(原作・松本清張)が放映されていた時期に、このマンガは描いた。不朽の名作・映画「砂の器」(1974)ではドラマの根幹に、原作通り主人公の父の病(ハンセン病)が存在する。社会的(法なども含めて)に構築されたこの病への無理解と偏見が、主人公のその後を形作る大きな動機になっていた。しかしその後のドラマ化では、この時も含め、原作の設定そのものに改変が加えられることになった。

「砂の器」の主人公、和賀英了は出自を隠し通すことで、この世界に居場所を見つけようとした。それは自分の生まれ育った家族の消去であった。深い深い心の奥に、父親に対する愛着はあったに違いない。しかしそれを封じ切ることが、この世界で生き延びてゆく彼の戦略だった。

「内と外」の理屈で言えば、捨てられるはずのない内を切り捨てて生きる決心をしたのである。しかし善意の駐在おまわりさん(一時期の育ての親だった)は、懐かしさから不用意に近づくことで、孤独に生きる辛さを乗り越えてきた青年を殺人者にしてしまった。

過去など要らないと思って生きている人間があることに、想像の及ばない善人の鈍感さは、しばしば厳しく生きてきた人の砦を、我知らず崩しにかかる。

彼に家族を捨てさせたのは「これが普通だ！」と認めさせている世間だったろう。他の家族とは違っていても、自分の中には持っていたい家族への忠誠心を捨てることを世間が強要したのである。

子どもが家族を好きなのは、そこが素晴らしいところだからだけではない。困った一家や、あり得ないと思われるような事情の人たちも少なくない。それでもやっぱり家族だと思って生きてゆくのは、諦めや負け惜しみだけではあるまい。

それが何かと問われても、答を知っているわけではないが少なくとも、経験の浅い教育・福祉関係者の語るありきたりの善意もどきの言葉で捉えられるものではない。

まだ日本が貧しかった時代に、道ばたに捨てられ、保護されて施設で育った青年がいた。長じて立派に家庭を持った。そんな彼がある時、児童相談所を訪れた。

「自分の捨てられていた時の記録がここにありますか?」。実親を捜し求めて児童相談所

を訪ねてくる人が、少数だが私の児童相談所在勤中には存在した。

「育ててもらっていない親をなぜ?」とは思わなかったし、彼らが恨みの一つも言ってやりたいと思って探しているとも思わなかった。

とはいうものの、「やっぱり親子は血のつながりやねえ・・・」などと語って納得する通俗性にもうなずけないところがあった。

自分は無事生まれたのだ。そして死なずに今存在しているのだ。その巡り合わせに、産んだ人が何もしていないわけがない。会えるものなら会ってみたい。せめて経過痕跡をたどりたいたいと思うのは、自分の存在そのものの確認であり、感謝だろう。

アーキヴィスト

しかし一方では、こんな経験もしている。だから一面的に、産みの親家族が大切だなどと言いたいのではない。

人間は家族と呼ばれる多様性を、時代を超えて持ち続けてきた。だからその、どの部分を取り上げて語っても、不十分感拭えない面があるのではないかと思う。

記録と記憶

2014年の初夏、ある関心から関東の児童養護施設を訪問した。これのそもそもは、春に英国のナショナルアーカイヴスを訪問したことと関わっている。私自身、それほど学究的な動機があったわけではないが、巡り合わせの結果として、子どもの記録保管というテーマが、英国でのフィールドワークに含まれていた。そして、同僚の中村正を通して、アーキヴィスト(Archivist・永久保存価値のある情報を、査定、収集、保存、管理し、閲覧できるよう整える専門家)という存在について、少し目を開かれるところがあった。

というのは、私自身の公務員時代の経験から、児童記録、公文書保管、当事者からの開示請求などは、馴染みのないテーマではなかった。だが一方で、保管年限の短さや、行政機関としての自己防衛的な開示対応など、「記録」そのものが中心ではなく、扱う側の社会的諸要因が、事実を加工している面が否定できないと思っていた。

そんな状況で、アーキヴィストという資格職

の存在を知り、日本では唯一、学習院大学にある専門家養成のカリキュラムで学んだ女性が現場で働いていることを知った。

複数力所で働く彼女から、戦後日本社会の児童福祉の大きな課題だった混血孤児の問題とその対応、そして記録と記憶のテーマを知らされた。

当事者Mさんとママちゃま

そんな縁があって、湘南にあるエリザベスサンダースホームを訪問することになった。ここは戦後直ぐ、街に溢れる混血児（浮浪児や遺棄児童）達を助けるために作られた施設だった。ここで初期の卒園生との面談が叶った。

ハーフの風貌をした中年男性が話してくれた昔話は、私の中にあった思い込みを少し変えてくれた。

彼は乳児期に、この施設の前に置き去りにされていた。一般論としては、自分を捨てた母を恨み、それでも生みの母を慕う気持ちは拭えず、子どもは産みの親と育ての親の間で苦しむ。通俗的な社会の認識は、私も含めて、こんな所ではないかと思う。しかし、ここでMさんが語ったのはこんな話だった。

*

私は母に捨てられたと思っていた。しかし園長は私にこういった。「M、あなたが今元気でここにいるのは、お母さんがあなたをここに置いてってくれたおかげだよ。ここなら大丈夫だと思える場所まで、列車に乗ってやってきたんだよ。そして、おっぱいをお腹いっぱい飲ませて、よく眠ったMを置いて、立ち去ったのだよ。あなたが目覚めて泣き出せば、必ず私達が気づくと信じられるところにね」

こうして園長に育てられ、この人を母だと思って義務教育を終えた。当時の児童養護施設は、中学を卒業すると退所して自活することを求めている。一般家庭ではもう中卒で就労する子は希になっていたが、施設の子にはまだこういう時期が続いた。Mさんは住み込みで就労を始め、施設を離れた。

私のこれまでの経験から想像すると、この段階で子どもは、実の母親を捜すのだろうと思っていた。やはり血のつながりは特別なものだ。しかしMさんは実母を探さなかった。恨んでいたわけではなく、それが自然だった。

初めて数日間の夏期休暇がもたらされた時、懐かしくて園長の所に顔を出した。すると「どうしたの？」と聞き、休暇だと知らせると、「何日間？」と聞かれた。答えると直ぐ電話で知り合いに問い合わせ、数日間のアルバイトの口を探し、「明日からここに行きなさい」と言われた。

その時は、「懐かしくて尋ねて行ったのに…」と思ったが、考えてみると、中卒直ぐの身寄りのない自分に蓄えはない。少しでも暮らしの安定に繋がるようにと園長は厳しさを突きつけた。今なら笑って話せますが「厳しい人だった…」と朗らかに語った。

実母

こうして暮らしていた十代後半のMさんにある日、Y市から郵便物が届いた。あけてみると、『貴方の母親が亡くなったが、その整理について希望はあるか？』という問い合わせだった。その時初めて、母がまだ生きていたんだと知った。何となく、ずっと前にもう亡くなっているだろうと思っていた。

役所の窓口に向き、そこで母の遺品から写真を貰った。初めて母の姿を見た。母はY市で生活保護を受けながら一人暮らしを続け、病気で亡くなったのだった。

遺体の確認をと言われて、写真を頼りに見たが、年取ってやつれた母を、元気な頃の写真と比べてみても何とも言えず、係の人と、「面影がありますね…」などと話したという。

私は話を聞きながら驚いていた。そして、人はこんなに強くなれるのだと思っていた。誰かにしっかり愛されて、鍛えられることで、軟弱で傷つきやすいばかりの小市民でいなくても、自分の人生を立派に生きることができる。

去らざるを得なかった人を追いかけたり、恨んだりせずとも、新しい出会いの中から、未来を築いていけるのだ。そのきっかけを作った園長・澤田美喜さんの強い愛情に、感服する思いだった。

そして更に続いた話には仰天した。Mさんは遺体確認の場で、自分より年配の男性から声をかけられる。その人は、「私は君の兄だ」と言ったという。そして彼は当然、Mさんより年上だから、母の面影も、事情もより詳しく知っていた。そこでMさんはそれぞれ父親の異なる二

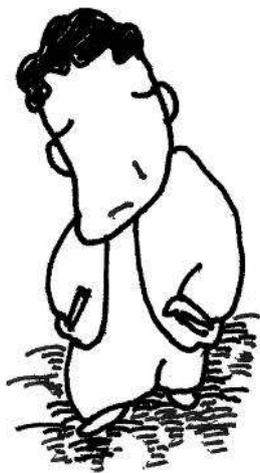
人の兄の存在と、母の物語を聞くことになった。



人は孤独なまま一生を
生きてはゆけないだろう



私は、捨てきれないもの、
捨てさせたくない
もののために
苦労する人を
信じたいと思う



この世界には選べないものがある



選べないから、
豊かにする努力を
するしかないもの

それが家族だったり、
生まれ落ちた場所だったり
するのではないかと思う



孤独

所詮人間は一人だ、という言い方がある。生まれるのも、死ぬのも一人だという。その通りだろう。だから人は誰かと生きたいと思うのだ。

恋愛をしたり、結婚をしたり、家族を作ったりしないで生きる人は、人間を孤独だとは思っていないのかもしれない。いや、あるいは、深い孤独の中から抜け出すことが出来ずに、時を過ごしてしまっているのかもしれない。

歳取ったら一緒に住もうね・・・とかいう独身者のグループのドラマや話を時々耳にする。そのたびに1970年代に流行って瓦解したコミュニオン話を思い出す。

利潤追求型の競争社会の中で、疲れた若者達が、もっと平和に、分かち合った暮らしをと考えてスタートした集団生活(コミュニオン)が世界各地に存在した。

しかしその多くは崩れ去った。理由はひとつ、人間(己も他者も)を知らなかったからだ。

ピースサインを重ね合っていたら、何とかなると思ってしまう単純さが、現実の前に敗北したのである。

所有欲を捨てる、功名心を捨てる、嫉妬心を捨てる、独占欲を捨てる、等のいろいろなお題目を、結局自らの手で一つずつ踏みつぶしてしまうことになった。

今日の心のケア論や家族支援の発想に同調している人々の心根が、こういった不用意な自明性を背景にしてはいないかと心配である。いつ、誰が、どこで言っても正しいことなど、正しい以外に力はないかもしれない。

むしろ、私達の家族行動への理解は、多くの「分かっちゃいるけど止められない」事から始まらなければならない。

*

人が天涯孤独に生きられるものだとは思えない。いっそなければ気楽、そう思う人間関係もある。しかし、本当になれば楽なのではない。そこは無である。あるから苦しいが、ない方が楽だと感じられる前提には、あることが横たわっている。

ロビンソンクルーソーは、一人は寂しいが、誰か居たらそれはそれで気詰まりなことだろうなどと言いはしないだろう。

児童虐待対応の議論の中で、「親の言うことを真に受けて、もし子どもに何かあった時、あなたは責任がとれるのか！」は、古い恫喝である。とれるはずなどない。しかしその責任の持てなさは、親子分離した後の、子どもの長い人生に責任など持てないのと同じである。

家族再統合などと、後出しジャンケンのような文言で、納得できるのは無知故である。大昔から、分離させた家族の再会には、多大なエネルギーが求められた。それ故、結果的に多くの子達を、児童施設に措置しっぱなしになる結果に至ってしまったのだ。

起こってしまった事柄に対応する専門家や世論の活性は、いつもこういう空しさを内包してきた。今、更に通報を迅速にと、中央官庁の役人発想だと思われる三桁ナンバー「189」化が動き始めた。

この対策で虐待通報はさらに増えるのだろうか。いや、ひょっとすると、国民はもうこの話題にはぼつぼつ飽和していて、興味がないかもしれない・・・。

それはともかく、通報数が上がればまたその

数字に、ますます・・・という論調も飛び交うのだろう。こんな数を拾い集めてきて、ゆゆしき問題だと語り合うことが仕事になってしまっている。

わが事を差し置いて一般を語るな。我が子にしないことを人に強いるな。自分が分からないからといって、人も分からないに違いないなんて思うな。中流サラリーマン小市民役人の想像できる人間の暮らしなど、人間のごく一部分にすぎない。

求められているのはいつも、予防である。私達の一人ひとりに悪意や犯意があるとは思わないが、専門家のマッチポンプ(自分で起こしため事を、鎮めてやると持ちかけて、利益を得ること)は社会の常なのだということは忘れてはならない。

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第六回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

今回は前の連載のつづきです。「続・家族理解入門 2」を期待しておられた方、ごめんなさい。大方まとめた原稿があるのですが、フィニッシュの気分になれない。そして新たな根本的なコンセプトを思いついたりしたので、いったん置くことに。

そして何より、前のこの形式が書きたくなかったので、今回はこちらです。こういう自在性も対人援助学マガジン連載の魅力です。もっとも、書き手の身勝手に過ぎるという弱点もあるかもしれません。ご容赦を。

2001年8月(14年前)

08/01 空調工事屋が二度目の来訪。すぐ分からないなどと言う。そして、よく調べて試行錯誤してみたら修理できたという。なぜ専門家がこういう仕事しかしないのか…と思う。

「月刊仕事場D・A・N通信」(トークライブ会場配布)の日誌を校正。K崎くんの本、4冊目の表紙デザインのゲラが届く。現職公務員で単著が4冊出てるんだから凄いことだ。

●忘れてる人も多いかも知れないが、14年前、PCはあったし、HPやブログも存在したが、ツイッターは多分存在しなかった。(調べてみたら、2006年7月スタート)だが私は、この時点で恐ろしく面倒な紙版のツイッターをやっていた。毎月それを印刷して配布していた。もう今となってはそんな手間はとてとても。年賀状でさえストップしてしまった。

今や全国を、私以上に細かく走り回っている川崎

二三彦君は、この時、まだ京都府宇治児童相談所の職員だった。それでいて明石書店から4冊目の本が出ていたのだ。

08/03 一日仕事場にいていい日はゆったりする。ポータブルDVDの修理が出来上がったと連絡があったので寺町の電気店に取りにゆき、「火垂るの墓」、「グッドバイガール」、「理由なき反抗」と、意味不明なラインナップのDVD三本を購入。マンションの天井やりなおし工事も終了。クーラーも治ったし、機嫌よく金剛出版の原稿の校正作業をする。紀伊國屋書店出版部の原稿の件、一応白紙に戻すこと、担当Mさんとのメールで了承。「発達」原稿のあれこれも校正段階に。

●当時、京都・寺町四条は家電街として誰にも認知されていた。とりあえずあそこに行って、複数店を見て…そう思っただけで出かけていた。今、見る影もない。撤退した店、大型店は京都駅前にと様変わりしてしまった。私の頭の中からは消えない幻の家電街。

出版を打診されて、今まであちこちに書いていた原稿に、書き加えを入れた「私の見た心理臨床業界周辺の事情」(そういうタイトルではないが、そう言うつものもの)の本。出版社営業サイドから、読者ターゲットが見えない、書店のどこに並ぶ本なのか曖昧というような理由で駄目になったと、編集者から連絡あり。向こうから声をかけてきておいて・・・とも思ったが、まあそんなこともあるのはここに限らないので撤収。

08/04 教員のための家族理解ws最終回。いいグループになって最終コーナーを迎えている。Sさん提出の事例、まったく家族の体をなさないまま、非常事態につこんでいる。子供は大変である。

この事例検討のH樫君の進め方が、なかなか面白かった。時間経過をファクターに入れて、2時間かけてやったもの。

●学校関係者が直面することになる問題に、深く家族が関わっているのに議論の余地はなかった。しかしあの頃もまだ、学校としては家庭に入り込むことは出来ないという言い方のままだった。

しかし昨今、SSWが登場して、その人達がどれほど機能できるかどうかの検証はぬるいまま、突然の手のひら返りで学校も家族のことを言い始めている。家庭訪問の手間も省いてしまったところが少ない今になってである。

現場の必然に合わせて、自らが機能を拡充、変化させていかなければ、流行モノ、廃りモノを次々に予算の名で押しつけられて、消費するだけの学校にしかないのに。そして、自分たちの実力はドンドン劣化していくのだが・・・。

私は家族療法の訓練を継続する中で、教員に家族のことをもっと理解して、扱えるようになって貰う必要を痛感していた。そこでKISWECで教員対象の家族理解WSを集中開催し始めていた。

参加してくれた人たちには成果も大きかったと思うが、継続的に参加者が溢れることにはならず、数年で不開催になった。何故そんなことが分からないのだ！と憤慨気分の頃もあったが、今では、世の中

とはそう言うものだから、出来ることからするしかない。時期が来れば解ることもあるよと思っている。つまり老化である。

08/05 日曜日だが、Sさんの面接日が取れなかったので朝やることに。KISWECへH樫、S掛、C葉、Y本の4人がギャラリー。昼食歓談後、仕事場 D・A・N に。夜、自宅に届いた「人間関係論」のレポート899通(1000人を超える受講登録で、最終レポートの提出がこれだけだ)の採点を夜中に始める。面白いものが減ってきている気もするが、それでも読もうという気はする。

08/06 移動途上にレポートを読み続ける日々が始まった。20日までに成績を欲しいとか言っている。次年度の授業は600人以下の清心館でおこなえるようコントロールすべきであると書いた答案あり。

08/07 昼前に仕事場 D・A・N に。今朝も4時頃まで採点をしていた。読んでも読んでもいっぱいある。仕事場 D・A・N 通信八月号を完成させて折って切る。夕方からKISWEC今年度訓練受講生達との会食に、仏光寺柳馬場のレストランESSENへ。

●文学部「人間関係論」のレポートが送られてくると、長い読み歩き生活が始まる。ありきたりな記述も多いが時々、はっとするような文章や状況記述と出会う。するとそれが、「漫画・木陰の物語」のインスピレーションになる。そのまま描くことはないが、記憶の中の何か引き出されるきっかけになる。

08/08 Y市教員の夏期wsで勤労者福祉センターに。昨夜までH田さんから連絡がなく、やきもきしたが32人の受講である。M園小学校の教員は基本的に全員参加。月例開催の家族勉強会とドッキングしている。

午前中は父親を思い出して語るエクササイズ。午後は「決定」をキーワードの家族面接と事例検討。三つ目の事例検討は、時間の関係で中途半端になってしまった。やめる決断もあったとは思うのだが。

琵琶湖花火大会の混雑を避けたくて、急いで帰宅。自宅ベランダから目前の花火を見上げるのは

いつまでだろう。その内また、山側の本宅(本宮)で花火を見る日がくるだろう。

キネ旬広告で8月10日「初恋のきた道」DVD発売を知る。待望の・・・である。

この時点ではまだ、暫定別宅生活を夫婦と娘でしていた。本宅には両親と私の次男(孫)が暮らしていた。もう二人とも亡くなったが、この時点ではまだ両親が存命だったのだ。今では次男も二人の子の父親になっている。十四年も経つと、何もかもが変わってしまうのだなあ。果たして自分自身の成長変化はいかなものだろう。

08/09 時間を見つけてはこつこつとレポートの採点をしている。面白いものがときどきあるが、つまらないものや舐めているものも多い。自分の学生時代をふりかえれば、もっともなのだが。巨大教室(1000名収容)の変更がムードをかえてしまったと感じている学生が多いのに改めて驚く。

夏の旅、イスタンブール旅行の払込みをしてHISに電話をいれると、トルコ航空(直航便)で席が確保できたとのこと。何かと都合のいい段取りである。

夕刻、園部駅に向かう。瑞穂町職員向けの講演で、出迎えが園部駅まで。JRの走っていないところは私には不便なところ。講演の出来は、笑いの少ないものとなったため、受け手の感触は不明。住民課長は嵯峨野高校でも聞いているので、あの時との違いに驚いたかも。

帰路の車中、N・サイモン著「第二章」読了。面白く読んだが、第一巻の方が良かった。

イスタンブールに格別な思いがあるわけではない。巡り合わせ、偶然である。そしてそれが必然になる気がすることもしばしばある。遭遇とはそういうものだろうし、私達はまだ見ぬ何かは知らない。そして知らないものを欲望することは出来ない。

08/10 「DVD・初恋のきた道」購入。そのうちゆっくり見よう。

午後は家裁の調停三回目。申立人が来ないとい

う展開。相手方の母親にも来てもらったが、見事に話し合いにならない。同じ日本語世界の人とも思えない。代名詞ばかりの、独り言老人。イライラする。娘も来ていたが、彼女の立場のなさにも同情してしまう。もっと普通の親や祖父母が欲しかったろう。



仕事場D・A・N通信 第5号

トーク2001の5回目が終了。いつものように50人ほどの出席は有り難いこと。しかし、話の出来は今ひとつではないかという反省しきり。というのも、今回第二部に用意していた話にゆかりのある人が突然出席してきたのである。驚いてしまって、やや混乱。終了後、K崎、K嶋と三人でお茶を。

帰宅途上にレンタルビデオ。「処刑人」変な映画。「ダーク・エンジェル第二巻・ハンナ」ちょっと、面白くなってきた。でも、やっぱり続き物のシリーズの匂い。採点は半分済んだような気配である。思っていたより快調なペースで進んでいる。

トークライブに50人もの有料入場者があったこ

とは、今振り返ると不思議な気さえる。私に勢いがあったのか、時代がそんなだったのか。この時の全記録が音は良くないが存在する。いつか聞き直してみたいと思って、ある時8ミリビデオテープをDVDにダビングして貰った。

以下は配布していた仕事場DAN通信の中の記事。手間のかかることを楽しんでいた時代だ。

「ルミの森」⁽¹⁷⁾ なぞこれか本所に⁽¹⁵⁾ 「風の恋歌」は評判⁽¹⁸⁾
 まの村に暮樹 みどのほうちい本で、日付を
 そりた読んで 見ると'76.10.大阪+3で置
 ました。あの 113.
 後に出版の とも面白か⁽⁶⁾ キャラクター⁽⁵⁾
 を読んでま ちやと何も覚え 売れたマ+が
 せん、何となく といはせん。 くもへんたて

今江作品の中は⁽¹⁾
 あり良くない。若い
 少年の他の人が見え
 てない。結末もなん
 んがそんなことか...
 7.7でせんは良!!

森理子とい人の⁽⁸⁾
 自然と読後感
 して、二度と⁽¹⁰⁾
 作品も対照を
 読もうと思わなかつた。

映画も本で大事に大
 事だと思いか一杯
 モラルもなんざん生さ
 ても良いのではなかつた
 「泥の河」はさだからそで
 作品を見た!!

このシリーズはCDから⁽¹⁾ 後で何か受書した本だ。⁽²⁾
 本と読んでみる。しかし ヨロヨロ風本派日記だが
 在野の他は読んだこと。 ヨロヨロあるものとは一味
 ちがった。*

こんな⁽¹⁶⁾ 非常にリアルのある味本。普通透明⁽³⁾
 本とわ。 人物は服を着ていないのかとがいろいろ疑
 911の... 問を持ったが全2巻まで解明。そして
 透明人間の鼻の芽をさ描いてる。*

26
 25
 24
 23
 22
 21
 20
 19
 18
 17
 16
 15
 14
 13
 12
 11
 10
 9
 8
 7
 6
 5
 4
 3
 2
 1

2つくらい読んでやめ⁽¹⁷⁾ 河童の平描の本⁽¹⁶⁾ 映画「三銃器」主演⁽¹¹⁾
 しま。この中8冊、他はも は「三銃器」観たのみの 生金子正次はも後で3冊
 11冊が犯罪物の1冊7冊 本来全部あると思っ てるんだ。その7冊を3巻
 3冊を讀んだ。1冊は 11冊と自分より1冊が 747ジャンは「三銃器」の
 意味はなかつたのだが。 して計たくなるのだ。

たまに名前が読の本が⁽¹⁶⁾ 僕には⁽³⁾ あちこち⁽¹²⁾
 2冊ある相相だった。しかし 11本本感心 ほんの1人がいた
 この2冊は氏の書の中はあま にはほうとかが 読むと味は
 り感心しない。他に1冊の があるそう自分 読んだの1冊
 13冊ある。そして何より氏が はあまのほう してしまつて
 編集するの著者誌「本の はないのだが しまったその
 雑誌」は「三銃器」として まに本は河 降一が1冊「
 長年の愛読書である。 ニュートン」の 初編」置
 いてる。

た。長崎の大雨土砂崩れで、生き埋めになって妻子を亡くした人が、社会人入学で受講しているそうだ。これだけ人数がいると、そういう人が含まれていることがあるのだとあらためて思う。仕事場に出てきて、メール返信。HISにパスポートのコピー、K出版のI井さんにFAX。

実家の母から心細そうな電話。近隣の住人の妻が妄想気味のことを言ってクレームにやって来る。「自分の悪口をFAXであちこちに言っているだろう」と何度も繰り返しているらしい。夫に連絡して、しかるべき対応をしてもらった方が良いとアドバイスしたが、父と相談して様子を見ることにしたらしい。

妻が熱っぽいので夕飯は済ませてきてと言う。そこで仕事場に泊まり込むことにした。「発達」の校正をして、夕食に出る。安くなった吉野屋で特盛り、けんちん汁、漬け物で八〇〇円。食後、青山でアメリカン・コーヒー五五〇円。仕事場に戻るつもりで歩いていると、「ジュラシックパーク3」オールナイトの看板が目にはいる。次回は午前一時三〇分から。まだ一時間ほどあるが、観ることにする。そこで初めてマンガ喫茶に。新規オープン半額とかで一時間一九〇円である。気になっていたコミックス「陰陽師」を読む。映画「ジュラシックパーク3」は例の調子で、変わりばえしない。鳥かごのイメージはなかなか目には面白かった。なんだかいろいろ刺激的な土曜日である。

木陰の物語「過去・現在」のネタ元がここにあった。そうか、あの話に触れたのは800枚以上のレポートの中だったのか。すっかり忘れてしまっていた。あの作品は今では宝だから、読む作業は発掘だったことになる。

地域社会にはいろんな人がいるが、みんながつながりなくやっていたらいられるほど、ちょっとした差異が、不安や恐怖になる。

仕事場に泊まることは、以前より今の方が多くなった。しかし、こんなにイベントのように夜中にうろつくことはない。元気だったのだなあと思うが、自宅以外に、京都市内に仕事場を設置したのは、家賃負担を越えて得策だった。

08/11 朝寝の土曜日。四六時中採点の日々である。今日読んだ中に、今回の一番のレポートがあつた。

最近、そろそろ大学の定年退職も視野に入れて、仕事場D・A・Nの撤収も考え始めている。そして、この期に及んで、ずっと自宅がベースになる事への心配が頭をもたげている。

08/12 半日かかって仕事場の掃除。なかなか片付かない。わかっているのに、なぜこんなになってしまうのか。日曜夜、K-1を見ながら飽きていることに気付く。BS放送のイチロー特集。わくわくする。シアトルのアメリカ人のイチロー談義が面白い。これって小泉人気と同じメカニズムだけだ。

身勝手な話だが、やがてイチローにも飽和してしまった。説教臭く感じ始めたので、情報に触れる機会が減った。振り返ってみると、サッカーの中田ヒデに注目し、香川に移り、MLBのダルビッシュに目を奪われ、ヤンキースのマー君に心惹かれ、今は錦織圭って、ただのスポーツミーハーだな。

08/13 月曜日、昨日手をつけた片付けがまだ納まらない。それよりショックなことは、「カイよりはじめよ」の言葉を、まったく勘違いして覚えていたこと。それを文章に書いてしまったことだ。しょうがないか。

「木陰の物語」を紀伊国屋書店から本にできないかどうか、打診のスクラップを送る。一度失敗しているMさんが今度は頑張ってくれるかな？それだけで一日すんでしまう。

夕刻K崎くん、遅れてH谷さん来訪。LAMASAで食事しながら話す。H谷さんの園部での生活は愚痴ばかり。大変だなと思う。今、組織の団塊世代は本当に行き詰まり、閉塞であるようだ。

夜中、ビデオ「ぼくたちのアナ・バナナ」エドワード・ノートンを観る。そこそこ面白かった。

この時点ではまだ、「木陰の物語」が出版物になる計画は成立していない。結果的にホンブロックから、「家族の練習問題」1-6 巻として現在に至ることになる。でもまだ、そんな未来があることを誰も知らない。未来はいつもそうである。

08/14 小泉首相は昨日靖国参拝に。そういうアイデアがあったのか。レポートの採点が大詰にきている。今日の一通、「虐待の世代間連鎖のようなことを言い過ぎると、片親や家族的マイナス原因を興信所が調べたような風潮が、また繰り返すのではないのかという懸念がある」このセンスにはとどまる。

08/15 嫌な事件が起きている。連れ子再婚夫婦の小学生の子どもを、虐待死させてしまっている。施設にも入っていた子だ。一時帰省の間のこと。死体遺棄までしている。全く嫌になる。人間に期待を繋ぐのが虚しい気にさせられるような出来事だ。

この二日間の記述は、何かを考える上での「ありたい姿」と「ある姿」の扱いについて、考えさせられる。慣用句に登場する、親が変わってしまったというのは本当なのか。子どもが昔とは違うというのは本当なのか。生物がそんなに短期に、決定的変化を遂げたりするものなのか？変わりやすいのは人ではなく、状況の方だろう。

08/16 朝の相談室は受け付けのAさんがアメリカの妹宅訪問でお休み。面接予約も入れてなかったのでソファで居眠り。

午後は家裁のやっかいな一件。時間がかかって、2時から始まったものが、終了は5時45分。気むずかしい虐待親父に、ここというところで、リアリズムを突き付けて話す。すると、私は理解してくれてる人だといいたす。28条の調査については、一緒に居てくれるのかと聞いたりする。人は自分の都合のよいようにではあっても、理解されたいものなのだ。この時間になると空調は切れてしまって暑くて仕方ない。なんという役所だ。

終了後、久しぶりに本宮へ。母が、「もうこの家はあんたも必要ないやろ」等という。何を云われても、笑っている私である。7シネマに出かけて「RED S HADOW 赤影」を観る。心底つまらない。映像的面白さだけの映画。忍者映画の面白さを作り出せていない。

これを読むまで、母がこんなことを言ったことを

覚えていなかった。この経過には、いったん同居しておきながら、大津市内のマンションに別居していた私達への不満や批判がある。当初の話し合いでは、親父よりも物わかりの良いことを言っていた母だが、腹の中では無念だったのだろう。しかしこの後、父が亡くなり、一人暮らしになった母の所に戻って再同居するようになって、想いの変化もあつただろうと思う。人は単純じゃないし、その時だけではない。

人はどの時点かに時間を止めて、それに自分の人生を代表させてしまう事がある。事実目を見れば、けれど生きている・・・だし、その後にも様々なことが起きるのが必然だ。生き物は自分の知らないある日の死に向かって、それでも日々を過ごすものだ。解釈と説明で人生を操作しようとする人の落とし穴を見る気がする。それもこれも、今も、私の人生である。

08/17 昼前に仕事場に来た。人間関係論のレポートの採点が完了。よく読んだものだと思うが、残り僅かになると、もうあと少しか・・・と残念に思ったりする心情がおかしい。25日のイスタンブール行きまでに仕上げたいことを書き出して片づける。

立命レポートの成績記入と発送、季刊「発達」の原稿、「児童心理」のイラストと原稿、晩年学フォーラム通信のマンガと文章、できれば「木陰の物語」9月分、とこんなところなのだがサテサテ。夕刻、N本さんが面談に来る。

今も忙しいような気がするが、当時の多忙さに比べると、年齢相応の抑制もきいてきている気がする。それに、この当時頑張っておいたことの成果が今に結びついている感じはあちこちにある。やはり出来るときには、やっておくのが一番なのだろう。

更に説教臭いことを加えるなら、今だけをしのぐような仕事は抑えて、未来の種蒔きに鳴ってくれそうなことを、忙しくてもしておくことだ。

08/19 月例ミーティングの日。F川、C葉、M、N本、小Z、H田の六人が来談。

月に一度、日曜日の午後から有志が集まって業界内外、周辺諸々の雑談会を仕事場DANで開催していた。食べ物持ち寄りの、日がな一日の歓談会だった。

仕事場を京都市内の便利なところに設けた目的の一つがこれだったので、長いこと月例会で開催していた。参加が10人近くと多いときも、3、4人の時もあつたが楽しかった。毎日出勤する職場がなくなったので、新たな同僚づくりを志していたのかな。

08/20 一日かけて木陰の物語・金剛出版用バージョン第一話「故郷」の絵の部分を完成。BGMは朗読・永井荷風著「墨東奇譚」。

夜、遊が泊まりに来ている。「団遊通信」のおかげで、やっていることがよく見えている。大和証券に務めている次男いどむの事が気がかりだ。こと葉は明日、台風の中を彼氏の車で東京から戻って来るという。

この頃はまだ、自分の中に親の気分が強かったのだなあ。上二人は成人して、それぞれ仕事をしていたのにである。今だって、子どもは子どもだが、それぞれに対して安心感は絶大だ。有り難く育ってくれた。

08/21 台風である。琵琶湖からマンションにふく風は驚くほど。朝、大津市の保護司会・K川さんから講演依頼あるも、火曜日で女子大の授業日ゆえ断る。〇市自治労の保育部会の研修会、助言者依頼ある。日程は都合つかなくないが、講演料定価を伝えて返事待ち。網野町から講演依頼。夜間であるが、日程が比較的自由に相談の余地あり。規定の謝金を用意しているので引き受けることになりそう。

50歳でフリーになってから、お金のことをきちんと請求して、扱えるようにと努力してきた。公務員だったから一番弱い面だからだ。そして様々な状況の中、自分の定価を確保して時間が経った。

昨今、あまり拘らずに、行けるところには行って

あげようと思った途端、講師謝金が 15 年前に戻ってしまったところがある。人にもものを頼むのに、謝礼のことを口にしない世話人はずるい人か弱い人だ。自分に都合のいい熱心さばかり強調するのは怪しい。

08/22 近畿はまるまる暴風圏にはいって雨風。そして関東に抜けていった。仕事場で一日作業。児童心理校了、発送。「発送」FAX送信。締め切り分は一応片付く。やっと本物の空調屋が来てくれたようで、クーラーの水漏れ工事、三度目の正直期待。

08/23 昨日から読んでいる、「蜷川幸雄伝」が面白い。朝は相談室。先日会った人が偽名で来ていたらしいことが判明。本名で改めて別の日に予約が入っている。しかも、前回来たときのことを受け付けに伝えている。よくわからない人だ。

MさんのN市勉強会、9月も中止。12月からというが、その日程でトラブル。上手くいくところは自然にそうなるし、駄目なところはどうあがいても裏目にでる。そういうものなのだろう。

他人任せで気楽に、何もかもが上手くいっていたわけではない。むしろ、順調なもの以外は皆、壁や落とし穴に出会っていたと考えてもらった方が、事実に近い。

それでもへこたれないのは、上手くいったその一つが元気をくれていたからだ。やりたくもないことが上手く行っても、フィードバックは少ない。そして上手く行かなかつたら、本当に滅入る。

だから結果が出た時の気分は、上手くいったかいかないかで決まっていたのではなく、やりたいことだったかどうかで決まっていたのだ。

やりたくもないことを、仕事だからと我慢して、あげくにダウンしている人は考え直した方がいいよ。

* * * *

そして翌日からイスタンブールに出かけた。その旅の記録は以前に掲載したことがある。



蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第七回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

よろしくない現象だ。書き下ろし原稿に気に入らない。特に新規に始めようとした「続・家族理解入門」の動機が高まらない。一方で回顧記述は活性する。老化だろうか。しかし、昔話がしたいわけではない。今のことを語りたい。でも今だけの情報を語るような上っ面話はしたくない。

昨今の世の出来事が、今初めて起きたことであることは少ない。大半はこれまでにあったことであり、未来にもきつと繰り返されることである。人間の営みとはそういうものだ。だから、日付のある昔を取り上げて、それと今日を重ねて考えてみたい。

何となく昔は良かったなんて話は信用しない。自分の人生(つまり過去)を美化していたいのは、年取った人間の常だろう。忘れてしまいたいことや、忘れてしまったことも沢山あって、語らずにいる内になかった事のように感じられる。そうやって穏やかな記憶に包まれた老後を迎えるのが、御身安全の加齢スタンダード、なんて流れにのりたくもない。

戦争に行った私の父は、野戦病院で麻酔なしで痔の手術をされた話を何度もした。敗戦後、帰国になるまでの間も食料調達はしなければならなかった中国中央部の街での、情けなかった話をおもしろおかしく語るのが好きだった。しかし、戦闘の話はしなかった。聞かなかったからなのか、私が聞けなかったのか、前線には出て行かなかったのか曖昧なままだ。

私の時代、徴兵されるような戦争はなかったが、それでもなにかはあった。それなりに頑張ってきた世代であることも否定される理由はない。でも、この期に及んで、自分の老後(今だってもう十分老後だよ!)不安ばかり語っているようだ、自己中のうんざり世代として一括りにされても仕方がないが、それは本意ではない。簡単に一括りになんかしてはいけない。何事もディテールだ。だからこんな記述形式に拘るのかもしれない。今回、書いていてそう思った。

赤字が2001年9月の日誌

(今から15年前。私は54歳だった。)

09/03 イスタンブールからの帰路機中。「ブリジッドジョーンズの日記」(字幕あり)、「恋する遺伝子」(英語のみ)をやっていたが、鑑賞できる態勢にない。朝10時過ぎに関西空港到着。はるかで帰宅。

専門学校の夏休みで帰省していたこと葉(娘)は、一人で無事留守番をしていた。今日、東京に戻るらしい。入れ違いである。

こんな風にかけていた一週間後、9.11が起きることなど夢にも思っていない。私達の未来は、いつもこんな風に直前までなにも知らせてはくれない。

仕事場に10日ぶりに出る。メールの整理や旅行中に書いた原稿をパソコンに落とす。夕刻、幼なじみのAくんから電話。京都に来ているというので、久しぶりにあう。大手N社では出世頭の彼もリストラに怯えるという。役員寸前で年収1200万円の会社員。五十歳を過ぎて、サラリーマンはこの時代辛いモノだと思う。せいぜい自衛を。

こう書いたが、Aくんはこの後、鬱で五十代の中・後期をほぼ埋められてしまう。そのまま定年退職し、地域の住民(高齢者のヒーロー)として、役割を得て復活するのはずっと後のことである。この段階で何か、私に気づいてやれることがあったかとも思ってもみる。思いつかない。長い音信不通の後、回復期に再会し、今後の話が出来たのは良かったと思うが、中学時代から知る彼の華々しい人生を考えると、この時期の持つ意味を考えざるを得ない。人は一色で自分の人生を塗りつぶすことはできないのだから。そして、この時間が彼に何をもたらしたかも、簡単には決められない。人間万事塞翁が馬は誰の身の上にも起きる。

09/04 昼過ぎ、二時近くなって出勤。何となく雑用をしているうちに時が経つ。時差ボケとも思わないが、旅疲れ。「ヒトクセある心理臨床家の作り方」(金剛出版)の原稿の修正と加筆。



川畑隆君達が編集していた「鬼相の心理臨床」という自主制作雑誌に連載していた文章を、出版しましょうと声をかけてくれたのが金剛出版にいた石井みゆきさん。

本が出たのは2002年10月だから、まだ随分先の話だ。この頃に、私の研修自分史を本にして、巻頭にカラーヒトコマ心理漫画ギャラリーまで付けてくれた編

集者に感謝である。今の出版状況ではとても出せないだろう。

09/05 旅疲れから、出勤が昼過ぎになってしまう。途上で、「木陰の物語」第十九話思いつき、ササッと仕上がってしまう。「ヒトクセ」のほうの家族療法の章、何度も読み直しておおかた完成。

躁状態のH君が企画したH市のプランは、案の定ダウンした。N市のMさんの企画と共に、今月は二つキャンセルになった。ヤナ感じもするが、この空いた時間に勉強しておこうかなんて。

家裁の7日のケースも取り下げになったとか。新件を頼まれかけたが断る。社会勉強の視点からは、調停の仕事も受けておくのがいいのだが、家裁の対応に少々うんざり気味なので。

家裁・調停委員仕事の文化と、自分のベースにある家族心理臨床文化とのギャップを常に感じていた。自分が役に立っていないとは思わないが、お役に立っても余り達成感がない。利用者・来談者があまり信頼できない。

現実なのだろうが、人間の悪くて弱くてずるい部分を引き出しやすい機関機能に違和感が拭えなかった。法とはそういうものなのか？

夕刻、F井君がSVIにくる。就職活動は難しいようである。良い奴なのだが、人柄で採ってくれるほど世の中にゆとりがないのか。ケース進展は例によって未熟さと自信のなさが重なって結果を出せない悪循環である。

職業選択にそれぞれの人柄が作用しないはずがない。何を指すかは、何になる能力が高いかよりも、その人個人の持つ欲望によるところが大きい。

ところが、どういう仕事か上手く出来るかと、人柄の間にはそれ程結びつきはない。むしろ、人柄で仕事をしてしまうと、危ないのではないかとさえ思う。

そういう意味で、彼は相談の仕事は向いていなかったのではないかと今振り返る。教員職に向いている人が、カウンセラーになりたがっているのを、一時期よく

眼にした。今はそんなことも減ったのではないかと思うが、どうだろう。

09/06 夜更かし朝寝のサイクルに、木曜日午前の相談室出勤が挟まると苦しい。眠い目を無理やりあけて出勤。にもかかわらずケースなし。一方、KISWECの土曜日は午後二件の新ケースが入ったという。

ポータブルDVDプレイヤーが中途半端な修理状況ゆえ、再度修理に持ってゆく。全くこの夏は壊れと修理の繰り返しだった。そう考えると、旅行中の酷い下痢も、壊れと修復のパターンか。ドトールコーヒーで木陰の物語の下書き。

夜更かし、朝遅めのサイクルは今に至るまで継続中である。午前三時前まで起きていて、朝は9時半まで眠る。幸せなことに、この間にトイレなどに目覚めることはない。ぐっすり6時間半は我が人生において、50歳での公務員退職以降の僥倖である。それまではずっと、慢性の睡眠不足、そして居眠りだった。

09/07 木陰の物語の来月号分、「解けるとき」をフィニッシュして発送。その後、大阪に。



まだ第19話である。現在(2016年1月)、第192話を描き上げたのだが、この時、連載192回なんて想像もできない。更に、「家族の練習問題」のタイトルで単行本

が六巻も出る事も、連載雑誌が三誌もあることも想像すら出来ない。

未来に何が起きるかなど、想像できない日常で、その時できることを重ねてきた今である事実、あらためて思うことは多い。

09/08 kiswecの面接日。朝はSさんの10回目。もう1クール、今度は全家族面接にチャレンジしてみることにしたが、ストレスのかかる状況である。

午後一件目は、K市家族勉強会に来ているIさんの紹介ケース。歳の離れた娘の非行問題。しかしこのカップルには、結婚当初から凍り付いた恨みが母親にあったようだ。もっとも、今こうして来談しているということは、それはそれという扱いも出来るようになっているのであるが。しかし、長女、次女の命名について、二十数年も経って、妻が誤解していたことを知らされる夫も珍しいだろう。

三件目はH君が担当。新書「不登校の解法」を読んでいる人だった。男児二人の退行と粗暴、甘え、身体病の頻発。なんだか夫の話に実態とのズレの予感。

結局、①ケース目はあまり上手くいった感がなく終了した。現実には望んだ変化も起きていたから、投げ出したわけでも、ドロップされたのでもない。しかし家族心理臨床家としては、不満残しのままの終結だった。

来談者の価値観に、私の我が抑えられなかったのかなあとも思うが、先方の意地の張り具合が、事態を切り開いた力だったかもしれない。希な経験だった。

KISWECの家族療法は、ドンドンと言うほどでもないが現在も相談を受けている場所である。決まったスケジュールの曜日に、受付の人が入れた予約に従って相談にのる。千葉くんがセラピストをして、私はバックで見ている。

来談者の目的、目標に一步近づく道筋を探すのが役目だと思うので、カウンセリングや家族療法に拘らない。再現性や普遍性など気にもしない。その人にとって有益ならばよい。そう考えると、来談者の前で私は自由だ。

先日受信したXさんのメールが気になっているので、旧知のKさんに転送する。その中味は

『前略、新聞記事等マスコミ絡みで、個人の発言について神経をとがらせているのですが、現場の実情を知っていただきたく、個人的にメールを書きます。

わが県の**対応は、中央児相の何人かの意見で突然決まってしまいました。当時の所長の持論は「児相は消防署だ」、「誤報でも現場に急行すべきである」というものでした。

しかし、消防署はそのときだけの仕事です。なにかもやらなくてはならない状況にある、現場の多くの声はきいてもらえていません。知事がマスコミに発表してしまったから……と言う理由と、今の中央児相で一ダ一的な存在の意見が強く、後戻りできません。

なぜ初めからこんなに無理をするのでしょうか…、この対応には、わたしのまわりは皆一様に反対しているのに。何故この対応なのか、いまだにわかりません。金曜日の夕方の通報のケースなど、誤報と推測されてもとにかく落ち度をあとで指摘されないようにと、調査する間もなくとんでいきます。本末転倒ではないかとみな思ってもどうしようもありません。

この対応のために、どれだけの犠牲を強いられているでしょうか。職員は疲れきり、仲間には休職や退職に至った人が何人もいます。ケースにとってもかなり無理なやりかたになっています。泣き声ひとつでも、学校等集団で確認がとれない時には、全て訪問して、安否確認しています。児相管内人口**万人、今年度3ヶ月で通告は120件をこえました。異常な状況でこのところ毎日のように緊急保護がでていて、騒然としています。職員は疲れきり、勉強したり、声をあげる元気もない状況です。本当に手をかけなくてはならないケースにどうしても手がまわりません。

限界を超えた、現実を考えないやりかただと思います。他県では真似をしないで下さい。むしろ、批判していただけるとありがたいです。

県に一番して欲しいことは、市町村や調査される側の理解と協力を求める施策です。突然の訪問は、する側もされるほうも極度に緊張します。泣き声ひとつで訪問される側は、踏み込まれたという意識になり、怒

るのは当然です。

OのTさんがおっしゃっていましたが、事前調査でセレクトしていく力量を持ち、本当に心配なケースに手厚くできることが、いま求められることではないかとおもいます。すべてをやろうとすることはとうてい無理なことです。でもあれもこれも、みなちゃんとやるように言われます。今は、火中の栗を拾うと怖いので、施設も関係機関もすぐに「児相に」と、ますますなってきました。周囲の理解のないところで、児相だけがやろうとしても限界があります。背負いすぎていると思います。事件があるたび、「やるべきこと」がどんどん増えて、何が重要なことかわからなくなりました。警察のようだ…とよく思います。又、反面ケースがどんどん心が通じなくなっていて、「福祉」でやっていることの限界も感じます。「犯罪」と位置付け、入り口できちんとした警察の対応を行い、その後福祉が援助していくやりかたのほうがいいのではないかと最近急に思うようになりました。当児相では「援助」のスタンスで対応困難な事例が多いように思えるからかもしれません。ながくなりました。すみません。

ほんの少し秋らしくなってきました。おいそがしそうですが、御身ご大切になさってください。

* 15年前、児童虐待問題は既に、熱心に現場で頑張っていた人が悲痛な声を上げていた。それから長い時間が経ったが、私達はこの時とさほど変化は起こせないまま、騒ぎだけが過剰化したと思う。

策を誤ったことは、改めなければならない。「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」と知りつつ、今更動かせないなど、原発事故問題後の社会の言説と相似形ではないか。

私は、この問題が迷路に突入していくプロセスで、一貫して信用ならないと言ってきた。児童虐待が児童福祉の中核問題であるはずがない。(それは警察の仕事の中心は凶悪事件の解決だ!と言っているのに近い。そんな無茶な話があるものか)

それは今も変わらない。だが現実には、児相職員の個人的力量の問題にすり替えられたり、もっと専門性を等という、何にでも当てはまるようなフレーズで目くらましを繰り返しながら、実はそう発言している人自身

が信じていないという、最低の状況を続けている。

業界人がみんな知っているながら、まあそれでも何とかなるだろうと思っている内に、こんなはずではない事態に至るのは、よく起きるパターンである。

最近あった地盤補強のくい打ち作業不正が明るみに出たとき、部内者はみんな、知っていたことだったから、業界内に驚きが走ったりはしなかったという。驚いたのは、「本当に建物が傾くんだ！」という点だったらしい。

笑い話ではない。専門家業界はこのように構成されがちなものである。だから用心が必要で、起きた事実には則した検証が必要なのだ。

児童虐待で今、検証されなければならないのは、何故こんなに長期に渡って、このテーマが語り続けられなければならないのかということである。

09/09 朝、長男に典子が旅行の話大声でしているのを聞きながらうつらうつら。昨日、夜中に遊がやって来た。明後日から一週間韓国に出張だそうだ。あいつは二度目のソウルだが、今回は韓国に事務所開設の計画検分のためだとか。

図書館に寄って、イスタンブール絡みの本二冊他を借りる。仕事場に出てきてまたまた原稿校正。夜、ビデオを久しぶりに借りてきて観たがたいしたことがない。「悪いことしましょ」、リメイク物のコメディだがつまらなかった。「ダーク・エンジェル(3)ザック」はだんだんシリーズモノの出来になってきている。

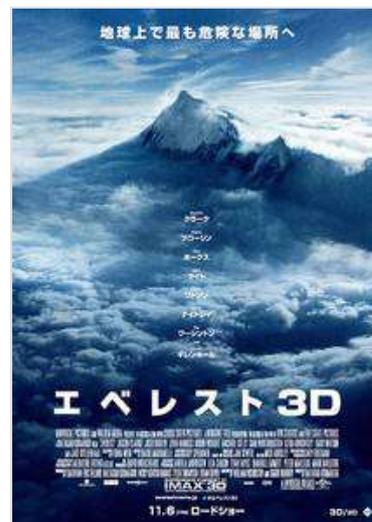
09/10 「パイロットの妻」アニータ・シュリーヴ著・新潮クレストブックス読了。最後になってIRAが出てきてしまうのが、唐突感いなめない。アメリカでベストセラーになったそうだが……。三日ほどで350頁以上を読んだのだから面白くなかったわけではないが……。

KBS京都テレビから出演依頼のFAX。日曜の夜で空いているのでOK。学校の安全という話題らしい。

〇くんの修士論文の下書きを読んで、感心する。良く書けていて、良く理解できている。これが実践できればいいのだが。4時半過ぎ、大学院の同僚、中村さんと村本さんが仕事場来訪。後期のクラスターの進め方をうち合わせ二時間ほど。

この春から立命館大学大学院応用人間科学研究科で働き出していた。大学院勤務は初めてだし、要領が分からないことも多いが、中村さんが用意してくれた特別契約教授というのは、本当に私向きのポジションだった。間もなく15年を終えるが、まだしばらくは在職のつもりだから合っていたのだろう。

夜中、ビデオ「パーティカル・リミット」、期待していなかったせいもあるかもしれないが、なかなか面白い話だった。かねがねヒマラヤ登山が観光化している話は聞いていた。それでも登山家は禁欲的に生きるイメージがあった。だがこのベースキャンプの描き方を観ると、「空へ」の作家のエベレスト事件も、そうなのか……とあらためて納得させられる。



15年前のこんなところに、最近見た映画「エベレスト3D」で扱われた商業登山のことが登場している。ジョン・クラカワー著の「空へ」は、凄い本だった。そしてそれを映画化し、IMAXシアターで上映にこぎ着けている人々にも感動だ。

1996年、不幸な山岳事故は起きた。それを忠実に再現した「エベレスト3D」は私にとって、とても印象深い作品になった。作品としてより、この事実と背景に、私をもった関心の深さが大きいのだが。

09/11 澁澤幸子著「イスタンブールから船に乗って」が面白い。夕刻からぼむの集会で大阪に。その前に、梅田シネリーヴルで「イルマーレ」を観る。韓国の不思議

議な雰囲気恋愛映画。岩井俊二だなあと思う。「ぼむ」は相変わらずのオヤジ話。

終了後、SIに「妻を大学に通わせる」というアイデアを話す。実現できればいいのだが、彼にそれが出来るかどうか。システム論の理屈が分かることと、変化できることのギャップがどこにもあるからな。

帰宅してTVを観て驚く。NY同時多発爆弾テロである。映画顔負けのアイデアと実行力。シュワルツェネッガーがなぜ出てこないのだと勘違いしそうな映像。

どれくらいの人が亡くなったのか。これが21世紀のターニングポイントになったりしなければいいが。



実際、9.11はその後の世界への転換点になった。あの後、様々なことがあったが、一貫しているのは争いへの流れだ。押さえつけていた側の力が相対化され、抑えられてきた者達のエネルギーが増大し、無秩序に吹き出した。

民主革命的だとラベリングされた変化さえ、持続する安定は作り出せなかった。だからといって抑圧された平穏を了承するわけにもいかない。結局、世界は武力と経済のパワーゲームの果てに疲弊きって平和を目指し、エネルギーが充ちると又、金と武力の世界に逆戻りする繰り返しなのか。

クールな見方をすれば歴史上、そうではなかった時代を形成できたことはないと言うべきなのか。

09/12 朝は相談室に予約が二件。カウンセリングになっているかどうかは分からないが、何か動くようにやりとりしている。一件目は鬱病の夫を抱えた妻。二

件目は一年前、家を出されたと訴えてきた父親が、今度は高校1年の娘の不登校だと訴えている。問題作りの上手い、整理の下手な典型のような人。一緒に仕事している人も大変だろう。

午後は大阪・上本町の都ホテルで、更生保護学会という集まりで15:50から1時間十分話す。私の前は、またまた川上範夫さん。氏を前座にするのは二度目である。そのあと、ムジカのレストランで会食。講演は久しぶりだったがキラク快調でよし！

珍しく雑誌「臨床心理学」など読んでいる。まあまあ面白い。「イスタンブールからバスに乗って」読了。またトルコに行きたくなくなった。

今、自分がある姿の実感と比べると、世の中での自分の立ち位置について、あれこれ考えていたような気がする。だが、それにも何処か空々しいところもあって、結局何処かの内部の重要人物になったことがない。

権力を与えられたことがなく、個人的見解以外の表明をあまりしたことがないなあと振り返って、立場上の責任を持ったことがないのだと思いたった。

09/14-15-16 今日から三日間、原家族に焦点を当てたWS. 開始。Mさん、Oさん、Kさん、Wさん、Nさんの5人参加。少ないかなあと思ったが、実際はたっぷり時間が有益な三日間だった。それぞれの原家族のこと、記憶に残りそうだ。

終了後、H君の車で四条河原町まで出て、MARUZ ENIに。本を二冊、ご苦労さん購入である。同朋舎発行「望遠郷シリーズ・イスタンブール」が前から感じてはいたが、手間ヒマかかった都市ガイドブックであることをあらためて認識。これは写真と情報で埋められた一冊とは訳が違う。都市の教科書のような。図録がいっぱいなのに、コストや手間のことを思って感動する。

ギャラをいただいた後、こうして本を買って、コーヒーを飲みながらぱらぱら眺めているのはいい気分だ。

仕事場に戻ると児相研MLに川崎君の一週間がアップされている。本を読むひまもなく働いている彼が、ご苦労さんで気の毒。

ここで書いた丸善は閉店した。そして2015年BALビルの地下でMARUZENは営業再開した。何だか嬉しかった。マニアックな出版社、同朋舎もたしか倒産した。変わらずにあり続けるものなど何もない。そんな時代だからこそ、有限であることは承知で、変わらずにあり続けるものを目指したい。

09/17 月曜日、敬老の日ということで両親を比良山麓のブルーベリーの郷レストラン「紀伊国屋」へ典子の運転で。母があまり元気なかったが、父もとても喜んでくれて、親孝行気分になった。

夕刻、仕事場へ。途上、「アラビアのロレンス」のDVD購入。待望の一枚で、仕上げが丁寧。なかなかいい感じのパッケージものに仕上げられている。後は本体が修理されてくるのを待つばかり。

もうDVDを購入することはほとんどなくなった。ブルーレイになったし、wowowやfulu、tsutayaディスクスでカバーできる。十五年でこんなに変化してしまうのだ。

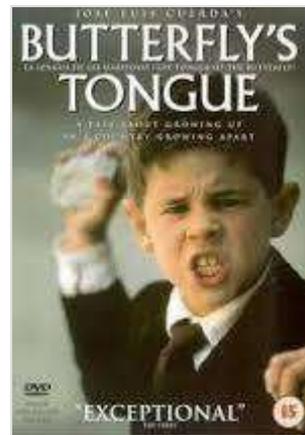
09/18 朝日新聞の児童虐待特集記事に、少し児相の現状に対する同情や共感の含まれた書き方を感じる。そういう流れにシフトし始めたのだろうか。12時30分から朝日シネマで「蝶の舌」を観る。いい映画だった。観ていてスムーズなこと限りなく、なぜこんなにサラサラ世界に飛び込んでゆけるのか不思議な気がした。タイトルバックのモノクロ写真からファーストシーンへの導入といい、幕切れといい過不足ない。そして厳しい映画でもある。母の強さが随所に感じられて家族を思った。

今年度収益見込みを上方修正したという吉野屋の牛井でお昼。今までと違った年輩の客が店にいる。客層の拡大が起きているのだろう。

メーリングリストにテロ事件のその後が見え始める。時代が動いたと指摘する声の多いのに不安が募る。どうもおかしいなあと思っているうちに、人間は変な勇ましさで戦争に突入していったのではなかったか。今、パキスタン政府要人は、苦渋の選択を迫られ

ている。どちらにしても市民が戦争の渦中に引きずり込まれるのか。

映画「蝶の舌」はフランコ独裁の始まる夜明け前、家族を護ろうとする母は、裏切りや嘘を辞さない。今がそんな時代ではないと、誰が言い切れるのか。夜中、TVで映画をやっているのを見ていたらなんとスペイン映画「ベルエポック」。昼間観た映画の先生役が出演している。ハリウッドに行ったペネロペ・クルスもでていて、なかなかいい味の作品。スペインのおおらかさあふれる物語。



日常的に歴史や社会の教科書を読むことはない。ところが映画を観ていると、突然、その時代の社会背景に引きずり込まれる。ナチ占領下のパリのレジスタンスだったり、ワルシャワのゲットーだったり。そこにある思いがけなさ、私が今いる場所のことを教えてくれる。

09/19 午後一番は家裁で虐待親の親権変更問題。二十八条問題とこっちの調停は関係ないのだが、大いに重なっている。子どもの様子が変わっているし、親の様子も変わっているが、母親の申し立てはそのままゆえ、裁判官と協議の上、調停不成立で審判に移行となる。

四時に出て京阪電車で門真市へ。門真教師勉強会第二クールの最終回。そこそこの人数で、家族造形法を試しながらのY川さん提出のケース検討。さて第三クールが実現できるものかどうか？

門真市、茨木市、八日市市(元東近江市)などでそこそこの期間継続開催していた勉強会は中断した。物事

の継続は本当に難しい。続く秘訣、続かない理由、そういう事にも関心がある。

09/20 木曜日、朝は相談室二件。新ケースは職場の人間関係。専門職の悩みというほどのジャンルも類似している。午後、いつものhandsにカットに行く。京都の名門フランス料理店「万養軒」が閉店になったと聞いて驚く。時代の波は変化しないことを許さない。

寺町のパソコンショップへ。決心して店員の薦めで東芝リブレットを購入。これで使えるようになるのかどうか…。借りていたビデオ「シャフト」は以前に観たものだった。気づかないで又借りてしまった。悔しい老化現象。でも、見始めてすぐ分かったのではあるけれど。

東芝リブレットのこと、ほとんど記憶になかった。「シャフト」など全く心当たりもない。「万養軒」は子どもの頃、京都の親戚の法事の後に何度か行ったことのある老舗高級店だ。

ここぞとばかり大ぶりのエビフライを頼むのだが、たいてい帰路のカーブの多い京津線車内で吐いた。

記憶にあるもの、ないものの区別を見ると、老化は否めない。

09/21 朝一番、携帯電話に沖縄からの講演依頼。Sさんと大学教員の三人トークになるらしい。とんぼ返りの日程になるが引き受ける。

典子の眼鏡を作り新京極の眼鏡研究社に。作ってもらっている間に、昨日頼んであったノートパソコンの受け取りに。その後、La・masaで一緒に昼食。仕事場に来てトーク2001用の月刊通信を作成。



用紙を折ってカットして、トルコ土産の菜を挟む。京都市内で子育て支援事業を展開しているところから、

講師依頼。連続講座というので考えてみることにする。

絶好調に活動中の頃である。求められることがあれば動いている。まあできる間だからね。最近新規のお座敷がとんとなくなった。継続プログラムで日程の大半が埋まってしまうせいもあるが、社会資源の人材として、もう新鮮味もないから。でも一方で、本人は飽きてしまった頃から売れるって話もあって。こういうことはわからない。

La masaは寺町二条のビルの奥まったところ、一階にあるスペイン料理店(仕事場DANと背中合わせのビル)。開店時からランチに足繁く通っていた。今では近隣に他にも三店舗ある店に発展。スタート時点から見ている、ずっと利用している常連店だ。写真はそこのイカスミのパエリア(私がこの食べ物と馴染みになったのは、30年以上前のスペイン旅行の時。そこでは、パエージャと言っていた。だからパエリヤは何とも語感が悪い。それはセビリヤではなく、現地ではセビーージャというのと同じ)。

夕刻からのトーク2001は快調な話になったと思う。第二部の話が思ったより短くなったのが誤算。前半の言い残し話をして、9時まで。

深夜に反省もこめて寝床でテープを聴いてみたが、あっという間に一時間たった。自分のことだからそうなのかもしれないが、聞いてくれる人にも、あっという間の一時間であればいいと思う。オープニングで「遠い雷鳴」の話をした。どこまでピントがあっていたかはわからないが、そんな気分の今日この頃だ。

月に一度の講演会(トークライブ)を自主開催した目的の一つに、落語家さんの継続自主公演のイメージがあった。依頼される講演ばかり引き受けていると、同じ話をして欲しいという流れが出来やすい。要望があるし、準備も簡単だし、話すほどにこなれてくるから良いのだが、自分がマンネリする。

新しいテーマの話は手間がかかって、達成感、成功率は落ちる。しかし毎月、継続して自主講演会を企画すると、否応なしに新ネタで登壇しなければならなくな

る。ここに生じるノルマ感が自分を鍛えるだろうと思っただのだ。

09/22 昨夜眠り損ねたので、結局午前11時に起床。雑誌数冊を購入して仕事場に。昨日受け取ってきたノートパソコン、Libretto を起動し始める。基本的なセットアップは有料で頼んでおいたので、持ち帰って古い一太郎7のソフトをインストール。とりあえず動き始めるが、一太郎10をまたインストールせねば。日曜日だと思つたんだか効率の悪い過ごし方をしてしまう。金剛の原稿を郵送。

明日からの産業社会学部での新しい授業「人間コミュニケーション論・実習」のプランを練る。夕方、眠くて二時間昼寝。リズムが乱れている。そのため夜は午前三時半過ぎまで起きていた。

そうか、2001年のこの時から「人間コミュニケーション論」の授業は始めたのか。今年で15年にもなっていたのか。この時始めた基本コンセプトのまま、15年が過ぎた。そしてますます、この形の必要性、必然性が高まっているように思う。同時に、個々にコミュニケーション上の課題を抱えた人が多い印象の時代になってきている。特に男子が目につくのだが、それは受講生の男女比率からも言えそうな気がする。スタートした2001年、受講はほとんどが女子学生だった印象がある。男子学生が皆無と言うことはなかったが二割未満だった。それが15年目の今年、徐々に変化していた受講生の男女比率が逆転した。今、4対6で男子が多い。

09/23 日曜日、アフガニスタンへの対応で田原総一郎番組は騒いでいる。辻本清美一人が女性であり、平和論者として孤軍奮闘している。勇ましい人が闊歩し始める度に、山田太一のドラマを思う。勇ましい人がもてる時代はいい時代ではない。

そして、トルコの軍事博物館でみたように、軍服はその時代に一番豪華にあつらえられていることを思う。男は軍服のようなカッコいい制服が好きなのだろう。



直ぐに異変が起きたわけではない。しかしあの頃の日本社会において、軍隊のこと、徴兵の事等を口走れば、次の選挙では間違いなく落選しただろう。

いま、そうではない空気が蔓延している。その分、心情左翼的言説は抑圧される。右傾化と言われることが起きていると思う。それは決して政治家がそうなのではなく、国民の作りだす空気の反映だ。

夜は「学校の安全」というテーマでKBS京都テレビの番組に出る。発言について思案中である。ノートパソコンを使い始めると、移動中の記述量が増える。

- * 自分の安全は自分で守る。
- * 予防にまず必要なのは個々人の想像力。
- * 多くのものは、ミスや被害をゼロにはできない。
- * コストが必ず関係してくるから、対策費は議論になってしまう。
- * 過保護は途中でやめられない。いまさら・・・
- * 景気や世論に左右されないのは、個人の自己防衛。

2001年9月の日誌は何故かここで途切れている。理由に全く覚えがない。ただ、この時のTV出演は全く愉快じゃないものだった。

登場した他の人たちの話の中身も態度も、うんざりするような時代迎合で、文字通りのマスコミ文化人。愚にもつかない持論の展開に、押し黙って過ごしていた。しかしTVだからその姿は映っていて後日、「団さん、不機嫌そうに座ってましたねー」と何人もの人に言われた。黙っていたらいいか・・・と思ったのは間違いだった。

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第1回

地域子育てネットワーク

何事にもきっかけは必要だ。この連載を開始するそれは2016年9月に長崎・ハウステンボスで開催される日本家族研究・家族療学会である。そこで私は「木陰の物語」パネル漫画展をする。そしてワークショップも担当する。更に、自主シンポでの助言者も卒院生の依頼で引き受けた。また、同学会誌には10年余り「連想映画館」という4頁コラムの連載も続けてきた。それを今年度いっぱいまで終える事になっている。そんなこんなでまあこの際、一度くらいいいか！と思って、六十代のフィナーレにあれこれ受けることにした。

しかし長崎大会会長・児島達美さんからの提案、「東豊さんとのコラボWS」なんて、何が出来るんだろう？、そう思いつつ、まずは一度打ち合わせをしようと言うことになったのが3月下旬。ところが約束当日、児島さんは緊急事態で来られなくなり、京都駅ビルのがんこ寿司で東さんと二人（急なキャンセルはきかないので、食べ役に一名、龍大院生同行）での話になった。そこで話しているうちに、今語りたいテーマの中核が「社会システムへの変化処方」であることに改めて気づいた。そして一任された大会WS案内文にこう書いた。

家族支援入門の東門・西門・南門・北門

入門の入口にも四方あります。2016年3月19日、京都某所でたつぷりと、このWSのための打ち合わせをしました。そこで、参加者があらかじめ予想するような、私達も飽きているような展開はやめておこうと合意しました。ただ、初学者、フレッシュマンに不親切な業界語りにもしたくない。やはり、学会のWSであることは踏まえておきたいと話しあいました。

そこで今回は、滅多に顔を合わせる事のない二人で、切り口を少しサイズアップして、社会システムというものをまな板の上にあげる事にしました。この切り口での入門です。これには団の意向が強く作用しています。東は「なんでもええですわ！」と言いました。

実は今回の学会では、別のスペースで家族マンガ展が開催されていますし、学会誌には映画の連載を10年も続けています。私のやりたい放題みたいですがご容赦いただいて、そんな素材も使って、(1)団が語り東が問う、(2)東が語り団が問う(3)参加者が小グループになって、自分の周りの社会システムの課題を語り、二人の話を受けて介入を話しあってみる、という時間配分を考えました。

果たしてこれが面白くなるのか、期待はずれになるのか、責任は持ちかねます。面白くなればいいなあとは思っていますが、どうなるかはライブですから、参加者の皆さんと大いなる方の御心のままです。

(文責 団士郎)

システムは部分が全体と連動している。始まりと終わりは直線的に因果で結ばれたりはしていない。「風が吹いたら桶屋が儲かる」、これを因果論的に説明したものは落語にはなっても、合理科学にはならない。しかし現実には、そういうことが多々ある。

この連載を書き始めるに当たって、構成をどうするかについては随分思案した。そしてたどり着いたのは、システムについての文章を書くのに、全体を計画性、必然性で貫いた構成を考えるのはシステム論的ではないということだった。そして、これがシステム論か？という批判も又、システム論的ではないと思う。

どこから、なにから書き始めても、私の考える社会システムの一相面であるに決まっている。小さな出来事が結果的に全体システムを引っ張ることになっていたりするのは周知のことである。書き連ねていく内に、その文章がそこにあるシステムを照らし出し、少し動かしてくれる。そんなことになれば嬉しいが、そうなるかどうかは分からない。

システム論

社会システムを考えること、それに小さな変化を処方することはそれ程難しいことではない。もう少し厳密に言えば、「ひとつ追加」はそう困難ではないと考えてきた。

一方、世の中も人もそう簡単には変わらないこともまた承知している。私はこの兼ね合いについて、こんな整理をしている。

客観的に事実をとらえれば、あらゆる事が日々変化している。時と共の緩やかな変化には、人は意外なほど従順だ。しかしそこには、現象的事実と感情的事実が横たわっているようだ。

こんな例をあげると分かりやすいだろうか、それともかえってややこしくなるだろうか。

バンジージャンプの台の上で飛ぶのをためらっているのは感情以外のなにものでもない。身体現象の事実としては、誰であろうと押されれば落ちてしまう。そして落ちて死ぬことはまずない(多分)。「死ぬほど怖かった、二度とやらない」という感想は当然だろう。でも、突き落とされるのに、勇気も決断力も要りはない。

だがこれを「意志に基づいて飛び出す」という話にすると、ややこしくなる。無理してそんなことをするのに意味があるのかとか、トラウマになる、悪影響だなどと言い始めると議論ばかりが長引いて、聞きかじりの説明世界の虜になる。そんな一つ一つの説明概念をドンドン採用して自分を固めてしまうのが好きな人は、そうしか生きようがないのかもしれない。

だが、水に飛び込んだら助かったものを、高所恐怖症だから飛び込めなくて、ベランダで火の手に飲み込まれて亡くなった、などというシチュエーションを、もつともだなどと共感する理由が分からない。

その人の命を守るのが第一だと考える時には、気持ちや意見など聞かないことだ。無論、命より意見や感情が大事だと考える人の自由は認めたらよい。その上で、圧倒的多数の人々は、意見よりも結果に支配されるところが大きいことを、もつと真摯に受け止めねばならない。

映画「明日に向かって撃て！」で、ブッチ・キャシディとサンダンス・キッドは追い詰められた崖から、手に手を取って谷に飛び込む。その時一方は「俺、カナヅチなんだ！」と告白している。

社会の仕組みの変化を阻止しているのは多くの場合、人の主観的どころというものである。人のところが人の世を、困難から脱却できにくくしている。無論私とて、これが分からないわけではない。愚かしいとも思うが、人間とはそういうものである。そして、愚にもつかない説明が巷に溢れる。

しかし一方で、だから人生は楽しく豊かなのではないかと語られると、そういうところがあるのを否定できない。全くもお哀しくも愛おしい人間よ！といった気持ちになる。

そんな既成の勢力バランスに変化を挑もうとするようなことを言うのは、まさに「螻蛄の斧」だ。イメージは巨大風車に突撃するドンキホーテ。

クールに見通すなら、一矢報いることくらいは出来るだろうが、それを社会が継続するのは難

しいだろう。

スマホや車、酒やコカイン、宗教などのように、大多数の人々を魅了して離さないような吸引力を持つ装置でない限り、マイナーなチャレンジは社会システム全体の中では敗北を続けるしかないだろう。つまり、元の木阿弥は残念だが折り込み済みの未来である。

それでも一時、場所や関係や面子を限定したところでは、少々の改革は可能だ。大変化はなかなか生じないが、小変化に意味がないわけではない。その小変化が思いがけないところでの新たな変化のきっかけになる場合も少なくない。

何故こんな事になったのか、誰も分からなくなってしまった頃に、従来には考えられなかった事態が生まれることもありうる。システム論者はそのように考えるから、そこに向けての試みも空しくはない。

その上で、そう簡単に既存の社会システムが変化するとは思っていないことは、やはり明らかにしておきたい。

具体的実践

対象へのアプローチと変化を、今いる場所で論理的に考えることそのものが、既存のシステムに対して、因果論的な絡め取られ方を避けられないのは覚悟しておかないといけない。私達が状況から独立して、何かを考える事など不可能である。



最近のことから書き始める。2016年3月、奈良県広陵町で団士郎家族マンガ展が開催された。きっかけは、地元出身の社会人大学院生Nさんである。

彼女は教員として働きながら子育てをし、定年退職を迎えた。そして大学院で学ぶ選択をしていた。

地元中学校で長年教職にあった彼女は、今後は地域の子育て支援に何か貢献できることをしたいと語っていた。そして入学初期には、修論構想のステップとして、あちこちの子育てサークルや、先進的保育実践などの調査を始めていた。

こういう関心や調査を、よくあるものだと言ってしまうと身も蓋もないが、実際そう言える面もある。時代の必然を踏まえているということは、既に多くの試みが発見されてきたフィールドなのである。それにも関わらず、相変わらずテーマとして登場するのは、実際にはなかなか成果への道筋の見えにくい事であることも示していた。

そしてその後、出会うことになった地域に暮らし、老いていく老女達の地域ネットワークの姿に焦点を当てた「観音堂に集う女達」と題した修士

論文を書き上げた。そこには、土地の上に「人の記憶」によって刻まれた、地域の歴史があった。

家族応援プロジェクト

2011年3月11日の東日本大震災・津波被災は、日本社会に甚大な影響をもたらし、今に至っている。立命館大学大学院応用人間科学研究科では、京都という遠隔地から、被災地に向けて出来る発信はないだろうかと考え、実現に結びつけて今に至る事業がある。それが東日本家族応援(十年)プロジェクトである。

これは東北被災地の街で1~4週間、家族パネル漫画展を2011年から2020年の10年間、継続的に毎年行う。そして週末には出向いていて、子育て支援者や被災地住民向けの、対人援助実践プログラムを開催するものである。

直ぐに効果の出るようなモノではないが、大震災という大きな物語に取り込まれてしまった個々人の小さな物語(思い出)を、別の場所、別の時代に生きた家族の物語に触れることを通じて取り戻すことを意図した。そして時と共に起きる身勝手な世間の風化を防ぐ、細く長くの支援を考えてきた。(詳しくは、本誌連載中の村本邦子「東日本家族応援プロジェクト」を参照)

広陵町マンガ展

Nさんは院生として、このプロジェクトに参加していた。これが卒業後、地元でマンガ展を開くことに繋がっていった。

広陵町での実施ということになると、これは被災者支援ではない。幅広い、子育て渦中の親御さんへの支えにならなくてはならない。

今、子育て支援プログラムは、全国各地で、恐らく想像を絶するほどの数、実施されているに違いない。ここでその効果や成果をあれこれ言えるほど、実態は知らないが、私達の社会が持っているメニューは、典型的で、いかにもやりましたとアピールするだけの短命なモノに陥りやすい。

待機児童問題が未だに課題になる社会が、

同時に少子化時代でもあるという、笑ってしまうような矛盾。

そのひとつひとつがどうこうではなく、そこにある隔靴搔痒感を一步脱することが出来ないまま、様々な対策は長い時を経てきたように思う。子ども虐待対策にどれほどの専門家と予算を動員してきただろう。そしてその結果を、私達は現実として引き受けている。

そんなところで、一筋の光明を見た気がする出来事を経験したので、ここに書いてみることにした。

子育て支援プログラム

「地域の子育て」という単語を、流通しやすい文言として使ったところで、従来の歩みから一歩も踏み出すことは出来ないだろう。

広陵町はNさんが生まれ、育ち、家族を設け、子育てをした場所である。そして同時に、教員として40年勤め上げた土地でもある。そこにはその年数だけの教え子が居て、巣立っていった。

これは全国各地、特に地方の街にはきつと、同じ状況が存在しているだろう。そして今までも、その退職者の人柄や意志による取り組みは、行われた経過があるにちがいない。

例えば家裁の調停委員として、退職教員が関わる事も多いと聞いた。それが近年、減ってきているという話。何が変化してきているのか、考えてみる必要があるだろう。

教員であったことを資源に、地域の子どもの学力保障、支援にボランティアの私塾のような取り組みをする人もあると聞く。

教員退職者のための天下り対策だとの指摘もある学校相談員(いろんな呼び名があるようだが)。主に退職校長の再任用職になっているものは、たしかに、子どものことや、子育て中の親のことを考えて作られているとは言えない。

そんな町のひとつ広陵町で、子育て支援の取り組み(児童虐待防止も念頭に)として、家族マンガ展と講演会を開催した。展示作品は5話(展示パネル数21枚)で会期は2週間。

この間、会場受付にはNさんがずっと詰める。これは、東北各地で開催継続中の方式と基本的に同じである。

漫画パネル展ギャラリーは作品を鑑賞して貰う場であると同時に、そこにこめられたメッセージを噛みしめ、しばし佇む場所でもある。

東北被災地では、たまたま来場された方が、会場に詰めているスタッフ(大学院生)に、作品の話題に重ねながら、被災体験を語り始めることが時々あった。

家族の物語に溢れた会場が、自分の物語を語り始める場になる。東北の場合は被災と不可分な自らの家族物語が語り出されるきっかけの場になった。

しかし広陵町にそんなシビアな経過は存在しないから、ごく一般的なイベントとしてのマンガ展の来客が私の目には浮かんでいた。

何が起きたのか

そして実際に開催された場で起きたことは、振り返れば、納得のいくことであるが、恐らくこんな事は今まで考えたことがなかったらと思うことだった。

会場を図書館ロビースペースに設営していた。これは、むつ市、多賀城市と同様である。日常生活の一部なのであろう、いつものように図書の返却に訪れた女性は、Nさんの教え子だった。地元開催である。意図せざる、しかし必然性の高い再会であった。

企画された中学卒業二〇周年同窓会などで久しぶりに元教師と元生徒が会うのとは違った、驚きを伴った邂逅だった。

そこには、学校時代の序列の匂いの漂わない、偶発的喜びがあった。同窓会ならクラスメートとの話に夢中で、話しかけなかったかもしれない元生徒が、「先生！」と話しかけた。

マンガ展の受付テーブル付近は、溢れる過去と現在が交錯する時間になっていった。偶然の出会いを受けて来訪者は昔を語り、現在の子育てを語り、家族を語った。

展示会場は融通性の高い空間である。長時間居たとしても迷惑がかかるわけではない。子どもがウロウロしても、大声で騒がなければ了解される安全な図書館の一隅である。

そこでは

マンガ展は二週間、継続開催されていたから、連日のように訪れる人もいた。夫を連れてきたり、地元で暮らす親を誘って再訪したりと、さすが地域社会と思わせる動員の多様さである。そしてこれらを支えたのは、Nさんの教員としての長い蓄積だった。この要素が一般的な展覧会とはおおく異なった空間を作った。

今日社会の定年退職者の現状を考えてみよう。ことに豊かな老後を約束された教員、公務員、大企業リタイア組は、文字通り仕事を離れ、悠々自適の生活である。

しかし、実際は多くの高齢者が厳しい老後を迎えざるを得ない現状にあるとNHKスペシャルでは報道され続けている。四分の一くらいの富裕高齢者を除けば、後はなかなか厳しい高齢化社会の到来だと言えるようだ。

ここではその問題は置くとして、ゆとりがあると言われている安定した高齢者に焦点を当てたい。

なにがしかの専門的知見を蓄えて、永年のキャリアを積み上げた団塊世代とその上世代。この人達を、欧米型のリタイアのまねごと消費者へと誘うのは何故なのだろう？

Nさんは間もなく年金暮らしの地元出身者である。地元には今、子育て真っ直中のかつての教え子達がたくさんいる。そこには夫のDVに悩む妻や、児童虐待と通報されそうなギリギリの孤独な子育て営むお母さん達もあるだろう。

その人達の一部とでも、Nさんがこの図書館ロビーで遭遇していたら、ひょっとして、子育て支援や、児童虐待の予防機能が果たせていたのではないかと想像したのだが、いかがなものだろう。

私達は、何かが起きてから騒ぎ立てるのに慣れすぎている。そして、何かを予防する話をし始めると皆、過激派になる。

「それで、ゼロになるのか！」と言うのだ。何であろうと「ゼロ」を目指す等というのは過激派の主張でしかない。

システム論者は、過去にあって、今もあるものは、未来もなくなることはないと考える。しかし、だからしょうがないのではなく、1000あるもの

なら800にならないか。500にするには、どうすればいいだろうと考える。

子育て支援

地域の子育て支援を、予防の視点から考えてみたとき、その対応資源として、地元の退職教員、公務員に担ってもらうのは理に適ったことではないかと考えるが、いかがなものだろう。

私たちの社会は、個人を強調しすぎたあまり、地域ネットワークを失った。そして縁もゆかりもない場所に戸建てを建てて、上手くいく時だけ、上手くやった者だけが暮らせる生活に舵を切った。

しかし人の暮らしは決して、個人主義で完結してしまえるほどすっきりはしていない。誰かの世話にならずに一生を全うするのは難しい。つまり、お互い様の一翼は担わねばならないということである。

だからといって、いきなり私達の暮らしにホームパーティや、教会での日曜礼拝を持ち込めるわけがない。だから、リタイア後の悠々自適生活の欧米型デザインも合っていないのである。

私達のこの狭い国では、お互いが姿の見えるところで時を経て、役割交代をしながら、お互い様生活のデザインを刷新していくしかないのではないか。そのヒントが今回の広陵町マンガ展会場に見て取れるのではないだろうか。

漫画 木陰の物語



二人が育つたのは急速に過疎化するすずんだ田舎。



成績優秀な加奈子は都市部の名門校に進み、高校時代から下宿暮らし。



どちらか言うとできない方だった佐織は地元の商業高校に入学。



三年後、加奈子は希望の大学に合格し、東京に出た。



過疎の鳥々を
つないで
架けられた橋と



誰もが車を
運転する
ようになった
時代の恩恵。



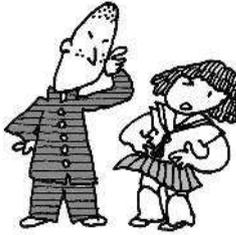
下の子は近所の
お婆ちゃん達が、
こぞって
子守してくれる。



若者流出が
著しい地域で、
彼女たち夫婦は
希望の星。



佐織は同級生と恋愛し
程なく妊娠。



卒業後直ぐ、
大きなお腹で
できちゃった結婚。



二人目を二十歳で産んで
今では二児の母。



娘の小学校入学を
きつかけに、昔の夢を
叶えたいと思い、
美容師学校に
通い始めた。





建築現場で働く夫も、
周りの人たちから
息子のようによくして貰っている。



故郷の両親からは、
「やっと仕事が終わる」
と安堵の音が届く。



一方、加奈子はこの春、
大学院を卒業する。



親がそう思うのは
当然だろうから、
加奈子は
何も言わない。

希望する
専門職の
採用通知は
なかなか
届かない。



しかし実際は、
卒業すれば早速、
奨学金の
返済も始まる。



卒業年度の
景気による
運、不運も
噛みしめる
日々だ。



今年

でも、何の経験もない専門職希望の
新人に、仕事の口はそんなにない。



まだ何も始まっていない。



児童心理を
学んだ私が
母になれるのは、
いつたい
何時の事だろう。



これから
どうなるだろう...



と思いながら、希望一杯だった
高校合格の日のことを
思い出すという。



恋愛も結婚もそれからのことだ。

経験を積んで、正規雇用され、
生活が安定するのは
何時のこと
だろうと思う。



先ずは自立した
経済生活の為に
とにかく仕事！

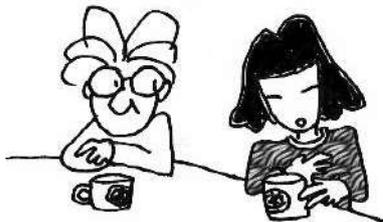


自分は努力して
やっと専門職の
卵になったが





気がつく、
夜空に向かって
そんな決意を
繰り返して
るんです…
と苦笑い
しながら語った。



これは10年ほど前、私のところの大学院生が修論のために調査した極めて個人的体験に近い事実である。

ここに私達は、日本の偏差値教育が形成している非社会性を読み取ることが出来るだろう。地元生活の彼女と、院生の彼女がそれぞれ、自

分の意志的選択として今を選び取っているならば、何も言うことはない。

だが現実社会がそうではないことは誰もが知っている。教師も生徒も親も、みんなで予備校が算出した偏差値に振り回されている。

このマンガのように、誰かの未来の可能性、可塑性を承知した制度になっていないことを考え、変化を作りだす力が弱い。煽って作り上げた偏差値ピラミッド体制が、ちっとも人々を幸せにしていないにも関わらず、変わるつもりがない人も少なくない。

予備校企業は少子化対策として、他業転出を熱心に画策しているし、学舎の転売も実行している。それなのに他人事だと考えているとしか思えない教員だけが今も、過去の民間受験業者の設定したルールに載っかって指導している。

この作品は、今日社会の有する実態に目を向け、そこに形成されているシステムに焦点を当てている。そして小さくても良いから変化の芽を探ろうとした。

現実

敗者のルール、失敗のメカニズムは、しばらくすると上手く行かなくなってしまう勝者のメカニズムよりも可能性を秘めていることがある。

非常勤専門職として次年度の契約がどうなるか不安を抱えながらスタートしたスクールカウンセラーの彼女。一方、地元でいつか自分の美容院を開設！と魂胆しつつ、修行勤務をしながら、子ども達の成長を見守るお母さん。もうどちらかが、どちらかに優越感を持ったり、劣等感を感じたりする必要もないだろう。

私達をもっと、我々の持つ現実に確かな目を向けなければならぬ。偏差値教育のもたらした志の低さを自戒すべきである。

昔、ドイツのマイスターは名誉ある職であり、わが子を継がせるに値する選択肢であった。ところが誰もが高等教育を受けられる社会になり、職人を目指したりするのは、学力がそれ程高くない者たちという世界的風潮を受けて、学力の高い子ども達を育てた職人(親)は、自分の子に

高等教育を受けさせたがった。そして出来の良い子達は皆大学に行き、職人にはならなかった。その結果、マイスターに至る職業選択をする者の社会的価値が低められた。

大学を出てホワイトカラーのサラリーマンになった者が皆、良き社会人として、この世界を支えたわけではないのを、私達は知っている。

更にそれに留まらず、例えば米国で医師になる教育を受けた優秀な人々が雇われる保険会社。そこでの仕事は、医療保険の給付額をいかに抑えるか、患者の治療費を削るために医者としての知識を駆使する。そして一人の患者も治療せず、時には治療の選択肢を奪うことで、自身は莫大な給与を得る。

能力や技術が、己の経済生活を支えるだけの手段になった。

ドイツの職人世界の衰退、劣化が進んだ。同様のことが戦後の日本社会でも起きた。近年、調理師を初め、伝統工芸職など、職人世界への回帰が散見される。とても良いことだと思うが、自認インテリ親は相変わらず、わが子がそうなることをまだためらっている。一般論としては賛成だが、わが子がそうすることには賛同できない。こういうメンタリティが社会を変革することを妨げ、既得権の世代伝達に向かわせる。

おわりに

大雑把だが、こんな歴史経過が過去にあった。我々の世界は、こういう馬鹿げたことを、繰り返すシステムなのだということは承知しておくことだ。

さて、地元に残った彼女のこれからの人生は、どのように展開してゆくだろう。この経過だから美容師の彼女は幸せになり、SCになった彼女は不安定雇用のまま、幸せにはなりませんでした、などと語るのもまた愚にもつかない因果論である。

結婚した人は離婚の可能性を、健康な人は病気の可能性を、生き物を育てている人は、その中に僅かな死の可能性を秘めると考えるのが、システムを分かった人間である。

こういう相対化が成立したところで、今後の私達の社会システムの構築デザインに目を向ける

のがシステム論者の責務であろうと考えている。

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第2回

『対人援助学マガジン』の発行

団 士郎

なぜ、「次の一步」なのか。

仕事にはたくさんの人達が関わっている。誰が一番上手か、どれが一番効率的か等、気になる人も多いが実際はそんなことを競っているのではない。

あらゆる仕事には、それが成り立つ経過があり、現状という名の到達点がある。現状は決してないがしろにされるようなものではない。そこにたどり着くのに様々な試行錯誤、工夫や努力が重ねられているのが圧倒的である。

しかしここが最終到達点であるはずはなく、「現状」という名の課題含みの状態である。だから今を生きる者にとっての課題は、「次の一步」なのである。

今、私が身近に感じてきた業界(児童相談所)で、少なからず働く者が離職、退職する現実がある。現状の厳しさに身体的にも精神的にも音を上げて、撤退するのである。新しく参入した人達は本来、先ず現状の正しい理解を自分のものにし、その後、次の一步に踏み出すための思索を行う。これが進歩の道筋である。

ところがこれが起きずに、次々人が異動していったり、現任者が退職の道を選択するような事態に陥っている。こんな事では業界そのものが亡びてしまうだろう。

さらに、そういう現実を知った若い人達は、その業界を目指さなくなる。あるところでは、正規採用の公務員の募集に、応募がないという信じがたい事態が起きている。ここに、業態現状の毒性が社会に浸みだしてしまっているのを感じる。

実際は、各府県が同じ状況ではないのだから、改善の余地は限りなくあるのだが、世論という風評への迎合と、組織の自己防衛によって、人材の参入を妨げてしまっている。貧すりゃ鈍するの言葉通り、長時間かかって出現した事態を、速攻の浅知恵で片付けようなどと、経験の浅い使い捨て非正規専門職でしのごうとしたりする。

ここにあるのは根本的な不真面目、不誠実である。いくらスローガンとして子どもの権利を語ろうと、福祉を声高に叫ぼうと、手段化されたところに落ち着きのないものは皆、ポロが出て瓦解する。

簡単なことではない。だからこそ、遠回りだと言われようと、地道な取り組みを続けるしかない。肩書きは管理職だが、短期決算のつじつま合わせしかできない経営者が会社にとって害毒であるように、行政システムに、そんな管理職しか出てこないようでは、それこそポピュリズムの公務員バッシングに、何も反論できないことになってしまう。

「次の一步」の確認と着手こそが、次世代の為の未来を切り開く道づくりなのだと思うのだが・・・。

第二回目の切り口は、この「対人援助学マガジン」である。第26号の現在を、社会システム変化への提案の一つとして解説してみる。

はじめに

対人援助学マガジンとは何モノなのか。その中味ではなく、形式が持つ意味を探る文章から書いてみる。

バックナンバーをいつでも読めるようにしてあるマガジンだから、創刊の思いについては、検索すれば読者はいつでも創刊号編集後記を読むことが出来る。

それ自体、初期の意図にあったことだから、2010年6月創刊を振り返りながら、「マガジン」によせた社会システム変化への思いを書いてみる。

以下、「赤文字」は創刊号編集後記から

学会スタート以前

2009年秋に発足した学会ですが、その前、二年余り、京都キャンパスプラザで月例の「対人援助学会準備会」を開催していました。

ここには毎月、ヒューマンサービス分野のいろいろな人にゲストスピーカーとして来ていただきました。そこで見えてきた地域社会のディテールの構築性をとても興味深く思っていました。マガジンでは、そこを更に掘り下げたものが生まれると良いと思っています。月例会も又、再開したいと準備中です。お楽しみに。

現在、この会合は年四回ペースで、マガジン執筆者でもある「千葉晃央」、「中島弘美」が世話人になって継続中である。

創刊

会員112名(2010/5/25現在)の小学会ではありますが、技術革新の恩恵を受けて、こんな形の雑誌が出せることになりました。まず連載を引き受けて下さり、締め切り日に原稿がいただいた執筆者の方々に感謝します。

ご覧の通り、様々なジャンルからの多彩(多才)な顔ぶれによる一冊に仕上がりました。まだまだ展開途上(完成形は全く考えていないので、ずっと展開途上誌です)ですので、学会員のみならず、読

んでくださった方々から、幅広く感想やご意見を伺いたいと思っています。

編集長メールアドレス

danufufu@osk.3web.ne.jp

また、新規連載参入の意思表示もお受けしたいと思います。編集者として採否判断はさせていただきますが、多領域から広く捉えた「対人援助学」の花が咲き乱れるといいと思っています。

季刊誌の位置づけです。創刊第二号は三ヶ月後、9月中旬発行予定です。したがって8月末が原稿締め切りになります。連載を開始された方々、心に留めておいてください。

創刊号は執筆者20名、全78頁のスタートだった。数頁のニュースレターのイメージからいきなり雑誌だったから、最初からなかなかのボリュームだったと思う。

それが現在7年目、2016年6月発行の通巻25号では、執筆者42名、全256頁に成長している。編集長としてはますます増ページの一途をたどれば良いと思っている。

ご承知の方も多いと思うが、この間、連載者による書籍刊行も複数生まれた。更に、対人援助学マガジンが舞台になって、いろいろな活動が花開いていっている。

それは連載を読んだ未知の読者の所から講演依頼やシンポジスト依頼がくるとか、連載記事を参考資料に指定して、講座の事前学習を求める。近接領域の研究者との交流が、新たに生まれる等である。

これらはいずれも、創刊時に意図したマガジンの役割である。偶然ではなく、こういう流れになっていくことを願って継続してきたのである。

プランド・ハプスタンスのことは中村正さんが連載で触れていた気がするが、私がマガジン創刊にこめた思いは全くそれである。

意図された準備と継続が、直線的因果として、何かをもたらすと考えているわけではない。むしろそれが、どんな幸運や出会いを誘ってくるかは決められない。しかし、必ず何か事前には予測できなかったモノがもたらされるに違いないのだ。

それは社会システムが常に流動、変化しているからである。私達の頭の中は、なかなか変

化しない。そこで立てるプランだから、当然のように硬直化するのである。動いているのは「社会」なのである。

マガジンへ

思いつきは瞬間でした。ニュースレター編集担当の千葉君と話している最中、最初に考えていた印刷物のNLから大きく展開してしまいました。そのことで負担は増えましたが、楽しみも増えました。この着想から考えはじめたら、話題の Free のことや、iPad がとてもしっくり来ました。

「Free」は文字通りタダと言うことである。クリス・アンダーソンの本が話題になった。無料であることでビジネスがどう成立するのかとか、どの業界にあらうと、「無料」との戦いは避けられないなど、刺激的な言葉が並んだ本だ。

「対人援助学マガジン」のコンセプトが、これにとても親和的なのが面白い。自分たちの着手したことが、世界の潮流と重なっていることに納得である。

でもこれは誰かが考え出した理論的なアイデアではなく、今の時代に整備されたインフラを駆使すれば当然、行き着くところである。

共時性(シンクロシティ)などということをよく言うが、この流れはインフラの整備状況と連動した必然であって、誰か固有のオリジナルアイデアではない。

事態が展開していくところに、さしたるオリジナリティがあるとは思わないが、そうなっていかないところには、頑固な現状維持への無意識の欲望がある。それこそ流動的システムではなく、事実をものともしない個人の頑迷な主張である。

社会のインフラは、あきれるほど日進月歩している。しかし現実の社会では、その手段が十分に生かしているとは思えない。道具は生かした使い方をしてこそその道具であって、道具愛が目的になってしまっているような人や話題には関心が持てない。

カラー写真も含む雑誌だというのは、総ページ数も印刷費も発送コストも考えなくていいのです。バックナンバーの在庫管理も、売れ行きも、収支決算も要らない刊行物になりました。

表紙のデザインや基本レイアウトのことを、あれこれ楽しみに考えているだけでした。校正が緩いかもしれないのはお許し下さい。まあ、素人ですから。

「学会誌」(本マガジンとは別です)を完全にWEB上の発行にしようと言っていた望月さん、サウさんの意図がやっと理解できました。

私は、学会誌、査読、論文掲載、業績という枠組みの面倒くささを避けていたい人間なので、そちらとは離れたところからエールを送ることにした。そして、このマガジンの発展が私の背負える学会のための、いやいや対人援助世界への貢献だと考えた。

ところで、世の中は、ますます短く、簡潔なものへの指向を強くしています。私の愛読誌「月刊クーリエ JAPON」も何度かのリニューアルを繰り返し、どんどん記事は短いコラム誌のように変身しています。

そんな中だからこそ、長く書かなければ伝わらないこともあるのだというマガジンにしたいと思いました。

専門的ではあるが、読者対象に排他的姿勢をとらない。どなたにも「今、私達の時代のヒューマンサービス世界では・・・」とお伝えできるもの満載になったのではないかと考えています。

雑誌(印刷物)として手にするのが馴染む方は、ご自身でプリントアウトして、ファイルしておいていただくと、雑誌らしさが出るかもしれません。(その場合、出来ればカラー印刷で)。

今後の課題は、会員を増やすための宣材として考えていたニュースレターの役割問題です。無料で誰でも読めるマガジンにしてしまったら、入会するメリットがないという意見。

私も長年そう思ってきましたが、ネット上の無料ソフト開発者のモチベーションの在り方のことを考えると、この思い込みはオールド世代のビジネスモデル発想かなと思うようになりました。

新しい学会を作った目的に見合う活動は何なのか。そこに向けてどう行動すべきなのかが問われています。

こんな事を書いている内にも時代はドンドン進み、今クーリエjaponは、完全 Web 雑誌になった。講談社という大手出版社の発行する、元は紙で刊行されていた月刊誌が、完全 Web 化される時代な

のである。

「調査報道」という言葉も時々聞く。取材をし、裏を取って、時間をかけた長文の記事に仕上がる。しかしそのようなモノを掲載する紙面、誌面はもはや紙媒体には残されていない。大衆は誰も読まないし、そんなモノが掲載された雑誌や新聞を購読しない。

その結果、短文のコラムのようなモノばかりが掲載される。「調査報道」はこれに対するジャーナリストの主張である。

近年目に付く、「この記事はデジタル版で」とかいうのは、そんな長文の掲載可能性が、そこにあるからだ。

分かりにくい現実や、巧妙に画策された悪事は、単純の露見することはない。隠蔽をかいくぐって真実に近づくジャーナリストの努力なしには、事実への接近すらあり得ない。

政府の発表や広報のデータを貰って、そのまま記事を書く記者など、書記以下だろう。調査報道はジャーナリズムに不可欠だが、取材費が出ない、コストに見合うインカムがないというので、簡単お手軽でキャッチーなゴシップが大衆版ニュース紙面を占める。

執筆者

雑誌の基本コンセプトが出来ると私の回りで、様々な対人援助世界で活動する人に、執筆を呼びかけてみたくなりました。

「出来るだけ自由に、何でもいから書いてください。ただし連載です。最低でも一年、できればそれ以上延々と。季刊発行ですので、年4回。最低でも2頁、出来ればもっと長く」、こう書きました。

長く書いて下さいということは、その方の世界の一部分がある程度の深さをもって提供されることを求めています。業界の専門用語や慣用概念で解説をして終了なんて原稿は登場する余地の少ないことになりました。

この要望に応えるものを書くためには、それなりのキャリアも必要かもしれません。でも、年配の人にしか書けないというものでもありません。いろんな年代の、いろんなジャンルの経験智が集まるといいと思っていました。

また、一分野から一本というコントロールをかけるのではなく、似通った実践が出てくるのも容認しようと思っています。細部に神宿るといいます。そんなディテールの差異こそが私たちが見るべきものなの

かもしれません。

もっとも冗長がすぎれば読み手はうんざりして離れてしまうだろう事も戒めに、筆者、編集者共に、この営みを開始します。（編集長 団士郎）

このあとがきを書いてから7年経った。自分への約束通り、遅れも欠番もなく7年目の今号、通巻26号が出せている。

私達はこの世界に居るために、なにがしかの使命を持って配置されている（と、私は思う）。今いる場所は偶然のようで、偶然ではない。そこに至る道程を振り返ると、必然が見えてくるに違いない。七十才に近づいたから言うことかもしれないが、それこそ私達が自分を生きてゆく意味だろうと思う。

自著が出るまで

「いま、人間として」

これは10号で休刊になった雑誌の名前だ。そしてこの雑誌を通じて私は、読者から書く側への道筋が切り開かれたと思っている。

漫画は小学校高学年から描いていて、大学4年の時、ひよんなことから産経新聞で一コマ漫画の連載が開始した。しかし文章を書こうと思ったことはなかった。

読書は随分遅くに身についた習慣で、好きになってはいたが、文章が書きたいとも、書けるとも思ったことはなかった。児童、生徒時代を振り返っても、作文が得意であったとか、読書感想文が優れていたなどという記憶はない。むしろ、「女子は何であんないろいろなことを考えるんだ？」と作文のたびに思っていた。

読書傾向として、漫画家目線の影響かジャーナリスティックなものは好みだった。筑摩書房刊「終末から」は書店で、印象的な味戸ミトが描くイラストの表紙を眺めるくらいで、好みの範疇から少しはずれていた。1973年に創刊され隔月官で9号、1974年10月に終巻を迎えた。大衆雑誌ではない。読者層は明らかにあの頃のインテリ層だった。

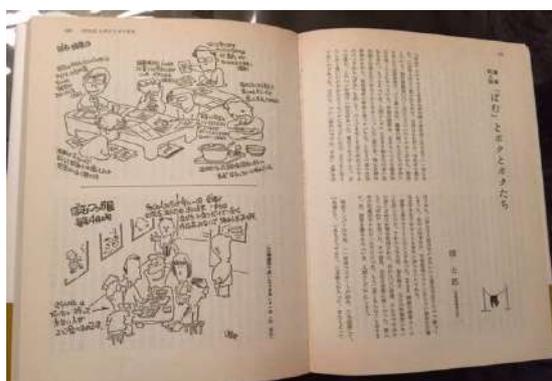
この編集長をしていたのが原田奈翁雄という人で、私は知らなかったが業界では有名な人らしい。

その人が筑摩書房を退職して立ちあげた出版社が径(こみち)書房。そこから刊行された季刊誌が「いま、人間として」である。創刊号の前に、準備号が刊行され、京都府福知山市に住んで、舞鶴市まで通勤していた私は、書店で見つて購入していた。

当時そんな動機が高まっていたこともあって、愛読者カードに漫画と文章を絡ませた感想を送っていた。これはずっと愛読していた月刊「話の特集」誌にも同様で、手書き文字、漫画付きの愛読者カードは、そのまま読者欄に載った。

そんなある日、径書房編集部からの封書を受け取った。それは編集長から、第二号で特集するテーマ「つきあい」に寄稿してくれないかというものだった。驚き、喜び、そして不安が同時に起きた。既に漫画家としては原稿料も貰っていたが、文章でその経験はない。

そんな不安を支えてくれたのは、漫画だった。大きくイラストを添えて、仲間内のことを描けばよいと思うことにした。



業務レポート

児童相談所で心理職として働いている頃、自分たちの仕事を世の中に報告することも、仕事の一つだと思っていた。一般にはプライバシー保護の意見が大勢を占めていたが、私はそういう言い草は怠け者に属することだと思っていた。給料を貰って仕事をしていながら、その結果、効果について、誰からも吟味されない仕事など発展するはずがないと思っていた。

無論、冊子を作ったりするのが好きだったこともある。しかし、それを個人的楽しみにするつもりは余りなかった。漫画家であったことも影響しているかもしれないが、文学(文藝)志向はなかった。文字にするのはもっぱら、仕事の中味、現状であった。

それは最初、職場レポートとして形になった。毎年一冊、児相レポートを発行し始めたのは1980年代のことだった。既に他児相でも研究紀要や事例集は発行されていた。厚生省(当時)も全国の児相に募って「事例集」を発行していた。京都府からも何度か執筆した。しかしそこに共通した執筆者の偏りがあるのが気になって仕方なかった。



当時、心理職は公務員の中ではやや専門家気取りなところがあって、その人達が論文紛いの執筆をしている印象が拭えなかった。当然、一般行政職から児童福祉司になっている人達はなかなか手を出さなかった。

私はそういうやり方をよしとは思わなかったので、児童相談現場の一年間のレポートとして、全員執筆に拘って出しつづけた。



四人囃子

こういう動きとは別に、京都府北部の二カ所の児相で働いていた中年男性4人で、もっと自由に何でも書けるミニコミを出して遊んでいた。それが「四人囃子」。結構な号数を重ねた。まだゼロックスは高いから青焼きコピーで、という時代だった。

今の人からみたら、児相が気楽な良い時代だったのだと思うに違いない。確かに結果はそうだった。そしてそこに仕事の厚味も人材も生まれた。

現状の大変さが、何を生み出し、誰を助けることが出来ているのか。ここは考えどころだと思う。



心理テストカンファレンス

月に一度、京都府の心理職全員が出張で集まって合同カンファレンスを開いていた。その成果をまとめる必要を唱えて、心理職従事者向け

の「心理テストカンファレンス」を発行した。そこで出た意見や検討経過をまとめて、10頁程の冊子にまとめた。

これは事例提供者順で月刊発行にした。出来上がったものには、ローデーターも含まれていたのので、関係者、研究者、諸先輩だけに通しナンバーを入れて郵送した。

業界の著名な先生方、大学関係者から礼状や、お褒めの言葉、カンパをいただいたりもした。

家族の居心地

これはミネルヴァ書房から出た、私（達）にとっての最初の本のシリーズタイトルだ。背表紙を見てもらいたい。5人の執筆者の名前が狭いところにひしめいている。こういう表示にして欲しいと言ったとき、編集者は「字が小さくなって見づらいし、ゴチャゴチャする」と反対した。

しかし私は最初から、本を棚に入れた時に読めるところに5人の名前が必須だと主張した。それが職場の同僚と本を出す目的だったからだ。そしてそのように造本して貰った。



それから三十年経って、今、amazon

で検索して貰うとそれぞれの沢山の著書が登場する。でも、背表紙にクレジットされたのは、みんなこれが初めてだった。

将来、どうなるかは分からないが、そうなればいいなと思って、その時できる一歩を踏み出しておく私のスタイルの原点がここにある。そしてそれぞれの本が今、複数冊、刊行されて書店に並んでいる。

この本の刊行年1991年に京都府児童相談所の心理職だった背表紙の5人は2016年、以下のような肩書きでこの世界に居る。

川崎二三彦

子どもの虹研修センター理事長

早樫一男

同志社大学教授をへて、児童養護施設「大和の家」施設長

川畑隆

京都学園大学教授

柴田長生

京都文教大学教授

団士郎

立命館大学大学院教授

こんな結果になった理由の一部が、この背表紙だと思うのだ。私はそういう考え方をし、今日まで様々なことと関わってきた。この関わり方が社会システムへの小さな介入だと信じて。

*

この後、私は季刊「発達」（ミネルヴァ書房）において、十数年の長きにわたって「家族パスワード」と題する、家族心理臨床系の4頁の連載を行うことになる。

そしてそれをまとめたものが二冊の文春新書「不登校の解法」「家族力×相談力」になって刊行された。残念ながら今では二冊とも絶版だが。

そもそも

そもそも公務員5人組が最初に、ミネルヴァ書房から本を出すことになったのには、こんな経緯がある。季刊「発達」の特集原稿が何かの事情で落ちてしまったらしい。

京都の重症発達障害児研究会で面識のあった編集者 寺内一郎さんからピンチヒッターに急遽依頼され、特集「児童虐待」を、児相心理職6人で分担執筆することにした。

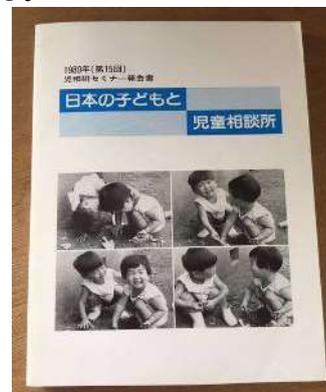
当時の児相心理職仲間はみんな熱心だった。私が煽った部分があるかもしれないが、よく学び、あちこちに顔を出して、発言も発信もしていた。そのメンバーで相当なボリュームの原稿を書き上げて季刊「発達」に掲載された。

その展開がシリーズ「家族の居心地」と題した、児童相談所における家族療法の本、三冊「登校拒否と家族療法」、「非行と家族療法」、「父親と家族療法」の刊行だった。



児童相談所問題研究セミナー

現在、児童問題研究セミナーと名前が変わって、四十年も継続開催されている業界研究会がある。一年に一度、全国大会が開かれ、翌年にはその報告集が刊行される。地道に継続して現在に至る、歴史ある官製ではない研究会である。



このセミナーの報告集を私も京都府で開催を担当した時、翌年に製作した。しかしこの作業はなかなか面倒なものだった。原稿が集まらない、校正に時間を取られる。

そこそこの大部になるので印刷代も高くなり、販売価格は一冊1500円とか2000円近くなる。それでも全部売れなければ赤字になる。そして実際は在庫がどっさり残る。事務局が保管しておくことさえ負担な印刷物は、バックナンバーが細々売れるのを待つことになる。

ある大会ではこの印刷費を、大会実行委員のSさんが、数十万円も引き受けた。全く不合理な報告集の製作、販売状況が繰り返されていた。

大会そのものは民主的な運営で、関係者の志を糧に継続開催されてきたものだった。しかし、報告集に関するこんな弱点が、開催担当する有志の気持ちを、少々引かせていた。

その後、この報告集は養護問題研究会（養問研）と合同で、明石書店から「日本の養護問題」のタイトルの季刊誌になった。

「児相とその近接領域における 家族療法の実際」

家族療法に熱中していた頃、全国の児童相談所でも、もっと家族を扱える人が多くなればいいのにと思っていた。そんな志を同じくする広島岡田隆介さんと二人で発起人になって家族療法の勉強会を開催した。この勉強会の大会冊子と大会後の報告集のことを書く。

全国から集まって、お互いに実践を報告するそのレジュメ集を考えると、すぐに学会で事前に送られてくる分厚い冊子が思い浮かぶ。見るからに金と手間がかかっていそう。

だからそうではないモノの製作を思案した。

分担印刷

そして採用したのが、各発表者に自分の所で完成させたレジュメを、参加者数分印刷して事務局に送ってもらうことだった。

200人の参加予定になったら、発表者の所で、頁ナンバーの所には京都1、京都2・・・のようにナンバリングして、200枚ずつコピーす

る。それを宅配分で事務局に送ってもらう。締め切りに集まったものを、製本だけの作業として業者に依頼した。



校正や編集が不要な分、時間短縮、労力軽減で発表冊子は完成した。

大会報告集も同じ事で、終了後、速やかに原稿締め切りを告知し、忘却しないうちに同じ要領で製作、発送を依頼した。そして届いたモノ製本して、速やかに大会報告集として全国の参加していない児童相談所も含めて送付した。

全く合理的な方法だと思うし、きちんと作成者に責任を持って貰っている。作家もどきに、いつまでも原稿の届かない人のモノを待ったり、督促するようなバカなことはしない。

報告集を出す意味の一つに、出席したいと思いつつながら、様々な事情で参加できなかった人に、当日の様子を伝えることがあった。参加した者だけで仲間になりたくなかった。そして来年は是非、来てもらいたいと思っていた。

だから、たいてい一年足らずかかって発行されると皆が思っていたことに挑戦したのだ。

誰にも簡単に、気の重い長期間の負担を抱えずとも、報告集の製作が可能になった。

しかしこの方法を次に引き継いだ人達がみな踏襲したかというところ、そうではない。様々な工夫もされていったが、昔の負担の大きい製作過程がイメージから離れきれず、結局、事後報告集は製作しないのが、一番楽だという結果になった。

対人援助学マガジン

2009年秋、立命館大学応用人間科学研究科が中心になって、対人援助学会が創設された。学会そのもののデザインは、それほど斬新でも革新的でもない。まだまだ新設の弱小学会として歩み始めたばかりだ。現在、会員二百人余り。年一度の大会を三年連続、立命館大学で行い、4回目は神奈川県立保健福祉大学で開催された。

学会誌編集長の意向でWEB発行が決定され、査読のフィードバックもWEB上で行うことになっている。そして、読者は学会員だけに限定されないことになった。

だから余計に、当初NLは会員向けに、印刷物として発行することがイメージにあった。そうでないと、会費を支払っている会員のメリットが余りにも少ないことになる。

しかし発足早々の弱小学会にとって、NL一枚だろうと、予算問題はクリアしなければならなかった。印刷費、郵送費、そしてその手間を分担する事務局費用など、何も無いところから始めるのである。

そこで浮かんだアイデアが、NLもWEB版にし、閲覧フリーにすることだった。編集長(私は発足時、学会長でもあった)としては、印刷、発送の手間と経費から解放されて気楽になった。そして、更なる発展意欲が湧いた。

WEB版にするなら、ボリュームは基本的に自由である。執筆者には思う存分書いてもらえばよい。執筆してくれる人があるなら、ページ数にこだわることはない。経費を喰わないのなら、出したい方式で発行できる。

その結果、急遽、NLではなくマガジンとして発行することに決めた。さらに、内容の薄い短文エッセイを並べるのではなく、全記事を連載にすることにした。

こうすることで編集者は、毎回執筆依頼に苦勞するパターンから解放された。この点も、大きな新たな一歩である。執筆依頼、そしてなかなか届かない原稿の督促が、NL編集のストレスなのだから。

そこで、連載を承諾してくれる執筆者を募って、基本的に全て長期連載にした。その結果、季刊発行で現在第26号。創刊号70頁からスタ

ートした「対人援助学マガジン」は、現在250頁余、連載執筆者40名の拡大ニュースレターとして継続発刊中である。

出版

専門書籍の販売不振。雑誌の休刊など、出版業界全般の不況に煽られて、連動しなくても良いところまでが沈滞する。

数多くの学会事務を代行していた会社の倒産で、学会の運営資金に多額の被害が出たのも数年前のことである。

そういう既存システムに組み込まれたアカデミズムの枠組みの閉塞にも、一石を投じる変化を処方できているのではないかと思う。コストや人的負担をかけ過ぎなくても、従来とは別のルートで、時代の資料として、現場からの記述をこの世界に蓄積できる。新しいインフラとの融合は、このように再構築されてゆく。

ここでの次の一歩

縷々述べてきたミニコミ刊行話から継続する「次の一歩」は、インフラの進化との連動である。

もうガリ版印刷こそ姿は消していたが、大枚かけたたいそうな印刷物、青焼きコピー、ゼロックス(と誰もが呼んだコピー)の時代、カラーコピー、そしてPCプリンターの印刷から、Webへのアップと、技術革新によって出来ることは大きく変化していった。

今、この形のマガジンが出せているのも、現在の到達技術との連動である。今後も技術は、更に変化してゆくだろう。

そして、ここが勘所だとも思うのだが、簡単には進歩しないコンテンツへの強力な推進役に、技術の進化が挙げられる。

私達の意見はしばしば、自分の馴染みの時代の技術に支えられることになる。そして、その技術革新によって、置き去りにされることにもなる。それを一概に駄目だとは言えないが、変化に対応するのを、いきなり内容ではなく道具的变化に寄り添ってみる所から始めるのは妥当性のあることだと思う。

蠅螂の斧

次の一歩

社会システムを変える

第3回

地域での学びシステムの構築

団 士郎

2016年9月24-25日、横須賀市にある神奈川県立保健福祉大学で、第8回対人援助学会が開催された。相模原の障害者施設で酷い事件が起きた地元である。時期的にも、あの問題に向き合えないわけにはいかない。結論があるわけではないが、理事会シンポジウムとして私も発言者の1人で登壇した。

そこであらためて気がついたことは、あの問題は日本社会の障害者問題における様々な積み残し課題に否応なしにスポットライトを当てたということだ。

事後対応策として行政は、あの施設の全建て替えを5年を目処に決めたそうだが。しかし、定員百数十人の巨大障害者施設。かつてコロニーと名付けられた大型施設が全国あちこちの不便な場所に建設された。あの時代の日本の障害者福祉界においては、一定の到達点であったろう。しかし今、そんな施設を新設するかと言えば否だろう。

現状として、そこには現在も利用者が存在する。しかし、世の中は進歩、変化している。そこにあの事件が起きて、対策されるのが「かつての枠組みのまま」というのはおかしい話ではないか。

ここに見られるのは、安易な元の姿への復帰ではない。そんなに杜撰な仕事は誰もしないだろう。むしろ動かせない現実、説得力を持たない対案の結果なのだろう。本人への支援と家族への支援は、別の問題として考えられなければならない現実がずっと横たわり続けているように思う。

障害当事者への取り組みはバリアフリー化や諸制度の歩み、地域生活支援の様々な専門家が担ってきた。だが家族へのサポートはそんなに変化していない。今なお、まずは障害受容から始まって・・・であろう。だから家族の意向が登場すると、暗礁に乗り上げたような古くて新しい問題点が表面化する。

今回の流れの中でも、家族の意向を受けた匿名報道がそうだろう。当事者の地域生活、在宅生活の推進は、苦しむ家族の利害としばしばぶつかってきた。社会に対して匿名のまま、死という不在化を受け入れさせられる自分とは、いったいどういう存在なのだろう。そんな様々な昔からの記憶を、今も変わらぬ課題として想起させられた事件だ。

*

2016年秋、訪れた東北各地は、東日本大震災津波被害を経て、さらに高い防潮堤の建設ラッシュだった。今年も訪れた宮古市田老地区には、それまで世界一だといわれていた防潮堤があった。それが破壊され、多くの人命が失われた。なのにその結果がさらに高い防潮堤をとということになっているのを見て、人間社会は事実から学ぶことのなんと難しいシステムなのだろうかと思った。

これらは共に、大事なことも含まれてはいるが、いずれも次の一歩ではない。前にもあったことを

リバイバルしただけだ。何があっても、失敗しても、まだそのままを続けたがる勢力はあなどれない。それは外にいるだけではなく、あなたや私の内にも住みついている。

*

さて、今回の本題にはいる。さしたる目的もなく訪れた旅先で、思いがけないものと遭遇する。そんな幸運はしょっちゅうあるわけではない。

地名以外何も知らなかった大分県日田を訪れたのは、ほぼ偶然だった。私の母が熊本県久留米市の生まれで「久子」と名付けられたと言っていたのが記憶にあったので、九州新幹線さくらの下車地を久留米にしたのが始まりだった。もっとも、母方祖父は職業軍人で、その赴任地だった久留米で母が生まれただけで、故郷とか出身地というわけではない。

初めての久留米の街を、寺町等を中心にぐるっと散策した。駅に戻って、さてどうしようかと思っていたら、JR久大本線が目についた。久留米から大分で久大線。こんなルートを列車で移動するなど考えたこともなく、更に考えてみると、大分市も訪れる機会のない場所だった。

別府はいったことがあるし、竹田市や国東半島観光はした事があった。そこで大分市でも目指そうかと思った。さらに地図を見ながら、その先の佐賀関からフェリーに乗れば四国に渡れるなあとも思った。開業したばかりの九州新幹線で、ぐるっと九州巡りのつもりだったのが、結果的に気まぐれ優先で大変更になりそうだった。

阿蘇の麓を抜けて走るJR九大本線。大分までの特急が主だったが、急いで大分に向かう理由もないので、途中駅までのローカル列車に乗った。終点で降りたが何もない駅は、まだ久留米市内だった。人影もまばらな駅舎で読書しながら次の列車を待って乗り継いで日田についた。

日田のことは、名前は知っていたがそれ以上でも以下でもなかった。ゆっくりするつमりの車中でネット検索し、二連泊の宿をとった。事情が分からないので素泊まりにした。着いたところは中規模の温泉旅館で、赤い風船などのパクツア一客が主だった。

翌日、街をそぞろ歩いていると、商店の店先や個人宅の玄関前に雛人形が飾られていた。寺の本堂にも多量の雛人形が飾られていた。町を挙げて、こういう趣向らしかった。

そんな観光名所の一つとして、「咸宜園(かんぎえん)」に遭遇した。それまで聞いたこともなかったし、開塾者 廣瀬淡窓のことも知らなかった。ただ、たまたま訪れた街に、江戸時代に開校された私塾の歴史が展示されていただけのことである。それが妙にはまった。案内人の話をたつぷりと聞き、向かいにある資料館を熱心に見学して、結局、半日近くそこにいた。

江戸時代の武士のための私塾をイメージしていたので、三奪の法(入学した者は身分、出身、年齢に囚われず、平等に学ぶ事が出来た)に、ちょっと感心していた。あちこち視察に行っても、何も見てこないことの多い私にすれば希なことだった。

そして自分がしてきたこと、していることが「私塾」なのだなあと思ったら嬉しくなった。資料館の廣瀬淡窓の志がいちいち興味深く、歴史をまとめた書籍も購入して読んだ。

私はしばしばこういう感想、感情を持ちやすい男である。24, 25号執筆者短信中で内村鑑三のことに触れた。その時に感じていた事とも共通しているが、自分のしていることを、歴史の中の先人の実践と重ねて納得するのが好みようだ。先人の誰かに学ぼうとか、真似ようというのではなく、自分のしていることを歴史に重ねて、「おうおう、こういうことをした人が先にもあるなあ、そりゃ当然だ」と思うのである。

「咸宜(かんぎ)」とは、ことごとくよろしい、という意味だそうで、皆良いという話である。私にピッタリじゃないか。そんなわけで、全国14カ所で長年継続開催中の「家族理解WS(出張私塾)」が今回のテーマである。

なお今回の文章は、2013年に発刊された、立命館大学大学院、応用人間科学研究科10周年記念誌に書いたものを、加筆、校正、再編集したものが中心になっている。

はじめに

私が長年働いていた福祉の現場(児童福祉、障害者福祉)ではずっと、「地域のネットワーク構築」を願う問題意識はあった。

そして「縦割り行政」、「セクト主義」、「専門バカ」、など、いずれも使い古しの分断表現実態もあった。つまり地域ネットワークとは、なかなか実現は遠いが故に、ずっと言い続けられてきたテーマだった。

わかってはいるのだが、そう簡単には変化しないもの。指摘が慣用句化しているにも関わらず、相変わらずそのままある事態。これは結局、「変化を拒否するよう構築された社会システム」だと言っていいのかもしれない。

藪から棒の突然の事態、事故は、否応ナシに変化のきっかけになりやすい。しかし、予め承知されている事態は、なかなか他からの影響を受けにくいし、反省から学ぶところも少ない。

こういった課題の変化実現が、私にとって長年のテーマなのだという意識は常にある。

臨床現場で

明確な問題意識からと言うより、自然に近い違和感への反応、疑問に対する反応が、後から考えると新たなネットワーク作りを志向することになった。

ことさら困難なテーマからというわけではなく、次々と現実の改善から着手したのが、結果的にそれだったわけだ。ここではその実現に向けて摸索した道筋と、道中で手にした知見を述べたいと思う。これに至る道筋はけっして計画性を持ったものでも、直線的に展開を実現できたものでもない。

対人援助領域における実践は、常にこの世界の持つ現実のディテールに寄り添っていないといけない。

杜撰な現状認識しかないと、業界内流行語はあっという間に消費され、問題意識の上っ面を撫でただけで消えてしまう。用心しておかないと、専門家の利益確保のためのアリバイ作りに手を貸すことにさえなりかねない。

児童相談所にとっての家族療法

児童相談所業務に内部スタッフとして家族療法を導入したことの意味が、しばらく経ってからはっきりと分かったのは大きな事だった。

多くの専門機関がそうだが、業務は基本的な仕事の流れを持っている。担当者個々の特性にかかわらず、進め方には基本形式がある。これは、その業務に関する理念、原則の上に形成されている。

子どもの問題で来談したとき、親面接は児童福祉司が、子どもの心理面談は心理判定員(現・児童心理士)が行うのが定番だった。

今はかつてほど頑なではないかも知れないが、基本的にこの役割分担は健在だ。そして担当する両者の見解の食い違いによる不満や葛藤も継続中だろう。

それまでしばしば起きていたのは、こんな事だった。子どもの面談が長引いて、児童福祉司の親面接はとっくに終わってしまっている。アドヴァイス好きの児童福祉司は、面接が長引くと、持ちネタがなくなってしまう。そして、なかなか終わらない心理面接にイライラする。



心理判定員からの継続面接提案も、児童福祉司には毎週時間を取られて、他ケースの訪問や調査に支障をきたすだけだ。一方、心理職は児童福祉司が親に話している内容が同意できない。

そして「子どもは良くなってきているが、親が問題だ」、「親は反省しているから、もう大丈夫なのに、いつまでセラピーをするのか。子ども一人で来させるようにしてくれないか」など、担当者間の葛藤が表面化していた。

今もあちこちで行われているであろう親子併行面接ゆえの見解の相違。これは積年の頭痛の種だった。

家族療法の形式を取り入れたとき、けっしてこの問題意識が先行していたわけではない。相談の形として合同家族面接をすることになり、親担当、子ども担当という別室での併行面接が変わることになった。

家族面接室と観察室、二人の担当者がどちらかに位置して、共同して面接展開を見ることになった。やり始めて分かったことだが、合同家族面接を採用したことが、児童福祉司と心理職間のギャップを取り除いてくれた。

だから家族療法の採用は、心理療法の一技法を導入したのではなく、児童相談所に於ける従来型の面接スタイルの変更だった。これは百の理屈よりも明快な現実だった。

そして当初は心理職の研修だと認識されていた家族療法訓練に、児童福祉司職にある人が参加するようになった。今では、家族療法研修に児童相談所から参加するのは、児童心理士、児童福祉司、半々くらいになっている。

してきたこと、たりなかったこと

公務員を退職する時期と前後して、いくつかの地域で、対人援助職に従事する人たちを対象のワークショップを始めていた。この核にあるのは京都国際社会福祉センター(KISWEC)で二十五年余り、現在も継続している「家族療法ワークショップ」である。

全国の児童相談所を中心に、今では福祉現場のみならず、教育、保健、医療、司法など、対人援助のほぼ全領域の人たちが受講する家族療法ワークショップstep1、step2、step3、更に「援助職者の原家族を見つめる」を継続開催している。

波はあったものの受講希望者は途絶えることなく、四半世紀を超えて現在に至っている。これまでの受講者総数は1500名を超えることになるだろう。

この事実は、KISWECで実施するプログラムが、時代を越えて普遍的に有用であることを示しているだろう。

研修内容の話ではない。長年愛用されて、今もコンスタントに売れ続けている定番商品のイメージである。これと対比されるのが、大ブームを起こし、あつという間に色褪せて忘れられてゆく商品である。

では、二十五年以上も続くものが作り出す状況とは、どのようなものだろう。長い時間が形成するのは、けっして技法やプログラムの結果だ



けではない。

WSを経験をした終了生は、各地での日常実践の後、時と共に管理職になっていった。良い学びだったと思う者は、部下や後輩にこのプログラムへの参加を勧めた。その結果、「うちの課長が薦めてくれたので・・・」、「先輩からは是非と言われて・・・」という各組織内からの参加者が増え、それが世代間連携のきっかけになった。

「家族」に関する共通のキーワードを持った多世代のスタッフが働く場を形成する触媒役を、このプログラムが果たすことになった。

しかし一方、このプログラムが全国各地の希望者が受講できることや、出張扱いで参加する公務員も多いことから弱点も抱えていた。

日本中から集う専門職同士のネットワーク作りとして、少なくない貢献はある。しかし、それが各地元での近接領域間のネットワーク形成に、リーダーシップを発揮できるようになるところまでは、なかなか推進できなかった。職場内では、よく機能できてきても、なかなか地域ネットワークの核にまではなりにくい。

研修の持ち方が結果的に「地域の連携」というキーワードを排除している面を否定できなかった。

地域での連携

そんな問題意識を持ち始めていた20年ほど前、青森県からの受講生が、「ここ(KISWE C)で行っていることを、地元で働く人たちと一緒に、地元で受けられないか」と問いかけてきた。

各地に出向いて行って、継続的研修を実施する発想はなかった。それまでの経験から、実現可能性に悲観的だったのだ。

何でもそうだろうが、物事が動き始める段階で、全てのことが分かっているわけではない。動きながら明らかになってゆくことも多いし、当初の目標より大きく発展した現実が構成される幸運もありえる。

結果的にこれがきっかけになって、全国各地で自主的で継続的なワークショップの開催が実現されてゆくことになった。

青森県の児童相談所職員であった女性に、地域における世話人グループを形成してもらい、地域に合ったワークショップ企画の展開を促すことにした。

こう書いてしまうと簡単なようだが、実現は大変だった。地域のネットワークづくりを、公の肝いりではなく、現場で働く人の意志の繋がりで形成してゆくのはなかなかだった。だからこの準備段階に時間をかけた。思いつき即実行のイベントは、一、二度は盛り上がるが、たいてい急速にしばんでしまう。個人の情熱は冷めやすいものだ。

近年、大きな災害被災に対して市民社会がボランティア活動を組織化し、多くの人たちの連帯があちこちで生まれてきている。これは従来には見られなかった日本社会の進歩の一つだろう。

この流れを片方の車輪だとすると、もう一方は地域で専門職として従事する人々の使命感(専門職としての責任感)の連携だ。縦割り行政などといつまでも言っていないで、渦中の者が自ら構成してゆく。私が目標にするこちらの方が、なかなか継続実現は難しい課題なのである。

研修のツボ

非常に意欲的な人が、高額な費用をかけて、都市部の学びの場に出てくることや、短期留学

にチャレンジするのは、珍しいことでも難しいことでもない。こういう研修の盛況は過去も現在も、そしてこれからも繰り返されていこう。

それが意欲的な個人の仕事や人生に貢献するところがあることを、否定するものではない。その道のトップランナーとして、然るべき地位や職を得ることになるのを批判する必要もない。

ただ、私の興味関心はそこにはない。こちらは地域における人の繋がりと、地域社会資源の繋がりを実現するべく、共通言語(私の場合は、「家族理解」)獲得の学びの場を協力して作り上げていく事を目指した。

これがエリート消費者としての研修参加ではなく、地域社会に於ける対人援助職従事者のネットワーク作りへの一歩だと考えていた。

当然のことだが、ネットワークという言葉の背景には持続、継続する営みが想定されている。従って、実現される学びの場も又、継続されるものでなければならない。この継続は次世代にまたがった連携を含み込んでいる。

とはいえ第一歩の青森において実現されていたのは、職場はまたいでいたが、先ず限定された業種(児童福祉関係職員)の人たちの研修であった。

更におおきな壁は、お金を払って講演会に行く人など地元には少ないという当時(20年も前)の地域社会の常識だった。確かに地方に行けば行くほど、講演会や研修会は、公やスポンサーによって企画され、出席者は動員されていることも少なくなかった。研修とはそういうものだと認識されていた。

だが実際に始めてみると、思った以上に参加者は熱心だった。直ぐに参加者有志によって二回目が計画された。条件に恵まれた人、選ばれた人だけの特権だった学びの機会が、身近なものになった。

無論、プログラム内容も関係なかったとは言わない。しかし従来の研修マニアには希薄だった一緒に学び、地域社会に新しいものを作り上げていくという動きが新鮮だった。

青森県での取り組みは結果的に、現在まで(2016年)17年以上も継続中である。当然参加者は変動してゆく。

しかしその割に、プログラム内容は大きく変化

はしてゆかない。同じ事の繰り返しを中心である。リピート参加者の中では深度が更新されてゆく。その実感は、参加者個々人の地域社会に於ける役割の変化を見れば一目瞭然である。

地域社会の抱える課題に、直線的因果論で成果や効果の立証できるものなど限られている。参加者が自分の意志として十年以上も続けていることと、その主観的体験として、地域の一員としての役割達成感こそ、それぞれが受け取



った成果物である。

デザイン 研修に於ける原則

おこなってきたことの整理をしておく、おおむね四つの原則が立つと思う。

第一は誰が対象かということだ。研究者中心から現任者中心にしようとした。更に言うなら、学ぶことが好きな人よりも、実践家であることに軸足を置いている人を対象に考えた。これは地域開催することで自然に、研究者、大学関係者(教員、院生、学生)より現場の人の参加者比率が高くなった。一つの職場、地域、事業所から複数の人たちが参加し、共有できる学び(共通言語)が生まれた。

地元開催なら、子育て真っ最中の人や介護渦中にある人も、参加できるようになった。

第二番目に考えたのは、出席者のモチベーション形成のことだ。

「どこかが企画した目新しい講習会に、自分も一度顔を出してみるか…」、こんなレベルの研修動機は、ほぼ継続することはない。研修マニアはあれもこれもと雑食だが、結局そのどれも深く

味わうことがない。

だから地域で継続的に参加するメンバーを育てることが目標になった。回を重ねる研修会で近接領域の人たちが繰り返し参加し、交流する。そうなれば受講生が即、地域ネットワークの構成員になる。

そのため、開催日程は土・日・祝日にした。プライベートの時間を業務に役立つ学びのために使うのである。

公的機関から年間行事の一つとして打診される研修依頼より、こちらを優先した。

第三に研修費用のことも、よく言われるように身銭を切ってこそだと思った。そこで費用は参加希望者なら、誰もが自己負担できる範囲の設定にした。地元開催なら参加者の交通費、宿泊費もゼロ近くなり、受講経費負担はより軽くなった。

全国各地で試行錯誤を繰り返した二十数カ所の中で、結果的に継続しているのは、この参加者自己負担方式をとったところだった。

どこからか予算がついて開催したものは、予算の切れ目でことごとく消えた。その後、自分たちの手で続けていこうと声をあげる参加者グループも存在したが結局、皆中断になった。

四番目に心がけたのは、プログラムを繰り返すことだ。これでいつも新しい参加者に門戸を開いていることを示し続ける。

「深く狭い専門家」が地域社会に必要なのではない。研究会や勉強会が特定の人たちのサロン化してゆくのは、途中から参加する者を阻むようなシステムになってしまっていることが大きい。

リピーターは繰り返しの中で習熟してゆく。新規情報を次々手にしようとするのではなく、上手になって、職場での処遇力がアップしてゆくことを目標にした。

継続

何事においてもいきなり大きな変化や転換が起こることはない。そう根拠のある話でもないが、一つの目安は十年だろう。十年続くものなら、内容よりその継続をもって、一つの意義、信頼を形成していると考えてもいいだろう。

新しいことを始め、それを継続維持してゆくに

は、中身もだが、運営の上手さも大事だ。そしてそれらが幸運をつれてきた時、新たな一歩が確保される。

こんなことを考えて着手して十数年。今も全国あちこちの地域に通い続けている。そしてそこには十年つきあいの現任者、管理者、そして新しく参加し始めた若者たちがいる。どの会にも共通しているのは、中心メンバーの領域だけではなく、関連近接領域からの途中参加を受け入れていることだ。

ネットワークの議論ばかりやかましく、いざとなると押しつけあったりしがちな地域社会システムを、一歩変化させるためには、中味よりも形式の変化に着目するのが早道だった。

変化は一気には起こらない。起きているのかどうかさえ、あやふやなところのあるものだ。しかし、今までなかなか実現しなかったものが生まれ、存在し続けているのをみると、変化は起きていると実感できる。社会の変化はこれくらいのスピードでいいのかもしれない。

多層的連携

このような各地での実践継続は、十年も過ぎると、あちこちで具体的な変化を生みだした。新しく参加する人たちの中に、初期からの参加者の部下であったり、組織構成員だったりする人が増えたことは先に述べた。加えて、母と娘の二代にわたって参加している人や、「娘が大学院でお世話になりました」と語る母親(教員)もいる。

また、参加者の属する現場が徐々に拡大していった事にも気づいた。福祉全般(児童相談所、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、福祉事務所、障害者諸施設、高齢者施設、ヘルパー、ケアマネジャー)のみならず、教育(小中高教員、特別支援学校、スクールカウンセラー、養護教員)、保健(保健師、助産師、精神保健相談員)、医療(医師、看護師、心理士)、そして司法分野(家裁調査官、調停委員、弁護士)からの参加者も増えた。更に、近接領域だと考える人たちの属する民間企業や組織からの参加も増えた。

近接異分野との連携、交流を声高に言いつ

のっているよりも、はるかに実態的变化が生まれ始めた。

また、初期からの参加者達の身上には、人事異動や昇進、退職、転職など、個人に属する変化も当然のように起き、それも研修会に変化を与えた。そここにネットワーク成立の結果が確認できることになった。

当然、人の行動選択には、様々な要因が関与する。一つのキーワードで、人生の多くの時間を乗り切れる人は希だ。人は飽和するし関心もうつろう。

だが一方で、一つのことに長く関心を持ち続ける人も出てくる。その結果、受身だけではなく、自身の関心をライフワークとして実践し続ける人も登場する。

地域社会にこういった人材が生まれ始めると、そこに取り残された地方都市のイメージはなく、今日社会の拠点の一つになって輝き始めた。

地域にスーパーヴァイザーはいる

このように、家族システム論的な視点からの現状を理解する人々の居る複数分野の地域社会資源が連携しはじめ、それによって切り開かれた新たな現実が動き始めた。それが地域開催の家族理解WSとして、全国各地で数年、場所によっては十数年も継続開催される学習の場に育つことになった。

ネットワークが生まれた場としての継続研修会には、若い世代も多く参加するようになった。そこには、職場ではなかなか出会えない地域社会の人材といえる業界のベテランが待っていた。

現場のあちこちで長年間かされてきた、上司、管理者がスーパーヴァイザー能力に欠けているというグチにも変化が起きた。

各組織は頻繁な人事異動などで、多くの現場が素人集団化し、防衛的にならざるを得ないと思われる現実がある。そんな中で専門職のベテランと若い世代が親しく言葉を交わせる場の継続的確保は、まさしく地域社会システムに於ける連携の実現である。職場では短期異動が多くても、地域社会にはベテランがいた。

現在継続中の地域プログラムとしては、年四回開催の東京は50回を超えた。年二回開催の札幌、弘前、埼玉、金沢、岡山、松江、高知、年一度の山形、広島。隔月開催の草津(滋賀)、毎月開催の京都(立命館大学)、大津。いずれも長きにわたって開催中である。

★関心のある方は雑誌奥付にある編集長のアドレスにお問い合わせ下さい。

スピンオフ ほほえみプロデュース

専門細分化された時代の行き詰まりに、専門職を増員することだけで対応するのではない地域作りが青森で始まった。(詳細は、本マガジンバックナンバー第6号からの連載を参照)

この企画の中心人物は、弘前勉強会の開催事務局を永年つとめた人だ。問題解決に専門家が対応することに終始するのではなく、予防に力点を置いた取り組みを考えたいというスタートだった。

「県民にもっと笑顔を」という行政の事業としては荒唐無稽にも思えるプロジェクトだが、知事みずからが関心を示したことで、進められることになった。

予防の取り組みとして、地域のコミュニケーション活性化のために、住民有志に「笑い療法士」(小児科病棟の取り組みとして、諸外国で有名なスキル。映画「パッチアダムス」で取り上げられている。長期入院中の子ども達に笑顔を！という目標で実施されるプログラムである。)の研修訓練を受講して貰う。

受講者を組織し、ねずみ算式の伝達講習会をプランし、地域に降ろしてゆく、現在も進行中の取り組みである。開始五年でファシリテーターとして、活動可能な研修受講県民数が二万人を越えたそう。

そして行政主導の事業としては区切りを迎え、NPO法人活動になって、継続進行中である。

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第4回

ユーモアエクスプレスK.K. & ぼむ

団 士郎

「小さな変化」が悩ましいのは、結果が必ずしもその後の事態に影響力が強くないからである。千里の道も一歩から等と慰めてはみても、千里に一歩はあまりにも小さい。それでも一歩は、システム論的には大きな一歩であると思おうとする。システム論的に考えると、そういうことだからだ。

この世界には、いくら事実を突きつけられようと、信念を変える気がない人がいる。事実をものともしない信念、主観的見解を変える気がない人にはどう立ち向かえばいいのだろうかと思ってしまう。だがこれからの変化は、そこにこそ処方されなければならない。正しい事実で、他人の誤った信念を上書きできると考えるのはもう、ほどほどにしておかなければならない。そんなものは、「屁理屈は負けない」の言葉通り、その人の前では無力だ。

より適切な次の一歩に踏み出せた道筋だけが、良き道だと自覚することが大切である。これをリアリズムと呼ぼう。とはいえ、現実に対してあまりにも無力な事態が続くと、手のひらを返したように効果、効力を求めたくなるのは人の常だ。その結果、浮き足立ったように証拠や結果を出すことに世の中が傾斜してゆく。すると、当然のごとく、その成果や証拠が愚にもつかない事ばかりで…と言う状況が登場する。

この傾向を当然だと論ずるのではなく、私達はなぜ結果の出ないことにこんなにも弱いのだろうかと考えてみることは大切だ。エビデンスを喧伝する心情は、こういった意識からの派生物で、それほど合理科学的でもない。大昔から言うではないか、桃栗三年、柿八年。結実にはそれなりの時間がかかるものだ。

*

とはいえ、最近の社会事象を見渡せば、2万人超えとまだまだ多いが、自殺者数は順調に減少に転じているから、取り組みの是を証明している。交通事故死者も10年前と比べると、確実に減少している。

一方、不登校は、専門職はどんどん増えているのに、不登校児童数も増えているので非だ。児童虐待も、死亡実数ではなく、通報数などを数えて増やして、騒いでいる限り非である。目に見える事実にはもっと謙虚に軌道修正すべきである。

悪しき成果主義とは別に、費用対効果の合理性は一定論じられなければならない。全体に目を閉じてしまった各論の原理主義者のような専門性主張には、この世界への貢献度は期待できない。そして用心しておかなければならないが、実はその現状こそが手に入れたかった到達点だという業界もある。新薬は売れないと困る。そのためには該当する病人の確保が必須だ。売れ行き好調な医薬品はよく効くからだけではなく、マーケットが拡大していることも表している。

会社を創る

ユーモアエクスプレスk.k.は1998年、漫画家7人と税理士で起こした漫画配信サービスの会社である。イメージは漫画版「共同通信社」。米国ではオリオンプレスc.等が有名だった。

主旨としては、我々の描くヒトコマ漫画原稿を、小さなメディアでもいいから掲載の機会を増やす。そして少額でも原稿料をいただく。自分たちで漫画家としての仕事を開拓するという主旨のものだった。

世界はいつもそうだが、あとから参入する者にとって既存システムは壁に囲われたゾーンである。その中に受け入れられるか、はねられるかで、自分たちの人生が決まってしまうところもある。

漫画家のように個性、才能といった曖昧なものが基準の世界では、編集者の誰かに気に入られるか、そうではないかによって決まってしまう事も少なくない。

「本当に才能のある人は、そんなことをせずとも必ず芽を出す。そうでない者など、所詮二流なのだ!」、なんて評論家的言いぐさもあるが、それは小さな才能の者を蹴散らす以上に、何の役にも立ちほしくない。こういう意地の悪い言いぐさは、これまでたくさんの芽を踏みつぶしてきたし、とても権威主義的だと私は思っている。

漫画家として、もう少し主体性を持って仕事をしたいと考えたのは、それ程思い上がったことではなかっただろう。しかし確立した業界はちょっとやそとでは変化しない。ごく一部の者に門戸を開き、多数の希望者には閉じることで既存システムを維持にかかる。

そこには日本の出版システムという、漫画作品とは関係のない「業界」の現実が広がっていた。

大手出版社、漫画雑誌業界、大手新聞社から地方紙、雑誌メディアと様々に媒体は存在したが、新たにそこに参入したいと願う多数の若い漫画家に対して、ルールはあきれくくらい昔から同じだった。

*

ここで一言、最近の状況を。
私の時代は確かにそうだったが、現在は

少しマンガを取り巻く状況が異なっている。コミケ(コミックマーケット)の拡大だ。このマンガ同人誌の一大イベントの動員力はすごいらしく、マンガ好き(オタク達?)が制作し、販売し、ファンを作り、マーケットを作っている。

当然表現に関する自由度も高く、細かいことは知らないオヤジ世代から見て、様変わりの印象はある。少なくとも出版文化のヒエラルキーの中で下位に位置づけられていた「マンガ」からは解放されている。一部の大ヒットコミックスが商品になるのに並行して、地産地消のような自主制作マーケットも拓かれたのは好ましい。

今回ここで述べる私たちのとは全く違った展開が、マンガ市場において花開いたことに驚きは隠せない。

また、大ヒット漫画「ブラックジャックによろしく」の作者は、自分でもっと自由にネットによるマーケット開拓をしようとし、出版社とぶつかって苦労した顛末を書いて出版している。

詳細を正確に把握しているわけではないが、漫画家に対する日本社会の扱いも、明らかに世界標準からずれている。あちこちの国を旅して驚くことのひとつが、どこの国にも日本の漫画が翻訳されて出版されていることだ。コスプレや日本ブームなども合わさった広がりや価値を、諸外国から教えられている始末だ。これって、本当に変わらないパターンだ。

プロ漫画家へ

初めて新聞に自分の漫画が掲載され、原稿料を受け取ったのは、大学四年の7月頃だった。

その頃、私は就職活動の健康診断で胸に影があると言われ、断層写真撮影の結果、結核と診断された。結核はもう治る病気になっていたもので、病そのものの不安などはなかった。しかし結果、まず半年の治療と安静の生活を強いられた。

想像もしないことだったが、身近なところで父が、結核の診断を受け堺市の病院に入院中だった。4人家族だった一家の男二人に、結核の診断がくだった。妹は高校を卒業後銀行に勤務。母は専業主婦だった。

それまでも好きで描いていたマンガだったし、高校、大学とマンガ研究会にも属していた。しかし漫画家になろう等という気はさらさらなく、楽しんで青焼きコピー誌を作成したりしていた。

漫画家の卵などと称される、絵のうまい友人、知人は山ほどいた。中にはデビューして漫画家として活躍していった人もあった。

四十年以上前の話だが、大阪新聞のヒトコママンガ連載を、篠原ユキオと三人で交代に担当していて、しょっちゅう作品原稿を見ていたのは、たしか「バイトくん」を描く直前の関大生「いしいひさいち」さんだ。

偉そうに私達は、「彼はヒトコマは向いていないよね」等と言っていた。(これは蛇足の自慢話)

きっかけ

始まりは産経新聞の投稿マンガコーナー欄。病気安静時間の退屈のぎに投稿してみたら思いがけず直ぐ掲載された。2222円(手取り2000円)の原稿料が郵便為替で送られてきて、それを換金すると、自宅で安静にしているバイト料が入ってくる感じだった。(当時、工場で一日バイトすると、おおむね1800円くらいもらえた)

味をしめて毎週投稿したが毎回掲載されるわけではなかった。でも、それが励みになって数ヶ月続けていると、秋も終わり頃、新聞社から連絡があった。

「一度、編集部に来てください」という。何だか分からない期待に、結核患者ではあるのだが、見た目に分かることもないので、堂々と大阪梅田の産経新聞本社ビルに向いた。

そこで、学生マンガ作家達と共同の連載をやらぬかと打診された。自信があったわけではないが、大喜びで引き受けたのが、プロ漫画家としてのスタートだった。

ここで長い長いつきあいになる漫画家(現・京都精華大学漫画学科教授)の篠原ユキオと出会った。

それ以降ずっと、産経新聞、朝日新聞、タブロイド紙、業界紙、タウン誌やミニコミ誌、社内誌等に様々な企画で描かせて貰った。子供服のデザイン画として、シリーズ商品がスーパーの衣料品売り場に並んだこともあつた。

た。

しかしこれらすべては、先方から打診があって、企画会議を経て、連載、掲載、制作にこぎつけたものである。一定期間が過ぎると何かの理由で終了する。

無論ごく一握りの漫画家は、何十年にもわたって新聞の4コマ漫画や週刊誌の連載をする。しかし多くの漫画家の仕事は、始まってやがて終了する。そして編集担当者は人事異動で出世したり退職したりする。新しい担当者は独白色を出したくなって、前任者の人脈の作家や漫画家は一新されたりする。

この担当編集者はサラリーマンである。私は心理職地方公務員と漫画家の二足わらじの期間が長かったから、このあたりのアヤが両面から分かる。自由業のマンガ家にとって、サラリーマン編集者はしばしば、慇懃無礼な権力者だった。

ユーモア エクスプレス K.K.

自分の漫画を掲載する場を、自分で開拓する。これはいわゆる売り込みとは一線を画している。あちこちに自分の漫画原稿を持ち込むだけだったら、一般の営業活動と差はない。

ここで考えてチャレンジしたことが、この連載「社会システムの変化」志向と重なっている。

私が考えていたのは、この時点で形成されていた日本の漫画家業界仕事の枠組みを、隙間産業的に少し開拓することだった。

限られた掲載機会の誌面、紙面を多数の漫画家が取り合うのではなく、新たな市場を切り拓こうと考えた。この発想の源に、よく知っていたわけではないが、アメリカの配信システムがあった。

近年、凋落の一途だと聞くが、アメリカの新聞発行部数は元々、読売、朝日等の日本の新聞のように500万部、600万部発行なんてことはないらしい。

日本の二倍の国民を抱える米国で、トップファイブにはいるNYタイムスだって200万部程度。広いアメリカ各地に存在する地方紙の発行部数は何十万部、もっと小規模なエリア新聞も数多く、全土に散在している。(現在はネットニュースに押されて凋落の一

途らしいが)

しかし地元紙だって紙面には著名コラムも欲しいし、マンガも欲しい。ローカルだからと、地元ネタ、地元民しか登場しないというわけにはいかない。全国ニュースも掲載しなければ、新聞とはいえない。そこで、通信社システムが発達する。

通信社が配信する原稿を、アメリカ全土のあちこちのメディアが掲載契約で購入する。

昔の日本の雑誌、漫画誌(マンガ読本)などにも、一コマ漫画はアメリカのオリオンプレス c.等と明示されたものをよく見かけた。

こんなことを書いているが、今にして思うと、正確に米国の配信システムを調べたわけでも、参考にしたわけでもなかったことに思い至る。しかしあの頃は、思いついたアイデアに惚れ込んでしまっていた。

この仕組みを日本で展開すれば、朝日、読売、毎日、日経、サンケイなどの大新聞や、マガジン、サンデー、チャンピオンなどの少年週刊誌の連載を競い合うようなことをしなくて良い。

一方、中小メディアの側は、時事漫画、風刺漫画などを、比較的安価にオリジナルで掲載することが出来る。一誌の原稿料は安くとも、掲載紙・誌が増えれば、一枚の原稿で一定額の収入が見込める。この着想はなかなか理に適ったものだと考えた。

しかし実際は、なかなかこの発想は日本社会に受け入れてもらえなかった。いや、興味すら持ってもらえなかった。当時流行していたタウン誌にDMを作って、売り込みをかけたことがあったが、全く関心も持ってもらえなかった。DMは3パーセント反応があれば上出来だと聞かされた。100送って三つレスポンスがあれば上出来。それと契約に結びつくのとは別である。実際、あまりにも反応がないので、「ミニコミのくせに、大出版社きどりか！」と心の中で悪態をついていた。

一緒にマンガを描き続けているグループ「ぼむ」のメンバーにこの話をしてを口説くと、了解度はともかく、みんなで会社を設立するのは面白そうだと賛同してくれた。そして全員が出資者・役員、ユーモアエクスプレス k.k.が発足した。

だが、それまでにない仕組みを作って、仕事に結実させて、発展させていくだけの動きを我々は持たなかった。意図を理解して営

業活動する者が誰もなかったのだ。所詮皆、漫画家、作家であった。

だからユーモアエクスプレス k.k.は名前だけの株式会社で、僅かな連載契約と決算が主な仕事の会社だった。(やがて商法改正などのあおりも受けて、有限会社に縮小し、篠原ユキオの個人会社になった)

ぼむ

マンガ家集団ぼむのことを説明しておかなければならない。このグループは先述した産経新聞ヤング面の連載をきっかけに生まれた。

新聞にヒトコマ漫画を連載することになったメンバーが集まって、漫画同人を創ろうと話し合った。大阪・阪急東通り商店街にあった喫茶店Nuでその集まりはスタートした。そこでグループに名前をつけようと思案した中からきまった「ぼむ」に、特に意味はなかった。

最初の活動としてヒトコマ漫画紙「ぼむ」の発行(たしか1970年のことだ)と、パネル漫画展を京都北白川のギャラリー喫茶店、同志社大学学生会館ギャラリー、そして大阪梅田のASAHIビヤホール展示壁でおこなった。

篠原ユキオ、山口博史、安芸ヒロシと私。皆就職して、私だけが病気留年していたため、実働部隊は一人だった。

それから今日(2017年)に至るまで、大阪現代画廊で「ぼむ」展を30年以上、一旦終えたパネル漫画展がまた京都で再開した。月例ミーティングは40年以上、現在も継続している。

篠原ユキオ、国府弘昌、外村晋一郎、柳たかを、ののぐちさとる、カワキタカズヒロ、桂べかこ(後に南光)が、長期継続メンバーで現在に至る。

木陰の物語 連載

時期は前後するのだが、当時すでに連載していたものを、新会社を通して受注することで、一定額の会社への留保もおこない、営業活動もしようとはしていた。しかしメンバーの仕事が増えていくことはなく、細々と会社

を維持してゆく感じだった。

「木陰の物語」は大阪/少年補導協会の機関誌「少年補導」(その後、誌名変更で「少年育成」)誌に連載していた「子ども旅」の連載が完結する頃に、珍しく新企画として編集者に持込んだものである。

それまで2ページ見開きで連載していたものを、4ページの一話読み切り作品にしたいと提案した。当時の松宮編集長の回答は原稿料据え置きで良ければ、ページ拡大は可能だとのこと。ここから今に至る連載がスタートした。現在第205話。月刊誌だから17年目になる。このコンテンツがその後、様々な条件の変化の中で発展していくことになった。

連載漫画の成り立ち方

よほど恵まれた条件が整わないと、長期連載は叶わない。まず読者の支持がないと当然だめだ。「ワンピース」や「サザエさん」、「こち亀」、「ゴルゴ13」のような作品は希である。多くの作品が年度末、紙面刷新、編集長交代、休刊など、様々な理由で連載を終える。

ありがたいことに「木陰の物語」にそれはなかった。松宮編集長が退職になった時も、次の編集長から「引き続き、よろしく」と挨拶があった。

しかし思いがけない要因でこの連載は終了することになった。2010年度末(2011年3月号)をもって雑誌そのものが休刊されたのである。

社会システムとはこういうものだという典型にも見えたので、そのエピソードを書いておく。

休刊(実際は廃刊)やむなしに至る原因の一つが総会屋対策の法律制定に関わっていたと聞いた。(裏はとっていないので、噂話)

「少年補導」誌(後に「少年育成」と改題)は大阪少年補導協会が発行する業界の小さな雑誌である。出版社が出す商業誌とは異なって、書店に並ぶことは少なく、もっぱら関係機関や業界公所における定期購読が販売基盤だった。

これと相似形の業態を形成していたのが総会屋である。「業界**ジャーナル」などと

タイトルした機関誌を名前だけ発行して、その定期購読料の名目で金銭を大手企業から受け取っていた。

企業の側は、あらぬ事(あることでも内密のこ)を書かれるくらいなら、定額を株主総会対策費として「購読料」の名目で納めていた方がベターという判断が働いていた。

総会屋に関わった不正や犯罪が表面化した時、この資金源を断つというので、この種の定期購読費の見直しが厳しく行われた。

そしてこれに類する多くの定期購読が廃止された。その余波を食らったのが「少年育成」誌だった。もともとそんなに発行数の多くはない月刊誌は、このあおりで幕を引くことになったと聞いた。そして私の連載も終えることになった。

連載終了≠執筆終了

この時、世間一般の連載終了=執筆終了という事態を私に避けさせたのは、ユーモアエクスプレス方式であった。数は少なかったが、他でも「木陰の物語」を連載していたのである。原稿料はないに等しかったが、定期的に掲載され、それを楽しみにしてくれている人がいた。

それが私立幼稚園の園便りへの連載である。複数園で、一園あたりせいぜい100人~200人くらいの在園児が持ち帰りのお便り。そこに掲載されている作品を読んでくれる読者があった。それがあって、毎月描くことをやめようとは思わなかった。

各幼稚園と契約して、園誌に合わせたレイアウトで提供し、その手数料はエージェントに受け取ってもらう。そんな約束をしていた。だからミニコミ(園だより)に掲載されるものを私自身が目にするにはほぼない状態で2011年は連載が続いた。(ユーモアエクスプレスkkもこれを目指していたのだが、この時点ではもう解散していた。そしてこの業態は、私の息子の会社の一部、ホンブロッックkkが「木陰の物語」に関して展開中である)

振り返ってみると、このときの園誌連載は、必ずしも新作がいつも掲載されたのではない。私は描きたいものを描いていた。だから、幼稚園の保護者向けではないと言われる作品(たとえば、高齢者問題、障害者問題)も多

数あった。

幼稚園の連載だから、幼稚園児が登場する話を、という考え方に私は賛同していない。家族は様々な構成メンバーがいる。幼児のいる家におばあちゃんも居ていろんな悩みを抱えているものだ。

だが園によっては、それまでに描いていた150話以上の中から、幼稚園向きだと思える作品を選んで掲載することを希望したところもあって、それは承知した。

2010年度末、つまり2011年3月というと、東日本大震災・津波・原発事故被災と時を同じくしていた。この大災害に向けた支援プログラムに、「木陰の物語」が絡んでくるのは、この直後の事である。

そんな中、2011年の秋、東京の「ほんの森出版」の編集者からメールがあった。「少年育成」に連載されていた「木陰の物語」のファンだったが、読めなくなって残念に思っている。あの連載を私のところの月刊誌で再開できないかという打診だった。

うれしい話だし、なかなかそんな機会はあるものではないので快諾した。そして翌年4月号から「月刊 学校教育相談」誌で連載が再開された。

この時の契約も一誌独占掲載ではなく、競合しない他紙誌併載の可能性を了承してもらった。だから原稿料は安い。そして現在、「木陰の物語」が連載されている媒体は数多い。

まず、どこの書店でも手にすることのできるメジャーなものは、季刊「かぞくのじかん」婦人之友社。毎回二話掲載で二年目に入った。

業界誌では「月刊 学校教育相談」が五年、「月刊 福祉」が三年、いずれも連載中。

他に通販会社のPR紙で一社。

そして、私立幼稚園の園便りへの連載。各園在籍園児数ほどの発行で、月刊のものが多い。これが七〇誌以上で掲載中である。子どもが持ち帰るものゆえ、保護者もかなりよく読んでくださっている。

配信連載多数

このように最初にユーモア・エクスプレス構想で持ったイメージが、ほぼ実現されて今に至っている。しかし、こんな連載形式は日

本のマンガ家では希だと思う。理にかなって、多くの人に読んでもらえる機会拡大になっただけでも、なかなか真似る人はいない。

作品の善し悪しは読者が決めるし、長期連載になるかどうかを決めているのも読者だ。その一方で編集者が決めている面も確かにある。でも本当のところは、作家自身が決めるのだと思う。

売れる、売れない、受ける、受けないを作者が決めることはできないが、継続しつづける根拠は作者自身の中にある。ある決意を持って作品を描き続けることだけが、そのものの社会的意味を醸成するのだと思う。

システム リ・クリエイター

こうして描き続けてきた作品が現在、世の中に広く届く。その突破口になったのは、私の息子の会社Asoblock k.k.の仕事である。彼が運営する会社の中の一出版部門homblock k.k.で、業務を担当してくれるスタッフがいる。

そのおかげで、「家族の練習問題」(現在発行数第一巻1万5千部、第二巻1万部、第三巻以降5千部)～第六巻まで、継続発刊中だ。

また、同じ第一巻が編集を加えて、ゴマブックス「新版 家族の練習問題」、講談社α文庫「家族の練習問題」としてメジャー発行もされている。

一方、東日本大震災復興支援の一環として、2011年秋以来、毎年一万冊、非売品「木陰の物語」をNO.1～2016年No.6まで発行し、届けるプロジェクトも継続中である。同時に、福島、宮城、岩手、青森の被災地において、「木陰の物語・パネル漫画展」を2011年から各地で毎年継続開催中である。

被災者に向けたマンガの発信がどんな意味を持ち得るのかはわからない。こんな形で復興支援が出来ているのかどうか。それをマンガ家や漫画出版業界が決めることは出来ない。

更に2017年2月には、大阪・地域生活定着支援センター発行で、刑務所を出所した高齢者、障害者を支援する人達のための冊子として、同じ出版方式のモノが作成された。

おわりに

日本社会における漫画の発行形式に少しチャレンジしてきた。それがマンガが果たせる役割を開拓するという、想定以上の一步を刻んでくれている気がするこの頃だ。もっとも、これとて私の自己満足、自画自賛だと言

われれば、そうではないと証拠立てるものはない。

ただ、売れてるかどうかだけ、依頼されるかどうかだけに漫画を描くことをゆだねるのは、私のメンタルヘルスにはきわめて良い。

マンガを描き続けるかどうかは、私が決めることであって、誰かが決めることではない。



蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第5回

授業「人間コミュニケーション論」

その1

団 士郎

作法の問題を時々考える。それは自分があまり行儀良くないなあと思うからだ。日常的な事だけではない。たとえば、私は漫画を描いているがデッサンのクロッキーだのを本気で考えたことがない。やってみたこともほぼない。描画、描写を志すなら基本はそこだろうと思っている人は多い。でも、そんな考え方を自分に採用しようとしたことがない。

心理の業界で長く仕事をしてきた。初めてケースを担当したのが25歳だから、それから45年、今も現役の相談員だ。この間、経験は重ねてきたが、いわゆる資格は何も持たないまま現在に至っている。けっして学びを拒否してきたわけではない。様々な専門技法への好奇心は持ち続けてきた。しかし、どこかの作法に従って、誰かの門弟になろうとしたことはない。

「家族療法」派だと見なされているところはあるのだろうが、その専門細分化された流儀と特に昵懇ということもない。自認するところは「社会システムの中の関係性」に焦点をあてた家族心理臨床家である。

大学院には16、7年もいることになった。ご承知の方も多いと思うが、大学教授に教員免許はいらない。だから教育を実施することに関して訓練を受けたことがない。いわば、素人教員である。

こう書いているからと言って、描画基礎力不要論でも、資格不要論者でもない。自分がそうだというだけで、それが正しいなどと主張したいわけではない。ただ、そこで忘れないようにしているのは、人は弱いかから、大きな枠組みに守られる資格や立場を得ると、独立性は損なわれやすいという警戒心だ。

寄らば大樹の陰は心情的に理解できる。人はそれほど強くはない。私だって25年も公務員をしていたのだから。手に入った立場や資格があれば、当然そのサイドからものが言いたくなる。そのことを十分承知しているから、私はその立場をとらないようにしてきた。

今回から数回、これを書くことを決めたのは2017年度が私にとって大学院の定年退職の年だからだ。唯一、学部で担当している授業「人間コミュニケーション論」も最終になる。この講義のことはあちこちで話す機会があって、マンガ「木陰の物語」でも一部取上げた。だから、是非もっと詳しく知りたいと求められたこともあった。

そこで調子に乗って、セメスター全体の授業の流れを、何度かに分けて書いてみようかと思ったわけだ。果たしてこれが「変化」や「次の一步」になり得ているのかどうか？それは私が決めることではない。

学びはどう説明されるか

FDという文字を時々見る。Faculty Development の略で「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」ということらしい。文部科学省は10年近く前、大学院から導入を義務づけたそうだ。だが、そんなことにはほとんど関心がないので、よく知らない。私が一般的な大学院教員の今日的わきまえから外れていると言われても間違いではない。

私は「特別契約教授」という契約なので、大学院の役職に就いたりすることはないし、教授会に出る義務もない。必然的に現状の大学、大学院に関する常識的理解も欠いているのだろう。

先日もある大学院で依頼された講演の枠組みはFD研修の一環だと知らされたが、こちらには自覚が全くなかった。

しかし、言われなくとも、大学や大学院の授業において、私のようなタイプの教員に何が出来るのかはずっと考えてきた。専門職従事経験の長い者が、大学教育の中でどのような役割が果たせるのかは、大いに関心のあるところだった。

古い話だが自分の学校時代、高等教育の目的がごく少数の賢者・学者の養成のような気がして、残りの多数はそのダシに使われているという被害者意識が消えなかった。

「それはおまえの劣等感だ！」という指摘も否定はしないが、それだけだとは思わない。私の時代、留学は一握りの優秀な人達のチャンスだった。そこから社会の様々な分野への栄達の道が開かれていた。私はいつも、なぜ学業だけが偏って社会から褒め

そやされるのか疑問を持ち続けてきた。教育が相変わらず潜在的に持っている現状肯定の学力競争勝者至上主義なのを好まないのは、十代の半ばまで遡る。とにかく、手段にされてしまって平気な学びが大嫌いなのである。我が国も含めたアジアの過剰な受験騒ぎが大嫌いだ。だからそうではない道筋を行く人々すべてに、世間に思い知らせてやってくれと願う気持ちが強い。

学ぶとはもっと面白いことだ。私は受験勉強は毛嫌いしていたが、学ぶ事にはとても謙虚で居続けたと思っている。手段としての学習や学力を忌み嫌っていたのだ。

これが多分、私という人間の面倒臭さの一つだろうし、長年、権力を持つ側から受け入れられないできたことに関わっているだろう。

学生時代は、時に敗北主義だといわれ、ガキっぽい詭弁だともいわれた。しかし私が少しだけ本当のこととして知っていたのは、実社会は学校の成績とぴったり相似形などではないことだった。

比較的早い時期に、成績優秀な者は、選肢肢の幅を世間から狭められている気の毒な存在だと見破っていた。だってそうだろう、そこに居れば得をすると分かっている、それを放棄するのはなかなか勇気のいることだ。

私はそのことを警戒して生きてきたのだが、20代半ばに巡り合わせて公務員職に就いていたために、50歳で退職するときには、既得権の誘惑から自由になるのに少し勇気が必要だった。手放さない言い訳はいっぱい思い浮かんだが、要するに手に入れてしまうと手放す度胸はなかなか生まれにくい。「欲しい」という希望より、「いら

ない」という意思の実行の方が、すでに手にしている物のある場面では苦しい。

人間の才能は多様だし、それはもっと幅広く活用されなければならない。フィールドを狭く設定した競争の結果が、あぶれて自死を選択してしまうような若者を作り出しているのだと考えてきた。

これは学校における不登校や、社会人年齢での引きこもりも同じだ。どうしてもっと文字通りの多様性を、実現、実行しないのかといつも思ってきた。自分を苦しめている世界だと認識しながら、なおその世界に認められたいと願うのは苦痛でしかないだろう。

誰かからの評価を頭の中に想定して、そこで認められたり、そこでの自己肯定感を云々したりするのは止めればいいのと思う。そもそも現行の教育枠組みの中で、そんなものを論じていることが、空しいことであるのは自明だ。

授業

私はおしゃべりな人間だ。面白いことを語るのに難しさもない。しかし、それを自分のアドバンテージとして社会を泳いでいきたいかと思ってきた。営業トークや誰かのお気に入りになることから離れよう離れようとしてきた。

講演したり、授業したり、ワークショップをしているのも、スキルの切り売り、商品化だという人もあるだろうが、自覚としては、そんな浅薄なビジネスをしているつもりはない。

宴会で座持ちのいい人が、講演や授業が上手なわけではない。自分の得意なこと

何を目指せるかは、なかなか奥深いことである。

「人間コミュニケーション論」

大学院ではなく、学部（産業社会学部）でヒトコマだけ授業を持っているのだが、その歴史は長い。

最初は、まだ公務員現職の頃、突然、面識もなかった立命館大学文学部心理学専攻の教授から声をかけられて「人間関係論」のタイトルで授業をすることになった。ここでは基本的に、現役社会人専門職としての経験を自由に話せば良かった。

その後、産業社会学部で「人間コミュニケーション論」とタイトルした授業をすることになった。それがもう12年も前のことだ。詳細は覚えていないが、何かを指定されて開講したのではなかった。むしろ、このような枠組みで何をやらせてもいいというようなオファーだった気がする。

だから人間コミュニケーション論の講義ラインナップは一から私自身が創った。とくに教科書を想定することもなかった。

コンセプト

先ず目標を定めた。「コミュニケーション論」と語ると、一般的に想定されそうな排除すべき誤解も明確にした。そして多少価値観押しつけ気味な感じはあるが、教育の名で洗脳されている若者達を、もう少し自由にしてやりたいと思った。（脱学習だ）

詳細には関心もないが、就活の自己分析とか、絶大な占い文化、誰かの起こした不

祥事を見てから登場して解説するTV心理学の解説など。そんなうんざりするような表層的情報でまみれた学生達に、実感として、己と向き合う体験と学びをもたらしたいと思った。

更に開講当時、日本社会はずっと年間3万人以上の自殺者を生み出していた。取り組みもあったが、1998年以降(15年以上)、その数字は長く維持されたままだった。

対策の成果なのだろう、近年この数値はかなり減少傾向にある。とはいえ、二万人は超えている。

今では初回の講義で口にもするようになったのだが、私は「人間コミュニケーション論」の授業の目標の一つに、受講した人達が将来にわたって、自死を選択したりしないことを考えていた。群衆の中における思い込みの孤独、孤立の毒性から、学生達を解放することが目指すべき一歩だった。

果たしてそんなことが出来るのか、などという自問自答はなかった。予防や防止の証明など出来るはずがない。起きなかったことの理由を、分析的にいくら語ってもむなし。論証するより、そんな目標で授業をするというカテゴリがあるのだと意識してもらうことで十分だと思った。伝わらない人はきっとあるだろうが、それは議論しても詮無いことである。

今にして思う

「人間コミュニケーション論」には(実習)の文字が透かし彫りで入っている。大教室で多いときは200人、少ない年でも60~70人くらいの登録がある。八、九割は出席す

るから、決して少人数授業ではない。

はじめ、学生達は、大教室でのコミュニケーションに関わる理論を聞かされるのだろうと思うらしい。シラバスにはちゃんと「実習」授業だと書いてあるのに。

そこからのスタートだから、初回授業開始二十分くらいで、予想と違ったと教室から逃げ出す者が毎年数名はいる。これは仕方ないことだと思っている。

授業構成

試行錯誤の結果たどり着いた現在の形がここ数年の基本だ。

開講一番、「木陰の物語」マンガを一話見てもらう。紙芝居のようにパワポのスライドショーで読み聞かせる。五分足らずの話である。

その感想を隣の人と二人一組になって話し合うよう指示する。感想を言い合うだけだが、開始早々に「相手を選んで、自由に話し合え」は、気分的ハードルが高いようだ。友人、知人と一緒に受講している者は、そこでしのぐが、一人で登録した者には気の重いスタートだ。

だから逃げ出す学生もあるのである。正規の受講登録はまだである。しかし、第一回のここで逃げ出す者には、「君こそ受講したらいい人なのに・・・」と思う。そして同時に、人は幸運も不運も、結局は自分で選ぶのだと思う。水辺にロバを連れて行くことは出来るが、飲ませることまでは出来ない。

第一回目の「木陰の物語」の話が確定しているわけではないが、最近「毎週お年玉」を使う。ここまでが授業のオリエンテーションである。

最初にどの作品を取上げるかに、それほど強い意味や意図はない。ただ、この授業を取上げた「宿題」という作品があるが、これを第一回目に使うと、その内容が受講生全体を強く誘導してしまうところがあるので、以前には使ったこともあったが今は止めた。



余談も入れながら、主に授業の構成を学習してもらう。次からも毎回、最初にミニ漫画紙芝居と三、四分ミーティングを実施することを知らせる。この冒頭マンガについては、授業の終わりに毎回提出してもらうミニレポートの記述要件の(一)になっている。だから開講10分のこれに出席していないと、レポートの第一設問が記入できないことになる。

これは遅刻防止策でもある。授業に出席する、しないの個人の選択にまでは立ち入れない。しかし、授業に来るなら遅刻せずにきちんと出席してほしい。終盤に滑り込んでレポートだけ出したり、実習の始まる時刻を見計らって教室に入るなどという身勝手さは許容

しない。

また、受講者同士で話し合う時間も中盤の実習ではかなり多くとる。だから、私語、雑談は厳禁である。話し合う時間はたっぷりあるのだから、聞くべき時間には聞く、これも徹底する。教室がなんとなくざわざわしているというアンコントロールな空気は認めない。

教室の空気の受け止め感度悪く、小声で私語する者には、小さな声で、しかし届くまで注意喚起する。まじめに受講している者に、不愉快そうに怒っている講師ではなく、授業を静聴している者の権利擁護のために、不法な者に注意し、教室を制御している講師を目にしてもらう。これならば熱心な受講者のモチベーションを損ね、教室の空気を悪くしてしまうこともない。

大きくない声で、「オーイ」「オーイ」と二、三度繰り返していれば、たいてい気がつく。

実習

さて、第一回目の授業中盤のエクササイズはこれである。ずいぶん以前に、本誌執筆者のある人から教えてもらったもののアレンジである。

課題はこんな風に進める。「今から二人一組になってもらいます」、「先ず、その場で立ち上がってください。荷物を持って、今の場所からは移動してください」、「課題はその後に伝えますが、知人、友人でない人と組む方が気楽だと思います」、「これからずっとそうですが、この授業では、こんな実習を繰り返します」。

「イメージとしたら、スポーツジムを想像してください。ここをコミュニケーション

のジムだと考えてください。皆さんは似合わないレオタード姿で居るくらいに思っ
て、気恥ずかしさはお互いだと認識してく
ださい」、「では、移動して誰かと二人一
組になったところから着席してください」

この授業は例年、登録者数より大幅に大
きな教室が手配されており、移動や別場所
の確保に困難はない。最初、学生達は教室
の後方半分に着席していることが多い。こ
こで少し、着席場所からの自由を体験させ
る。

しかし教室で初めて出会った未知の人と
二人一組にと言う指示は、簡単には全体で
実行されない。そう実行する者も多いが、
一部のこどもっぽい、自意識過剰の男子中
心に（近年では同様の女子学生も増えた）、
どのように指示しても友人、知人と組んで
しまう者はいる。この段階ではこの件は深
追いしない。それは彼ら自身の課題だとい
う認識である。

再度強く促すのは、全15講の中盤にさ
しかかった頃である。未知の人は、自分を
呪縛から解き放ってくれる他者であり、既
知の他者は、自分をその人の知っている私
から解放してくれないのだということを、
授業の中でメッセージし続ける。

そしてエクササイズに入るのだが、通常
の初対面者同士の自己紹介のようなことは
指示しない。する場合も、学年、年齢情報
は出すなど指示する。一歳年上とか、二歳
上を、とても大きな違いがあるなどと思っ
ているのは、大学生までの子どもだけであ
る。世の中では相手の年齢情報など、ない
ことも多い。

課題 Good & bad

「Aさん、Bさんを決めてください。交
代で実習しますから、どちらでも同じです。

先ず今から、一人で4分間、スピーチを
すると思ってください。内容は何でもいい
です。気になるニュースでも、サークルの
ことでも、趣味のこと、スポーツ、バイト
のこと、大学のこと、何でもかまいません。
大事なものは深く考えなくても話し続けら
れる話題であることです。

先ず、Aさんが話します。Bさんは聞き
続けます。そのとき、Bさんに課題があり
ます。

私がタイムキーパーをしますので、B
さんは話が始まったら最初の1分30秒
は、とても行儀の悪い聞き手として、話を
聞いていてください。

スマホを触る、他の話している人に気を
散らす、相手の顔も見ないでゴソゴソして
いる、鞆の中の何かを探したりする etc。

Aさんは話し続けてください。

1分半経ったら私が知らせますので、残
りの二分半は、Bさんが考える理想的な聞
き手として話を聞いてください。

うなづく、相づちをうつ、笑顔を見せる、
相手の目を見る、etc。」

そして二分半過ぎた合計4分で終了の合
図を送る。

ここで直ぐ、今度は交代でBさんが話し
始め、Aさんは同じように悪い聞き手1分
半、良い聞き手二分反を繰り返す。

それが終わったら、二人で体験のフィー
ドバックをしてもらおう。

その時、悪い聞き手から良い聞き手に変
更した段階で、教室全体の音量やパワーが
グリーンと高まった事実を伝えておく。そし

て5分間、二人で自由に、今経験したことを話し合う。

このエクササイズは短いものだが、初回でもあり、丁寧に意図を解説しながら時間を使って進める。

解説

「実際にやってみて、分かったと思います。どんないい話も、聞き手の態度に大きく左右されます。

話し上手、面白いネタ、関西風のオチなど、いろいろ言いますが、良い聞き手があってこそです。

どうでしたか？悪い聞き手に向かって話すのは？授業の指示だとは理解していても、話すモチベーションはどんどん下がっていきましたよね。

そして一分半後、良い聞き手に転じた教室に活気がよみがえりました。みんな感じたと思います。せっかく準備した話も、相手の聴き方がひどいと、どんどんテンションが下がって、あっという間に終わってしまいそうになりましたよね。

話(ネタ)がいいからではなく、聞き手が上手に聞いてくれるから、もっと話したくなるのだという経験です。

分かったと思いますが、会話を支えているのは良い聞き手です。逆に言うと、良くない聞き方は、いろんなものを壊すのです。

余談ですが、授業も同じです。受講生が悪いと、同じ授業でも質は下がります。相手に関係なく提供されるライブなどありません。

自分は上手く話せないからコミュニケーションが苦手。無口だから、なかなか人の

輪に入りにくい、話し上手で社交的な人がコミュニケーション上手だ、これまでそんなことを思ってきましたか？

セールストークをしたいのならそうかもしれない。しかし、コミュニケーションとは、そんなものではありません。

毎週レポート

75分ほど過ぎたところで、第一回最後の15分はミニレポートを書いて提出してもらおう。課題(1)は最初の紙芝居の感想と、話し合った振り返りである。(2)は実習について自分の経験したこと、感じたことを自由に書く。

書き終えた者から、レポートを教壇まで提出に来て、退室する。他人のレポートと一緒に持ってこない。自分の分しか受け取らない。

毎週課す課題であるから、自動的に出席評価点になる。五割の配分評価だから、出席が三分の二に満たないものは、単位取得の評価対象外とするとシラバスに明示してある。

これが、「人間コミュニケーション論」のオリエンテーションを含む第一回授業である。

二回目以降

第二回目以降は、導入の紙芝居セッションの後に、前回のレポートを読んだ講師からのフィードバック時間が入る。

実習のテーマ、意図は毎回異なっているので、連載の次回からは、どのような課題ラインナップで15回実施するのか、そこで何を目指していて、受講生達には何が届いているのかを記述してゆく予定だ。

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第6回

人間コミュニケーション論

その2

団 士郎

前日も書いたように、私は「教師職」として素人だ。教育を担当する者として、基本的な訓練や教育実習のような体験が全くない。更にいえば、他の分野に関しても似たようなものである。心理臨床に関しても、大学の心理学専攻の経験だけで、体系的に心理臨床教育を受けたとはいえない。弟子入りをして、一からたたき込まれるような経験がほぼない。

そんな中で出来ることの側で奮闘はしてきたつもりだ。だから専門分野において、何事かが分かって言うのではなく、分かっているかどうかは不明なところがあるが、私はこんな風にやってきて、七〇歳になる今日まで何とかしてきたという話だ。これは謙遜や卑下ではない。二分するならば自慢に近い。寄るべき大樹の陰を持たず、自分で植えて、育てた木陰での物語なのである。

もしかすると門外漢の戯言、あるいは、教育された人には常識のことも多々あるのだろう。にもかかわらず、あえてこのスタンスで何かを発信するのは、専門とする人達が作り出した世界が現状でしかないじゃないかという批判がこころの中にあるからだ。

私は権力や支配権を持たせてもらったことがない。公的責任を権限と共に与えられたこともほぼない。だから自分の立ち位置に経時的変化は少ない。しかしその立ち位置の人達が多くとりがちな、傍観の批評家になるつもりは昔からなかった。それは空しい立場だ。漫画家をしていてそう思った。

だから中心にいて権力や権威を持つ者ではなく、周辺にいて揶揄する勢力でもない者になろうと考えてきた。それこそが私の言葉でいうと正当な改革者なのだが、なかなか道は遠い。

「人間コミュニケーション論」の全体には、そんな私のスタンスからの発言が随所に含まれている。分かる学生にはとてもよく届くが、「これが授業か?」、「試験はどんな問題になるのだ?」と発想する者には雲をつかむような時間になっているのかもしれない。それだって、経過と共に伝わるものがあると確信しているが、中には終始理解不能のままドロップする人もある。

だが世界はそういうものだ。ひよっとしたらあるかもしれない読者の「何を書いているのか、訳が分からない!」という声も一部には想定しながら、授業で行っていることを書いておこうとしている。

大学の授業には毎年度はじめ、学生の受講登録に向けてシラバスを書く。毎年、少し手直しするくらいで大きく変えることはない。2017年度用のシラバスを以下に示しておこう。

シラバス

授業の概要と方法

対人コミュニケーションには言語的なものと、非言語的なものがある。そして人は圧倒的に多く言語的コミュニケーションを使う。そこではしばしば得意、不得意の意識が生まれる。その結果、「人見知り」、「口べた」などという説明を自分に貼り付けてしまう。

一方、得意だと思っている者は、自分のコミュニケーション技術を振り返ってみる機会は少ない。上手くやれていると思っているものを、見つめ直す必要は感じないのが当然である。その結果、若くして身についた技術のまま、二十代、三十代を過ごしてしまうことになる。

また、得意な者も苦手な者も、非言語的コミュニケーションは、自覚することが少ない。自分の振る舞いが他者の目にどのように映っているのか、気にはなるけれども、明らかにされる機会はそうない。ここにも焦点を当てる。

対人コミュニケーションには「スキル(技術)」と「コンテンツ(内容)」の二つの課題が存在する。当然のことだが、人はコンテンツ(伝える内容)とプロセス構築力(伝達手段技術)の両者がうまく備わってはおじめて、関係の場に自信を持って立てる。

大学の授業としては少数派の実習形式で毎回、課題に挑戦してもらおう。教室はコミュニケーションの「ジム」だととらえてもらいたい。だから出席しない者には意味がない。

対人関係が苦手な者は少しの勇気と共に、得意だと思っている者は、持ち味だけで一生過ごせるわけがないことを内省しながら受講の決断をしてほしい。

受講生の到達目標

まず、対人コミュニケーションにおける自身の特徴を自覚する事から始める。そこで発見される課題に各自が取り組む。エクササイズは毎回提示するが、どう取り組むかは受講生に委ねられる。教室は知的情報取得の場ではなく、コミュニケーションの練習場になる。到達目標もそれぞれのコミュニケーション能力の、更なる一歩前進である。

付け加えると、ここで目指すのは一般社会への適応、順応力だけではなく、もう一歩踏み込んだ、社会と関わる力の養成である。この実習で身についたものが、受講生の将来のいつの日にか、役立つことを願う。

この後、授業全15回のスケジュールと評価方法などが記されている。そしておわりに、

毎回、授業の最初に絵物語提示とその相互フィードバック時間を設定します。終了時に提出するレポートの課題①はこれに関する記述です。遅刻するとこれが書けません。時間厳守で入室してください。

続いて、前回エクササイズのフィードバックと新たなエクササイズ(小グループでの実習)を毎回実施します。遅刻は実習の妨げにもなるので、原則入室を禁じます。

長い間、受講生は女子学生中心でしたが、2016年には男女比率の逆転がありました。男子学生にとって、この実習の持つ意味が浸透してきたのかもしれない。

さて

正規の受講登録はまだだが、二回目からの進行が、授業の基本的なスタイルになる。それは以下のようなものだ。(1~3回目までは最初に、授業全体の進行をパワポで示しておく)

90分の構成

基本パターン

エクササイズだから繰り返しが重要
プログラム(その日のコンテンツ)によって
深めてゆく

- パート1 紙芝居漫画 見る 語る
- パート2 前回レポートへのコメント 解説 聞く
- パート3 今日の体験実習 する 語り合う
- パート4 体験や感情の言語化・文章化 書く

た
彩子がグループの筆頭だと言われ



翔子の母親に
「いじめっ子グループ」と
名指しされた
六人が残った

私の手元には先週、第一回授業の終わりに出席者が書いて提出した授業レポートがある。書かれた感想、意見、学びの要約、疑問をこの日までにすべて読んで、気になる事には寸評メモをしたり、アンダーラインしたりしてある。

前回、逃げ出した学生は多分来ていないだろう。未だ受講登録完了にはなっていないので、出席簿も用意されていない。

近年、どこの大学の授業も同じだろうが、学生達の出席率は非常に高い。こんな感想を持つのは、七〇年代に学生であった自分の中に、1,000人規模の大教室に、50人未満の出席という教室風景が希ではなかった記憶があるからだ。当時、自分も渦中の一員であったから、ずいぶん変わってしまったなあと思っている。

第2回授業

スタートは前回書いたように、マンガ「木陰の物語」のライドショー約5分である。今回はタイトル「いじめた側の」という作品を見てもらう。

その後、二人一組になって、感想を話し合ってもらおう。「いじめ」問題は学生達に身近な体験を持つ者も多く、話し合いは活気を帯びる。

しかしこれはあくまで、ウォーミングアップ。教壇で私が注意しているのは、相手を見つけれず、何かしているかのように振る舞っていたり、うつむいて微動だにしない学生の事である。ペアになった者達が、何を話し合っているかは気にしない。

4分の予定時間でタイマーの音が鳴り、どんな話の展開があらうと、そこで中断する。

パート2

「はい、では人間コミュニケーション論、テーマに沿って、進めていきます。先ず、前回書いてもらったものについて、私からフィードバックしたいと思います。

出席した人は記憶にあると思いますが、前は[good & Bad]というエクササイズをしました。

それについて、こんなレポートがありました」と、いにしえの深夜放送の進行よろしく、リスナーのはがきに答えるかのようにあれこれ連想的にコメントしてゆく。

Good & badに関して、毎年、みんなが書くことの一つは、「こんなに聞く側が影響力を持っているなんて、今まで思ったことがなかった」。

話している自分ばかりに関心が向いた

り、話の中身がウケる事だけに必死だから、こんな風に思ってしまう。

しかし、俯瞰してみれば対話空間の活性は、話し手と聞き手の呼吸で成立している。誰かの話が済むのを待っているだけの、おしゃべり集合グループはコミュニケーションしているとは言えないし、話題が展開してゆくこともない。

ここを最初に押さえておくことで、この教室が目指すものを明確にする。無口、口べたを自称する者は「聞き上手」になれば良い。そしておしゃべりな話し上手も、「聞き上手」にチャレンジすれば良い。

再度断っておくが、ここにコミュニケーションについての専門的見解が込められているわけではない。専門としてコミュニケーションを学んだことはないし、研究者として深めたこともない。内容はきわめて個人的で、主観的かつ実利的なものだ。

中心的に届けたいと思っているものも、コミュニケーションに関わる情報や分析ではない。受講生達それぞれの、これからの人生におけるコミュニケーションスタイルの「体験拡大学習」だ。

小耳に挟む豆知識や断片的な言葉ではなく、そこに身を置いて、相手に自分の姿が見える場所で向き合うところから始まるコミュニケーション体験における気づきである。

SNSと対立したいわけではない。10年以上も前から続けて行ってきた授業なのだから、昨今のSNS批判とも直接関わりのあることではない。

社会や時代のテーマにきちんと向き合っていれば、それが時代の焦点とシンクロするのは必然である。

近年、関心を持たれることも多く、「コミュ障」などと称されるカテゴリーも存在する。本当にそんな分類がなされなければならないかどうか疑問だが、そういうことを切り取りたい動機は世間にあふれている。

私に言わせれば、練習や訓練もしないで、未熟なままを持ち味、個性と定義して、それに診断をつける。全くばかげていると思うし、当事者だと思う者が、そういうことを甘受していなくてもいいのである。まずは、上手くやれないことや問題を感じている事があつたら意識化する。そしてその改善のためのエクササイズを自ら実施する。

最初から上手くやろうとしたり、上手くやれることだけを選ぶのは、現実感を欠いている。そんなレベルで持っている自信や自尊感情など、お山の大将のそれである。

何でもそうだが、繰り返しの練習は不可欠だ。ろくに手順も学ばず、上手くいかない体験を繰り返し、追い詰められたりする人があるが、クールに言えば、失敗する練習をしているからだ。

その結果、病気になったりトラウマになったりと語るのだとしたら、それは目標が達成されていることになる。だから、それが目的でないのなら、やり方は他にある。

受講生の一般的な特徴として、自分のコミュニケーションに課題があると思っている人が多い。一方、自信を持っていて、だからこの授業に関心を持った人もある。

どちらにせよ、あるいはその中間にあるにせよ、序盤のエクササイズでは、この講義を選択した思い、動機の話のところで、このテーマは登場しやすい。しかし、この

テーマは、とても個人の内面的特徴話と親和性が高い。放っておくと、悩みの打ち明け話のような自己解説があふれる。私はこの類の対話を、意義深いものだと思わない。

むしろ、自分のことをよく知らない相手に、己の思い込みを蕩々と語ることで、たいした根拠もない先入観を相手に植え付けているだけだと思っている。

だからそんな話になりがちな自己紹介プロセスは重視せず、こんな解説をしておく。

『自分は口下手だから・・・』とか『こういう授業形式は苦手で・・・』とか、「関西生まれではないので、話にオチがなくて・・・」等と、己のネガティブキャンペーンはやめなさい。

教室で初対面に近い他人に、開口一番、自分の不具合解説を延々とするのは悪趣味である。

人は自分が語ったように人生を生きる場所があるものだ。ナラティブの考え方が、当然だろう。『自分は無口なもので・・・』と解説したら、その後どんなに話が弾みかけても、無口だと説明したこととのつじつまが気になるだろう。

君がどんな人に見えるかは、君が解説するのではなく、相手が見立てればいいことだ。君がもし、友人、家族の中で無口で、陰気くさいやつだと思われているとしたら、そのイメージを覆すのは簡単ではないかもしれない。頑張っても、冷やかされるのがオチかもしれない。

しかし今、目の前に居る人に、そんな先入観はない。ならば、本当はこんな風に他者と過ごせたら・・・と願っている自分に近づく努力を、一歩でいいから始めれば良

い。

それを見ても、初対面の人が冷やかすことはないだろう。相手が自分に持っている先入観やイメージは、自分への呪縛である。

人は自分が語ったように生きる場所がある。だからって自分のトリセツ（取扱説明書）を過去の自分ばかりを材料に、決め込まなくてもいい。

パート 3

二回目の課題は、引き続き初回の流れで、未知の人と組みになって語ることである。

今日のエクササイズ

二人一組

(勇気を出して、面倒がらずに友人以外を選ぶこと)

必ず場所は移動する！

二分間

今日のテーマ

「私の好きなもの、私の興味のあること」

A × B

相手は知らないこと、
興味を持っていない場合もあるが、
解説をする。

きっかけ、どこが面白いのか、
どんなことが起きるのか。

聴き手は、興味を持って質問する。

このテーマで交代で会話をする。そのとき、題材として、相手も知っていそうなことを選ぶという社交をしない。

自分は面白がっているが、相手は聞いたこともない趣味やスポーツの場合もある。

今回の課題は、相手の話すことがよく分からないときや、興味のある部分が登場し

たら、どんどん詳細を質問することである。

受けそうな話題を選んだり、わかりきっていることだからと、だらっと聞き流さないことが大切である。

パート4

授業の最後は前回同様のミニレポート作成である。内容にはこだわらない。広く授業内での体験からの振り返りや質問を書く筆記時間12分をめどに、授業全体を進めてきている。

最後は自分の書いたものを教壇に提出して、静かに退室する。

全般に男子学生は早いし、授業へのコミット度合いの低い者がさっさと書いて出て行く。その顔ぶれや、所要時間も、授業の進行と共に変化してゆく。

まさしく、人は成長してゆくのである。そして、まさかこんなことが自分に起きるとは思わなかったと振り返る学生が少くない。

私は学びの成果とはこういうことだろうと思っている。試験などで誰かに評価されて、初めて分かる成長や変化がないとは言わないが、余り関心はない。

今、教室の中でだけ、自分の内面だけでの気づきになっている事が、しばらくすると、自分の世界のあちこちで起き始める。

結構な頻度で彼らの周囲の人達が気づく。そんな授業って、そうなのではないかと密かに自慢に思っている。